

と
こ
は
と
の
は

第 32 号
2 0 1 9

常葉大学外国語学部言語文化研究会

表紙の題字は木宮健二理事長

目次（簡略版）

I	外国語学部共通	1
1.	教員エッセイ	3
2.	外国語学部コロキウム	22
3.	特別研究の題目と要旨	24
4.	日本語教員養成課程	50
5.	外国語学習支援センター	54
6.	学内外での教職員や学生の取り組み	64
7.	（共催）英語教育公開研修会	67
8.	（後援）現代世界文学の読書会	69
II	英米語学科	71
1.	Catherine Sasaki Memorial Speech Contest	73
2.	高校生対話弁論大会	95
3.	英米語学科特別研究発表会	97
4.	教員採用試験合格者	98
5.	国内外関係組織から英米語学科への受け入れ	109
6.	学内外での教職員や学生の取り組み	112
III	グローバルコミュニケーション学科	119
1.	海外事情談話会	121
2.	多言語レシテーション大会	122
3.	社会人基礎力養成	140
4.	キャリア開発	144
5.	臨地実習	149
6.	国内外関係組織から GC 学科への受け入れ	155
7.	学内外での教職員や学生の取り組み	158
IV	各言語圏での活動	165
1.	英語圏	167
2.	スペイン語圏	216
3.	中国語圏	226
4.	韓国語圏	240
5.	上記 5 言語以外の言語圏	250
V	井上朋子先生を悼む	253
VI	学部機関誌と学内学会規約	263
	編集後記	275

目 次

I 外国語学部共通	1
1. 教員エッセイ	3
1-1. アオテアロアとの出会い	一言 哲也
1-2. ブラジルの黒人女性文学	江口 佳子
1-3. Only Robinson Crusoe could get everything done by Friday	江藤 秀一
1-4. 英語科教員養成の道のり	佐野 富士子
1-5. 私の学びと英語音声学	本沢 彩
1-6. 台湾高座会留日 75 周年歓迎大会の参加記	若松 大祐
2. 外国語学部コロキウム	22
3. 特別研究の題目と要旨	24
3-1. チビチリガマ集団自決における日米報道比較	進士 千陽
3-2. ホスピタリティとサービス概念の受容と変容	田邊 里沙
3-3. 沖縄における法の境界線	村松 嘉之
3-4. 小学校外国語教育における英語絵本の活用と効果について	池田 優花
3-5. 小学校外国語活動の今後	影山 萌香
3-6. 日本の小学校英語教育のこれから	谷 菜々美
3-7. 中学生の会話頻出語彙習得度調査	杉田 輝一斗
3-8. 教科書の言語活動分析	松島 未歩
3-9. 後悔・無能感は学習者の学習行動にどのような影響を与えるのか	糸川 真央
3-10. 日本人大学生を対象とした Writing 活動における Task repetition の効果	大塚 沙映
3-11. 英語コミュニケーション自信に肯定的な 影響を与える教員支援の在り方	小林 千紗
3-12. 生徒のやる気を引き出す褒め方とは	住瀬 百花
3-13. 中学校時から高等学校時の英語学習に対する意識の変容	園田 耕介
3-14. インターネットを利用した英会話練習システム の有効性に関する一考察	築地 航平
3-15. タスク性の確認ツールの提案	古畑 晃代
3-16. 児童の国際的志向性を高める要因	望月 萌乃
3-17. 映画『もののけ姫』の日本語セリフと英語字幕にみられる 翻訳の比較研究	増田 純一
3-18. 車名と音象徴	犬塚 智也
3-19. カタカナ英語の英語教育における関連性	松本 拓巳

3-20. [グローバルコミュニケーション学科特別研究]	
共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧	47
4. 日本語教員養成課程	
4-1. 日本語を分かりやすく伝えるには	土佐谷 優希、中澤 緑 50
4-2. 日本語を教えることのむずかしさ	嶋本 妃那、佐野 日花莉 51
5. 外国語学習支援センター	
5-1. ピアサポーターによる勉強会	江口 佳子 54
5-2. Give Yourself a Pat on the Shoulder	濱田 真理 55
5-3. 韓国語と私	佐藤 文香 57
5-4. Enseñando el idioma español (新たな挑戦)	Eimi Nakasone 59
5-5. 留学がきっかけで	杉田 輝一斗 61
5-6. TA の影響力の大きさ	梅原 大裕 62
6. 学内外での教職員や学生の取り組み	
6-1. イデアの犠牲者	道下 玲 64
7. (共催) 英語教育公開研修会	佐野 富士子 67
8. (後援) 現代世界文学の読書会	69
II 英米語学科	71
1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest	
1-1. The 2018 Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest	Aya Motozawa 73
1-2. We Are Born This Way	Kaoru Warashina 74
1-3. How I overcame stress in my daily life	Momoka Morizaki 75
1-4. Communication is the Best Way	Maho Nakajima 77
1-5. How to Get Rid of Stress Perfectly	Michiko Kurebayashi 78
1-6. The Thing We Can Learn	Junya Saito 80
1-7. Power of Smiling	Takeshi Hasegawa 82
1-8. How would people you respect overcome stress?	Kajita Hayata 84
1-9. 自分の自信へ	藁科 薫 86
1-10. スピーチコンテストを通して	森崎 桃香 87
1-11. 挑戦が自分を成長させる	中島 摩保 88
1-12. What is "Speaking English?"	Junya Saito 89
1-13. 後悔の無いように	長谷川 猛虎 91
1-14. 緊張のスピーチを終えて	梶田 隼大 92
2. 高校生対話弁論大会	95
3. 英米語学科特別研究発表会	山田 昌史 97
4. 教員採用試験合格者	
4-1. 夢を叶えるまでの道のり	進士 千陽 98

4-2. 九ヶ月間の初心	望月 萌乃	99
4-3. 学びを支えた3つの習慣	園田 耕介	100
4-4. 夢のスタートラインへ	大塚 沙映	102
4-5. 世の中の流れを味方に	高木 勇里	103
4-6. 夢の教員採用試験合格までの4年間	影山 萌香	105
4-7. 過去の自分が現在の自分の土台となる	小林 千紗	106
5. 国内外関係組織から英米語学科への受け入れ		
5-1. クレイトン大生がやって来た!	一言 哲也	109
6. 学内外での教職員や学生の取り組み		
6-1. ENGLISH CHANGED MY LIFE	Airi Terada	112
6-2. A SENSE OF BELONGING	Miri Miyazaki	114
6-3. 「話っ、輪っ、和っ!」を企画して	安藤 実希	116
Ⅲ グローバルコミュニケーション学科		
1. 海外事情談話会	増井 実子	121
2. 多言語レシテーション大会		
2-1. 第5回多言語レシテーション大会の報告	若松 大祐	122
2-2. 詩の力	江藤 秀一	126
2-3. 外国語学部3つのコンテスト	一言 哲也	127
2-4. 踏み出す一歩	加藤 未奈	128
2-5. 自信をつける	仲宗根 エイミ	130
2-6. 挑戦心	西川 莞人	131
2-7. 臆病者の挑戦	渡邊 光砂	132
2-8. 「仲間」の大切さ	杉山 慎之佑	133
2-9. 勝負は一瞬、努力は無限	杉山 滉一	134
2-10. 中国語に私の1年を捧げました	中野 元文	135
2-11. 自分との闘い	宮本 智華	137
2-12. 新たな挑戦	松本 奈々	138
3. 社会人基礎力養成		
3-1. 「協働研究セミナー」の改善に関する一考察	谷口 茂謙	140
4. キャリア開発		
4-1. 「現代の産業」の現状と改善	谷口 茂謙	144
5. 臨地実習		
5-1. [臨地実習A] やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu 2018」 ボランティア活動報告	増井 実子	149
5-2. 4年間楽しめて活躍できるイベント、それが「はあとふる Yaizu」	中村 和貴	151
5-3. 1年生としてはあとふる Yaizu の実行委員を務めて 伊川 亜祐菜、伊藤 侑、梶川 夏葉、竹下 媛香、久門 千夏		152

6. 国内外関係組織から GC 学科への受け入れ

6-1. 韓国公州大学大学生との交流会の報告	谷 誠司	155
------------------------	------	-----

7. 学内外での教職員や学生の取り組み

7-1. 歓迎聆聴	若松 大祐	158
7-2. 台北駐日経済文化代表処との交流	若松 大祐	161
7-3. Lo que aprendí estudiando idiomas	中沢 真央	162

IV 各言語圏での活動

1. 英語圏

1-1. Experience Things for Myself	Junya Saito	167
1-2. Vicissitude	半田 ひな乃	168
1-3. 初めての土地でチャンスを掴む！	木野 結生	170
1-4. 持って帰ってきたもの	山田 裕子	171
1-5. 留学という財産	榊原 未菜	173
1-6. 帰国してからの 1 年	梶田 隼大	175
1-7. 留学を終えてからの 1 年	曾根田 成	176
1-8. 自分への挑戦	山田 真愛	177
1-9. During a Storm	Kota Ushio	179
1-10. 私の成長	山崎 あゆみ	181
1-11. 留学が教えてくれた大切なこと	徳原 有紀	183
1-12. カナダ留学のメリット・デメリット	増田 翔馬	185
1-13. 「英語」以外の大切なもの	木宮 伽音	186
1-14. Vacation in America	Kyohei Nimura	188
1-15. 日本とカナダに住んでみて	山口 萌子	193
1-16. 日本を伝える	山本 妃紗	194
1-17. Small Opportunity から Huge Opportunity へ	渡邊 花音	195
1-18. Japan Wants to Incorporate Diversity from the United States	Tetsuya Sunagawa	197
1-19. 成長と気持ちの変化	望月 のゆり	201
1-20. 第二の人生	安部 葉史	202
1-21. My Turing Point	Airi Terada	204
1-22. 留学が変えた私	佐野 日花莉	206
1-23. 国境を越えて学べること	桑山 美柚	207
1-24. 自信がついた 2 ヶ月間	渡邊 優衣	209
1-25. 文化を超えた家族の温かさ	廣田 琴乃	210
1-26. アメリカでの出会い	谷 菜々美	212
1-27. 未知の世界を知る	落合 右季	213

2. スペイン語圏	
2-1. 2017 年度スペイン語学研修・留学報告	増井 実子…… 216
2-2. El idioma inglés en España	中沢 真央…… 216
2-3. 不完全を楽しむ	田島 利恵…… 223
2-4. 1 年のスペイン留学が教えてくれたこと	大久保 愛…… 224
3. 中国語圏	
3-1. 中国語そして「中国」・「中国人」を学ぶ	戸田 裕司…… 226
3-2. 台湾の夜市と食文化	小野寺 悠夏…… 227
3-3. 中国のおもてなし	亀山 莉美…… 232
3-4. 漳州街あるき MAP	…… 234
3-5. 双方向の繋がりへ	佐藤 文香…… 236
4. 韓国語圏	
4-1. 人との出会いが私を変えてくれた	泉 咲弥夏…… 240
4-2. 完璧でなくていい	畠山 愛理…… 241
4-3. アイドルとファンについて	大石 陽菜…… 243
4-4. 「交流」で日韓を繋ぐ第一歩に	伊川 亜祐菜…… 248
5. 上記 5 言語以外の言語圏	
5-1. 第 4 回 GC 学科学生海外活動報告会	江口 佳子…… 250
5-2. 勇気の一步	森谷 みなみ…… 251
V 井上朋子先生を悼む	…… 253
1. 井上朋子先生の経歴と業績	…… 255
2. 朋子先生との思い出	幸田 明子…… 258
3. To my dear colleague and friend, TOMOKO-sensei	Rie KOIKE…… 260
VI 学部機関誌と学内学会規約	若松 大祐…… 263
1. 『とこはことのは』を開く	若松 大祐…… 265
2. 常葉大学外国語学部言語文化研究会会則の策定始末	若松 大祐…… 268
編集後記	…… 275

I 外国語学部共通

1. 教員のエッセイ

アオテアロアとの出会い

外国語学部長 一言 哲也

ニュージーランド（以下、NZ）初期の歴史は、考古学的に未定である。英国人が入植する前の先住民マオリの人々が文字を持たなかったこともあり、伝説でしか残っていない。表題の「アオテアロア（Aotearoa）」は、マオリ語で「白く長い雲の棚引く地」という意味。マオリ人が自分たちの国（今の NZ）をこう呼んだ。伝説では、彼らの祖先は 7 隻ほどのカヌーに乗って移住してきた。祖国は「ハワイキ」。今のタヒチ周辺とも言われているが、ハワイではない。太平洋の大きなポリネシア文化圏に属す一帯である。詳細が未確定の NZ 考古学では、9 世紀頃にポリネシア人がこの島々に渡ってきたとされる。現在の NZ という名称は、この列島を 1642 年に「発見」したとされるアベル・タスマンの出身国オランダの「ゼーラント（Zeeland）州」に因み、Nova Zeelandia（新しい海の土地）と命名されたもの。それが、約 100 年後に当地を探検に来た英国のジェームズ・クックにより New Zealand と訳された。漢字表記では「新西蘭」だが、あまり使われない。

約 30 年前、私はこの国の北島南部にあるワイララパ地方の私立学校に日本語教師として着任する。その 4 年ほど前にも南島クライストチャーチと北島南端の首都ウェリントンを訪れたことがあったが、この時は永住権を所得した上での移住だった。首都から北上し峠を越えると、広大な平原ワイララパ地方に入る。羊が 1 匹、羊が 2 匹、羊が 3 匹、、眠くなるどころか、周囲の牧草にはあちこちに羊。文字通りの NZ 的風景に圧倒された。

着任した学校は、この地の中心地マスタトン。町の人口は約 2 万人だったが、当時の NZ 人口約 360 万人（今は約 460 万人）の中で、（日本の人口 1 億 2,000 万との比率も考慮すれば）この田舎町は結構な大きさだった。私が着任したのは、「Trinity Schools」という小中高校一貫の私立校で、ここの女子部 St Matthew's と男子部 Rathkeale の中・高等部で、日本の中 2～高 3 までの生徒に教える。当時、日本はバブル景気の末期。NZ 最大の貿易相手国で、日本人観光客も多数

やってきた。日本語は、アジアとの交流における重要な外国語として、NZ 中等教育でも学習者が急増し、最人気のフランス語を凌ぐ勢いであった。

NZ の新学期は夏の終わり 1 月末。まだ暑さが残る頃、私は街の郊外に位置する男子部の寮にある Tutor 用の部屋に入る。ここの Tutor とは、英国の私立パブリックスクール卒業後、大学進学前に OE (overseas experience) で NZ 私立校にやってくる若者の呼び名。彼らは、年下の寮生たちの面倒を見て、寮監 housemaster・寮母 matron・当番教師などの補佐をする。私は着任後間もないため、家探しも未だで家族も来ていなかった。英国式私立校の学生寮で始まった生活に、初めから驚くことばかり。やや誇張はあるが、映画「Dead Poets Society (邦題：いまを生きる)」の世界である。寮の規則は、予想以上に厳格。起床から夜 9 時の自習終了まで生活時間が決められ、寮の食堂でのマナーや服装にも、matron や tutor たちが目を配る。驚くことに、3 つある寮の 1 つ Rugby には、英国の名門 Rugby School からラグビー部の元キャプテンが tutor として来ていた。NZ の国技はラグビーで、南半球の豪州・南アフリカ共和国と並び、NZ は世界 3 強の 1 つ。その代表チーム「All Blacks」は現在 W 杯 2 連覇中。日本で開催される 2019 年 W 杯でも優勝候補である。

さて授業が始まると、いきなり、私のクラスに大問題発生。先生が、生徒の話す英語が聞き取れない！ NZ 英語の訛りというよりも、むしろ生徒独特の「スピード・話し方・語彙」が原因らしい。日本でも、例えば静岡の中高生が教室で話していれば、ある程度日本語力のある ALT でも理解できないだろう。困った、、、、がどうしようもない。最近、文科省がアクティブ・ラーニングを提唱しているが、NZ ではそんなもの当然の「学習文化」。生徒は、じっくり聞きもしないで質問したがる。「まゝ、待て！まずは良く聞いてから、質問しなさい。」などという指導は通じない。特に「パケハ (= 英国系 NZ 人)」系生徒は活動的いや攻撃的。一方で、アジア系生徒は、比較的よく聞く。ノートも取る。そして、テストも出来る。

そんな「多学習文化」と「中高生英語」に面食らいながら、3 ヶ月。ようやく英語にも何とか慣れ、季節は秋から冬に。スポーツも、夏のクリケットから秋冬のラグビーへ。対外試合では、学校ごとの「ハカ (マオリ戦士の士気高揚の踊り)」があり、応援する生徒たちがスタンドで披露する。さらに、Rathkeale 校ではス

I. 1. 教員のエッセイ

コットランド式バグパイプ楽団があり、20名ほどの生徒が正装で応援演奏を行う。日本で言えば、夏の高校野球の応援風景か。

この頃、私の家族は既に合流し、私は寮を出て庭とプール付きの家（残念ながら借家）に移動。彼らにはいきなり英語の生活が始まっていた。町に日本人家族は我が家だけ。長男もすぐに地元の小学校に転入。さぞかし言葉の壁で苦しむと思いきや、初日は笑顔で帰宅。「楽しかったよ。」という発言にホッと一安心。その後、彼は「真っ黒な海苔のオムスビ事件」や「アジア人蔑視のオシッコ掛けられ事件」などにも遭うが、何とか学校に馴染んでゆく。田舎のNZ人は親切で、学校の教職員仲間も含め、我々はいろいろな助けを受けつつ、「移民」として、羊に囲まれたマスタトンでの生活に落ち着き始める。

1年目が終わろうとした頃、教員用の住宅が空き、我々はその所に引っ越すことに。女子部の広大なキャンパスの一隅にある家で、仕事にも便利。唯一の違いは、日曜のdutyがあること。つまり、キャンパスにあるチャペルでの礼拝に、寮生と一緒に参加する職務である。日曜の朝、houseの寮生は学校牧師（通常は特定の先生が務める）chaplainのお説教を聴き、賛美歌を歌う。約1時間の祈りと内省の時間である。教会を真似た日本の結婚式場などにはあり得ない深遠な精神と敬虔な宗教文化が、NZの田舎の日常にある。このチャペルでは、夏の好日、卒業生が結婚式を挙げる風景も時折見られた。

当時、私が教えていた学校では3学期制であった。（今は4学期制が多いと聞く。）各学期の終わりには、「保護者との三者面談」がある。ただ、日本の高校等での三者面談とはやや趣が異なる。保護者の多くは夫婦でやって来る。教員はクラス担任ではなく、各教科担当。大食堂で、父母が次々と各科目の担当教員のテーブルを回って、科目ごとの成績や授業中の様子を聞く。なかなか丁寧はシステムである。たまに空白の時間も発生したが、私はその間、会場の「ざわつき」に耳を澄ます。「-p, -s, -t, -k, -ch, -sh」など、語尾の子音があちこちから響いてくる。日本語話者だけの雑踏からは聞こえない不思議な感覚が、今でも耳に残る。面談後には、保護者と教員のパーティーがあり、高3生に当たる最上級生がその場のホストやアテンド役を務める。そして、それが終わると、三々五々親たちは寮生を連れて帰路につく。休暇の始まりである。中には、ヘリコプターでキャンパスの広い芝生グラウンドに「駐機」し、再びパタパタと飛んで帰る親もいた。聞く

と、彼らの牧場はかなり田舎にあり、羊が 4,000 ～ 5,000 頭ほどいるとのこと。日本ではあり得ない日常である。

「あり得ない」と言えば、もう 1 つ。卒業式のこと。Initiation ceremony と呼ばれたが、辞書で調べると「通過儀礼」・「入学（社）式」などと訳される。卒業が人生の重要な通過点であり、次の人生の段階を initiate（≡ start）する大切な儀式、とでも言えようか。あり得ないのは、実はこの後。卒業パーティーである。教員も保護者も、そして卒業生もカップルで出席。「めいっぱい」の晴れ着（＝ドレス）で着飾る。そして、ダンス。ディスコ系ではなく、文字通り社交ダンス。皆踊るが、日本人夫婦は踊れない、、、この機会に、日本から持参した kimono を着た妻も、見つめるばかり、、、晴れのパーティーでもあり、当然ワインが出る。卒業生も当然のように飲んでいる。あり得ない。アテンド役は、もうすぐ下級生の指導を担うことになる高 2 生。あり得ない。が、飲酒の文化が違うのだから仕方ない、、、スポーツ等の対外試合でも、相手校と試合後の交流パーティーがあり、高 3 生は保護者や教員の同伴があれば、飲酒をする。禁止するのではなく、むしろ年長者との同席で、飲酒のマナーを学ぶのだ。こうして、大小の「あり得ない」体験の日々が、その後も続く、、、

やがて時間が経ち、すっかり田舎の kiwi 生活に馴染んだ頃のある日、日本から「国際教育新聞（だったか?）」が届く。常葉学園大学で、「海外大学との協定が結ばれ学生の留学事業が拡大」との特集記事。私は、知人を通じて履歴書を提出。その後、忘れかけた頃、日本から国際電話。面接に来いとのこと。機内泊も含め 3 泊 4 日の単身帰国。南北移動のため、時差は比較的少ないが、寒い NZ を出た後、着いた日本は茹だるような真夏。その半年後、この「就活」が実り、私は当時の「常葉学園短期大学英文科」に転職。ほぼ 3 年間の NZ 生活を終え、家族で帰国。NZ ではイースター休暇の頃だったか。1 学期が終わった 3 月末のことである。ひと月掛け荷造り。引っ越しの段ボール約 60 個を発送し終え、友人の車でウェリントン空港に向かう NZ 最後の日。友人が NZ 人で日本語が分からないため、車内は英語。息子が英語で話している。友人に向かい、「お父さんの英語には、日本人の訛りがあるよね。」友人は笑いながら、羊の群れが点在するワイラパの平原を疾走する。そんな息子の英語には、NZ 訛りが聞こえた。

私は、英国アルビオン、豪州アウストラリスと出会い、最後に NZ アオテアロ

アと出会ってきた。その過程で私の世界観は広がり変化した。この3部作の初回、「私がアルビオンに出会ったのは、もう40年以上も前のことになる。大昔の話しになってしまったが、私が皆さんのような大学生の頃である。外国語大学で英語を専攻していた。高校時代から外国に出たくて出たくて、外大に進んだ。」と書いた。その夢は、長い年月の中で実現した。しかし私の見た国々はその後も変化した、世界の変わり様は留まることを知らない。皆さんと世界との出会いは、一体どのようなものになるのだろうか。世界が皆さんを待っている。

※本稿は、一昨年「アルビオン」掲載の『アルビオンとの出会い』、そして昨年「とこはことのは」掲載の『アウストラリスとの出会い』に続く3部作の最終稿です。

ブラジルの黒人女性文学

江口 佳子

しかし、黒人は既に四百年もの間、苦しんできた。

二十五歳で死んでしまう黒人もいた。それは悲しみからであった、売られてしまうことを苦悩していたのだ。今日ここにいても、明日はあっちかもしれない、風によって散る葉のような存在であった。黒人は生まれた場所で成長し、死んでいく木がうらやましかった。黒人は移民ではなく、順応させられたのだ。

これは、カロリーナ・マリア・ジ・ジェズス（Carolina Maria de Jesus, 1914-1977）というブラジルのアフリカ系黒人女性作家が書いた『ビチータの日記』（*Diário de Bitita*）の一節である。“ビチータ”とは作家の幼少期のあだ名であり、ビチータの6歳から22歳頃までの約15年間のことが語られる。

本書には“日記”というタイトルがついている。“日記”というと、おそらく多くの人が、小学生の頃に夏休みの宿題として「絵日記」を書いたり、思春期に自分の思いを書き留めたりした経験があるのではないだろうか。（夏休みの終わ

りにまとめ書きをしないことを前提にすると…) 基本的に日記は、書き手が自らに関する日々の出来事を書き綴るものである。その日の出来事が、書き手の未来にどのような影響を及ぼすのかわからず、書き手の願望が実現される確証もない。

自分に関して書くものには「自伝」もある。「日記」と「自伝」は、前者がどんな年齢の人でも書くことができるのに対して、後者は子供や思春期の若者ではなく、一定の人生経験を経た人が、それまでの自分の人生を振り返るために自分史を書くという点で異なる。「自伝」とは、書き手の「今」を「過去」に歩んだ人生から回想し、様々な出来事や経験、思考の変化などの、現在の自分を形成するに至った諸事項を選択し、それらに連続性を持たせて繋ぎ合わせていく行為である。また、「日記」に比べて「自伝」は、公の読者を前提とした性質があるという点でも異なっている。こうした点から、カロリーナ・マリア・ジ・ジェズス(以下、カロリーナと呼ぶ)の『ピチータの日記』は、「日記」というよりも「自伝」といったほうが相応しいであろう。というのも、上述のとおり、『ピチータの日記』は、作家が 50 歳代になって、その幼少から成人になるまでの話をまとめたものであるからだ。

カロリーナの作家デビューは、『物置部屋』(*Quarto de Despejo*, 1960) という作品であった。この作品には「あるファヴェーラ住民の日記」という副題がつけられている。ファヴェーラ (favela) は、ポルトガル語で「貧困地域」という意味である。デビュー作を発表した当時、カロリーナはサンパウロ市北部のカニンデ地区 (Canindé) のファヴェーラで、家政婦や、ごみ集積場で集めた本や雑誌等の紙ごみを換金して生計を立てて、三人の子供と暮らしていた。紙ごみの収集行為は“catar”で、彼女は“カタドーラ (catadora)”だった。拾い集めた本や雑誌、チラシを読んで、文章の書き方を独学したと述べている。1958 年に、ブラジル人ジャーナリストのアウダリオ・ダントスは、カロリーナが住むファヴェーラを訪れ、彼女が数百枚の紙に書き記していたものを読み、彼女の才覚を見出した。それまで手書きしてきたものを整理して、2 年後に『物置部屋』が発表された。ブラジルでは、中流階級以上の大学教育を受けたエリートたちが作家の主流であったため、カロリーナのようなファヴェーラの住民が貧困層の実態を描いたことで、『物置部屋』は大変な話題となり、彼女はベストセラー作家として注目を浴びる。そうして大金を手に入れた彼女は、ファヴェーラを出て、自宅を持つと

いう夢を実現する。ところが、世間や出版社からの期待に応じて後続の作品を複数発表するが、まったく売れずに、世間からは次第に忘れられ、再び困窮した生活を送るようになる。

『ビチータの日記』は、カロリーナが1970年代に書き表した手記である。1975年に彼女のインタビューをするためにブラジルを訪れたフランス人ジャーナリストに、カロリーナはその手記を手渡した。その後、1977年にカロリーナは死去し、その手記は、1982年にフランスで*Journal de Bitita* というタイトルでフランス語に翻訳・出版され、1986年にはブラジルでも*Diário de Bitita* として出版された。『物置部屋』でセンセーショナルを巻き起こすも、その後、文学的には評価されなかったことを述べたが、その背景には、1964年から1984年のブラジル軍事政権の影響があったことを看過してはならない。貧困層の劣悪な生活環境の露呈は、当時の軍事政権への批判と解されたため、政府は言論統制の検閲で、カロリーナのような社会批判に通じる作品の出版を妨害したのである。

『ビチータの日記』は、22の章から構成された“ビチータ”の成長の記録である。物語は、サンパウロ州の北に位置するミナスジェライス州の小さな町、サクラメントに母親と二人で住んでいた頃のことから始まる。幼少期の話のなかで、「黒人」という章がある。ビチータは空腹から、隣家の木に登り、マンゴーを採って、着ていたワンピースの胸元にしまい込む。それを家主に見つかり、木から落ちて怪我をする。その家主に、盗み働くのは彼女が黒人だからだと罵倒される。ビチータは、自分の祖父から植民地期に始まるブラジルの奴隷制度の話を学んでいたので、「白人だって、アフリカから黒人を盗んだのだから泥棒だ」と言い返す。ブラジルでは1888年に奴隷制が廃止され、1889年の共和制開始とともに、近代化が本格化するが、支配・非支配の関係は維持されたままであった。また20世紀を通して、資本や土地の分配が進まず、欧米列強に肩を並べようと産業開発が優先され、1960年代から1970年代にかけて社会格差が拡大した。アフリカ系の人々の多くは、仕事を求めて都市へ移り住み、インフラの不十分な貧困地区を形成した。冒頭の引用は、ビチータがマンゴー泥棒をした後に述べたものである。アフリカから強制的に連れてこられた黒人を、自らの意志でブラジルにきた移民と区別する。歴史を通して、生きる場所を自分たちで決めることができなかった黒人の悲運を風に散る「葉」のような存在として悲しんでいる。ビチータは、白人は

黒人をブラジルに連れてきておきながら、黒人を差別すると憤慨する。

この作品の重要な点は、「私」が世の中を見る視点の位置である。ビチータは、街中で黒人が白人から罵られ、罪もないのに警官から追いかけられるのを目撃する。また、母親と住み込みで滞在する富裕層の贅沢な暮らしや、母親が雇い主から叱られる姿を見る。そうした光景を見るのは、町角やドアの隙間からなど、常に片隅からである。彼女の居場所が社会の周縁であることと、視点の位置は無縁ではない。

物語の主な内容は、自らが経験した苦い人生経験である。登場人物は、家族や親戚、隣人、雇い主、修道女といった、身近な人ばかりである。しかし、そうした人々との人間関係から、ビチータは社会における黒人、とくに黒人女性が置かれた状況を問題視する。人種間の対立、不十分な教育、不安定できつい労働環境を繰り返し述べる。女性が貧困から娼婦になっていることも言及する。黒人の厳しい状況から脱け出すために、彼女は勉学への強い関心を抱くようになる。偶然、勤め先の家で本に触れる機会を得て、ブラジルの歴史や文学に興味を持ち、辞書を使って、時間を見つけては本を読み進めるが、その姿を目撃した隣人からは、それは周囲を欺くためのポーズだと不審の目を向けられる。母親からも読書を止めるよう注意されるが、読書が唯一の日々の苦痛を癒してくれると感じ、益々読書に没頭し、社会への批判的視点を養っていく。カロリーナは、「食べ物がないうちに、不満の代わりに、私は日記を書いていた」と述懐している。彼女にとり、読書と執筆は、日常からの逃避と苦境への抵抗の手段であったのだ。

また、ビチータの生活の絶え間ない移動も作品の重要な点である。母親と不仲になったビチータは独り立ちするが、長期間同じところに留まることができない。「役立たずの黒人娘」と罵倒されて、雇い主から頻繁に解雇されるが、居心地の良い安全な修道院での仕事に就いても、金銭的な豊かさを追い求めて、木の葉のように定着せずに、他の場所へと移り渡る。ビチータは、高い賃金を目当てにサンパウロを目指すが、進む道は容易ではない。彼女の足跡を地図で辿ると、後戻りや方角の脱線で、サンパウロへ到着するまでに何年も要している。物語は、ブラジル経済の中心地のサンパウロに到着して、大都会で始まるこれからの生活に希望を抱く場面で終わる。

『物置部屋』の出版後、カロリーナ・マリア・ジ・ジェズスは、才能がないと

マスコミや世間から叩かれ、周囲からも断筆を勧められた。それにも関わらず、カロリーナは執筆を続けた。『ビチータの日記』は、作家が薄幸の晩年に、一時的ながら成功した当時の要因を探求し、自己の存在価値の再構築を図った稀有な回顧伝である。

— 参考文献 —

Jesus, Carolina Maria de. *Diário de Bitita*, Minas Gerais, Bertolucci, 2007

Pereira de Souza, Germana Henriques. *Carolina Maria de Jesus: o estranho diário da escritora vira lata*, São Paulo, Horizonte, 2012

Moreira, Daniel da Silva. “Reconstruir-se em texto: práticas de arquivamento e resistência no *Diário de Bitita*, de Carolina Maria de Jesus”, *Estação Literária, Vagão-volume 3*, 2009, <http://www.uel.br/pos/letras/EL/vagao/EL3Art6.pdf> (2018/12/26)

Only Robinson Crusoe could get everything done by Friday.

江藤 秀一

イギリスのとある村の祭りに出かけた折に “Only Robinson Crusoe could get everything done by Friday” と書かれた小さな壁掛けを買った。写真にあるように温かな感じのする手作り品で、そこに記された文言が^{もんごん}大いに気に入った。まさに私の専門としている 18 世紀イギリス文学中の傑作『ロビンソン・クルーソー』のお話にまつわるものである。この英文を見て、微笑んだり、なるほ



どと感心した方はロビンソンのお話を承知している方々である。もっとも、この英文を日本語に訳してみろと言われるとそれなりに難しい。この could は can の過去ではなくて仮定法ではないのか、あるいは by は「～までに」という期限を表すという文法的な知識が必要である。さらには「get + 目的語 (everything) + 過去分詞 (done)」が使役を表す構文であるというやや高度な文法知識も絶対に必要である。しかし、たとえそのような文法の知識があっても、ロビンソンのお話を知っていないとこの英文のおもしろさはわからない。つまり、「ロビンソン・クルーソーだけが万事を金曜日までにやってもらうことができる (できた)」という日本語訳では不十分なのである。

この英文を読んで感心した方は、Friday が「金曜日」という意味だけではなく、ロビンソン・クルーソーの召使の「フライデー」という人名の意味もかけてあるということを理解しているわけである。ロビンソンは無人島に流されて 15 年目にしてはじめて人間の足跡を見る。その後、この島には人食い人種が出没することを宴の跡から察知する。さらに数年の年月が流れていき、ある朝のこと、ロビンソンが望遠鏡で海岸の方を眺めていると、まさに人食いの宴が始まろうとする場面を目にする。焚火とすでに切り刻んだ肉とが目に入ってくる。しばらく眺めていると、その犠牲になりそうな一人の青年がすきを見て逃げ出してロビンソンの方へ走ってくる。思わぬ光景に度肝を抜かれたロビンソンではあるが、その青年を追いかけてくる二人の土着民をやむなく殺して青年を救いだす。その日は金曜日だったので、ロビンソンはその青年にフライデーという名を付け、以後召使として共に暮らすこととなる。ということで、この話を踏まえて先の英文を日本語に訳そうとすると、「ロビンソン・クルーソーだけが万事を (フライデーに) (金曜日までに) やってもらうことができる (できた)」ということになろうか。しかし、たとえこのような日本語訳をしたとしても、このフライデーの由来を知らなければ、なぜ (フライデーに) (金曜日までに) とかっこがついているのだろうか、あるいはなぜ「フライデー」という語が出ているのであろうか、と疑問に思われることであろう。つまり、この英文は日本語には翻訳不可能ということである。ロビンソンのお話を知らない人は、解説がなければ、なるほどどうなずけないし、また笑うこともできないわけである。

この英文は日本語のダジャレということになろうが、日本語のダジャレも語

I. 1. 教員のエッセイ

彙力がないと笑えない。もっとも最近レベルの低いダジャレは「おやじギャグ」と冷たくあしらわれるが、そうばかりにもできない。まして英語のダジャレとなると、これが難しい。解説がないと笑えないことが多い。英語のダジャレを存分に楽しむには日本語同様に単語の一つの意味だけではなく、別の意味も知っていなければならない。たとえば、“Why did the teacher wear dark glasses?” — “Because the class was so bright.” では、bright という単語には「眩しい」と「賢い」の意味があることを知っていなければ笑えない。さらに、先に出した Friday の場合には単に単語の複数の意味を知っているだけでは不十分で、文学作品の知識も必要となる。つまり単なるダジャレではない上級な笑いを誘う英文の理解には教養が必要ということになる。大学で学ぶ英語にはコミュニケーションの道具としての側面と、知性と教養を磨く側面とがある。日本語とは違った笑いを誘う構造的な特徴を学ぶことは、言葉に対する鋭敏さも養うことになる。そうすると、ロビンソンがその青年に教えた最初の英語が master と yes と no という語であり、自分の名が Robinson ではなくて Master であると教える件も、当時の植民地政策と考え合わせると様々な解釈が生じてくる。原文では、“I let him know his name should be Friday, which was the day I saved his life; I called him so for the memory of the time.” とあるが、Friday は Friday なんかではなく、ちゃんとした名があるのに、「見つけた日を記念してそのように呼ぶようにした」とはロビンソンは何と尊大な奴だろうかと、腹が立ったりもする。ロビンソンのそんな態度に、イギリス 18 世紀の領土拡張主義が見え隠れする。やはり、外国語や外国文学に対する興味は尽きない。

英語科教員養成の道のり

佐野 富士子

常葉大学に3年前に着任してから授業は「英語科教育」を中心に担当しているが、常大生の良さとして最初に気づいたことは、入学時から卒業時までの英語力の伸びの大きさである。特に初年度の伸びには目を見張るものがある。ところが卒業時までにはその良さを十分に発揮し切れていない原因かもしれないこと（他校との差）にも気づいたので、制度を変えずにできることを探ってみた。

1つめは、英米語学科教職課程では2年次に英語を教えることに関する科目の提供がない点である。他大学では観察を通した生徒の実態把握を目的とした「観察実習」や「英語教育実践研究」といった科目が開講されていることが多く、「英語科教育」のような理論面の学習と両輪を成し、学部 of 早い時期から理論と実践の融合が始まる。しかし本学科には両輪を成す科目がないうえ、2年次になると英語科目の数が減るため、例年2年生の英語力は下がる傾向にあった。

この問題を解決しようと考案したのが、2年生英語教育協同学習プロジェクトである。前期はビデオ教材の視聴、後期は専門分野の入門的な図書講読に取り組んでもらった。4人一組で前期後期それぞれ15週間ずつかけて60本のビデオと60冊の図書をリストから選択し、討議を重ねる対話的自律的学習である。グループ運営を各グループに任せたとこ、1人の脱落者もなく、全員が最後までしっかりと取り組んで報告書も定期的に提出できた。前期の終わりには「教員としての意識が高まった」「教員目で見ると先生の考えが分かった」「初めて会った人たちとグループを組んだが良い人間関係ができた」という声を多く聞いた。7月のTOEICテストでも点数が下がっている者はおらず、英語教員としての意識が高まったことを裏付けているように感じた。後期の読書課題では、書物を常に読むという習慣も強化できた。前期も後期も単位の出ない課外活動ではあったが、スムーズなグループ運営とリーダーシップをとる練習は全員が経験できた。

2つめは、教員採用試験合格に至るまでの4年間の成績の追跡調査である。1年生の時にどのような成績（特に英語）で、学年が上がるにしたがってどのように伸びた人が教員採用試験に合格しているのか、具体的なデータがなかった。そ

I. 1. 教員のエッセイ

のため、着任した年から英米語学科の専任教員には提供される英語統一テスト、英検の結果を FLSSC 担当者から頂戴し、それぞれの年の数値の動きを調べてみた。その結果、4 年生の夏に教員採用試験合格した学生は、1 年生の 1 月に教職課程履修希望届けを出した時点で、すでに TOEIC の点数が同学年の教職課程履修合格者の平均より高いことがわかった。なかには 1 年生 7 月の TOEIC テストから半年で大きく伸びている学生もいて、その後の伸びも大きく、他の学生の模範となるような人たちもいた。また教職履修合格者の TOEIC 平均点が学部で定めている点数より毎年 30 点も高いことがわかり、今後に向けて教職選抜基準を 20 点高く修正する方向に向かったのは、1 つの前進である。やりたいこと（夢）は実現できることなのか、じっくり考えさせる機会になればと願う。

3 つめは、若い卒業生のお話を後輩が直接聞く機会が得にくいことである。年齢が近い先輩が輝いている姿は後輩にとって憧れの的となり、手の届く目標になるので、卒業生が時々大学に来てくれると在学生には大変良い刺激となる。しかし、卒業生がふらりと訪れることができるような“英米語部屋”や“グローバル部屋”といったものがない。また、外部講師として授業に来てくれれば、本学の卒業生の長所であるスピーキング力とプレゼンテーション力を生かした授業実践を報告する場にもなるが、打診してもなかなか承諾してもらえないのが実情である。

そこで、本学の学生に公開発表の場を提供し、英語教育公開研修会（2018 年 10 月 27 日）における発表者になってもらった。今年はその試みの 1 回目であった。2 名の院生によるチームティーチングでは語用論のモデル授業を行った。生徒役の参加者は高校の時に学んでいなかった英語の側面に気づき、新たな学びがあった。飛び入りで 4 年生には世界的に注目を浴びている CLIL(Content and Language Integrated Learning) と呼ばれる指導法を用いた授業について発表してもらった。実習先で良い感触を得て、後期の「英語科教育Ⅳ」でさらに発展させた指導手法は、中学生にフェアトレードについて深く考えさせる授業であった。今後は、依頼があったら快諾し、発表の場数を踏んで常業で培ったプレゼンテーション能力をさらに伸ばす学生、卒業生が増えることを期待する。

気づいた違いは他にもあるが、教員志望の学生が夢を実現できる教育環境を整える一助となることを願い、そのための支援は惜しみなく提供するので、学生諸君にはそれを受け取ってもらいたい。草薙新校舎でますます伸びてほしい。

私の学びと英語音声学

本沢 彩

1. はじめまして

2018 年度 4 月に外国語学部英米語学科にやってきました、本沢彩（モトザワアヤ）と申します。難しい漢字は入っていませんが珍しい苗字らしく、100 円均一で判子が見つかることは滅多にありません。また、発音しにくい苗字のため、電話に出るときは気合を入れないと自分でも滑らかに言えません。そのような私の名前ですが、常葉大学に来て 10 か月で非常に多くの人に会い、覚えていただくことができました。今回はこの場をお借りして、普段はなかなか伝えることのできない私のこれまでの学びと専門分野である英語音声学についてご紹介させていただければと思います。そして、英語音声学について一人でも多くの方に興味を持っていただけたら大変うれしいと思います。

2. 大学入学と英語音声学との出会い

私が大学に入学したのは今から 15 年前の 2004 年 4 月のことです。私が入学した関東学院大学文学部英語英米文学科（現在は国際文化学部英語文化学科）では、英語を「ことば」「しくみ」という観点で学ぶ英語学の講義や、アメリカやイギリスなどの文学作品を原文で精読する講義、英語圏の社会や文化を学ぶ講義などに加え、英語のコミュニケーションスキルを高めるための講義や英検や TOEIC などの資格試験対策の講義などがありました。大学に入学したばかりの頃には、卒業後に中学校か高校の英語の先生になりたいと漠然と考えていましたが、当時の私は英語のリスニングとスピーキングがとにかく苦手で、高校生の頃から自分なりに勉強を続けていたものの大して上達しませんでした。苦手意識の強いリスニングやスピーキングを何とか克服したいという思いから、当時は選択科目だった英語音声学の授業を履修することになりました。それが私と英語音声学との出会いです。英語音声学の授業では、英語で用いられる音の種類と発音の仕方、日本語の発音との相違点などを学びました。毎回の講義では、英語に特有な発音が出てくる表現の発音と聞き取りの訓練を繰り返し行いました。私は母音や子音など

の一つ一つの音の聞き取りが苦手で、特に似た発音を聞き比べる課題には非常に苦戦しました。始めのうちは全く区別ができなかったものの、何度も何度も発音と聞き取りの練習を繰り返すことで、少しずつ発音したり聞き取ったりすることができるようになりました。学期の後半には、数十人もの履修者たちの前に一人ずつ出て、教卓の前で先生から指示された表現を発音するテストがありました。多くの学生の前で一人発音することは非常に緊張するものだったので、練習の成果は全く発揮できず、むしろ英語の発音に対する強い苦手意識が残りました。

3. 卒業研究、そして大学院進学

1年生の英語音声学の講義での体験から、卒業後には英語の先生として、自分のように英語の発音が苦手な人の役に立ちたいと強く思うようになりました。そして、4年生の時には英語の発音指導と評価をテーマに卒業論文に挑戦しました。文献調査の内容をもとに発音改善のためのリズム・トレーニングを考え、同級生や後輩に協力してもらい、トレーニング前後の発音の変化から改善効果を検証しようと試みましたが、発音の聞き取りが苦手だった私はトレーニング前後の発音の微妙な変化を感じ取ることができず、ネイティブスピーカーの先生による評価に完全に頼りきりでした。ネイティブスピーカーの主観だけでは評価の信頼性が不十分であると感じつつも、自分の「耳」による評価ができないため、客観的に評価できる方法について考え始めました。そして、音響分析によるデータを用いて評価する方法に強い関心を持ち、本格的に学ぼうと大学院へ進学しました。しかし、当時所属していた文学部では音響や解析について本格的に学ぶ施設や機材が十分でなかったため、当時の指導教授の先生と相談し、工学部の建築音響の研究室で機材の使い方や実験方法などについて実践的に学ばせてもらうことになりました。そして、文学部では英語音声学や発音指導を学び、工学部で技術を磨きながら、修士論文や博士論文の研究活動を進めていくことができました。

4. 新しい分野への挑戦

建築音響の研究室で学んでいる間には、音声の録音を目的とした録音室の制作を行い、その性能を調査し技術論文にまとめる機会にも恵まれました。また、別の研究室で行っていた省エネに関する実験調査にも参加させていただきました。

これらの経験から、建築や音響、環境などに関する知識や、実験の計画の仕方、測定したデータを数値表やグラフなどにまとめる方法、論文での結果の効果的な魅せ方など、所属していた文学部では学ぶことのなかった多くのことを知ることができました。また、文学部では大学院に進学する学生が少なく同級生や先輩後輩がほとんどいませんでしたが、工学部の熱気ある研究活動の様子を目の当たりにして日々刺激を受けることもできました。工学部での学びを通して発見したもっとも大切なことは、自分の専門とする分野と一見関係がなさそうに思えることでも、実際に学んだり体験したりすることで、活かすことのできる知識や考え方、アプローチ方法などがたくさんあるということでした。

5. 今後の展望

常葉大学にきて、自分の専門とする英語音声学の講義を初めて担当させていただいています。学生時代に発音に強い苦手意識を持っていた私が、英語音声学の講義を教えていることは本当に不思議です。しかしながら、発音の習得で苦労してきた体験があるからこそ教えられることがあるのではないかと感じています。大学生の時に抱いていた「発音が苦手な人の力になれる英語の先生になりたい」という気持ちは今も変わりません。これからは、私の英語音声学の講義を受けた学生が自信をもって発音できるような、そして、もっと学びたい・発音を良くしたいという学生の気持ちに応えられるような指導ができるように、研究活動を通して自らの専門分野である英語音声学の学びをより一層深め、英語学習者としてもレベルアップしたいと考えています。また、専門とする英語音声学の知識を（自分が特に苦手だった）リスニングやスピーキングの技能向上に役立てられないか、学生時代から日々考え続けています。発音は重要だと言われているにもかかわらず、残念ながら、英語の一般的な授業では発音指導に十分な時間がかけられていないことが多いです。リスニングやスピーキングの技能向上のための活動と効果的に組み合わせる方法を考え出し、日本人学習者の英語の音声コミュニケーション能力の向上に役立てられたらいいなと考えています。そして、英語の発音に苦手意識を持っている人が少しでも自信をもって話せるように、貢献できたら大変うれしいです。

台湾高座会留日 75 周年歓迎大会の参加記

若松 大祐

2018 年 10 月 20 日（土）および 22 日（月）、台湾高座会留日 75 周年歓迎大会に参加した。歓迎大会の概要を記するとともに、台湾高座会の現代史的な意味を考えてみたい。

まず、歓迎大会の概要を記そう。そもそも、台湾高座会とはかつて 1943 年 5 月から 1944 年 5 月まで、神奈川県の高座海軍工廠で戦闘機雷電の製造に従事した台湾少年工（約 8400 名、平均年齢 14、15 歳）が、第二次世界大戦後に台湾で結成した組織である。台湾少年工の事績や関係者による評価は、10 月 20 日（土）に座間市芹沢公園に設置された「台湾少年工（海軍軍属）顕彰碑」が概括している。

「八千の台湾少年雷電を造りし歴史永遠に留めん」（石川公弘）

「北に対き年の初めの祈りなり心の祖国に栄えあれかし」（洪坤山）

「朝夕にひたすら祈るは台湾の平和なること友の身のこと」（佐野た香）

台湾高座会は 1992 年に神奈川県大和市を訪問したのをきっかけに、以降、かつて高座郡だった地方自治体と交流が始まる。1993 年 6 月に「台湾高座会留日 50 周年歓迎大会」が開催され、2003 年に 60 周年、2013 年に 70 周年の大会が実施された。かつて台湾少年工だった人々も今や高齢になり、体力的な問題もあって、大規模な歓迎大会は 2018 年の 75 周年が最後になった。75 周年大会は甘利明（衆議院議員）が会長を務めるものの、実際の事務は石川公弘や橋本理吉といった高座日台交流の会の人びとが担う。

台湾高座会留日 75 周年歓迎大会 (<http://jt75.info/>)

< 1. 台湾少年工顕彰碑除幕式 >

2018 年 10 月 20 日（土）10 時 30 分より、座間市芹沢公園

< 2. 台湾高座会歓迎式典 >

13 時 30 分より、大和市文化創造拠点シリウス大ホール、定員 1000 名

内容：台湾からの参加者への感謝状贈呈など。

< 3. 歓迎イベント >

15 時 00 分より、大和市文化創造拠点シリウス大ホール、定員 1000 名

演奏：海上自衛隊横須賀音楽隊による演奏、古川精一と慶応大学ワグネル合唱団。

< 4. 有志による歓迎宴 >

18 時 30 分より、オークラフロンティアホテル海老名、定員 100 名

< 5. 歓迎航空ショー >

10 月 22 日 (月) 11 時より、静岡市富士川滑空場

内容：ゼロ戦と雷電ラジコン戦隊 (原寸三分の一)

続いて、台湾少年工や台湾高座会の意義はどこにあるのか。そもそも台湾少年工や台湾高座会については、いくらかの参考文献がある¹。また、2013 年には台湾高座台日交流協会の元少年工が日本政府の旭日小綬章を受章した²。こうした文献や出来事は日台交流史の脈絡や観点で理解されており、親日台湾という同時代的な側面を描く内容となっている。

そこで、私は既存の脈絡や観点から離れて、東アジア現代史における台湾高座会の意義を強引に展望してみたい。それは、戦友会という観点である。戦友会とは、「アジア・太平洋戦争時において軍隊生活を共有した人々が、戦後に結成した集団である」(戦友会研究会)³。つまり、青年期に軍隊に関係して苦楽を共に過ごした人々の集いである。台湾高座会を戦友会の一つとみなし、戦友会を日本規模にとどめず、東アジア規模で理解するきっかけに位置付けられないだろうか。2018 年の歳末、母の実家でずいぶん前に亡くなった祖父の遺品を整理した。戦友会での写真や記念品を見ながら、台湾高座会も戦友会の一つであろうという着想が強まった。

¹ 管見の限り、次のような記録や先行研究がある。

林景淵『望郷三千里：台湾少年工奮鬥史』台北：遠景、2017。

石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』東京：並木書房、2013。

野口毅 (編著)『台湾少年工と第二の故郷：高座海軍工廠に結ばれた絆は今も』東京：展転社、1999。

保坂治男『台湾少年工望郷のハンマー：子ども・市民と学ぶこの町の「戦争」と「平和」』〔ゆい協同文庫：子どもとおとな一緒に未来を考えよう 4〕東京：ゆい書房、1993。

劉嘉雨『僕たちが零戦をつくった：台湾少年工の手記』東京：潮書房光人新社、2018。

² 「フォーカス台湾 > 政治 > 「日本は私たちを忘れなかった」台湾の元少年工に勲章伝達 2013/06/17」(<http://japan.cna.com.tw/news/apol/201306170007.aspx>) [2018 年 12 月

I. 1. 教員のエッセイ

29 日確認]。

³ 戦友会研究会 (Research on Japanese "Sen'yukai") は京都大学が中心になって組織された研究会であり、多くの資料や研究成果を出版している。主要な成果には次のような文献がある。

戦友会研究会『戦友会研究ノート』東京：青弓社、2012。

戦友会研究会（編）『戦友会に関する統計調査資料』京都：編者、2008。

高橋三郎（編）『共同研究 戦友会』〔新装版〕東京：インパクト出版会、2005。

高橋三郎（編）『共同研究 戦友会』東京：田畑書店、1983。

「特集：戦友会の社会学的分析」『ソシオロジ』第 24 卷 2 号（76 号）（京都：京都大学文学部社会学研究室、1980 年 1 月）、pp.1-92。

2. 外国語学部コロキウム

2018 年度外国語学部コロキウムの実施報告

昨年度に引き続き、以下のように外国語学部言語文化研究会が主催するコロキウム (Colloquium) を 2 回開催した。目的は、外国語学部教員が自身の教育研究活動の一端を発表して、外国語学部教員同士で関心を共有し、今後の外国語学部の教学へ活用しようと目指すところにある。参加者については主に外国語学部教員を想定しつつ、大学ホームページなどを使って学内外からの参加を広く呼びかけている。

(若松大祐)

第 1 回

日時：2018 年 7 月 4 日 (水) 16 時半から 18 時まで

会場：静岡草薙キャンパス A402 教室

講師：本沢 彩 (英米語学科)

演題：英語音声学の未来：これまでの教育経験と研究結果から考えてみたら

要旨：音声学は、人間の音声コミュニケーションに関する様々なナゾを解明する学問ですが、全国津々浦々、大学の英語音声学の授業では、「口の中のパーツとか発音記号とか覚えることが多い」「発音練習ばかりで英語力があがらない」「文系学部なのにガチ理数系科目」などなど、嫌われがちな科目です。音声を理工学のアプローチで研究する諸分野の台頭により、日本において英語音声学者はもはや希少生物と化してきています。はたして、英語音声学は学問分野として生き残ることができるのか。新米教員で若手英語音声学者の本沢が、自分の経験から好き勝手にお話しします。

第 2 回

日時：2019 年 1 月 9 日 (水) 16 時 45 分から 18 時まで

会場：静岡草薙キャンパス A406 教室

講師：小池 理恵 (英米語学科)

演題：Vladimir Nobokov ⇄ Bharati Mukherjee

Mauritius：文学、言語政策、チャゴス難民、そして 50 周年

I. 2. 外国語学部コロキウム

要旨：「今取り組んでいることをどの学会で発表するか」が最大の研究テーマかもしれません。その意味で研究分野の共生を考えながら、ロシアの亡命作家ナボコフから、インド出身移民作家ムーカジ、そしてモーリシャス地域研究と渡り歩いてきた短いですが波乱万丈の研究人生についてお話させていただきます。モーリシャス研究では、文学、言語政策、難民問題と狭い領土であっても多様な研究の可能性と出会いました。独立50周年を迎えたモーリシャスはこれから日本とどのような関係を築くことができるかということも考えてみたいと思います。

3. 特別研究の題目と要旨

英米語学科

チビチリガマ集団自決における日米報道比較

小池研究室 15121044 進士 千陽

2017 年 9 月に沖縄にある洞窟「チビチリガマ」の内部が破壊されるという事件が起こった。書類送検されたのは、当時 16 ～ 19 歳の少年たちであった。彼らはこの場所の意味さえ知らなかったという。戦争を体験した人たちの高齢化により、戦争の記憶は語り継がれぬままに風化していることを思い知らされる事件だった。私は 2019 年 4 月からこの少年たちと同世代の生徒たちを教育する。戦争の記憶を風化させず、次の世代に繋げていくために何ができるのかということに立って本研究のテーマを設定した。

本研究では、チビチリガマで起こった集団自決が日本とアメリカでどのように捉えられていたのかを明らかにすることを主たる目的とする。近年では、「集団自決が軍による指示で行われた」という記述を教科書から削除するという「教科書検定問題」でも注目されている。日本政府はなぜこの文言を削除したいのか、ということも調査し、戦争の記憶の風化との関連性も分析する。

第 1 章では、日本軍とアメリカ軍がそれぞれどのような目的で沖縄を戦場に選びどのように戦いを進めたのかという戦時経過と犠牲者数を精査する。第 2 章では先行研究に基づき「集団自決」の異なる定義を分析し、本論での独自の定義を提示する。その上で、チビチリガマでの「集団自決」の経緯を精査する。第 3 章では、「集団自決」について報道しているワシントン・ポストと毎日新聞、また戦後の朝日新聞を用いて、「集団自決」が軍からの指示であったのかどうかを分析する。その際に、同日付の日本とアメリカの新聞に異なる戦果報道があったことに注目し、日本の報道は、戦争に対する国民の士気を高めるために利用されていたことを示す。第 4 章では近年問題になっている「教科書検定問題」について、日本はなぜ、「集団自決は軍の指示である」という記述を削除したいのかを考察する。それは「集団自決」が軍の指示や意識の植え付けにより起きたものであり、

戦後政府はそれを隠すために削除したのだと考える。その結果、戦争の記憶はますます風化するであろうと結論付ける。

ホスピタリティとサービス概念の受容と変容

小池研究室 15121055 田邊 里沙

本論では、英語の“hospitality”と“service”の起源と歴史を調査し、日本に受容された「ホスピタリティ」と「サービス」との比較を試みることを主たる目的とする。その結果、それらの言葉が日本社会にどのように受容され、変容し、使われてきたかを追究する。そのために本論は以下のように構成した。

第1章では、「ホスピタリティ (hospitality)」の語源・歴史・意味を日本語と英語でそれぞれ比較しまとめた。「ホスピタリティ」とhospitalityはその出現年代こそ大きく異なるが、定義には大きな違いは見られない。それは、日本独自の「ホスピタリティ」に類似した文化が存在していたからである。ここでは、先行研究をもとに日本語の「ホスピタリティ」の定義付けをする。

第2章では、「サービス (service)」の語源・歴史・意味を日本語と英語でそれぞれ比較してまとめた。「サービス」とserviceには定義に大きな違いがあることが理解できる。日本語における「サービス」は言葉の受容後に独自に変化したことがわかった。ただし「サービス」という言葉の変容にはそれほど長い時間はかかっていない。

第3章では、「ホスピタリティ (hospitality)」と「サービス (service)」との相違点を明らかにした。日本文化では「ホスピタリティ」と「サービス」が切り離せない関係である一方で、提供する相手にはそれぞれ異なるアプローチを併せ持つことが理解できた。そこには日本独自の「おもてなし」の存在とその重要性を示す必要があった。

第4章では、言葉の意味や解釈、またそれを体現する行為は時代とともに変化することを確認した。従って固定概念を持たず、柔軟に対応することが重要である。本論では「ホスピタリティ」と「サービス」、そして「おもてなし」は連動しながらも全く異なる性質を持つと結論づける。つまり、サービス業という分野

の中には、「ホスピタリティ」と「おもてなし」を含むことはできるが、マニュアル化されている「サービス」という行為そのものと、広義の「ホスピタリティ」、「おもてなし」は異質である。一見「ホスピタリティ」と「おもてなし」は混同されがちであるが、日本独自の「おもてなし」という文化を「ホスピタリティ」に吸収させることはできない。相違を明らかにするために、日本独自の「おもてなし」用語を選出し、英語で説明を加えるアペンディックスを本論の最後に加えた。

沖縄における法の境界線

—Indian Reservation での犯罪を参考に—

小池研究室 15121086 村松 嘉之

沖縄の人々は 1972 年の日本への返還以前から「米軍人および軍属」（以降、米軍人等とする）による犯罪や軍事訓練中の事故の犠牲者となっていた。戦後の米国による統治時代においては、1955 年 9 月に当時 6 歳の少女が嘉手納高射砲隊所属の米兵によって拉致・強姦されたうえ、殺害される事件が起きている。この事件は被害にあった少女の名前をとって、「由美子ちゃん事件」として現在でも沖縄の人々の記憶に残っている。また、1995 年の米軍人等 3 人による少女暴行事件、2004 年 8 月の沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事故は、沖縄県民だけではなく多くの日本人に衝撃を与えた。

このような非原住民による住民の殺人や強姦の事例は世界各地に存在する。本研究では、特に類似点がある事例をアメリカ先住民のインディアン保留地 (Indian Reservation) に見出して比較検証する。沖縄との共通点は、殺人や強姦などの刑事事件について裁判を行う権利である「刑事裁判権」について問題を抱えていることである。インディアン保留地では、非インディアンによる犯罪は自民族の裁判所で裁判を行うことができず、自民族の裁判所で扱える事件は著しく制限されている。裁判権を自民族で行使できるか否かはインディアンにとって深刻な問題である。これは近年の調査で、インディアンの女性の約 3 人に 1 人が強姦の被害にあっており、強姦の 87% が非インディアンによって引き起こされているた

めである。

インディアン保留地では犯罪を引き起こした人物がインディアンか非インディアンによって、自民族の裁判所で裁判権を行使できるか否かが別れる。一方、沖縄は在日米軍基地の内外をわける境界線があり、その土地の境界線が犯罪に及んだ米軍人等を日本の裁判所で裁けるか否かが決まる境界線となっている。本論では、インディアン保留地と沖縄での重罪を3件ずつ精査し、その裁かれ方と判決を明らかにした上で、法の境界線が国内にあるか国際的なものかにより、法の改善と実践の度合いに差があることを示す。

小学校外国語教育における英語絵本の活用と効果について ～ことばの教育から見る英語絵本の活用～

幸田研究室 15121010 池田 優花

2011年より、公立小学校第5学年および第6学年での外国語活動が必修化されている。2020年度には、小学校第3学年および第4学年に外国語活動が引き下げられることにより、小学校第5学年および第6学年では外国語科として外国語が教科化される。小学校学習指導要領の中の外国語活動の目標には、言語や文化について体験的に理解を深めることや、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることで、コミュニケーション能力の素地を養うことが掲げられているように、児童生徒の発達段階を考慮するだけでなく、興味・関心を高める様々な教材を使用していくことが必要である。初めて外国語に触れる機会として外国語活動では、音声面を中心としたコミュニケーション活動を行い、慣れ親しませることが特に重要である。また、高学年で行われる外国語科では、「聞くこと」「話すこと」に慣れ親しませた上で「読むこと」「書くこと」の指導が加わる。そのため、習得能力に差が出やすい「読み」「書き」の指導では、児童の発達段階に応じた教材について段階を踏まえながら選ぶことが大切である。

本研究では、第1章で小学校外国語活動の現状とそこから見えてきた課題を考察し、高学年で始まる「読むこと」に慣れ親しむためにも現在、公立小学校の教

材としては、ほとんど取り上げられていない英語絵本の活用が必要ではないかと考えた。

第 2 章では、母語および第二言語を修得するための「ことばの教育」という観点から、言語修得の特徴、ことばの発達、英語教育を考察し、外国語活動で必要な指導を考えた。ことばの教育として英語を修得していくためには、親や教師等による「ことばの提供」をできるだけ多く行うことが必要であり、そのための効果的な指導をまとめた。

第 3 章では、教材としての絵本はどのような力を育成することができるのか論じた上で、様々な活用方法を参考に 2020 年度から外国語活動が始まる第 3 学年および第 4 学年の児童に対して英語の文字や音声に慣れ親しむことができるようにするにはどのように絵本の活用を行う必要があるのかについて考えた。

小学校外国語活動の今後

～アンケート調査をもとにした授業案提案を通して～

幸田研究室 15121026 影山 萌香

小学校外国語活動は、平成 20 年度以降も様々な経緯を経て改革され、平成 23 年度に第 5 学年、6 学年で年間 35 単位という授業時間で必修化された。平成 30 年度までの約 7 年間、外国語活動はこの単位時間内で、文部科学省の提供する教材と指導書で指導がなされてきた。しかし、平成 29 年告示の新学習指導要領において、平成 32 年度から外国語活動は年間 35 単位時間で第 3 学年、第 4 学年で必修化、さらに、第 5 学年、第 6 学年においては年間 70 単位時間で外国語科という新たな形で教科化されることとなった。5、6 年生の外国語科は教科になるため、今回の改訂に際し、評価に関する問題も様々に挙がっている。

本研究は 3 章で構成する。第 1 章では小学校外国語活動の現状を検証、第 2 章では中学校外国語科の現状を明らかにし、今後小中連携を意識した指導をどのように行っていけばよいのかを考察、第 3 章では、文部科学省が提供している教材を基に、教材提案をする。

現場の学習者の実態を把握することが本研究では重要であるため、第 2 章 3 節

I. 3. 特別研究の題目と要旨

では、中学生を対象とした英語学習に関するアンケート調査を基に考察した。平成30年度6月に赴いた教育実習校において、調査研究をすることができた。今回のアンケート調査対象者は、私立中学校の3年生で、生徒が回答した「今までで印象に残った指導」や「好きだった活動」を参考に5、6年生のための教材提案を行った。私学だということもあり、学習に対して意欲的な生徒が多いと予想していたが、アンケートの設問の「英語が好きですか？」については、「好き」と回答した生徒は全体のわずか14パーセントで、「嫌い」と回答した生徒も多く見受けられた。その理由を問うと、最も多かった回答が「書くことが嫌い」であった。小学校外国語活動では文字指導はほとんど行わないため、このような結果になったと考えられる。また、授業内で“習った表現を用いて一文作ろう！”においても苦戦している生徒が多く見受けられたため、全体的に文章を書くということ自体に苦手意識を持っている生徒が多いと感じた。アンケート調査の中で、「英語を使って今後やってみたいこと」を問うと、海外旅行、洋画や洋楽を字幕なしで観たり聴いたりする、といった回答が多く、生活に密着した「使える英語」を習得したいと考えている生徒が多いという結果が得られた。

第3章では、アンケート調査の結果を踏まえて観光旅行や道案内といった具体的なシチュエーションを設定して、表現をただ覚えるだけでなく、実際に使ってみたくなる活動、児童にとって意味のある活動を体験できるような授業を提案した。

今回のアンケート調査は、教育実習先での限定された生徒のみの結果であった。4月からは小学校に赴任するので、その教育現場で調査対象者を増やし、継続して調査を行うことで、外国語活動が意味のある指導となるよう、また、小中の連携が円滑に進むよう指導方法の研究を続けたい。

日本の小学校英語教育のこれから ～ 2020年に向けての課題と展望～

幸田研究室 15121056 谷 菜々美

文部科学省は新学習指導要領において、2020年度から小学校3・4年生に外

国語活動を必修化し、5・6年生は外国語を教科化することを発表した。今後は大きく小学校での英語教育が変動する。そのような変動していく流れを理解するため、常に文部科学省の動静に目を向け、一年後のオリンピック開催などの社会の変化を敏感に考察する必要がある。小学校教諭を目指している筆者が今、一番意識していることは小学校英語・外国語活動のより効果的な指導方法である。また大学で受けた授業で、生徒に英語を教える上での基礎に焦点を当て、生徒に英語を教える各場面の特徴や、教える上で必要となる歌や教授法を理解し、模擬授業を実施した。この授業により現在公立小学校で行われている外国語活動の課題が浮き彫りになってきた。

本論文では、小学校英語・外国語活動の導入に至った経緯や目的を整理した後、現状や課題に目を向け、実際の現場を観察し、東アジアの取り組みと比較しながらこれからの日本の小学校英語教育について考察した。

第一章では、小学校英語・外国語活動の背景として、第一節で導入の経緯を、第二節で文部科学省が示す目標を挙げ、学習指導要領と新学習指導要領の比較、外国語活動と教科としての外国語の学習指導要領の比較をした。第二章では小学校英語・外国語活動の現状として、第一節で時間の確保、第二節で指導教員の育成・確保、第三節で評価にそれぞれ焦点を当て、問題点と解決策を挙げた。第三章ではフィールドワークとして、三つの小学校の研究会に参加して授業観察を記録し、それぞれの授業に対する課題を挙げた。第四章では海外の英語教育として、第一節で台湾の現状を挙げ、第二節で日本と台湾の比較をした。第五章では外国語科・外国語活動への展望として、第一節では英語の教材を研究し、第二節では実践授業例を挙げた。

小学校英語・外国語活動の実際の現場に行き、授業観察をすることで、授業前の準備や確認、授業中の指導、授業後の振り返りや次回への繋ぎ方など、教師の小学校英語・外国語活動に対する工夫がとても大事だと感じた。今後も研究会や講演会に参加し英語教育において研究を続けていきたい。また、自分が教師として英語教育・外国語活動を行う際、この研究を生かした教材開発や指導をしたい。

中学生の会話頻出語彙習得度調査

佐野研究室 15121045 杉田 輝一斗

幼い頃から、私は英語に興味を持ち、英語を話したいと感じていたが、高校卒業までの英語教育で私が英語を流暢に表現することはできなかった。しかし大学在学中に経験した語学留学で、たくさんの語彙を学ぶことができ、英語を話す時にもっとも必要なことは語彙なのではないかと考えたため、本研究を実施することにした。

本研究では、現在の中学生の語彙習得の状況について探求した。中学校学習指導要領の改訂で「聞くこと・話すこと（やり取り・発表）・読むこと・書くこと」の総合的な育成がさらに強化される中で、その5つに加えて「語彙力」の育成も必要であると考え、本研究では「語彙」特に「中学生の語彙力の調査」に焦点を当てて研究をする。

はじめに、語彙習得には語形、意味、使用の3つの知識を総合的に高めることが必要であることや、語彙学習法に関わる先行研究を集めて確認した。そのような研究内容は、語彙力とリーディング力の関係の研究や、直接語彙学習法や間接語彙学習法など多岐にわたっているが、その中で、会話頻出語彙の習得度に関する研究が極めて少ないことに気づき、この点を本研究のテーマと定めた。現在の中学生の語彙習得率を調べるために、静岡県の中西部にある公立中学校の全校生徒295名を対象にアンケートを実施した。アンケートは(1)会話に必要な語彙上位200語を知っているかいないかを問うYes or Noの選択式、(2)日常生活で話したい言葉は何であるかを日本語で書く記述式、の2種類である。使用した語彙リスト200語は、The British National Corpus, The Corpus of Contemporary American Corpus, Longman Communication 3000の3つのリストを参照して作成されたボキャブラリーリストを入手し、その上位200単語を本研究の調査項目として採用した。もう1つの記述式アンケートでは中学生が日常でよく使う語彙や表現を日本語で自由に書いてもらった。

頻出200語に関する語彙の意味知識調査の結果は第1学年：29.5%、第2学年：56.3%、第3学年：74.4%の正答率であった。各学年で習得率が低い語彙について

て語彙の属性を分析し、その語彙の必要性を考察した。中学生が日常で使っている語彙の調査では、調査対象者の話したい表現と教科書の新出単語を比較し、その中には教科書で扱っていない語彙が全体で 248 個中 25 個 (10.1%) あるとの結果を得た。以上の結果をふまえ、なぜ教科書で扱っていないか考察し、扱う必要性があるとの結論に至った。

最後に中学生の英語を話す力の育成のために具体的な語彙指導法を提案した。

教科書の言語活動分析―効果的なタスク活動を考える

佐野研究室 15121080 松島 未歩

日本の英語の授業は、教科書本文の訳読や音読を中心に進められているのではないか、それでいいのか、という疑問は長い間持ち続けていた。大学に入学し、英語教職課程に在席している間もこの疑問に対する答えを探し続けていた。生徒に文法項目を教えることに重点を置き、形式に当てはめた練習を繰り返す授業では、生徒はそのときだけ達成感を味わうが、その日学習した内容をすぐに忘れてしまうのではないか。目的を持ったコミュニケーションを意識した活動とは程遠いのではないか。生徒たちを英語に浸らせ、自ら英語を使いたい気持ちにさせるには仕掛けが必要ではないかと考え、そのためには生徒が主体的に外国語を話すことを手助けすることが必要であると考えに至った。そこで、本研究では生徒が教室で英語を使う指導法として「タスク」を取り上げ、その有効性を探究した。

タスクについては様々な定義が提案されている中、Skehan (1998) は教室実践に沿った定義を挙げており、(1) 学習者が意味内容に焦点を当てる、(2) 自分と相手に情報の差がある、(3) 現実世界の出来事と何かしらの関係性を持つ、(4) 完了することが優先される、(5) 成果で評価される、という 5 つの特徴が備わった言語活動がタスク活動と言えるものであると主張している。現実起こりうる自然な言語使用を教室で疑似的に体験することができるのがタスクの魅力である。従ってそのような機会を生徒に与えることで、生徒は積極的に外国語を用いて実際のコミュニケーションで活用できる技能を身につけることができると考えた。

I. 3. 特別研究の題目と要旨

そこで本研究では、教科書に記載されている言語活動が生徒のコミュニケーション能力を養うことができるものとなっているのか、生徒がタスク活動に取り組むことができる教科書であるのかを調べるために静岡県の公立中学校で採択されている現行の教科書（平成 27 年検定）4 冊を分析した。そしてさらに、2 回改訂前の教科書を分析した河野（2010）による言語活動分析のデータと比較して、9 年前と今の教科書の変化を読み取った。主な結果は次の 2 点である。

- （1）タスクの数が以前の教科書よりも増えていた。
- （2）しかし、どの現行の教科書も文法の言語形式を正確に発話できるようにするための練習（ドリルと呼ばれるもの）が以前の教科書よりやや増加傾向にあり、ほとんどのページに記されている。

結果で示された数字をもとに考察すると、9 年前にはタスクがまだ日本では広がりが無かったことが考えられる。現行版では数は少ないものの少し取り入れられているということは、英語を使うことの重要性が社会でも認められ、英語を使う力の育成が求められる時代になったことを示していると言えよう。一方で現状では、定着を図るために形式を繰り返し練習することが、多くの時間を費やすような教科書編成になっている。しかし、言語形式の定着を重視しすぎると、生徒は意味を考えないで言語形式の操作のみに注意を払うため、実際の言語使用に結びつけることができない。教科書に沿って授業をしていくだけでは実際に英語を使う力の育成はできないのである。

結論として、それぞれの言語活動に足りないタスクの特徴を補うよう工夫を加えると、タスク活動に近づいた言語活動にすることができると考えた。そのために教師は、コミュニケーションな言語活動を創造する力と、さらにはコミュニケーションを通した文法の定着を促す授業力が必要となろう。

後悔・無能感は学習者の学習行動に

どのような影響を与えるのか

柴田里実研究室 15121012 糸川 真央

近年、第二言語習得（以下 SLA）における動機づけ研究の第一人者である

Dörnyei を中心に多くの研究がなされている。日本の SLA 動機づけ研究の第一人者である廣森 (2015) は、学習者はすでに「動機」(学習の目的) は定まっているが、それを実現させるだけの「動機付け」(強さ) が不足していることを指摘している。まさに、筆者自身、これまでの英語学習で同様のことを経験している。

筆者が大学 1 年次に英語の本を大量に読むという「多読」という学習に遭遇した。その際、多読をする「動機」は定まっていたものの、継続できなかった経験をした。しかし大学 3 年時に、多読をする「動機」をこれまで以上に認識するため、できる限り書きだし、自分の「動機づけ」を高める工夫をし、多読を継続することに成功した。この経験から、「動機」および「動機づけ」の重要性、成功体験だけでなく、失敗経験に焦点を当てることの重要性を認識し、本研究に至った。

大谷・中谷 (2011) は、学業の失敗場面に焦点を当て、内発的動機づけの低下に及ぼす影響について、日本の中学生を対象に質問紙調査を実施している。その結果、無能感を感じた場合、内発的動機づけを低下させるが、一方で後悔を感じた場合には、内発的動機づけの低下が抑制されることが明らかとなった。しかし感情が学習者の内発的動機づけに影響を与えることを見出せたものの、一方でその後の学習者の学習行動は明らかにされていなかった。したがって本研究では、後悔・無能感を感じた原因とその後の英語学習行動への影響について調査する。

事前に設定した質問項目を基に 7 人の研究協力者に半構造化インタビューを実施し、データを質的に分析し考察した。結果、第 1 に、学習者は、理想と現実の不一致や同じ目標の学習者と比較することによって後悔を感じるが、今後の目標を設定することによって英語学習行動に移すことが出来ていた。第 2 に、学習者は、伸びない点数や自信の喪失によって無能感を感じるが、優れた成績の学習者や特定の教員の影響によって無能感がやる気になり変わり、英語学習行動に移すことが出来ていた。第 3 に、後悔・無能感を感じた学習者は、目標を設定せず、他者からの影響を受けなかった場合、やる気は低下し、その後の学習者の学習行動を中止していることが明らかになった。

日本人大学生を対象とした Writing 活動における Task repetition の効果

柴田里実研究室 15121018 大塚 沙映

卒業論文では、英語での Writing 活動に焦点を当て、日本人大学生を対象に Task repetition（タスクの繰り返し：以下、TR）の効果について論じた。本研究のテーマを決定する上で大きな要因が二つあった。

まず、私自身が英語学習における Writing に大きな魅力を感じていることがあげられる。Writing の魅力とは、ポートフォリオのように年代ごとに記録できることであると考えている。今までの英語教育の中で、このような Writing の魅力に触れたことが、本研究を研究テーマと選んだ最大の理由である。

また、多くの先行研究で、TR は英語力向上に肯定的な結果をもたらすことが報告されている。特に Oral（スピーキング）における TR に関する研究は数多く行われており、TR は、学習者のパフォーマンスに有益な効果をもたらす (Ellis, 2003) と言われている。一方、Writing 活動で TR を行った場合も、未だ実証研究は少ないものの、正確さ、複雑さは著しく向上し、それほど顕著ではないが、流暢さも向上するということが、ギリシャ人を対象とした先行研究 (Indrarathne, 2013) で明らかとなっている。そこで、私は卒業論文で、Writing における TR の効果を、日本人学習者を対象に検証したいと考えた。

本研究では、Indrarathne (2013) の研究を指針とし、Writing 活動における TR の効果を検証することを試み、研究協力者として初級英語学習者 2 名を選出した。2 名の学習者にはそれぞれ、1 日目と 2 日目はタスク A の絵を、3 日目、4 日目はタスク B の絵を見ながら、その絵を英語で描写し、自由にストーリーを考えるという 4 日間の Writing 活動を実施した。以上の調査から正確さ、複雑さ、流暢さに変化があったのかを検証し、さらに詳しく TR の効果を調査するために、4 日目の Writing 活動終了後に約 20 分間のインタビューを行った。最終的に、研究協力者 2 名が書いた 4 つの Writing とインタビューを分析し、考察をした。

研究の結果、TR により、2 名の研究協力者の流暢さを向上させることができたのではないかと示唆された。そして、正確さと複雑さに関しては、プラスの影響が確認された部分もあったが、向上したことを明確に示すことができなかった。しかし、同じタスクを繰り返すことで自分の語彙力や単語力の足りなさを再確認できたり、2 回目以降は 1 回目よりも文法に気を付けて Writing を行うことができたりなど学習者からは TR に対して肯定的な意見が多くあった。Indrarathne(2013)の研究とは少し異なる結果となったが、実際に日本の教育現場で Writing 活動時に TR を活用することは、少なからず有効であることが明らかとなった。

英語コミュニケーション自信に肯定的な影響を与える 教員支援の在り方

柴田里実研究室 15121035 小林 千紗

本研究では、「L2 コミュニケーション自信」に焦点をあて、日本人英語学習者が英語コミュニケーションに対して抱いている「不安」や「抵抗」について調査することを目的とした。その上で、学習者が英語コミュニケーションの自信をつけるためには、教員はどのような支援をすればよいかを考察し提案した。

1990 年代、カナダを中心に、「第二言語でコミュニケーションをとりたいという意思」(L2 Willingness to communicate : 以下 L2WTC) に関する研究が盛んに行われた。Macintyre & Charos (1996) の L2WTC モデルでは、学習意欲が L2WTC へとつながり、L2WTC や L2 能力の認知が L2 コミュニケーション頻度へつながることを示している。日本国内においても、大学生英語学習者の L2WTC を Yashima (2002) や Yashima et al.(2004) が調査している。それらの研究では、日本人英語学習者の L2WTC につながる重要な要因は、「L2 コミュニケーション自信」であると指摘している。したがって、本研究では、何が「L2 コミュニケーション自信」に影響を与えるのかを調査することにした。

調査方法は、半構造化インタビューを使用した。調査対象者は日本人大学生の英語学習者 5 名である。調査概要は、英語コミュニケーションに対して抱いてい

る「不安」、「抵抗」、「緊張」、および、それらの軽減要因、さらには「現在の英語コミュニケーションの自信につながった成功体験」を尋ねた。

研究の結果、5つの要因が、「L2 コミュニケーションへ自信」に肯定的な影響を与えることがわかった。第一に、「L2 コミュニケーションの成功体験」、第二に、「英語力への他者からの承認や称賛」、第三に「自己の英語力への肯定的認知」、第四に、「英語学習観の変化」、第五に、「話す相手と自分との英語力の差」があげられた。

結果から、教員は学習者が英語コミュニケーションの成功体験を多く得られる授業の在り方を検討する必要があることが考えられる。例えば、学習者が未知語に遭遇した際は、日本語で説明するのではなく簡略化された英語で学習者の理解を促進させることが、成功体験につながる支援方法のひとつとして考えられる。授業内外で、他者からの承認や称賛を得る場の設定として、ペア活動ではお互いの良かった点を褒め合う機会を設定することが考えられる。今後、筆者は、「L2 コミュニケーション自信」を促進するよう、中学校の教員として、本研究の結果を踏まえた授業ができるよう、さらなる研究に励みたい。

生徒のやる気を引き出す褒め方とは：

mindset に焦点を当てて

柴田里実研究室 15121050 住瀬 百花

筆者は、「褒める」という行為は、学習者の学習行動に影響を与える重要な要因であると考えていた。しかし、個別指導塾での勤務の中で、褒めて伸ばすことを心がけて指導を進めても、自分の「褒め」と生徒のやる気が必ずしも結びつかないということに気付いた。先行研究では、Dweck & Kamins(1999) は、人物に焦点を当てた「褒め」と過程に焦点を当てた「褒め」を比較し、過程に焦点を当てた方が自己評価が高く、失敗後も無力感反応が低くなると主張している。一方、高崎(2013) は、褒め手と受け手の理由認知にズレが生じていることを報告している。従って、褒め方だけでなく、受け手の個人差のよって、「褒め」に対する受け止め方が異なるのではないかと考え、調査することにした。

Dweck(2006) は、mindset には 2 種類あり、生まれつき能力は決まってい変化しないという fixed mindset(以下 FM) と、能力には限界がなく努力により変化することができるという growth mindset (以下 GM) があると主張している。また、GM の方が、失敗に対する無力感反応が低くなることを指摘している。従って、学習者は mindset が異なれば、「褒め」に対する受け止め方が異なるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、第一に学習者の mindset を質問紙を用いて調査した。質問紙は、岩木・梅津・前泊 (2015) の mindset に関する質問紙 (知能観に関する質問 10 項目、失敗に対する質問項目 16 項目の合計 26 項目) を使用した。さらに「褒め」に対する経験を調査するため、自由記述調査、インタビュー調査を実施した。研究協力者は、英語学習に肯定的で、ある程度の成果をあげている 6 人である。調査の結果、6 人中 4 人が GM の傾向が高かった。従って、4 人を GM、2 人を FM とし、2 グループ間で、失敗に対する態度を比較した。その結果、「何事においても失敗は避けたい」という項目では FM の 2 人とも「失敗は避けたい」と答えており、先行研究で示されているように、FM の学習者は、「失敗」に対する無力感反応が示唆された。しかし、「何事においても自分の考えが間違っていたら恥ずかしくなる」という項目では mindset に関わらず、6 人全員が、失敗したら恥ずかしいと回答していた。インタビューでは、「褒め」の経験について覚えていないと答える学習者が多かった。以上の結果から、日本の学校教育で、教員は失敗への対処に関しての「褒め」やその他の手法で肯定的な影響をもたらすことが出来ていないこと、受け手が褒められたと認識する褒め方が出来ていない可能性が示唆された。

中学校時から高等学校時の英語学習に対する意識の変容

柴田里実研究室 15121051 園田 耕介

本研究では、中学校時から高等学校時にかけての英語学習に対する意識の変容について調査することを目的とした。さらに、高校入学後の英語への苦手意識が高まると言われている時期に、どうすれば「英語嫌い」を作りにくい授業ができ

I. 3. 特別研究の題目と要旨

るのかを考察した。

小学校の外国語科の新設や、新たな大学入学制度としての英語の4技能測定など、グローバルに活躍できる英語力をもつ人材の育成に向け、英語教育は様々な変革を迎えている。しかし、より高い英語運用能力を育む為には、制度の確立だけでなく、教師が学習者の英語に対する意識へ配慮をすること、特に英語嫌いや苦手意識をつくらないように最善を尽くすことが必要である。Benesse 教育開発センター（2014）は、中学1年から2年にかけて、また高校1年の前半が、英語が苦手になるピークであることを指摘している。及川（2016）は、中学校時に焦点を当て、「語彙力」と「産出力」が英語の好き嫌いに大きく影響することを主張している。したがって、入門期である中学1年時から、それら2点を重点的に指導することで、英語嫌いを減らせるという可能性を提案している（及川、2016）。しかしながら、高等学校時についての授業の在り方については未だ十分な研究がなされていない。そこで本研究では、まだ調査の進んでいない高校入学後の英語に対する意識の変化について、その要因を明らかにし、英語嫌いを作りにくい授業の在り方を考察した。

まず、中学校時から高等学校時にかけての英語学習に対する好き嫌いの変化の有無を調査するため、大学生30名に質問紙調査を行った。次に、質問紙で変化のあった4名を選出し、意識変化を起こした要因を追究する為の半構造化インタビューを実施した。研究の結果、英語の好き・嫌いの変化を起こした要因として、「文法学習への躓き」や「教師への不信任感」等があることが明らかとなった。現在の教育現場では、未だ文法シラバスの授業を行っていることが多いため、文法ができないと英語が理解出来ないと感じてしまう学習者も多く、文法学習に苦手を感じると英語学習全体への自信を失い苦手意識から英語が嫌いになることが示唆された。また「文法を勉強して英語が話せるようになるとは思えなかった」という発言から、生徒が文法を学習する意義を見だせていない可能性が推測された。したがって、英語を実際に活用することに重点を置き、実際の場面の中で必要に応じて文法を学んでいくという授業の在り方を提案した。

インターネットを利用した英会話練習システムの有効性に関する一考察

柴田里実研究室 15121060 築地 航平

本研究の目的は、インターネットを利用した学習 (web-based language learning : 以下 WBLL) は、学習者にどのような変化をもたらすのか、その有効性について考察することである。

近年、WBLL のサイトやアプリなどが無数に存在する。その形式も様々で、月額一万円以上かかるものから 1 レッスンあたり 100 円程度の安価なものまである。英会話レッスンのみのもの、テキストに基づいて英会話レッスンを受ける形式のもの、ビジネス英語に特化したものなど、多様な形式のサイトやアプリが存在している。そこで、本研究では、スピーキング力の向上を目的としているため、1) 英会話レッスンが受けられること、2) インプット理論等に基づき、語彙学習等様々なコンテンツがあること、3) 多くの学習者が利用可能な安価なものという条件を満たす WBLL システムとしてイングリッシュ・セントラル (English Central : 以下 EC) を選択した。

本研究は、EC を筆者自身が 6 か月間使用し検証するケーススタディとし、多面的に収集したデータを分析し、学習者がどのように変化するかを考察した。データは、第一に、EC のデータ管理システムから時間数を収集した学習記録、第二に、半年間記録したダイアリーノート、第三に stimulate recall method (回想刺激法) を利用し、学習日、学習時間等を確認しながら作成したリフレクションノートである。

研究の結果、特に学習者の変化として、3 つの側面 (①動機付けと自己効力感 ②コミュニケーションストラテジー、③メタ認知能力) で顕著な変化が確認された。例えば、「12 月から EC をはじめ英語力が確実に上達したと思う」や、「発音がよくなってきたことを実感できて、勉強していて楽しい」などのコメントから、英語力の向上を自己認識した結果、自己効力感が高まっていることが分かった。また、コミュニケーションストラテジーに関しては、「相槌が打てるようになった。

た」や「質問を尋ねることが出来るようになった」など、肯定的な変化が見られた。さらに、「設定した学習目標に届いていないので届くように心がけて学習していきたい」などメタ認知能力の向上が示唆された。以上のことから、学習者にWBLLの活用が肯定的な変化をもたらす上で有効であることが示唆された。本研究の結果を踏まえ、今後の英語教育において、WBLLはスピーキング力の向上を目的とした英語学習において、有効な手段の一つであることを提案したい。

タスク性の確認ツールの提案： TBLTと自己決定理論に焦点を当てて

柴田里実研究室 15121075 古畑 晃代

本研究では、効果的なタスクを生成することが、コミュニケーション能力を高めるために重要であると考え、「質の高いタスクを生成し、そのタスク性を確認するためのツール」（以下、確認ツール）を開発することを目的とした。そこで、「確認ツール」の作成に当たり、2つの視点に焦点を当てた。

第一に、Task Based Language Teaching（以下 TBLT）のタスクの条件に着目した。臼田ら（2008）は、TBLTに基づき、中学校英語検定教科書に掲載されているスピーキング活動のタスク性を分析するための「タスク度チェック」ツールを開発している。臼田（2014）は、チェック項目として、5項目、Interaction、Meaning、Outcome、Explicitness、Authenticityをあげている。臼田ら（2008、2014）が開発したものは教科書に掲載されているタスクのタスク性の確認ツールではあるが、同様にタスクを生成する際にも活用できるのではないかと考えた。

第二に、TBLTのタスク条件に加え、タスクが学習者の動機づけを高めるかどうかという点が重要であると考えた。動機づけ研究における主要な理論である自己決定理論（以下 SDT）では、自律性、有能性、関係性の3つの心理的欲求が満たされると、学習者の内発的動機づけが高まるとされている。田中・廣森（2007）は、SDTの3つの心理的欲求を満たす必要性を論じた上で、そのような活動としてグループ・プレゼンテーション活動を挙げている。したがって、生成したタ

スクが SDT の 3 つの心理的欲求を満たすかどうかを確認できる項目が必要であると考えた。

以上を踏まえ、本研究では、2 つの視点を満たし、タスクを考える際に確認の指針となるツールを開発し、その有効性を質的に分析することを目指した。まず、「確認ツール」を開発した後、パイロットスタディを実施し、改良を加え、本調査に移った。本調査の研究協力者は、私立大学に所属する大学 4 年生の教職履修学生 5 人である。研究協力者には、「確認ツール」を使用し、タスクを生成してもらった。さらに、教育実習時に実際に使用したタスクを対象に「確認ツール」を使用し、自己分析してもらった。その後、「確認ツール」の使用感および有効性に関し、半構造化インタビューを実施した。インタビューの結果、情意面、技術面の 2 つの視点からツールの有効性が確認できた。経験の浅い教員が授業案を作成する際に感じる不安・ストレスを軽減するため、タスク生成の際に留意すべき点が可視化できる「確認ツール」を活用することを提案した。

児童の国際的志向性を高める要因：

児童へのインタビュー調査を通して

柴田里実研究室 15121089 望月 萌乃

本研究の目的は、児童の国際的志向性に影響を与える要因を明らかにすることである。国際的志向性とは、「英語が使える世界への参加や日本の外の世界への興味、多様な人々とコミュニケーションをする学習者の姿勢」(八島 2001) という日本人固有の概念だ。八島 (2004) は、日本人大学生を対象とした国際的志向性に関する調査から、国際的志向性は L2WTC「第二言語を用いて、特定の状況で、特定の人、または人々との会話に参加する意思」やコミュニケーションの頻度に影響を与えると主張している。外国語教育の目的を外国語コミュニケーション能力の育成であると考え、児童・生徒の国際的志向性の向上は喫緊の課題と考えられる。さらに、グローバル化の進展、2020 年東京オリンピックの開催などの影響もあり、外国語教育は大きな変革の時期を迎えている。近い未来、どのような職種においても必要とされるであろう外国語コミュニケーション能力の

I. 3. 特別研究の題目と要旨

育成において、国際的志向性という概念は一つの鍵となるはずである。しかしながら、これまでの研究は、児童を対象にした調査が少なく、調査の対象が学校の教育過程の中に限定されてしまっているため、本研究では児童を取り巻くあらゆる要因を考慮し、調査することを試みた。

本研究では、日本人児童5名を対象に、質問紙・インタビュー調査を行なった。質問項目は、学校現場に限定しない児童の生活全般に関する質問で構成した。調査の結果、児童の国際的志向性に影響を与える概念として、「外国の治安に対する不安」や「日本の文化・技術に対する安心感」など3つの概念が抽出された。これらの概念は、児童の留学先の決定や旅行先の決定に影響を与えると共に、職業選択、進路選択の範囲を日本国内に限定する要因となっていると考えられた。これらは、メディアの影響が大きく、海外のニュースの再現ドラマを見て外国に行くことに不安を感じるようになったという者もいたことから、家庭で、どのようなテレビ番組を見ているか等、児童の国際的志向性に影響を与えることが示唆された。また、社会科の授業を受けている最中に外国に対する関心が高まったというコメントから、児童の国際的志向性を高めるためには、外国語活動で外国の歌やかかるたなどのアクティビティに取り組むより、社会科や総合的な学習の時間に、主体的に思考して問題を解決する授業を受ける方が効果的である可能性があることが示唆された。

映画『もののけ姫』の日本語セリフと 英語字幕にみられる翻訳の比較研究

山田研究室 14121091 増田 純一

近年日本のアニメに対する海外からの人気は高く、世界各国へ輸出され、その需要が高まっている。このことは、動画配信サービスの大手Netflixがオリジナルのアニメ作品に力を入れていることやスタジオジブリの作品をはじめ、2016年に公開された新海誠が監督を務めた『君の名は』が海外でも多く上映されたことから伺える。本研究では、日本のアニメが海外に輸出される際、原作のセリフがどのように翻訳されるのか、さらに、原作で描かれる日本独自の文化がどの

ように表現されるのか、原作のセリフと英語字幕のスク립トを比較してそれぞれの特徴を考察した。

山田 (2004) は『千と千尋の神隠し』の英語翻訳では、日本語と等価の意味を持つ英単語を対応させてはいるものの、両言語間で等価の意味を持つ単語が見つからないことがあり、このような場合、原作にはないセリフが英語版に加えられていることがあるとしている。また、物語の内容を英語圏の視聴者に伝わるようにするために、日本文化のあいまい性とアメリカ文化の明示性の衝突を避け、物語の整合性を保つように翻訳がなされているとしている。加えて、「カオナシ」が“No Face”になるなど、登場するキャラクターの名前に変更があることがあるが、このような名前の変更は宗教観の違いにより起こることが明らかにされた (cf. 山田 (2005))。さらに、『となりのトトロ』のトトロは「おばけ」であり「神様」であるが、英語で「おばけ」に相当する単語は「神様」という意味を持たず、「神様」に相当する単語も「おばけ」という意味を持たない。これは、キリスト教という一神教を文化背景に持つ英語と、アミニズムを文化背景とする日本語といった宗教観の違いによって生じるもので、同じような意味を持つ単語でも翻訳する際に適切な翻訳にならないことがあると述べている。

本研究では、中世日本を舞台とし日本独自の文化や歴史的な背景を表すセリフが多く使われている『もののけ姫』を取り上げ、原作のセリフと英語字幕のスク립ト比較を行った。その結果、先行研究で明らかにされた宗教観の違いによる名前の変更が顕著に見られることが分かった。作中には「シシ神」や「犬神」など神様が多く登場するが、英語版ではこれらを“God”で訳す場合とそうでない場合があること、日本独自の文化に関するセリフは前後に補足的な説明が加えられていることが明らかになった。

車名と音象徴

山田研究室 15121014 犬塚 智也

本研究では、それぞれの音がもつ特徴が人にどのような印象を与えるのかを捉える言語学的な概念である音象徴に着目し、主に自動車の車名を研究素材として

I. 3. 特別研究の題目と要旨

車名が持つ音感と実際の自動車のもつ特徴がどのように関連しているのかについて考察した。越川 (2009) は、50 音のそれぞれの音を聞くと人がどのような印象を持つかを表にまとめるとともに、その表を用いてロングセラー商品について考察している。例えば、「森永ミルクキャラメル」の音感キャラメルはキャラメルは柔らかさや不思議な触感、キューピーマヨネーズの音感マヨネーズはマヨネーズのねっとりとしたイメージを反映するものであることを明らかにしている。

本研究では、越川 (2009) に従い、研究対象を自動車として、自動車の名前が持つ音感が車のタイプとどのように関係するのかを考察した。研究の準備として日本車、外国車の売り上げランキングを作成し、表中の自動車をコンパクトカー、普通車、ミニバン、スポーツカー、大型車の 5 種類に分類した。そして、それぞれの種類に含まれる車名の音感を観察した。その結果、それぞれの車名から受けるイメージは異なるものの、かわいい車にはかわいい音感を持つ名前、かっこいい車にはかっこいい音感を持つ名前が付けられていることが明らかになった。また、コンパクトカーの車名には、明るさ、開放感、柔らかさを表す音が多く含まれていたが、その中でも、直線や角が多いデザインの車の車名には、鋭さやスピード感を表す音が組み込まれ、車のデザインによって車名に使われる音が変化することが明らかになった。ミニバンの車名には、コンパクトカーには見られなかった強大さを表す音が含まれていたが、大型のバンの車名には、さらなる大きさを示すために鈍重さや不快さを表す音が含まれていた。スポーツカーには、英数字が含まれるものやスピード感、鋭さを表す音を含む車名が多く使われていることが分かった。本研究では、海外の車の名前についても日本車と同様に、車名と音感の関係を同様の手法で調べた。しかし、車のデザインと車名の音象徴の関係は、日本車と大きな違いがなく、音象徴に普遍性があることが示唆された。

本研究では架空の車に架空の名称を複数つけ、車のイメージに合う名称を選ばせるアンケート調査を行なった。その結果は車の売り上げランキングの分析から得た結果とほぼ同じで、車名の音感と自動車のもつイメージは一致することが明らかになった。

カタカナ英語の英語教育における関連性

山田研究室 15121082 松本 拓巳

本研究は、中学校の英語の教科書に含まれるカタカナ英語を調査し、それを英語教育にどのように活用すべきかを議論する先行研究 (cf. 伊藤 (1990)、和田 (2016) 等) を分析し、カタカナ英語を教育に導入することの有用性や課題を踏まえたうえで、授業でカタカナ英語を活用する教育手法を提案した。

現代はますますグローバル化が進んでいるため、日本でも英語の重要性がさらに高まってきている。この中で、文部科学省は次期学習指導要領外国語編小学校版で 3、4 年生から必修で英語に触れる時間を設け、子供たちに英語の技能を身につけさせようとしている。その一方で、現在の学習指導要領では、小学校 5、6 年生が外国語活動でコミュニケーションの素地を養う活動をしているが、これは「話すこと」、「聞くこと」に重点をおいているため文字と音声が一致せず、小中学校の接続がうまくいかないという問題がある。この問題を解決するために、実際の教育場面でカタカナ英語を積極的に活用することが有用であると考え、どのような方法でカタカナ英語を英語教育に活用していくべきか考察した。

本研究では、先行研究からカタカナ英語の定義を確認し、また、カタカナ英語の英語教育についての先行研究から現在の英語教育にカタカナ英語がどのように活用されているのか議論した。そして、これらの先行研究を踏まえて、カタカナ英語の活用法について考察した。具体的には、中学校英語の検定教科書に記載されている英単語にはどの程度カタカナ英語が含まれているのか調べ、その単語を分類し表にまとめた。この表を授業でどのように活用していくべきか考察した。さらに、文部科学省は中学生の英語力を卒業までに、(大学入試共通試験に採用が予定されている) 実用英語技能検定の 3 級に合格するレベルの英語力をもつ生徒を全体の 50% に到達させることを目標としているが、この目標を達成するためにも、本研究で作成したカタカナ英語表が、特に、二次試験の面接の際に役立つことを議論した。

中学校で学習する多くの単語はカタカナ英語で、それらは日常的に使われてい

I. 3. 特別研究の題目と要旨

るものが多く、これらを着実に身につけることで中学校レベルの英単語の効果的な習得が期待され、また、本研究で作成したカタカナ英語分類表は授業でのコミュニケーション活動の補助教材として活用されることが期待される。

グローバルコミュニケーション学科

共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧

スペイン・ラテンアメリカ特別研究

担当 増井実子

《共同翻訳文献》

原題：Agustí Alcoberro, Historia de Cataluña en 100 episodios clave, Lectio Ediciones, 2016 Capítulos 23-50

邦題：アグスティー・アルクベール著『100のエピソードで読むカタルーニャの歴史』レクティオ社 2016年 第23章～第50章

《サブ・レポート題目一覧》

14122012 大久保愛「スペイン国歌 Marcha Real について」

14122044 高須祐斗「スペインにおける言語状況と文化言語としてのカタルーニャ語の復興」

15122043 中村和貴「バスク地方サンセバスチャンの美食文化が与える観光への影響」

15122044 野中梨加「ヒトから見る日本とスペインの交流史」

15122053 森 遥香「宮廷におけるベラスケスー宮廷画家兼宮廷役人としての人生に対する評価」

15122054 矢吹真佑「中世スペインにおけるイスラーム教とキリスト教の多文化共生」

韓国特別研究

担当 福島みのり

《共同翻訳文献》

原題：김현식, 장서윤, 권석경 (2017) 『대중문화 트렌드 2017』 마리북스

邦題：キム・ヒョンシク、チャン・ソユン、クォン・ソッキョン (2017) 『大衆文化トレンド 2017』 マリブックス

《サブ・レポート題目一覧》

15122014 勝瀬那々子「アイドルファンの日韓比較 ～インタビューを中心に～」

15122016 川口こころ「異色のドラマ『シグナル』はなぜヒットしたのか ～ドラマが伝えたメッセージ」

15122019 小池菜摘「『#韓国人になりたい』～SNSを活用する日本の若者世代を中心に～」

15122022 櫻田史保「韓国好き女性と SNS ～ブームの中心と情報網～」

15122034 関 玲音「アイドルの兵役が意味するものとは」

15122045 野村花保「なぜ防弾少年団はアメリカビルボード受賞に至ったのか 江南スタイルとの比較から～」

15122058 山本美憂「韓国の音楽市場におけるインディーズの位置づけ ～ファンたちの実践を中心に～」

ブラジル特別研究

担当 江口佳子

《共同翻訳文献》

原題：DaMatta, Roberto. *O que faz o brasil, Brasil ?*, Rio de Janeiro, Rocco, 1986

《サブ・レポート題目一覧》

15122038 ナガオ マイシャ 「パウロ・コエーリョ『11 分間』 (*Onze Minutos*)

I. 3. 特別研究の題目と要旨

におけるブラジル人女性の身体と貧困問題」

15122042 中野真優 「ブラジルのクロニカを確立したフーベン・ブラガ」

中国特別研究

担当 戸田裕司

《共同翻訳文献》

原題：那志良《典守故宫国宝七十年》（紫禁城出版社，2004 年）

《サブ・レポート題目一覧》

15122025 鹿内彩香 「中国のスポーツ事情—オリンピックを中心に—」

15122037 友田愛紀 「中国の人口政策—少子高齢化に対する生活の変化—」

15122049 松浦成美 「楽思想から見る古代中国の音楽」

4. 日本語教員養成課程

日本語を分かりやすく伝えるには

16121080 土佐谷 優希

16121082 中澤 緑

私たちが履修したのは、国内実習という講義です。外国人留学生に日本語を教える講義です。授業の教案を作成し、留学生の前で授業をします。私たちは、外国人留学生が分かり易く楽しい授業にすることをテーマにしました。私たちは、外国人留学生に「～ないでください」という文法を教えました。

工夫した点は、外国人のレベルに合わせて日本語の言い回しを易しくすること、そして、学生が将来日本で働く場面を想定して、役に立つ教材を作成することでした。まずは、「～ないでください」を使う例文を各自でいくつかあげていき、その中から分かりやすく、普段使える例文をピックアップしました。次に、どうやって学生に文法を教えるのか、その方法・授業の構成を考えました。学生が日本で働く場面を想定し、各々役を与え、学んだ表現を使った会話練習をさせました。他に「～ないでください」の文法には、「注意・禁止」の意味以外にも、「配慮・気遣い」の意味があります。私たちが教えた中には、「心配しないでください」、「遠慮しないでください」、「無理しないでください」もありました。この3つをどのように学生に教えるかで、とても悩みました。清先生にもアドバイスをもらい、これらの言葉を使う場面をいくつかあげ、言葉の意味を学生に教えました。教え方は、イラストや、身体で表現しました。

教案作成にあたり、そう簡単には進みませんでした。何度も清先生に内容を見てもらい、多くのアドバイスをもらい、何度も修正を重ねました。その都度、グループ内で意見の食い違いもありました。ですが、最終的には自分たちが納得のいく教案ができました。

発表当日、それまで練習している際に、学生がスムーズに理解出来ず、授業は簡単に進まないだろうと正直思っていました。しかし、それは甘い考えでした。私たちが想像していたよりも、学生たちの理解が早く、授業は次々と進んでいきました。そんな中、一度だけ学生から質問がありました。しかし、その質問に私

I. 4. 日本語教員養成課程

たちは答えることができず、やむを得ず、清先生が授業に入り、学生の質問に対応しました。このとき、私たちは当たり前に使っている日本語について、どれだけ知らないのかよく分かりました。そして、日本語教師の大変さも実感することができました。また、学生の理解が早いため、用意していた教案が授業終了前にやり終えてしまいました。10分程余ってしまい、急遽その場で考えた教案をやりました。そこで、予想外のことが起きてしまっても、瞬時に対応する能力が必要なことが分かりました。そして、起こり得ることを想定し、十分準備をすることの大切さを実感することができました。

躓く場面もありましたが、学生も楽しく学び、満足感のある狙い通りの授業が出来ました。今回の国内実習では、外国人留学生の前に立って、日本語を教える日本語教師の大変さを実際に自分たちが体験し、実感することができたとてもいい経験だったと思います。この経験により、人に合わせて分かり易く伝える能力と、人前に立っても物怖じしない積極性を養いました。

日本語を教えることのむずかしさ

16122030 嶋本 妃那

日本語を話すみなさんは、日本語について深く考えたことがありますか。私は国内実習を履修するまで、日本語について一度も疑問に思ったことはありませんでした。

私が『国内実習』を履修した理由は2つありました。1つ目は「日本語教員養成課程修了証」を取得したいという理由。2つ目は日本語教員が不足しているというニュースを聞き興味を持ったためです。

国内実習を履修する生徒は、一度は必ず日本語を学ぶ外国人に対し、授業を行わなければなりません。1グループ3人、45分の授業を行います。授業を準備する時間、グループで集まる時間も限られていたことにより、私たちグループには焦りや不安が多くありました。

国内実習を通し困難だったことは3つあります。

1つ目は、授業を作ることの難しさです。まずは時間です。私は、今まで人前で45分という長い時間、立ち続けるという経験がありませんでした。そのため、話すスピードや授業の構成に余裕を持たせなければいけません。私たちグループが担当した「～しています」は6つの状況で使われます。進行や状態、継続、習慣…。あまりにも多くどこに重点をおけばよいか、時間配分はどうしたらよいか、と考えることが山ほどありました。教案を作るにも案が浮かばず、休み時間や放課後に図書室や書店、インターネット等で日本語の教案に関する情報を調べました。調べることにより、授業の教案作成が作りやすくなりました。

2つ目は人前で話すときの注意点。声の大きさ、表情、ジェスチャー、資料の見やすさ等。これらに関しては客観的に見なければ直すことが出来ません。清先生から注意されたことを思い出し、頭に入れていました。

3つ目は自分の気持ちの持ち方です。私は、実習が近づくと不安と緊張が大きくなり眠れなくなってしまうほどでした。グループの仲間にそのことを伝えると「私もだよ」と同じような思いを持っていました。清先生に不安なことを伝えると、「生徒に教えようと思えば緊張しない」とおっしゃっていただきました。アドバイスや励ましにより本番では緊張より「生徒に伝えよう」という思いが強くなりました。また、これまで努力して準備してきたことが自身に繋がっていました。しかし、そうは思ったものの、実際に授業を行うと不安と緊張で一杯でした。私の伝えたいことが分かっているのかと生徒の笑顔でさえ不安になっていました。それでも私が笑顔でいることを欠かせなかったのは生徒に教えようという一番の気持ちがあったからだと思います。

実習を終え、やりきったという思いもあれば、反省点もありました。教えることに集中しすぎて疑問をもつ生徒や間違えた回答をした生徒に気づくことが出来なかったことです。こうして振り返ると大変でしたが、得られたことが多かったです。国際ことば学院の皆様と交流し、日本にはない文化や気づかなかった日本語に疑問をもつきっかけとなりました。私たち生徒に真剣に向き合ってくくださった清先生や協力してくれた仲間、ことば学院の先生方や生徒さん本当にありがとうございました。

16121051 佐野 日花莉

私は、国内実習という授業を履修し、嶋本さんと同じグループで実習を行いました。授業では、実習を通じて具体的な教授方法を学習しました。実際に自分が授業をできる時間はとても短かったですが、クラスメイトの授業から学ぶことも多くありました。授業は3人1グループで45分を与えられました。同じグループになった2人とは、学科が違い、話したこともありませんでした。どんな導入にしようか、どんな活動を入れようか、とても悩みました。グループメンバーと上手くコミュニケーションが取れず、実習間近になってもお互いが納得のいくような教案が出せずにいました。直前まで修正を重ねました。実際に授業をやってみて、教案は完璧に作り上げるものではないと学習しました。授業は、その時の学習者の反応に合わせて、柔軟に展開していくものなのだと分かりました。ネイティブである私たちよりも、学習者のほうが日本語のつくりを知っていて、私たちが考えていた過程を飛ばして次のステップへ進んだり、考えてもいなかった方向へ発展して、授業が生きているものだと感じました。

学習者はそれぞれ、仕事や将来のため、真剣に日本語を学んでいます。小学生や中学生に教えるのとは違い、より正確で実用的な、すぐに使える内容を教えるという、本物の授業を彼らは求めています。日本語教師とは、単純に外国人に日本語を教える仕事というだけでなく、日本の社会や経済を支えることになる仕事でもあるということを感じました。

国内実習の授業を通して、日本語教師の役割を理解しました。学習者に本物の教師と認められるような立派な教師になりたいと思いました。お忙しい中時間を割いて、細かな指導をしてくださった清先生、実習に協力してくださった国際ことば学院の皆さま、共に努力してくれたグループメンバーに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

5. 外国語学習支援センター

ピアサポーターによる勉強会

江口 佳子

平成 30 年度 4 月の静岡草薙キャンパス新設に伴い、ピアサポート (Peer Support) 制度が外国語学習支援センターの新しい活動として始まった。これは、有志の学生による自主的な語学学習の勉強会である。

本制度を始めるにあたり、5 月中旬に第 1 回目の打ち合わせを行い、GC 学科の 5 名の学生（3 年生 4 名、2 年生 1 名）が、韓国語、中国語、スペイン語、ポルトガル語のピアサポーター (PS) として、登録してくれた。この時に、PS の役割を確認し、勉強会の進め方について意見を出し合った。勉強会を周知するために、5 月末に説明会を実施したところ、GC 学科の 2 年生を中心に約 15 名の参加者があった。その後、各言語の PS が中心となって、参加者とグループを作り、授業の空き時間や昼休み等を利用して、FLSSC や図書館前のナレッジスクエアにおいて、勉強会が開かれている。

後期に入ると、GC 学科の 1 年生の四言語の授業が始まること、また、12 月のレシテーション大会に向けての発音練習のために、10 月中旬にあらためて説明会を実施した。後期から、経営学部 3 年生の学生がポルトガル語の PS として加わってくれ、説明会には約 25 名の 1 年生と 2 年生の参加者があった。説明会后、各言語グループで、それぞれの方法で勉強会が開かれているが、PS の学生が親身になって、楽しい勉強会を行っているため、参加学生の語学学習に対する意欲的な学びの姿勢が見られ、大変良い形で PS 制度が定着してきているように思われる。その表れとして、第 5 回レシテーション大会では、多くの 1 年生が積極的に出場し、好成績を収めた。

ピアサポート制度は、授業での教員と学生の間にある「教える／教えられる」という縦の関係ではなく、「一緒に学ぶ仲間」であり、横の関係である。参加学生は気軽に質問をしたり、アドバイスを受けたりすることができる。また、PS にとっても、得意な語学を活かせることは、自らの語学力向上にもつながる。勉強会への参加者がさらに増えることを望むとともに、参加学生が今度は PS に

なって、語学学習の輪が広がることを期待したい。

Give Yourself a Pat on the Shoulder

濱田 真理

2月。瀬名キャンパスのFLSSC（外国語学習支援センター）は、たくさんのダンボールと資料とでごった返していた。過去のTA（ティーチングアシスタント）たちが作成したであろうポップや多読の記録、イベント時の写真、英検の賞状の数々、と出てくる資料にはたくさんの思いがしみ込んでいるようだった。それを一つ一つ手に取り箱に入れるのは、なんとももどかしい気分になった。FLSSCが長年、多くの学生が切磋琢磨し、学力をあげた場所であったことが肌で感じられた。ご多忙にも関わらず、幾人かの先生方もFLSSCの引っ越し作業をお手伝いくださり、3月には無事引っ越し作業を終えることができた。

4月。新築の匂いと真っ白な壁、そして大きく展開された窓から見える富士山とともに、FLSSCは新しい場所でのスタートを切った。新しい3年のTAも加わって本格的にFLSSCが稼働するようになると、学生も定期的に足を運んでくれるようになった。今年より、グローバルコミュニケーション学科からのTAも加わり、新たにスペイン語、韓国語、ポルトガル語の勉強の輪が生まれるようになった。「私たちも中心になってFLSSCを作っていきますよ」という心強い言葉通り、TAたちが中心になってFLSSCを盛り上げてくれた。例えば、毎日1限目に行っている『朝活』は、様々な学部学生からの要請を受けてTAが企画したものである。2限目から授業のある学生を対象に、1限目に英会話をしてから授業に行くというものだ。年度初めには、英語で話しかけても微笑んで返していた学生も、次第にFLSSCによるたび英語であいさつをするようになっていった。英語だけでなく、韓国語やスペイン語でもTAへ会話をしにFLSSCに来てくれるようになった。レベルに関係なく、ただ「話したい!」という思いが学生たちの多言語会話の輪を生んだ。

後期にたくさんの学生が参加してくれた、通称『バナナゲーム』は、あるTAと学生が英語学習と勉強の合間の息抜きとして始めたゲームがきっかけである。

3 分間で好きな英単語を並べていき、最後にコマの数を競うというシンプルなゲームだが、多くの学生が息抜きとして楽しみ、気軽に英語に親しむ環境を作ってくれたきっかけとなったのではないだろうか。他にも、「こんな企画を入れてもらいたい」という TA や学生のアイディアによって、FLSSC が彩られていった。ピアサポーター制度も今年度の新しい企画の一つだ。ピアサポートとは、同じ学生の立場で外国語を教えあう制度だ。年度初めより、ピアサポーターの話がある前から、英会話のお手伝いができたら、とボランティアを名乗り出てくれた学生がいた。それが、今では 5 ヶ国語にわたるピアサポートのグループが活動をしている。それぞれの立場で、学年も違う学生たちが、とても楽しそうに会話をしたり、文化について語ったりしている姿をよくみかけた。

新しいキャンパスになり学部も増えたことで、いろんな学生との交流があった。休学をして留学をした学生、これから留学に行きたい学生、海外インターンやボランティアに参加した学生、語学留学ではない形で海外に行きたい学生…。似たような留学経験がある学生や、行きたい国や参加したいインターンに参加した経験のある学生がちょうど FLSSC にいあわせると、そこから会話がはじまり、学部・学科を超えての交流も生まれた。

新しい踏み出しの時には、どのような FLSSC になっていくのか不安が多かったが、勇気をもって FLSSC へ訪れてくれた学生や、目標を掲げて勉強をしに来る学生、言語や文化を楽しそうに話す学生たちに、何度も励まされた。格別、「検定受かりました！」や「留学決まりました！」という声は、私までガッツポーズをとってしまうほどの喜びを与えてくれた。学生だけではない。以前よりずっと FLSSC を支えてきたように、今年も外国語学部の先生方や FLSSC 委員会の先生方、ネイティブの先生方からもたくさんの助けをいただいた。英検二次対策や各イベントでのレクチャー、経営学部のネイティブの先生による会話練習は具体的な例である。たくさんの方々によって、FLSSC が色鮮やかになっていったのではないだろうか。

今、FLSSC が新キャンパスへ移動してから早一年が経とうとしている。もちろん今後の課題や改善が必要な部分もある。しかし、この 1 年を振り返って、よい踏み出しの年ではなかっただろうかと思う。それは多くの先生や職員の方々、そして学生たちの支えがあって初めて成しえたことではないだろうか。感謝の気

持ちとともに、まずは、“Give yourself a pat on the shoulder!”。

韓国語と私

～意識・自覚・更なる意欲～

16122027 佐藤 文香

私は三年生としての一年で大きく成長しました。中でも、自分に自信が持てるようになったのが大きな成果だと思います。私は現在、外国語支援センター (FLSSC) で、韓国語の Teaching Assistant (TA) として勤務し、学生の皆さんの韓国語学習のサポートをしています。そしてそれと並行して、Peer Support という活動も行っており、韓国語学習に意欲的な学生を集め、勉強会を開いています。どちらも、韓国アイドル好きが高じて始まった、韓国語学習の成果で手にした機会です¹。この二つの機会によって私が成長できたのには、TA 勤務や Peer Support の活動に基づく3つの理由があります。

一つ目は、韓国全般についての知識の活用です。今までの私には、ただ趣味を通して関心を持った韓国語しかなく、韓国全般の知識もほぼ独学で身につけました。留学経験ありません。それでも、その知識でハングル能力検定三級まで取得したり、昨年には初めて韓国に一人で渡航するという経験もしたりしました。とはいえ、結局は自己満足の域にしかならず、自分に自信が持てませんでした。そのため FLSSC に勤務し始めは、私に務まるのかとても不安でした。しかし、FLSSC のみなさんは私を韓国語の担当として頼りにしてくれ、FLSSC での韓国語面は私が請け負うようになりました。それによって自分の韓国語力を、ツールとして意識するようになりました。また、共に働く TA のメンバーや職員の濱田さんは、一人ひとりの内面や人柄にその人にしかない魅力を持っています。私はその魅力の源は、それぞれの分野で培った知識からくる自信だと感じています。そんなメンバーと過ごす中で、私も次第に私にしか出来ない事や、私にしかない魅

¹ 筆者にとっての韓国アイドルと韓国語学習の繋がりについては、今年の『とこはことのは』にて詳しく述べている。佐藤文香「好きの対価と代償」、『とこはことのは』31号（静岡：常葉大学外国語学部言語文化研究会、2018年3月）、pp.165-167。

力があるのではと思い始めたのです。それが自信に繋がっていきました。

二つ目は、自覚です。FLSSC で勤務し、沢山の出会いに恵まれたおかげで、私は自分の持つ知識が自己満足の留まらず、周囲の人々にも通用するものなのだと自覚しました。韓国語に触れたことのない学生でも、私と話すことで韓国語に興味を持ってくれることがあります。例えば、私はまだまだ英語が主流の FLSSC において、少しでも韓国語に馴染みを持ってもらう為に、訪れた学生たちに韓国語で挨拶をしています。すると、真似て韓国語で返してくれる人がいます。そしてそれをきっかけに、「〇〇って韓国語でなんていうんですか？」などのちょっとした質問も受けるようになりました。挨拶ひとつでも、韓国語を知ってもらうきっかけになり得ると感じました。そして、そのきっかけに私になれるのだと自覚したとき、韓国語を勉強してきてよかったと強く思えたのです。

三つ目は、Peer Support の活動を通じて湧いた、更なる意欲です。現在 Peer Support では、グローバルコミュニケーション学科の一年生を中心に毎回六人程度が集まり、韓国語会話をしています。今まで自己満足でしかなかった語学力が、この活動で役に立ちました。私が韓国語を勉強し始めたきっかけは、応援しているアイドルと話せるようになりたいという気持ちでした。会話練習に集まっている学生も、多くが韓国アイドル好きです。目標や動機が同じ仲間が集まって高め合う環境は、そもそも私が独学を始めた頃に求めていた空間でした。そんな環境を提供することは、趣味をきっかけに独学してきた私だからこそできることでしょう。こうして、韓国語学習の手助けをできていると喜ばしい反面、会話練習をする中で、自分の韓国語力がまだまだ至らないところばかりだと痛感することが多々あります。その度に、もっと勉強しなければと強く思うのです。この意欲は、一人で学んでいた頃には感じなかったものです。現在は、それが韓国語学習のモチベーション維持に繋がっています。

自分にしかできないことを見つけること。自分の力を認めること。それでも甘んじず、向上心を持つこと。私は韓国語をきっかけにこれらを学びました。自己満足で終わっていた言語も、自分の意欲次第で、人生そのものに関わる、言語以上のものを得られる最高のツールになり得るのです。そう身を持って実感した今、ようやく自信を持って、教える立場に立てる気がしています。

Enseñando el idioma español

16122043 Eimi Nakasone

He comenzado a enseñar el idioma español en el mes de Junio .Mis padres tienen la sangre “Nikkei”, por eso tenemos dos culturas:japonesa y peruana. En casa nosotros hablamos en español. Pero mi hermano y yo nos comunicamos en japonés. Cuando le cuento esto a mis amigos se asustan porque dicen que es interesante que yo pueda separar los idiomas. En la universidad yo quería aprender español nivelado y también enseñar a los demás. Mi profesor me aconsejó para que enseñe a varias personas que recién habían comenzado a estudiar en la universidad. Me sentí feliz porque no había tenido esa experiencia y quería probar mi capacidad.

El primer día de clase estaba nerviosa, porque no sabía cómo enseñar el idioma a otras personas que todavía no entienden el español y también era difícil para mí explicar la gramática porque a veces me resulta un poco complicado,aún no soy tan experta. Tengo la suerte de tener a mis padres,cuando tengo alguna duda con respecto al idioma les pregunto. Enseño español y al mismo tiempo también estoy aprendiendo muchas cosas. Por ejemplo aprendemos juntos la gramática,vocabulario etc.

Enseño dos veces a la semana, los Lunes y Miércoles en el segundo horario. Los Lunes enseño a los de segundo año. Es más para conversar y que practiquen el idioma antes de viajar a España, pienso que tienen que acostumbrarse a oír la pronunciación. Me he dado cuenta de que los españoles hablan muy rápido por eso quiero que practiquen conmigo. Al principio yo hablaba despacio y movía mis manos para que entiendan de lo que estoy hablando. Poco a poco subí el nivel de la conversación y en estos meses estoy hablando más rápido.Valió la pena porque ahora la mayoría me entienden. Estoy satisfecha de haberlos podido ayudar en sus estudios. Los Miércoles

estoy enseñando a los de primer año,ellos recién han comenzado a aprender el idioma. Les enseño la gramática. Todos son estudiosos y cariñosos. Tienen muchas ganas de aprender el idioma, por eso también me esfuerzo y además me divierto en las clases.

Agradezco a las personas que me han dado esta gran oportunidad, en especial a mis queridos profesores. Quisiera continuar este proyecto este año también. Muchas gracias.

新たな挑戦

16122043 仲宗根 エイミ

昨年(2018)の六月に私はスペイン語のピアサポーターに任命された。私は、日系ペルーの家庭で生まれ育ったため、日本とペルーの文化を持ち、家庭内言語はスペイン語である。大学では、自分の言語能力を活かしたボランティア活動に挑戦してみたいと思い、スペイン語のピアサポーターになることを決断した。週二回、上級ピアサポート活動の様子（C棟1階ナレッジスクエアにて）



I. 5. 外国語学習支援センター

生、下級生クラスに分け、それぞれのレベルに合った文法や会話事項などを教えている。初回の授業では、どのように教えれば学習者が飽きず、学ぶことができるのか、良い方法がないかと悩んだ。しかし、幸運なことに私にはスペイン語が話せる両親がおり、迷った時には彼らに尋ねることができる。授業を重ねていくうち、教え方のコツが分かるようになり、次第にいろいろな人と打ち解け、最後には「ありがとうございます、今日はとても楽しかったです、またエイミさんと一緒に勉強したいです」という言葉をもらうことができた。今後もピアサポーターの活動を継続し、一人でも多くの学習者がスペイン語を学ぶことの楽しさを知ってほしいと思う。

留学がきっかけで

15121045 杉田 輝一斗

私は3年生の時分から4年生までの約2年間、外国語学習支援センター（以下FLSSC）でティーチングアシスタント（以下TA）として働かせていただきました。働く中でFLSSCを利用してくださる学生から様々なことを学びました。

はじめに、私がTAを志望したのは、2年次に経験した留学がきっかけです。留学に向けて準備をしている時に、私には頼る人がいませんでした。質問をする人がわからず不安な思いをしたので、TAになり、これから留学に行く学生の手助けをしたいと考えて志願しました。無事にTAになることができ、その後は留学相談に携わってきました。3年次の時には、留学をする2年生の学生がFLSSCによく相談に来てくれました。留学相談やその後の他愛ない話が役に立ったのか、その学生が帰国した際に、「輝一斗さんのおかげで安心して留学に行くことができました」と言われた時に、FLSSCで働くことができて光栄であると感じました。

その他にも会話練習でFLSSCを訪れる学生とよく英語で会話をしました。いかにして相手の伝えたいことを引き出すか、私もわかりやすい英語を使うなどして、試行錯誤を繰り返しました。卒業が間近になった今、かつては英会話がままならなかった学生が、私と楽しく英会話をするのが当たり前になったことを考え

ると、そこにもやりがいを感じます。

様々なことを経験させていただいた TA という仕事ですが、今年に入りキャンパスが変わった影響で、TA の業務や FLSSC のあり方にも大きな変化が生じました。私は TA のリーダーとしてより良い雰囲気づくりや円滑な FLSSC の運営をするために様々なことを考え、行動に移しました。具体的には外国語学部の学生以外の他学部の学生と英会話をしたり、学習相談をしたりして、FLSSC が全学生に開かれた場所になるよう努力しました。

まだ FLSSC でやりたいことはありますが、私は卒業をします。TA としては、常葉大学の FLSSC が日本に在りながら、訪れるだけで外国を感じられるような場所になっていって欲しいと思います。また、利用する学生も今までと同様に、外国語の勉強を続け、FLSSC から世界に羽ばたいて欲しいと思います。私も FLSSC で学んだことを卒業後も忘れることなく、毎日が勝負であると思って、頑張っていきたいです。今まで FLSSC で関わってくださった先生方、職員の方、そしてすべての学生に感謝します。ありがとうございました。

TA の影響力の大きさ

15121016 梅原 大裕

外国語学習支援センターで TA という仕事を始めて、早くも二年近く経つ。一年生の時の私にとって、TA という仕事をしている人は雲の上の存在であった。勉強ができるのはもちろんのこと、人間性に関しても非常に尊敬できる人たちばかりであったからだ。私はその TA になり後輩の目標になれたのかはわからないが、TA という職は良くも悪くも後輩に与える影響力は大きかった。本文では、その影響力について三つに分けて述べよう。

第一に、TA になろうと思った具体的なきっかけは、自分自身楽しんで成長することのできた留学を後輩の学生にも経験してほしい、英語というツールを使い生きる上での視野を広げてほしい、と思ったためであった。しかし、人を良い方向に促そうとすることは簡単なことではない。実績や数字はもちろん、普段の生活でも「TA らしく」いることは必要不可欠であった。私が TA として仕事をす

る前に、「TA とは学校を出ても、どこにいても見本となる人間でなければならない」と一人の先生に言われ、今でも頭に色濃く残っている。確かに学校内でだけ真面目に働くことは、誰にでもできるかもしれない。私はその先生のおかげで、「常に周りの目がある」と意識し始める。やがて後輩の一人が、「先輩を見て私も頑張らなければならないと思った」と言った。TA として働いていたうえで、誰かのやる気を刺激できたことは今でも誇りに思っており、自分の自信になっている。

第二に、新校舎に移り体制も変わった外国語学習支援センターで働くことは、正直大変なものであった。今までと違い、学生との距離が遠く感じるが多々あった。たくさんの学部学生と関わるようになってからは、より一層「先生と学生の間での存在」としての TA の役目が非常に重要になる。英語をあまり勉強してこなかった学生に対して下手なことをアドバイスすれば、悪い方向に作用してしまうかもしれない。そのようなところに気を配りながら、毎日働いていた。そんな中、二学年下の学生の短期留学が決まったという話を聞いた。そのなかでアメリカに行く学生が、「大裕さんの影響でアメリカに行くことにした」と言っているのを聞いた。今までやってきたことがすべて報われるうれしい言葉である。一人の学生が留学先を決める際に、私の TA としての言動が彼に影響し、彼の背中を押していたのだ。今思えば、私自身が留学を決意した最後の一手は、私が一年生の時の TA による「行ってこい、行ってみなきゃ何も知らないまだ」という言葉である。私は、これからアメリカへ行く学生のその言葉を聞き、改めて TA の重要性や影響力の大きさを再認識した。この二年間で誰かに影響力を与えることの重大さや喜びを知ることができ、非常に良い経験になった。

第三に、後輩へ伝えたい思いがある。日々努力しても、結果に表れず、成長を感じることができない時がこの先たくさんあろう。しかし、取り組んでいることを「無駄だ」と考えてはならない。取り組んでいることや自分しか知らないことは、今後の人生の何かの場面で必ず役に立つ。「努力しても努力しても、成長しないこと」を経験するのは、人生において重要である。自分で定めた目標を諦めてはならないし、自分自身を裏切ってはならない。

二年間お世話になりました。不甲斐ない TA でしたが、たくさん勉強させていただきました。ありがとうございます。

6. 学内外での教職員や学生の取り組み

2018 年度後期「国際関係論 B」（担当：若松大祐）では、プラトン『国家』を講読した。受講者は担当教員とともに、内容を十分に理解できずとも、なんとか邦訳 900 ページを足掛け 4 か月で読み終えた。ここに収録するのは、受講者の中でも特に熱心にプラトンと格闘した道下玲さんの読後感である。

(若松大祐)

アイデアの犠牲者

14122067 道下 玲

今回、プラトン『国家』（藤沢令夫訳、岩波文庫、2009 年、本書概要は本文に記載）を読んだ直後、私は眠れなくなった。アイデア（文末を参照）とは何かを考え始めたら、止まらなくなったためだ。当然、答えにたどり着けるわけもなかった。同時に、ソクラテスの言葉というものは、凡人には簡単に届かないだろうと感じた。それは、内容からはもちろんのこと、外見からも難しさが伝わってくるからである。ここで私は何を述べるのか。ただの感想文を書くつもりではない。凡人による凡人のための二つを提案したい。

一つは、表紙や挿絵を現代的な絵にするという提案である。この本は外見から見て、現代人とりわけ若者が手に取りにくい。なぜ、哲学というただでさえ堅苦しいジャンルの本というものは、なぜ見た目だけでも時代に合わせようとしなのか。書籍の表紙には色々なタイプがあるものの、私が読んだ『国家』は、白をベースに黒文字で『国家』と書いてあり、かろうじて題名のバックに青色が存在するだけである。つまり、多くの人がまず手に取ろうとはしないタイプの表紙だ。そこで、今はやりの漫画チックな表紙にするということを私は提案したい。この『国家』という本は、ソクラテスが弟子に話しているものをプラトンが書き残したものである。ソクラテスやプラトンをコミカルに描いて表紙にするだけで、間違いなく手に取る人々の数が増えるだろう。すでに挿絵にある線分の比喩や洞窟の比喩も例外でなく、コミカルに描く。このようにすれば、読書が捗るのは、間

違いないだろう。

もう一つは、話し言葉も現代的にする提案である。この『国家』は会話がメインである。古代ギリシアの話し方を日本語に訳されている。そのため、ソクラテスの言葉が難しく理解しづらい。一つの文が終わりなく続き、いつの間にか文がカッコで閉じられ、ソクラテスの対話相手の「確かにその通りです」という相槌が続く。こういったところが、内容をさらに難しくしてしまい、私たちが『国家』を読み続けられない原因の一つになっていた。そもそも、『国家』はもとは古代ギリシア語である。訳し方はもっと自由であってよかろう。現代人の会話にもっと合わせて日本語に訳してみたらどうだろうか。言葉遣いだけでも現代風にすれば、きっと読みやすくなるにちがいない。そうすれば、私のような凡人が例えば僭主独裁制国家のあり方について早く理解できただろう。

『国家』を読み終えた際、先生が講義中に、「この本の素晴らしさは答えではなく、賞味期限がない問いにある」とおっしゃった。この言葉が私を深く納得させた。思えば、私自身は今、紀元前 430 年ごろの人間と同じ問いのために頭を抱えている。そして、この問いは、これから先もずっと人々に問い続けられるのだろう。古典を読むのは、今の人間が昔の人間と対話できる唯一の方法だとしても良い。こうした経験はすごいことであり、間違いなく自分の肥やしとなろう。しかし、この一生ものの脳の揺れは、まず読んでみて、たとえ完全に理解できなくても、少しでも自分なりに理解しようと試みた人間にしか、体験できない。多くの人にこうした体験をもたらすためにも、『国家』の日本語訳の現在の堅苦しい文体を改める必要がある。

アイデアによる犠牲者が少しでも増えることを願う。

・専門用語(1):『国家』

『国家』は、ソクラテスが弟子たちに話している内容を会話形式で書き残した本であり、2000 年にもわたって研究されてきた哲学書である。この本が問いかけるのは、「どのような国家形態が最も優れているのか」、そして、「どのような人間が支配者になるべきか」などの現実的なことから、魂の在り方や正義の徹底的な追究などの理想的なことがらまでである。そこで、本書は読者に国家、自己、周囲の事物すべてに関心を持たせるのであり、それゆえに学問全

般を指南する哲学書だといえる。

- 専門用語(2)：アイデア

アイデアとは、事物の本当の姿、原型といった非物体的で永遠的な存在のこと。人は事物を見たとき、それが何であるかを認識はできても、そのもの自体を知っているわけではない。例えば、椅子を見た時、誰でもそれを椅子だと認識できるとはいえ、椅子の原型や椅子そのものを見ているわけではない。人が見ているのは、人が椅子のアイデアを模して椅子として造ったものであり、いわばコピーなのである。(第七卷一章 - 五章、514A-521B)

7. 共 催

英語教育公開研修会

佐野 富士子

大学の地域貢献のひとつとして、また、本学卒業生への情報発信の場として、2016 年度から英語教育公開研修会をスタートさせた。今年 (2018 年度) で 3 年目である。本年度開催の背景には大学入試に関わる 2020 年問題があり、入試問題形式が記述式になることへの対応を中学高校で始めたいというニーズがあったことに応えたものである。本年度の公開研修会の内容は以下のとおりである。

1) 2018 年度第 1 回英語教育公開研修会

共催：常葉大学外国語学部言語文化研究会

主催：JACET SLA 研究会

日時：2018 年 9 月 22 日 (土) 16:00 - 18:00

会場：常葉大学 (草薙キャンパス) C 棟 208 教室

テーマ：ライティング指導—2020 年問題に対応する思考力・判断力・表現力の育成を図る

講師：佐野富士子 (常葉大学)：中高大の連携を踏まえたライティング指導

豊田ひろ子 (東京工科大学)：小学校での読み書き指導の課題と実践

2) 2018 年度第 2 回英語教育公開研修会

共催：常葉大学外国語学部言語文化研究会

主催：JACET SLA 研究会

日時：2018 年 10 月 27 日 (土) 15:00-17:00

会場：常葉大学 (草薙キャンパス) B 棟 302 教室

テーマ：英語による英語の授業—なぜ英語で授業を行うのか、どうすれば生徒が英語を使うのか

講師：甲斐順 (神奈川県立柏陽高等学校)：英語を使う授業—三角ディベートなど

発表者：関根由大（関西大学大学院・常葉大学卒）・鈴木晴也（常葉大学大学院）：

ティームティーチング

解説者：佐野富士子（常葉大学）

8. 後 援

現代世界文学の読書会

若松 大祐

有志の教員が2017年度より外国語学部言語文化研究会の後援を受けて、毎月1回の頻度で世界各地の現代文学を対象とした読書会を開催している。目的は、参加者が自身の専門外の地域に理解を広げるところにある。2017年度はアジアに注目したのに続き、2018年度は、ラテンアメリカのスペイン語圏やポルトガル語圏の現代文学に注目した。

2017年度は8回開催できたのに対し、残念ながら2018年度は3回の開催にとどまった。2019年度はより多く開催できるように尽力したい。ほぼ毎回参加した教員は、江口佳子、三村友美、若松大祐（以上は外国語学部）、そして戸塚麻子（教育学部）であり、学生では中野真優（外国語学部）である。新たな参加者の出現を待っている。

第一回（6/27 水）

ホセ・エミリオ・パチェーコ（ほか著）、安藤哲行（ほか訳）『ラテンアメリカ五人集』〔集英社文庫 ハ-17-1、改訂新版〕東京：集英社、2011年から任意の2篇。

第二回（12/12 水）

〔研究発表〕三村友美「スペイン語の接続法について」

第三回（3月予定）

フーベン・フォンセッカ（著）、江口佳子（訳）『あけましておめでとう』〔ブラジル現代文学コレクション〕東京：水声社、2018年。

ポルトガル語原著：Rubem Fonseca, *Feliz Ano Novo*, 1975.

Ⅱ 英米語学科

1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

The 2018 Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest

Aya Motozawa

The annual Catherine Sasaki Memorial Intramural Speech Contest was held in our new Kusanagi Campus on 4th December 2018. This contest honors the memory of Catherine Sasaki. She taught at Tokoha for many years as a member of the English department until she suddenly passed away from cancer in 1997. According to Zushi sensei, the only teacher who directly know and worked with her, Catherine was a third-generation Japanese-American teacher and always serious about cross-cultural issues. She was also an energetic, positive, and devoted teacher in the early stage of the English department, when studying abroad programs (such as long-term abroad programs, summer and spring seminars) started. One of her biggest efforts was to reform this speech contest from the former too-rigid style into today's less formal type of event.

In addition to remembering Catherine Sasaki, this year's contest honored two other professors from the Faculty of Foreign Studies: Professor Yoichi Kuwahara and Associate Professor Tomoko Inoue. They both passed away from cancer (Professor Kuwahara five years ago and Associate Professor Inoue at the end of last October). In the beginning of this year's contest, the audience was asked to observe a moment of silence

A total of 17 speakers participated in this year's contest: 10 students into Division 1 for 1st and 2nd year students, and 7 students into Division 2 for 3rd and 4th students. The judges were Mr. Kevin Demme and Mr. Peter Hourdequin from the U.S., and Mr. Robert McLaughlin from Canada. Ms. Mari Hamada from Foreign Language Study Support Center (FLSSC) and 11

student volunteers also assisted this year's contest. Speakers have a choice of two topic to make their speeches, and this year's themes were:

- (1) How do you over come stress in your daily life?
- (2) What can people of other countries learn from Japan, and what can Japanese people learn from other countries?

Here are the winning speeches from each Division.

【入賞者のスピーチ原稿】

《Division I》 優勝

We Are Born This Way

18121125 Kaoru Warashina

For the last two months, I thought about what Japan can learn from other countries, and what other countries can learn from Japan. I thought about it, while I was eating dinner, taking a bath, riding my motorcycle, and even in my dreams. However, the answer never came to me.

I tried searching the answer on the Internet at first. Then I found that many articles just generalized about each country. For example, an article says Japanese people are all quiet and polite even though actually some of us are not. Another example is that American people are not punctual. Do you think this is true? My answer is absolutely not! It is still a fresh memory when Creighton University students came to Tokoha. One day, I promised to meet them at Shizuoka Station at 6 pm. As you expect, they came on time. While searching it, I realized that I should not judge a country by its national character. We cannot simply say that the people in this country have this national characteristic because nobody is the same even if they are from the same country.

Therefore, I started to think again about what every single person can

learn from each other. Then, I remembered one song, “Born This Way” by Lady Gaga. When I heard this song for the first time, I felt nothing, actually. I didn’t even know the meaning of the lyrics because I was only twelve and couldn’t understand English at all.

When I was 15, however, I was extremely moved, watching the performance of the song in *Glee*, an American comedy drama series. There, the *Glee* cast sings it, wearing special T-shirts. On the T-shirts, it says how they feel inferior about themselves, their personal flaws. There is a line in the song “I’m on the right track. I was born this way.” This drama taught me to accept myself positively.

At last, I reached an answer for the question; what can every single person learn from each other. It is, we should express ourselves freely. The world is becoming smaller and smaller. Thanks to the Internet and Facebook, Twitter, and Instagram, we can easily connect with people around the world. By dealing with various people, we can notice the diversity of the people. We are all different and that’s what makes each one of us wonderful. We don’t need to hesitate to express ourselves just because we are strange or out of place.

What I want to say is we are on the right track. We are born this way.

《Division I》 2位

How I overcame stress in my daily life

18121105 Momoka Morizaki

I get very nervous easily. For example, giving a speech and presentation is painful and very stressful for me. So, now, I’m under considerable stress. Besides, I was chosen to talk first, so I’m getting nervous. However, I want to overcome my fear of speaking in public and make use of this experience.

Today, I'd like to tell you about how I overcame stress in my daily life.

I found that there are three keys to overcoming stress. First is to understand your stress. How much do you know about stress? Do you think stress is good or bad? After doing some research, I found that it isn't always bad. In fact, moderate stress is good. Certainly, excessive long-term stress can cause headaches, stomachaches, and even depression. However, people can change moderate stress into a motivating force. By dealing with stress in daily life, people build up their strength for overcoming stress. Even though I thought that tension is a bad thing, I changed my thinking. Moderate tension is actually important for motivation and performance.

The second key to overcoming stress is to prepare 120% not just 100%. When giving speeches in high school, I always forgot my draft and cried in front of my classmates due to extreme nervousness. It was a matter of preparation. In my own case, I could show my ability of only 60% even if I prepared 100%. However, one day, I could show 100% because I prepared 120%. I did imagery training and practiced many times, which allowed me to gain confidence. I noticed that I should be totally ready and prepare 120% in order to succeed in my speech.

The third key is to talk with others. I always talk with my teachers, friends, and seniors at my work place when I have difficulty and worry in my daily life. In fact, I hesitated to take part in this speech contest. Then I talked about it at my work place. The store manager and seniors said to me, "You are too serious. Why don't you try? Anyway, you can gain experience." I felt better and recognized that I really wanted to change myself by entering this speech contest. In addition, there is another advantage of talking with others. We can gain wisdom by talking with people of different ages and backgrounds. We can know many ideas about our lives, and we will have more choices.

In conclusion, the three keys to overcoming stress are understanding it, preparing 120 %, and talking with others. I think that the last is the best

way to reduce stress. Also, friends who listen to you are precious. If you don't have friends, first of all, you should make them. And please try my method to overcome stress in your own life.

《Division I》 3位

Communication is the Best Way

18121069 Maho Nakajima

Imagine, somebody suddenly tells you "You are useless!" What do you think about that? How stressful is it for you? The way we feel stress is different for each person. Everybody has a different capacity for stress. Let's say water is stress, and my capacity for stress is the glass. Your glass might be smaller than mine. I might be able to bear stress about this much, but you might not be able to bear as much stress as I do. In that case, of course, the water overflows out of your glass. If you know the water is about to overflow, you should stop pouring it, or you should heat it to evaporate so that it won't overflow.

Today I am going to talk about how I overcome stress in my daily life. I overcome stress by communicating with my family and my friends. That is how you can keep the water from overflowing.

When I am stressed out, I always talk to my mother. My parents were divorced, and I don't live with her anymore. She hasn't lived with me since I was in the 5th grade in elementary school, so we tried to get in touch with each other in various ways. Now, she listens to me whenever something happens to me. She is my mother and at the same time she is my special listener. She always understands everything.

Three years ago, I started basketball in high school. I couldn't do anything because I had no basketball experience. My coach was super strict.

His words sometimes hurt me. One game day, I missed all my shots. Then, he came to me after the game and said, “you are useless for our team!!” I was really shocked. I was at a loss for words. I cried and cried. What he said made me think whether or not I should quit the team. So, I talked to my mother about it. She really worried about me and listened to me. After that, she just praised how much effort I made in order to play as a member in the game. She taught me I shouldn’t feel useless by only once failure, and she reminded me about the efforts I made. She supports me whenever I am depressed. She always makes me feel so much better. Just talking with her always reduces my stress.

After all, you shouldn’t take all stress into yourself. Communication changes the way of thinking. There is always somebody beside you. You have a mother, father, sister, brother and best friends! When you are stressed, you should tell somebody your painful feelings. I am sure you can keep the water from overflowing.

《Division I》 特別賞

How to Get Rid of Stress Perfectly

17121050 Michiko Kurebayashi

Hello, everyone! My name is Michiko Kurebayashi. Thank you for coming today. I would like to tell you about how I overcome stress in my daily life. When I think about the topic how I overcome stress in my daily life, there came up a big problem, because I have never felt any stress in my life. Therefore, I started to think about why I do not feel stressed. Then, I realized that is all because of my personality.

To begin with, I am super optimistic. My basic belief is “it will work out all right.” Even if very important exams or big presentations are coming

II. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

along the next day, I can sleep perfectly, and I can sleep very well. I just believe it is a waste of time to think about the things we can not change.

Next, I also think I am very blessed with where I am. I am surrounded by great people, kind people, my family, my friends, and my teachers. Whenever I face some big problems, they really listen to me, ask what happened to me, and give me advice. I don't think I can never thank them enough.

However, I'm not different from you. When I feel tired in my life, I do get stressed like you all. But as I said, I realized I am a super optimistic person and very lucky to have great people around me, I am at the same time I realized that I overcome problems and stress unconsciously. Actually, I have a lot of ways to solve them. For example, talk with my friends, take a rest, sleep for a long time, eat some delicious food, buy some sweets or clothes, go into Oshiire, play some sports, shout out when riding a bicycle and more. I choose one of these depending on the mood of the day without thinking about it. I just happen to do some of them naturally.

So, if you don't know how to get rid of stress like I do, here is a tip for you to live happily. As you know human's brain is very simple. Even you feel bad, please make a smiley face. Then your brain will be deceived and make you believe you are happy. Here is even a special word to make you smile. That is "Lucky, Happy, Whisky!" Please repeat after me "Lucky, Happy, Whisky!" Please keep your smiley face! And look around the people next to you, the corners of their mouth are lifted a little right? And they look smiling, don't they?

So, when you feel nervous or bad in your daily life, please cast the special word on yourself. I think when we feel happy, we will not get stressed. You should find some good things around you and don't keep the bad things longer. It doesn't have to be some big things, just a small thing is fine. For example, find some delicious food, make up your self very well, find beautiful or cool person on the train, and so on! Every small thing can make you

happy.

If you feel some stress, why don't you overcome it like me? I hope all of you can be happy and enjoy every day! Thank for your attention.

《Division II》 優勝

The Thing We Can Learn

16121045 Junya Saito

Have you ever noticed differences between you and others, for example, about cultures, traditions, and ways of thinking? When I was in Canada, I found a lot. We're the same human beings and live in the same world. Then, why are we so different?

I asked some of my friends in other countries about what they could possibly learn from Japan. Most of them said they could learn about cooperation and consideration. One of them told me a good example.

“In Japan, people don't talk on the phone in busses or trains, but in my country, people talk on the phone everywhere because they don't care how that would bother the people around them. Japanese people think about others. So we should learn more about cooperating with each other and considering other people from Japan”

When I heard that, I thought cooperating and considering make us keep moral. And at the same time I wondered why Japanese people could do so. And I came up with one idea. I think Japanese people prefer uniformity, being the same and doing together. It may sound alright in terms of cooperation and consideration. However, it could also mean we don't prefer

II. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

uniqueness and sometimes we may not like to accept differences, which caused a terrible incident last year.

A high school student with brown hair was forced to dye her hair black by her school. Her mother already told the school that her daughter's hair was naturally light brown, so she hoped that the school would understand that. However, after she entered the school, they made her dye her hair black every two weeks. Even though she was born with light brown hair, it was not accepted. Because of that, she stopped going to school. Furthermore, the school said, "Even if students of other countries with blond hair enter our school, we'll force them to dye their hair black." When I heard the news, I was speechless. This is one of the big problems we do have in Japan. Being different could sometimes be despised. Of course, I don't mean every Japanese person thinks so, but it may be true that we tend to like uniformity, being the same with others. I think we're afraid of being different from other people, so we try to blend in with our surroundings. We think about the wellbeing of a group of people instead of just ourselves, individually. Those could be the reasons why that school forced her to dye her hair black and we don't talk on the phone in busses or trains. I think sometimes uniformity makes our lives better, but at the same time it also makes them worse.

Therefore, one of the biggest things Japanese people can learn from other countries is accepting differences. According to the Ministry of Justice, there were three million people from other countries in Japan as of 2016. And according to the Japan National Tourism Organization, 26 million people of other countries came to Japan in 2017. There are many opportunities to encounter differences, so I think we need to appreciate diversity. I think having diversity and accepting other cultures or ways of thinking doesn't hurt Japanese culture or ways of thinking. We don't need to standardize all of them, we don't have to be the same all the time. We just need to understand each other's uniqueness.

I asked earlier why we are different. It's because we have uniqueness, which makes us different and diverse, so we should understand each other. And we need to cooperate with each other and consider about other people. Both Japanese people and people of other countries can learn diversity and uniformity. Diversity and uniformity may be opposite ideas, but if we can have both of them, I think we can make our world much better than now.

《Division II》 2 位

Power of Smiling

15121069 Takeshi Hasegawa

When I know that one of the topic is about how to decrease stress, I became so happy, because I thought that my way to reduce stress is the best. I overcome stress by smiling. I'm here to talk about importance of smiling. Smiling brings positive factors like happiness, good friendship, and keep negative factors away from us like bad behaviors because of stress. Smiling can be a wonder drug for decreasing stress. Before talking about smiling in detail, I want you to answer a question, because this question is really important for my speech.

The question is this.

Do you think that “We smile because we feel happy”? Or “We feel happy because we smile”? I think most of you will choose former. However, I believe that we feel happy because we smile. We can get a happier life by smiling, because smiling is a really important key to be happy. It is a wisdom given by predecessors.

I'll produce a proverb. It is 「笑う門には福来る」 This proverb means that Good fortune and happiness will come to the home of those who smile. Some of you will say that it is just a superstition. Don't worry. Today, I'm here to

II. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

talk about how to decrease stress by “power of smiling”. Smiling have power to even change your life.

There are huge amount of factors which can cause stress in daily life. Studying for entrance exam, Overtime working, personal relationship, and anxiety for the future and so on. We tend to take it out on others. However, this is the best situation for us to feel power of smiling.

When I feel stress, I try to smile, because I thought that smiling can calm myself down and feel relaxed. I watch YouTube. I hang out with my friends, and I sometimes look in the mirror and try fake smiling. Power of smiling has been scientifically proven. All of what I said have effect to decrease stress.

Regardless of the type of smiling, smiling can help reduce the level of stress-enhancing hormones like cortisol, adrenaline and dopamine, increase the level of happiness-enhancing hormones like endorphins and reduce overall blood pressure. I said “regardless of the type of smiling”. Smiling, even fake smiling has power not only to decrease stress, but also to be happy. You don’t have to take it out on someone or something. You don’t have to eat too much to decrease stress. Even if you have stress, smiling makes you feel refreshed and makes you move toward future with happiness. Action changes your habit. Habit changes your character. Character changes your destiny. Smiling is your first step for your brilliant future.

So whenever you want to take advantage of a superpower that will help you and everyone around you live a happier life, smile.

Thank you.

《Division II》 3 位

How would people you respect overcome stress?

16121027 Kajita Hayata

When you wake up in the morning, the sun is shining, the birds are singing and you start to feel that it is going to be a wonderful day. However, the moment you get on a train to commute, you are squashed flat in an extremely crowded train. After that, your class begins, and at the same time, your professor starts to talk about very sophisticated and complicated things and that leads you to daydream about a world with rainbows and unicorns. At the end of the classes, your professors give you millions, billions of hours of homework to do. Finally, you finish your classes and work at a part-time job. However, working has never been a stress-free situation. You sometimes have to deal with people who you can't empathize with. At the end of the day, you are ashamed of yourself. You are ashamed to expect your day to be spectacular.

I used to be the type of person who thought about the same thing over and over when I felt stress and anxiety. When I was a high school student, I was a member of the baseball club. I practiced very hard, day in day out. I practiced from 4 pm to 9 pm from Tuesday to Friday, and 9 am to 5 pm on weekends.

Even though I practiced baseball so hard every day, I was not a very good player. It was rare for me to play in games. I was so disappointed and stressed out that I couldn't help thinking about all the negative things. It was not fair. Why was I even practicing? Maybe I shouldn't have joined the baseball club, blablablablablabla. I almost lost all of my motivation. It was a really hard time for me. I was trying to figure out the way to handle all the negative feelings but it didn't work well. Surprisingly, one of the members of my baseball club was a girl. She was positive about everything. She loved

II. 1. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

baseball. Even though she was a girl, she practiced harder than any other boys on the team. She came to the school earlier than anyone else and started training herself. She was smiling all the time and always showed a positive attitude towards baseball. I think she was such a strong woman mentally. she obviously deserved to be playing in games, but often she didn't play in games either.

One day in the cold winter, the training was extremely hard and I almost gave up. I started to think that I couldn't do it anymore. However, the strong girl popped up in my head and I said to myself " how would she overcome this difficulty?" "How would she react to this situation?" "The answer was she would be very peaceful. Maybe she would smile without any complaining. She would enjoy training no matter how hard it was. When I finally figured it out, I thought there was more I could do and I had to try harder. I really respect her and her way of thinking. I really appreciate her.

Bad things will happen until the day you die, so you have to find a way that you can handle stress in a positive way and Here is my idea that I want to share with you guys. When you feel stressed, Why don't you think this way? How would people you respect overcome stress? How would your friends who are always positive handle problems in their daily lives? Is it really worth it to waste your energy thinking about this? Why not have fun? If you think this way, you can realize that people who are having fun truly are the ones who don't care about all the small things. It is important to see the bigger picture so that you can realize how small the problems are. But it is very natural for you to feel stressed because we are all human beings. That's life. Stress is the sign that you are struggling, but at the same time trying to do your best in your own life. You don't have to force yourself to overcome stress. Just think positively and focus on what you really want to do, and finally, you can become friends with stress. Thank you.

【入賞者の感想】

《Division I》 優勝

自分の自信へ

18121125 藁科 薫

オーラルコミュニケーションの授業中、ケビン先生がスピーチコンテストの説明をしてくださった時にこのコンテストの存在を知りました。説明を聞いた時、真っ先に出場したいと思いました。高校の時にスピーチコンテストに出場したことはありましたが、録音した声を送るものだったので、ジェスチャーもなく、オーディエンスも勿論いませんでした。2回参加して2回とも予選落ち。自分の練習不足や力のなさを痛感しました。それから約2年が経ち、このスピーチコンテストは自分の英語力がどれだけ伸びたのかを確かめる良い機会だと思い、挑戦しようと思いました。

私は What can people of other countries learn from Japan, and what can Japanese people learn from other countries? という題を選び、まずはその答えを見つけないとスピーチ原稿が書けないため、必死で答えを見つけようとしていました。それでも答えは見つかりませんでした。しかし、答えを見つけようとしていた時に一つの考えが浮かんで来ました。それは、誰1人同じ人はいないのに一括りにしてはいけないということです。自分の考えが一つにまとまり、少しずつ原稿完成に近づいていきました。授業で出る課題もこなした上で、スピーチの原稿を考えることは容易なものではありませんでしたが、このコンテストにエントリーしなければよかったと後悔したことは一度もありませんでした。なぜなら、このコンテストは自分を成長させてくれると確信していたからです。何度も原稿を訂正しては、柴田先生にアドバイスをもらい、また訂正を繰り返して結局原稿が完成したのは本番の4日前でした。ケビン先生やピーター先生に録音して頂いた音声を聞き、どのようにしたら上手に伝わるのか考えて4日間練習を繰り返しました。確かに沢山努力はしましたが、1位という素晴らしい順位は自分1人では取ることが出来ませんでした。特に柴田先生には沢山サポートして頂きました。この賞を取った事で恩返しになれば良いと思います。

サポートしてくださった先生方、応援してくれた友人達がいたからこそその結果です。本当に感謝しています。有難うございました。このスピーチコンテストは自分への自信繋がりましたし、今後英語学習をもっと頑張ろうという気持ちにもなりました。これからも努力を怠らないで、英語力を伸ばしていきたいと思います。再度、このスピーチを作るに当たって、関わって頂いた先生方、友人達に感謝いたします。本当に有難うございました。

《Division I》 2位

スピーチコンテストを通して

18121105 森崎 桃香

スピーチの中で述べたように、私はこのスピーチコンテストに出ることをためらっていました。なぜなら、人前に立って話すことが大の苦手だからです。高校生の頃、たった40人のクラスメイトの前でスピーチをしても、途中で原稿が飛んでしまい、終わった頃にはいつも泣いていました。エントリーの締め切り一週間前に聴衆は最大で400人と聞いて、更に出る気を失くしてしまいました。そんな中、私の背中を押してくれたのはバイト先の店長と先輩でした。彼らは、「出てみたら？とりあえず場数を踏んでみろ。何事も経験だ！」と簡単に言いました。その時は他人事だな、と思っていましたが、スピーチコンテストに出ることで自分を少しでも変えることが出来れば…と考えるようになり、挑戦することに決めました。私はスピーチコンテストをとっても重く考えていたけれど、店長たちに話したおかげで気が楽になり、出てみようという気持ちになりました。今思えば話してよかったなと実感しています。

スピーチコンテストを通して、私が最も苦勞した点は、原稿の作成です。本沢先生に原稿を見もらう前、私は日本語で考えた文をただそのまま英語に直していました。そのため、序論と結論が一致していなかったり、thatばかりを使ったり、一文が長い文章が多くなったりと、改善しなければならない点がいくつもありました。それから、簡単な単語やフレーズを使ったり、一文を簡

潔にしたりして、聞いている人たち全員が一度に聞いて理解できるスピーチを作るよう意識しました。今自分が一番伝えたいことは何なのか、これこそが原稿を作るうえで一番に考えるべきことだと感じました。

そして、このスピーチコンテストで私に最も影響を与えたのは先輩方の存在です。出だしから私は先輩方のスピーチに聞き入ってしまいました。話すスピード、声のトーン、抑揚のつけ方、ジェスチャーの使い方など、今の私にはできないだろうと思う部分がたくさんありました。先輩方が今考えていることは何か、そして、聞いている私たちに何を伝えたいのか、様々なことを考えさせられるスピーチでした。今後こういう機会があれば、先輩方のようなパフォーマンスができるようまたチャレンジしたいです。

今回こうしてスピーチコンテストで賞を取ることができたのは、たくさんアドバイスをくれた本沢先生や先輩、発音の指導をしてくれたネイティブの先生方、そして、エントリーするきっかけをくれた店長のおかげです。本当にありがとうございました。

《Division I》 3 位

挑戦が自分を成長させる

18121069 中島 摩保

今回のスピーチコンテストを終えるまでに、多くの人にお世話になりました。この場をお借りして、お忙しい中時間を割いてご指導をくださった先生方、練習に付き合ってくれた友人たち、アドバイスをくださった全ての人に感謝します。

私はスピーチコンテストが開催されることを、授業でプリントを配られた時にはじめて知りました。今までは大勢の人の前で何かを発表することに関して他人事のように考えていました。なぜなら失敗するのを恐れて、挑戦する気持ちを無くしていたからです。しかし、その時は違いました。毎日繰り返される同じような生活がどこか嫌で、何かに没頭して努力してみたい、こんな自分を変えたいと思っていた時だったからです。そう思っていたおかげで、スピーチコンテストに

とても興味が湧き、“やってみようかな”という気持ちになりました。しかし、今までに大勢の人の前でスピーチをした経験は一度もなく、スピーチをしている自分を想像することすらできませんでした。“こんな自分がスピーチか…、やっぱり無理だな”と何度も考えましたが、応募開始日の朝、“まほも出るでしょ？”と何気なく言った友人の言葉のおかげで、出るか出ないか迷う時間はない、自分を変えるチャンスだ！と決意し、応募することを決めました。

私は今まで外国に興味があったものの、留学経験はありませんでした。そのため二つあったうち、“how do you overcome stress in your daily life?”というテーマを選びましたが、自分が今どうやってストレスを解消しているかなんて考えてこともなく、とても難しいテーマだと思いました。まず、これまでのつらい経験をどういう方法で乗り越えてきたかを思い出しました。その時真っ先に浮かんだのが高校時代の部活でした。よし、これを話そうと思いました。しかし、自分の経験をダラダラ話すだけで、何を伝えたいのか分らないし、聞き手からすると興味の湧かない内容になってしまいました。何度も先生の研究室に行き、帰りの電車でも考えました。伝えたいことを英語で表現することの難しさを改めて感じ、同時に自分の語彙力の無さにも苦戦しました。そして自分の発音をより聞きやすい英語にするために、先生にお願いして読んでもらったものを録音して何度も聞き返し、声に出してイントネーションを修正して当日までを過ごしました。

今回スピーチコンテストを経験して、もちろん実力はまだまだですが、前の自分より英語に対する自信が付いたことは間違いなくと思います。そして新しいことに挑戦する楽しさを知りました。もし迷っている人がいるなら、絶対に挑戦することをお勧めします。

《Division II》 優勝

What is “Speaking English?”

16121045 Junya Saito

When I took the 1st place at the Catharine Sasaki Memorial Speech Contest, at first, I couldn't say anything. My heart was filled with many

kinds of emotions like excitement, amazement, and so on. Suddenly, tears ran down my cheeks. Getting the 1st prize at this speech contest was one of the things that I wanted while I was at this university.

After I came back to Japan from Canada, I looked for opportunities to speak English. It was so difficult to be a good English speaker like people who speak English as their mother tongue. Therefore, after I came back to Japan, I, the person who speaks odd English, struggled to be able to speak my ideal English. I couldn't pronounce many words exactly even though some of them were learned when I was in junior high school. Looking back now, it made sense why I couldn't pronounce them. It's because, until I went to Canada, I hadn't focused on pronunciation while I was studying English for 10 years. However, at that time, I thought, 'What did I do in Canada?', 'Was everything I did in vain?', and so on. When I thought like that, I saw an announcement about the Catharine Sasaki Memorial Speech Contest, and I applied for it to improve my English and know how my English was. While I was preparing for this speech contest, I struggled. It's because when I read the script, I noticed I couldn't pronounce words exactly. I practiced reading the same sentences many times, but I couldn't read them perfectly. Each time I couldn't do it, I felt I was not good at speaking English. However, I kept doing it again and again. Then I noticed I was a slave to pronunciation, and I just thought about it. The most important thing is what I want to tell people through speaking English. I forgot this, and I just focused on pronunciation. I understood pronunciation is, of course, important to speak English, but it is just one of the factors of English. Therefore, I changed my mind, and I didn't think too much about it. I tried speaking English effectively to tell people about the things what I wanted to say.

After I changed my way of thinking, I could enjoy speaking English. Therefore, I decided to try to enjoy English while I was giving the speech. At the end of this event, some people came to me and said, "Your speech was so good, your delivery made us concentrate your speech." When I heard that,

even though I thought preparing for the speech contest was really tough, it also made me change my mind. I could tell people about the things I wanted to say in English. Finally, I did what I wanted.

What I really want to say through this report is that speaking English is never only fun, and sometimes you feel depressed and disappointed about your English. However, if you think about what you want to tell people through English and you try to do it, your English will improve and it will make you confident. I hope you will show people your idea and your true self in English someday.

《Division II》 2位

後悔の無いように

15121069 長谷川 猛虎

『「過去の自分の記録を超える」という目標があった。1年生の時もスピーチコンテストに参加し、3位を受賞する事ができた。「当時の自分の記録を超える事で自他共に成長できたと実感できる」と考えたから、正直に言えば、過去の自分と同じ記録である「3位受賞」は自分にとってかなり複雑な気持ちだった。(大学二年時はアメリカに留学していたため不参加)悔いのないスピーチで終われるように。来年のスピーチコンテストに全てをぶつけたい』

この文章は、一年前、当時大学三年生で、Division IIで三位を受賞した私自身の感想文の一部です。当時の自分は、大学一年生の時と同じである、「三位受賞」を素直に喜べていませんでした。過去の自分自身の記録を打ち破る事が出来なかったからです。その悔しさをバネに、この一年間、英語に磨きをかけてきました。すべては「過去の自分に勝つため」でした。そして今回、遂に目標であった、「過去の自分の記録に勝つ」を無事達成する事が出来ました。後悔が全くないわけではありませんが、(そりゃあ最後のスピーチコンテストで一位取りたかったですよ笑)ベストを尽くした上での二位なので、清々しい気分です。

この、三度に渡ったスピーチコンテストは文字通り「自分との闘い」であり、「自分への挑戦」でした。と言うのも、自分には「過去の自分の記録を超える」という目標の他に、もう一つ、自分にミッションを課していたからです。それは「他者の力を一切借りずに原稿を作り上げる事」です。文法、文章校正、イディオム、文章全体の不備の確認等、すべて自分だけでやり切りました。昨日の自分を書き上げた文章の添削、確認、書き換えを、今日の自分が行う。それを何十回も繰り返し、自分なりに「完璧な文章」を作り上げました。教授たちへのネタバレを避けたかった、というのもありますが、一番の理由は「スピーチコンテストを経て、自分自身の成長具合を知る為」でした。混じりけのない、100%自分一人で作った文章が、どこまで通用するのかを知りたかったのです。大学一年時、生まれて初めて自分一人で添削等をやりきった文章を手に壇上にあがり、スピーチをしたあの日から、大学四年生、最後の集大成として、自分を信じてやりきった今回まで、この四年間、スピーチコンテストを経て本当に心身ともに成長する事が出来ました。目標も、ミッションも、努力も、挑戦も、悔しさも、すべて自分の血肉となり、今後の社会人生活でもきっと生きてくると思います。スピーチコンテストのお蔭で、とても充実した大学生活を過ごせました。運営してくださった先生方、生徒の方々、本当にお世話になりました！！！！ありがとうございました！！！！

《Division II》 3 位

緊張のスピーチを終えて

16121027 梶田 隼大

まず始めに、この外国語学部の数多くの先輩方が素晴らしいスピーチをおこなってき、キャサリンササキメモリアルスピーチコンテストの舞台に立ち3位に表彰していただいたことをとても光榮に思います。また、自分の原稿の丁寧な添削や発音指導をしていただいた先生方、本当にありがとうございました。自分が1年生の時に初めてこのスピーチコンテストを見た時は、正直なところ、自分は

このコンテストとは縁のない人間だと思っていました。自分があの舞台に立ち、大きな部屋が埋まるくらい多くの人の前で英語でスピーチをしている姿をどうしてもイメージできませんでした。今回のコンテストの参加も本当に迷いました。事実、エントリーを決めた日はエントリーの締め切り日でした。迷った末に、エントリーを決定した理由は2つあります。1つ目は自分が先生になりたいという夢があるからです。自分は大勢の人の前で話をするのがあまり得意ではありません。(先生の仕事は向いてないんじゃないの?!と思うでしょうが、その通りです。)もしも自分が先生になったら沢山の生徒の前で、英語で授業をすることはもちろん、全校集会などの場で大勢の人の前で話をする機会が山ほどあるかもしれません。大勢の前で英語のスピーチをした経験は必ず自分を精神的に強くしてくれるに違いないと思いエントリーしました。実際本番はものすごく緊張しました。自分の名前が呼ばれ舞台上がり、大勢の観衆が自分のスピーチのために沈黙する時間は本当に怖かったです。自分がスピーチをしている時の記憶は全くなく、あとで友達に聞いてみると同じフレーズを3回も言っていたそうです。それくらい本当に緊張していたんだと思いました。

自分がエントリーを決めた2つ目の理由はトピックに対してみんなとシェアしたい、いいアイデアがあったからです。キャサリンササキメモリアルスピーチコンテストでは毎年トピックが2つあり、スピーチをしたいトピックを出場者が選ぶことができます。今年のトピックの1つは自分の選んだ「ストレスの対処法」もう1つが「日本が他の国々から学べること、他の国々が日本から学べること」でした。自分がこの「ストレス対処法」で話したアイデアは「もしストレスを感じているとき、あなたの周りにいる尊敬できる人、ポジティブな人だったらどう対処すると思うか考えてみる」というものです。これは自分がストレスを感じたり、イライラしている時に考える対処法でもあります。このように考えると自分を客観的に見る事ができ、途端に自分の悩んでいたことがとても小さなことに思えてきます。そのあと「自分が今ストレスを感じていることは本当に悩むに値することなのか」と自分に問いかけるとそうではないことに気がつきます。人間は誰しも悩むことがあります、悩むことばかりにエネルギーを使っていて楽しい事に使うエネルギーがなくなってしまうのはもったいないですよね。効果的だと思うので、皆さんもぜひ試してみてください。

3 位という結果よりも、このキャサリンササキメモリアルスピーチコンテストの舞台に立つと決断を出来た事を本当に嬉しく思います。ただもっと緊張せずに落ち着いてできたのではないかと、セリフも練習できたのではないかと悔いもあります。

また来年も自分が自信を持って話せるトピックやアイデアがあったら参加しようと思います。



Division I 受賞者たち (左から、3 位、1 位、特別賞、2 位受賞者)



Division II 受賞者たち (左から、3 位、1 位、2 位受賞者)

2. 高校生対話弁論大会

第 35 回静岡県高等学校英語対話弁論大会 (草薙キャンパス・オープン記念大会) 報告

外国語学部英米語学科では、静岡県教育委員会の後援を頂き、毎年秋に本大会を主催してまいりました。今年は 35 回という節目を迎え、草薙キャンパス・オープン記念大会として開催いたしました。この大会は、外国語学部を持つ大学としての社会貢献とともらえていますし、静岡県内の高校における英語教育に資することを願っております。本大会は、「対話」という点がユニークです。一人で行う通常の「スピーチ・コンテスト」は一人で行います。しかし、対話形式をとって 2 人ペアで行う弁論大会は珍しいです。単に英語の技能だけでなく、「場面設定のある対話」つまり実際的な場面設定という状況も、総合的に評価される大会です。

大会の運営には本学科の学生ボランティアが当たり、「通訳」や「モデルワークショップ」も含まれます。高校生への良い刺激になるよう練習してきました。学生たちのスクリプトもまた彼ら自身が創造したオリジナルです。

11 月 10 日（土曜日）に草薙キャンパスで初めて開催されました本大会の結果は以下の通りです。（本学ホームページ参照）

A 組 ー英語圏の滞在経験がない、もしくは通算 10 ヶ月以下ー

順位	高校名	テーマ
優勝	静岡県立静岡城北高等学校	英語ってむずかしーよね！！
準優勝	常葉大学付属橘高等学校	あ、ちょっと待ったそのイヤホン！
3 位	常葉大学付属菊川高等学校	インスタグラムについて

B 組 ー海外での滞在経験の長さは問わないー

順位	高校名	テーマ
優勝	常葉大学付属橘高等学校	良い知らせ
準優勝	静岡県立清水東高等学校	清校の実実



大会運営スタッフ（右からモデルスキットメンバー・MC・学部長通訳）

3. 英米語学科特別研究発表会

英米語学科特別研究発表会について

山田 昌史

11月18日（木）の15:00から（Intensive Reading IIIBの授業内で実施）、英米語学科4年生の特別研究の中間発表会を行なった。英語教育、イギリス文化・文学、アメリカ文化・文学、英語学・言語学など分野によって5つの会場に分かれて、特別研究に取り組んでいる学生たちが、来年度、特別研究に取り組む予定の3年生や先輩の研究内容に興味を持つ下級生たちを前に自らの研究の内容と進捗状況について報告した。筆者が担当した英語学・言語学の会場では、5つの研究発表が行われたが、60席ほどある教室がほぼ満杯になり、40部用意した発表資料が足りなくなるほどの学生が集まった。学生たちの発表に熱心に耳を傾けている姿がみられた。

また、1月30日（水）には、特別研究の最終発表会を2つの会場で実施した。両会場で総数23の研究発表が行なわれた。どの研究発表も大変興味深いもので、1年間、ひとつのテーマを熱心に追究した成果が見られ、大変意義深い発表会となった。

これらの取り組みを始めて2年目となるが、今後もこのような取り組みが継続して行われ、英米語学科の学生の学術研究が活性化され、学生が自身の学修の成果を発表する場を作ることで、学生間の学問的な繋がりが深化することを期待したい。

4. 教員採用試験合格者

夢を叶えるまでの道のり

15121044 進士 千陽

私は小学3年生のころからずっと静岡県で教員になることを夢見て、常葉大学に入学しました。3年の11月で所属していたバレエ部を引退し、採用試験に向けた勉強に励みました。ひとり図書室で勉強し、教職支援センターの先生方と面接練習をする毎日でした。支援センターの先生にご指導いただき、褒めていただくことで自信になり、面接に自信を持つことができました。

5月には母校の中学校で教育実習をさせていただきました。生徒たちの目はとても輝いていて、本当に充実した3週間でした。1年生を担当したのですが、最初はうまく授業を進めることができず悩みました。しかし、日記帳の「先生の教え方が分かりやすかった!」という文章や、廊下ですれ違った生徒の「千陽先生の授業楽しかった!」という言葉に何度も救われました。1日1日があっという間に過ぎ、最終日に学級、学年、担当部活からたくさんの手紙と色紙をいただきました。「絶対に先生になって僕たちがいる間に〇〇中学校(母校)に戻ってきてください。」といったメッセージには感動しました。この経験と思い出が私の「教員になりたい」という思いをより強くさせてくれました。

実習が終わって3週間後には1次試験がありました。実習中は勉強する余裕がなく筆記試験は不安でしたが、英語での模擬授業と個人面接は今までの練習の成果を発揮することができました。

結果はまだ明らかになっていないながらも、次の日からは2次試験の集団討論に向けた練習を重ねました。学内での集団討論は顔見知りの人が多いのですが、本番は初対面の人、現場で経験を重ねた年上の講師の先生方の中で発言しなければいけません。2週間後に1次試験の結果が発表され、合格という文字を見たときは手が震えていました。と同時に、身の引き締まる思いでした。

2次試験当日は意見を言いつつも周りの意見をまとめることを意識しました。緊張はしましたが笑顔で心掛け、リラックスした雰囲気での討論を進めることがで

Ⅱ. 4. 教員採用試験合格者

きました。結果が発表されるまでの1ヵ月半は生きた心地がしませんでした。

発表の日、携帯の画面には自分の受験番号がありました。昔からの夢が叶った瞬間でした。すぐに両親、祖父母、母校および大学の先生方に報告し、感謝の気持ちを伝えました。間違いなく22年間の人生の中で一番うれしかった出来事です。

これから先の教員生活、辛いことのほうが多くあると思います。ですが、どんな時も笑顔を忘れず、生徒に寄り添える教師になりたいです。常葉大学で4年間学んだことを胸に4月から頑張ります。

九ヶ月間の初心

15121089 望月 萌乃

自分の夢に真正面から向き合った試験直前の九ヶ月間は、それまでの生活とは比べ物にならないほど充実した時間であった。多くの人からの支えを受け、春から小学校教員として働くことができることに大変感謝している。

私は、教員採用試験直前までの九ヶ月間で多くのことを学んだ。

まず、初心を大切にすること、自分の慢心に気づくことの大切さを知った。きっかけは、毎週末通っていた教師塾にて配布される「塾だより 初心」だ。平日にメリハリのない生活を送ってしまった時も、週末の塾にて、「塾だより 初心」を読み、塾生と切磋琢磨することで、「初心を大切にしなければ」と感じた。「初心」を意識した生活は、自分の行いを省みて改善するするきっかけとなった。例えば、計画性がない生活をして時間に余裕がなくなってしまった時、「時間を逆算して、計画的な生活を送る意識が足りなかった」と反省する。そこで、「これからは、時間を意識した行動ができるように工夫しよう」という初心をもつ。初心を大切に生活することで少しずつ時間に余裕ができ、その時間を新しいことに挑戦する時間に充てることができた。初心は、生活をしていると何度も何度も生まれる。どんなに些細な初心であっても、一つ一つの初心は私を成長させてくれるものだった。

また、実際に初心を大切にした生活を送り気づいたことがある。それは、「人

の心には必ず“慢心”が生まれてしまう」ということだ。初心を忘れて慢心を抱いてしまった時、その都度、自分を省みること、そして初心を取り戻すことが大切だった。

私は、これからの教職人生においても「初心」を大切にしていきたい、また、子供にも初心を大切にしてほしいと願う。もちろん、これから教員を目指す後輩にも初心を大切にしてほしい。

次に、「決めたことを最後までやり抜くこと」の素晴らしさ、「自分の限界を決めつけないこと」の大切さも学んだ。試験直前までの九ヶ月間は常に時間に追われる日々だった。毎日、大学に通い、週末は塾で多くのことを取り入れる。取り入れたことを学生ボランティアや私生活で生かし、その反省をする。この繰り返しであった。途中で自分に負けて手を抜いたこともあったが、自分に負けることが一番恥ずかかったので、目の前のことから逃げることは一度もしなかった。このように、紆余曲折はあったものの、この九ヶ月間学び続けることができたのは、自分の限界を決めつけずに前を向いて努力し続けたからだ。この九ヶ月で身につけた「最後までやり抜く力」、「自分の限界を決めつけない前向きな姿勢」は、「初心」同様、これからの生活に欠かせない力であると考える。

以上が、私が試験直前の九ヶ月間の生活を通して学んだことだ。合格は、ゴールではなく、スタートだ。自分の限界を決めつけず常に初心を忘れず精進していきたい。

学びを支えた 3 つの習慣

15121051 園田 耕介

高校の教員を目指す場合、一次試験に専門である英語の筆記試験や教職教養に加え、数学や音楽などの一般教養を問う試験があります。さらに二次試験では、英語でのディスカッションや個人及び集団面接、小論文があり盛りだくさんです。教員採用試験は決して楽な試験ではなく、3年の2月から半年間多くの時間を参考書との睨めっこに費やしました。しかし、今振り返ると私が奇跡的に合格を手にすることが出来たのは、机上の学習だけでなくある3つの習慣のおかげだった

Ⅱ. 4. 教員採用試験合格者

ように思います。

1つ目は、自分自身ときちんと向き合うことです。自身の長所や短所について友人に聞いたり、大学での生活を振り返ったりすることで自分という人間を知ることに努めました。そして教員に求められる能力や人間性の中で今の自分に欠けているモノは何かを常に考え、それを補うように学習計画を立て実行するようにしました。教員採用試験において仲間の存在は支えになり大切ですが、一人一人学習スタイルも得意不得意も異なります。「友人が面接練習をしているから自分も面接練習しよう」と人に合わせてしまうこともありましたが、孤独に自分の欠点と向き合うことは自分にとってとても重要な学びの時間だったように感じます。

2つ目は、将来のビジョンを描くことです。公表するのは恥ずかしいですが、私には将来の娘に「パパかっこいい」と言われることに憧憬があります。不純な動機かもしれませんが、いつかできる我が子に尊敬されるような人間になりたいと自分を鼓舞していました。また、ホームセンターに行き、キッチン用品や家具などを見て合格後の一人暮らしを空想したりして試験合格へのモチベーションにつなげていました。眼前の問題集への没頭ではなく、未来を構想することが半年間の学習を支えてくれたと思います。

3つ目は、休息やリフレッシュの時間の確保です。はじめは毎日机に向かって勉強するようにしていましたが、どうしても途中で飽きてしまい効率が悪くなってしまいました。そこで、DVDを借りて映画を観たり、友達と買い物に出かけたりするなど一日中自由に過ごす時間を週に2日設けるようにしました。教員採用試験では幅広い知識技能が求められますが、大半は大学の授業や日々の生活の中で学ぶことが出来ます。気負うことなく心に余裕を持ち、遊ぶ時間を大切にすることで、日々の勉強に憂鬱になることなく学び続けることが出来たと感じます。

教員採用試験は自己の将来を左右するビッグイベントでしたが、この3つの習慣のおかげで半年間楽しみながら学習を継続することが出来たと感じます。これからは高校教師として、自分自身と向き合う時間や休養の時間を大切に、未来を描きながら堅実に努力を続けていきたいと思っています。

夢のスタートラインへ

15121018 大塚 沙映

私は、小学校の恩師の影響で幼いころから教師になることが夢だった。英語教師になりたいと思い始めたのは中学生の頃だ。教師になりたいという夢を持ち続けて、約 14 年。この 4 月から、静岡市の教員として社会人のスタートラインに立てることとなった。私は、自分の長年の夢を実現することができた大きな理由は二つあると考えている。

ひとつ目は、大学での様々な経験である。カナダでのショート留学や外国語支援センターでの TA、サークルや学習ボランティア、教育実習や介護体験、対話弁論大会の MC やスキットづくり等、多くの経験をさせて頂いた。大学 4 年間の限られた時間の中で、少しでも気になったことや挑戦してみたいと思ったことは、自分から動いて何事でもチャレンジしてみることが大事だと感じた。私は、昔からあまり前に出て発言するタイプではなかったが、これらの経験を経て、以前より自分に自信を持つことができるようになった。教員採用試験の際も、自信を持って面接やグループ活動に取り組むことができたと思う。

特に、教職を履修している中で思い出深い経験は、何といても 4 年次の 6 月に行った教育実習である。実際に毎日朝から生徒たちと関わり、教壇に立ち授業を行い、生徒指導を行った時間は、何より「リアルな教育現場」を肌で感じることができた充実した経験だった。教育実習を終え、夢が現実に近い近づいてきたことを実感し、自分の思い描く教師像がおぼろげながらも見えてきたように思う。それと同時に実習の中で自分の足りない部分や、反省すべきことも多く見つかり、教員採用試験の前に疑心暗鬼になったり、何度もネガティブな気持ちになったりした時もあった。しかし、教育実習で出会った生徒たちの温かい言葉や笑顔を思い出し、無事にその後の試験を乗り越えることができた。

ふたつ目は、「教師になりたい」という気持ちをずっと強く持っていたことである。他の職種にも目を向けてみよう、と、大学 3 年生の時には、エアラインインターンシップに行ったり、学内の就職ガイダンスに参加したりしたが、教師への想いは一度も消えることはなかった。他にも魅力的な職業がたくさんある中で、

Ⅱ. 4. 教員採用試験合格者

「教師になりたい」という想いをずっと熱く持ち続けていたことが、今の自分につながっていると改めて感じる。

私の夢のきっかけが、小学校時代の恩師の存在であったように、私も生徒たちの夢のサポートやきっかけ作りをする、縁の下の力持ちのような存在であり続けたい。そして、20年後、30年後の子どもたちの姿を想像しながら、生徒一人一人とまっすぐ向き合う教師でありたいと考えている。常葉大学で学んだこと、経験したことを糧にして、4月には自信を持って笑顔でスタートラインに着けるようにしたい。

最後に、一緒に教員採用試験に向けて切磋琢磨してきた大学の仲間や、たくさんのご指導をいただいた諸先生方、大学4年間、支えてくださった全ての方々へ心から感謝をしたい。本当にありがとうございました。

世の中の流れを味方に

15121052 高木 勇里

私が常葉大学に入学できたのは父との約束があったからだ。高校を卒業後、一年間予備校で勉強をしたにも関わらず親の願う大学に合格することができなかった。しかし、どうしても大学に通いたかった私は父に公務員として教員になることを条件にこの大学に入学した。そして、その他にも交わした約束は英語検定1級の取得、漢字検定準2級の取得とあった。正直、高校へ入学してから成績不振で自信を無くしてしまっていたため、大学に入っても勉強ができるのか不安であった。

そんな不安の中、最初の一年を過ごしたが、思ったより成績がよく、自分の希望する進路にも順調に向かっている兆しが見えた。部活とアルバイトと学業の両立ができ、気持ち良く学生生活を送ることができた。友達とも仲良くでき、プライベートも充実していた。しかし、気が緩み有頂天になると自分の置かれている立場を忘れてしまうというのが私の悪い癖である。遊び惚けてしまいやらねばならない優先順位を間違えてしまっていた。すると決まって深夜日付を超えるくらい父に叱られたのだった。父の叱る姿は今でもこの世で一番恐ろしいものだと私

は思っている。しかし、そういった父の私に対する態度は思いやりがあったからこそ自分の夢を達成することに近づくことができたのだと思う。

しかしながら、二年生になっても悪い癖は抜けず、部活とアルバイトに精を出しついに成績が落ち、よく目をかけご指導いただいた先生からこっ酷く叱られた。というのもせっかく取得できた英検準一級の価値を、十分に学業に力を入れないことにより、下げていたからであった。そして何よりも私に潜在能力があるにもかかわらず十分に活用していないことがもったいないと言われた。自分が将来指導する立場になることを考えるとつらいものがあると思い、深く反省した。

三年生では教職の科目が多くなり自分の夢に向かっているのが分かった。三年という所属している部活で活動できる最後の年だった。私は二年の最後から三年の七月まで休んでいたが最後の年だということから部活に復帰した。またしても、学習能力のない私はまた部活に時間を費やし自分のやるべき優先順位を変えてしまったのだ。自分の欲望と引き換えになったのは勉強する時間。学期末にポータルサイトで成績を見ていくつかの単位を落としていたことに気が付いた。その時、はじめて自分が今まで間違った優先順位でやりたいことをしていたことに気付き、激しく後悔をし、先生や親に言われたことを思い出した。その後私は自分の指導教員のご指導のもと四年生に向けてと進路に対する姿勢を改め新学期を迎えた。

四年生になった私は将来のことに不安になり教員採用試験に合格できなかった時のことも考えるようになった。そのために私立学校に勤務できるように私立適性検査の情報を得るために教職支援センターに相談をしたりもした。他にも非常勤として講師登録を自治体によってすることができることも分かった。他にも自分の道を変えようかと悩んだが、両親に「信念」がないと見透かされうまくいくはずがないと諭された。考えてみればそれぞれの学生が真剣に目指して準備しているモノに対して自分は思いつきだけで行動しようとしていたのは浅はかな考えであった。

教育実習も近づき、そのあとにはすぐ教員採用試験があったため、更に自分の夢に対して本腰を入れた。世の中では学歴社会に対する考え方から大学への受験方法が考え直され、小学校での英語の授業の必修化、教科化、2020年には東京オリンピックの開催など英語に対する取り組みが多くある。私は自分の教育に対

Ⅱ. 4. 教員採用試験合格者

する考えを社会の流れに沿わせて確固たるものにし準備をした。さらに、勉強に関しては授業で習ったことを思い返しながら何度も参考書を読みこんだ。教員採用試験の問題も時間が足りない中、過去3年分解いて自分の力を確認し試験に臨んだ。

結果は合格。嬉しくなって大学生活でこれ以上ない嬉しい報告を両親にできた。自分が置かれている立場・状況を理解し、自分の目指すものに沿って世の中の流れを見定めて全力で準備することが今回のよい結果を導いたのだ。私は大学生活で全力になって勝ち取ったものは数少ないが、どんな道のりや手段であろうと勝ち取ってしまえばそれが自分の実力である。そして、これから教員を目指す人達に恥ずかしくない先生として過ごしていきたいと思う。

夢の教員採用試験合格までの4年間

15121026 影山 萌香

私は、幼いころからの夢だった教員として春から働くことになりました。入学当初は中学校教員の免許取得を目指していましたが、他学部履修で小学校免許も取得できることを知り、4年間勉学に励んできました。恩師のような教員になりたい、とあこがれを抱いて目指し始めた教職の道ですが、4年間は長いようであるという間で学びの多い時間でした。教員採用試験を終えて感じたことは、目標を大きく持ち続けるということです。

1年生の頃は、教職取得のために専門である英語の必修科目を勉強し、TOEICを積極的に受けました。正直、入学したばかりの私は大学生活が始まり、毎日が楽しく、教職を取得するための勉強というよりも毎日友人と楽しく過ごすことを大切にしていました。1年生の11月ころから本格的に英語の勉強をするようになりました。教職を目指す他の友人と一緒にTOEICを受けたり勉強したりしたことは今でも鮮明に覚えています。2年生、3年生になると、教職科目が増え、課題や試験に追われる日々が続きました。2年次の他学部履修、小学校一種免許取得のための授業は特に科目数も多く、苦勞しました。しかし、一緒に授業を受けている友人と課題をしたり、教えあったりして苦手なことも一

緒に乗り越えてきました。3 年次は初等教育実習、4 年次は中等教育実習を経て、教員になりたいという思いを強く抱くようになりました。

教員採用試験の勉強は、3 年生の春頃から始めました。毎日ノルマを決め、時間よりも質を重視し、時には息抜きもし、自分に合った勉強方法で 7 月まで勉強に励みました。志願書の作成や面接練習等では、大学の先生方に多に支えていただき、自分の教育観や教師像を膨らますことができました。また、友人とテキストを紹介しあったり、交換したりすることで様々な問題に触れ、筆記試験の対策もしました。

このように 4 年間を思い返すと、先生方や友人がいたからこそ頑張ることができたと感じます。入学当初の教職を取得し、教員として働くという私にとっては大きかった夢が今叶いとても嬉しいです。

春からは、自分がなりたい“教員”、理想の“教員”になることができるよう、また新たな目標に向かって精進していきたいと思います。

過去の自分が現在の自分の土台となる

15121035 小林 千紗

この度、静岡県教員採用試験に中等英語で合格をいただくことができました。私が教員採用試験に合格できたのは、常葉大学での学生生活が素晴らしいものであったからです。そこで、現在に至るまで私が行動してきたことについて書いていきたいと思います。

私は常葉大学に入学すると決めたときから、「静岡県の英語科教員になる」という目標をもっていました。その目標を達成できるように、自分は今、何をすればよいのかを小さな目標とし、常に考え 4 年間行動してきました。正直、教職課程は授業や課題が多く、嫌だと思ふときや大変だと感じる時もありました。しかし、小さなハードルを一つずつ超えていくたびに、自分が教員になる日が近づいていると考え、ポジティブに取り組むようにしました。

1 年次は教職課程履修の資格を得るために履修科目の成績では秀と優をできるだけ多く取ることを目標にしました。その結果、無事に教職課程履修の資格を得

Ⅱ. 4. 教員採用試験合格者

ことができました。当時の私は、教員になる道へのスタートラインに立つことができてただけであり、ここからが大事であると思っていました。2年次の目標は、英語力を向上し留学をするということでした。教員を目指す多くの先輩方からのお話の中で、必ず出た話題は、「留学の経験は将来の自分を助けてくれる」ということでした。その言葉を受け、私は留学に行くことを決めました。今、当時を振り返ると留学先での生活は、今の私にとってかけがえのない時間であったと感じています。スピーキング力が向上し、留学で感じたカナダの良さ、英語という言葉のすばらしさを教員になってから生徒に伝えたいと思うきっかけとなりました。3年次は、教職科目の授業で学んだことを大切にすることを意識し、特別支援学校での実習や介護等体験に取り組みました。この経験が自分の教育観や理想の教師像を形成することになったと思います。

私は、3年次の春休みから、教員採用試験に向けて本格的に準備を始めました。教員採用試験の勉強や面接シートの作成、面接練習を進めていく中で、友達や先生方の存在はとても大きな支えでした。友達が勉強を頑張っている姿を見ると自分のモチベーションになり、辛いと思うときでも頑張ることができました。また、面接シートの作成や面接練習では、多くの先生方に添削していただきました。学校教育への思いや考えを伝えることができているか不安でした。しかし、教育現場を経験した先生からの的確なアドバイスのおかげで、自分の教育観や理想の教師像を交えて学校教育への思いを伝えることが徐々にできるようになり、自信となりました。試験当日に頑張るのは自分しかないけれど、その日のために多くの人の支えがあったことを今でも感謝しています。

教員採用試験を受けようと考えている皆さんに一番伝えたいことは、「常に目標をもって行動してほしい」ということです。大学入学時に決めた、「静岡県英語科教員になる」という目標がなければ、教員の道を選んだ私はいなかったと思います。目標に向かって努力していても、つらい時期は必ずあると思います。そのとき、自分で乗り越え方を知っている人は強いと思います。友達の意見を聞いて実践することもよいと思います。自分なりの解決法をぜひ見つけてください。

4月から教員として生徒の前に立つということに緊張と不安もありますが、これから出会うたくさんの生徒との学校生活が楽しみです。私の長所であるポジティブ思考を活かして、教員としてだけではなく、人としても魅力のある人にな

りたいと思います。教員になるまであと 3 か月、今しかできないと思うことに全力で取り組み、4 月からは、生徒と共に学び続ける教員を目指します。

5. 国内外関係組織から英米語学科への受け入れ

クレイトン大生がやって来た！

— 古い協定が生んだ新たな交流 —

一言 哲也

2018年6月11日（月）から7月8日（日）まで、本学の提携校である米国クレイトン大学（ネブラスカ州オマハ市）の学生6名と引率教員2名が、4週間の「日本文化・日本語研修」を行うため、本学の草薙キャンパスにやって来た。

同大学とは、静岡－オマハ両市が姉妹都市であることも契機となり、1988年に協定校となった。その後の約10年間は、外国語学部が長期留学や語学研修で同校に滞在した実績があるものの、2000年以降は交流が途絶え、今回のような本学を滞在先とした「インバウンドな研修」という形の交流は、クレイトン大学との間では初めてのこととなった。

静岡市国際交流協会からの協力も受けながら、主に両学科の学生が Host brothers/sisters となり、さらに「学習補助学生」(Study buddies) が午後の時間帯に配置され、クレイトン大生の日本語学習やキャンパスライフをサポートした。午前の授業に続き、午後や週末には、学内外で以下のような多様な活動が企画された。30年前の古い協定が、新しい草薙キャンパスにおいて新たな友情を生み出し、将来への新たな交流の可能性を広げてくれた。

【主な活動】

●静岡市長への表敬訪問 ●静岡市立高校への訪問 ●富士山文化遺産センター・富士宮浅間神社・久能山東照宮へのバス遠足 ●理事長・学長への表敬訪問 ●小糸製作所や駿府匠宿の見学 ●草薙キャンパス「健笑庵」での茶道部による茶会 など

「クレ大」生がやって来る前は、初の試みでもあり、ホストファミリー手配、研修中の企画内容、外国語学部生との交流、受け入れ側教員や職員との連携など、

英米語学科 1 年生「教養セミナー」の授業で（クレイトン大教員による講演）



（クレイトン大について話すマクラナハン先生）（日米の大学や学生の違いについて話す海野先生）

いろいろな不安があった。しかし、マグラクレン先生や清先生が手配してくれた、当番学生がクレ大生を個別にサポートする「Study Buddy 制」が上手く機能し、クレ大生にも好評であった。これにより、ホストファミリーの学生だけでなく、日常のキャンパスにおいて他の多くの学生も本プログラムに関わることができ、キャンパス内に日常的に外国人学生がいるという「グローバルな国際化」が、短期間かつ小規模ではあったが実現できた。そして、FLSSC が host brothers/sisters や study buddies とクレ大生たちにとって、授業後や休み時間の meeting place の機能を上手く果たし、自然な交流の場になっていた点にも注目したい。

また、ホストファミリーを引き受けてくれた外国語学部生（英米 7 名・GC2 名）も、良い意味で「何も特別なことはしない」という普段着のもてなしを実践し、彼らのお蔭で、各家庭 2 週間ずつの滞在が大過なく進んだ。

Ⅱ. 5. 国内外関係組織から英米語学科への受け入れ

英米語学科1年生「Listening I」の授業で

(両大学の学生たちがそれぞれのテーマでプレゼンを実施して交流)



(彼らの大学生生活についてプレゼンをするクレ大生たち)



(英米語学科1年生の英語によるプレゼンを聴くクレ大生とマクラナハン先生)

7月6日(金)に学生食堂「グラン・テーブル」で行われた「さよならパーティー」には、ホストファミリーのご家族や市国際交流協会の方々も出席し、外国語学部
の両学科で滞在中の交流に関わった学生たちが参加。FLSSCの濱田さんのピアノ生演奏のもと、「今日の日はさようなら」を全員で合唱して別れを惜しんだ。あっという間の4週間が過ぎ、クレ大生たちは8日(日)に静岡を後にした。2019年6月17日、再びクレ大生たちがやってくる。

6. 学内外での教職員や学生の取り組み

Student Essays : Communicative Writing III A

This was my first year teaching Communicative Writing IIIA. I was excited by the challenge, and worked hard to create a course that would give students rich experiences reading and writing in various English-language genres. Despite inevitable missteps and miscalculations on my part, in the end I was very pleased with what students were able to accomplish.

One of the genres that we focused on was language learning memoir. Because learning a foreign language involves ongoing shifts in one's identity and values, I wanted students to reflect upon their relationship with English. All students did a great job with this assignment, but the two memoir pieces included here stood out. In Airi Terada's language learning memoir, we see how a junior high school English teacher's encouraging words were able to spark the beginning of a language learning journey. In Miri Miyazaki's essay, we gain insight into her very difficult but ultimately transformative experiences gaining confidence in English while growing up in Hawai'i. I hope you enjoy reading these students' essays as much as I have.

Peter Hourdequin

ENGLISH CHANGED MY LIFE

By Airi Terada

When I enter junior high school and take my first English class, I cannot understand English at all. Although I have taken just one English class, I feel I hate English. During class one day I say "I cannot understand English!" with a loud voice. The teacher hears what I say, comes to me, and asks which parts I do not understand. Then, she changes her way of explaining, so that I can understand. At that moment, I thought she was a very intelligent teacher, and I wanted to be an English teacher like her.

I realized that I needed skills to be a teacher, so I kept studying English from that time onwards. When I became a third year student in junior high school, I had to decide which high school to go to, so I decided to apply to a

II. 6. 学内外での教職員や学生の取り組み

school that had a Global Studies course. When I graduated from junior high school, I went to Tokoha High School to study English at a deeper level.

During high school, I noticed that I needed to go to a foreign country to increase my exposure to English. Hence, I went to the United Kingdom for two weeks. In the U.K, I noticed that I had to learn a lot of vocabulary and idioms to improve my listening and speaking skills, so I was thinking about going to a foreign country again after I entered university.

After I graduated from the high school, I entered Tokoha University. I found out that the university has so many fabulous teachers and useful classes, so I took as many classes as possible. After I became a sophomore, I decided to go to Canada for two months to immerse myself in English. I went to Canada, and I got exposed to a lot of English. Finally, I realized that I was speaking English more fluently and was not afraid of making any mistakes, which is very different in comparison to the first day I arrived in Canada. In addition, I realized that teachers in the class, who taught me English had used the words and idioms which I learned in my oral communication class back at Tokoha. Thanks to taking that class before I went to Canada, I understood most of the content in class.

Now, thanks to these past experiences, the relationship between English and me is wonderful. At first, I thought learning English was very hard. However, while I was studying English, it became important to me. I affirmed my dream to become an English teacher, since it changed my life in a positive way.

Encountering English marked a turning point for me. If I had not learned English, my life would not be happy and filled with satisfaction. Different people make sense of foreign languages in different ways. Some people think that learning a foreign language can be interesting. However, there are also people who think learning a foreign language can be boring. For me, English is essential, and will always stay with me forever.

A SENSE OF BELONGING

By Miri Miyazaki

My mom pushes her handkerchief into my hands. One piece of cloth is not enough to wipe away the tears that are running down my face like a waterfall. The handkerchief is instantly soaked.

It's my first day of school in Hawaii. I'm not even willing to put my backpack down as my "friendly" classmates settle me into my new seat. Having no clue what to say, I just sit and zone out, staring into space. Of course, my teacher is not happy with my indifferent attitude in class. But sorry, I have no choice.

I am about to turn seven and have almost no knowledge of English. I feel extremely isolated. Not physically isolated, but psychologically alone. Without the tools of communication, I have lost my sense of belonging. Everything seems too foreign here in Honolulu, Hawaii: the rough accents of English, the tropical atmosphere, the big, bulky islanders, and obviously the language.

After only a week, I am already fed up with everything about the process of learning English. While my fellow classmates are busy with their books at the library, my cranky second grade teacher sits in front of me for a special lesson. "This is a L-E-A-F." Every day, she makes me cut and paste very simple drawings onto flash cards. I have to repeat every word until she is satisfied. When I grow tired of the cutting, pasting, and imitating, I silently stare at the other students speaking fluently with each other. Of course they can speak to each other smoothly; they already know how to speak English. I dream of manipulating the same language effortlessly like they do.

Nearly five years fly by without much success. I am wary from all the humiliations I've suffered attempting to convey my emotions in English. Finally, at the point of entering middle school, I spontaneously realize that I

must escape from this negativity. I cannot just keep on wishing. I have to catch up to the other local students as soon as I can. I can no longer live in a state of denial. Even my Asian friends in middle school overcame the struggle of acquiring English as their second or third language. There is no excuse for me not to make the effort of accepting the reality that I live in a foreign country. An English-speaking country.

Starting afresh, I transform myself into a diligent student. I never miss a class — even when I come down with a high fever. I always stay awake and focus during class as well. I have never done any of these things before. On top of that, I also immerse myself in reading many English books whenever I have the chance. Every time I come across unknown words, I stick Post-it notes onto the pages to figure out what they mean later on. Eventually, I even managed to finish reading the whole Harry Potter series — a feat that once seemed impossible for me.

Getting better grades gives me a lot of confidence. It allows me to keep my motivation and to survive in Hawaii. It also assures me that my hard work is paying off. However, there is something more meaningful about learning English. It is not the straight A's or the praise from my teachers: I realize English has given me a sense of belonging.

It has been over 14 years since my first encounter with English. All the humiliation I felt when I first arrived in Hawaii completely isolated me from others and from the community. I did not have the tools that I needed to communicate with friends and the place where I lived. With better control over English, I became more comfortable socializing. In my later years in Hawaii, I finally came to appreciate the unpleasant, yet rare opportunity of having been immersed in English at a young age. I realized that English is a universal language that creates ties between people with different cultural backgrounds. For me, it really did stretch my perspective about cultural differences and it also gave me a piece of my identity. I cannot be more grateful than this.

学外イベント

「話っ、輪っ、和っ！」を企画して

17121004 安藤 実希



「話っ、輪っ、和っ！」とは、静岡県内の留学生と大学生のトーク型交流イベントである。2日間かけて泊りがけで行われる。昨年の3月に知人から実行委員をやってみないかと持ち掛けられ、何か新しいことを始めてみたい、成し遂げたい

と思い、引き受けることにした。毎年12月に開催されるこのイベントは、静岡県内から100人近くの大学生、留学生が参加する。たった2日間のために8か月も準備を重ねていくことに驚いたが、あっという間に本番を迎えた。

私が担当したのはトークリーダーと移動中のバス内でのレクリエーションだ。1日目が始まってすぐのトークタイムでトークの進行を務めた。

今年の参加者は例年より留学生の割合が高く、申し込み時に申告してもらう日本語力は5段階中3や4の人が多く、日本人の参加者はアウェーの状態であった。日本語がうまく伝えられるのか、話し合えるのか、そもそも進行できるのかという不安な気持ちを抱えたまま本番を迎えた。

しかし、そのような心配をよそに、参加者たちは目をキラキラさせて集まってきた。想定していたよりはるかに日本語が上手だし、性格も明るい人ばかりであった。日本人か留学生か、そのようなことを気にしていたのは最初だけで、バスが発車した後は、ただひたすらおしゃべりを楽しんだ。留学生からツッコミが入ったり、留学生のボケにツッコミを入れたりすることもあった。お互いの国のおすすめ旅行スポットや日本の歌手についてなど、終始盛り上がった。



Ⅱ. 6. 学内外での教職員や学生の取り組み

トークでは多くの意見が飛び交い、日本人か外国人か、どこの国で生まれ育ったのかは関係なく、ただ「人」として語り合った。留学生からは、日本人と話したいのになかなか話せないという悩みも相談された。静岡県内には留学生と語り合う時間を過ごせる機会が少ないように感じた。今回、実行委員を務めてみて、留学生と交流していくことは自分の視野を広げることにつながると感じた。より気軽に留学生と交流できるような機会を増やしていければと思う。

Ⅲ グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会

海外事情談話会

増井 実子

グローバルコミュニケーション学科では有志の教員を中心にして、2017年度より毎月の学科会議の終了後に海外事情談話会を開催している。そもそもは、学内共同研究「外国語学部グローバルコミュニケーション学科の教学内容の向上のための比較地域研究」（平成 27-29 年度）の一環として始まった。目的は、学科教員が近年の出張内容を報告し、自身の関心を参加者と共有することにある。2017 年度は 5 回開催できたのに対し、2018 年度は 3 回の開催にとどまった。2019 年度はより多く開催できるように尽力したい。

第一回（5/23 水）

戸田裕司「薊城（きょうじょう）探訪－2018 年 3 月の漳州市 / 中国福建研修旅行報告を兼ねて－」

第二回（12/13 木）

若松大祐「台湾高座会留日 75 周年歓迎大会の参加記」

第三回（1/23 水）

福島みのり「①韓国のフェミニズムは今：『82 年生まれ、キム・ジョン』」
「②グローバル化の中の在日コリアン－多様なアイデンティティの実践『ジニのパズル』第 59 回群像新人文学賞受賞」

2. 多言語レシテーション大会

第 5 回多言語レシテーション大会の報告

若松 大祐

「多言語レシテーション(暗唱・朗読)大会」が、2018 年 12 月 8 日(土)に本学静岡草薙キャンパスの C201 教室で開催されました。目的は、古今東西の詩歌を詠みあげて、その詩歌を生み出したその時その場所を、今ここ静岡に再現することにあります。大会で登場した詩歌はいずれも、それぞれの言語が持つ時間の長ささと空間の広がりとを私たちに伝えてきたことでしょう。

この大会は、常葉大学外国語学部創設 30 周年を記念して 2014 年に始まり、今年で第 5 回を迎えました。学部創設以来の伝統と定評ある英語やスペイン語の教育だけでなく、中国語、韓国語、ブラジル・ポルトガル語の教育をも加えた外国語学部でのグローバルな学びを、参加者が互いに励み共に楽しむことのできるイベントとして企画し、毎年 12 月に実施されています。

第 5 回大会には中国語、ブラジル・ポルトガル語、韓国語、スペイン語の四言語をあわせ、のべ 63 名(Level I が 42 名、Level II が 21 名)の出場があり、うち 12 名はグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムである二言語学習を反映して、二言語のレシテーションに挑戦しています。また、参加者の内訳を見ますと、外国語学部グローバルコミュニケーションの学生のみならず、英米語学科の学生(2 名)や、さらには静岡県内の高校生(10 名)の参加もありました。常葉大学に集い外国語を学ぶ若者たちの熱演に対し、審査員が暗唱力、発音、表現力を審査し、会場からは大きな拍手が送られました。今回の特徴は、1 年生の活躍が目立ったところでしょう。

< 次第 >

1. 開会式 13:00 ~ 13:15

あいさつ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科長 増井実子
審査員の紹介

中国語：盧 思(画家・京劇俳優)、戸田裕司(常葉大学教員)

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

ブラジル・ポルトガル語：アリッセ・堀内（常葉大学非常勤講師）、
江口佳子（常葉大学教員）

韓国語：申 昌鉉（常葉大学非常勤講師）、福島みのり（常葉大学教員）

スペイン語：イグナシオ・キロス（常葉大学非常勤講師）、
増井実子（常葉大学教員）

出場者の紹介

2. レシテーション 13:15 ～ 15:30

中国語（レベルⅠ、Ⅱ）、ブラジル・ポルトガル語（レベルⅠ、Ⅱ） 13:15 ～ 14:15

韓国語（レベルⅠ、Ⅱ）、スペイン語（レベルⅠ、Ⅱ） 14:25 ～ 15:25

3. 交流会 15:35 ～ 16:35

常葉大学ダンス部有志、常葉大学セビジャーナス部有志。

実行委員によるクイズ大会

4. 表彰式および審査員講評 16:45 ～ 17:05

5. 閉会式 17:05 ～ 17:15

あいさつ 外国語学部長 一言 哲也

あいさつ 実行委員長 加藤 未奈（グローバルコミュニケーション学科3年）

<入賞者一覧>

中国語レベルⅠ 課題：王翰《涼州詞二首 其一》

1 位 西川 莞人 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

2 位 松浦 涼子 外国語学部グローバルコミュニケーション学科2年

3 位 岡田 彩香 外国語学部グローバルコミュニケーション学科2年

中国語レベルⅡ 課題：曹植《七步詩》

1 位 仲宗根エイミ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年

2 位 木原 理彩 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

3 位 中野 元文 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年

ブラジル・ポルトガル語レベルⅠ 課題：Castro Alves “O Gondoleiro do Amor”

- 1 位 渡邊 光砂 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 2 位 望月里緒菜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 3 位 松下 香凜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

ブラジル・ポルトガル語レベルⅡ 課題：Lygia Fagundes Telles “Natal na Barca”

- 1 位 仲宗根エイミ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年
- 2 位 川村味奈美 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 3 位 大塚 彩乃 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

韓国語レベルⅠ 課題：윤동주 「서시」

- 1 位 石貝 真実 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 2 位 飯田 千尋 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 3 位 紅林 花織 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年

韓国語レベルⅡ 課題：도종환 「담쟁이」

- 1 位 杉山慎之佑 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 2 位 伊川亜祐菜 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 3 位 山田のぞみ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

スペイン語レベルⅠ 課題：Ana Belén López “DIBUJA UNA LETRA”

- 1 位 亀井 直樹 外国語学部英米語学科 1 年
- 2 位 鈴木 雄大 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年
- 3 位 松浦 涼子 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

スペイン語レベルⅡ 課題：Federico García Lorca “LA GUITARRA”

- 1 位 杉山 滉一 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1 年
- 2 位 田島 利恵 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3 年
- 3 位 小野寺悠夏 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2 年

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

二言語入賞者：二言語を学ぶというグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムの特徴を踏まえ、二言語の暗唱にチャレンジした学生の中から、合計得点の高い順に入賞者を決定しました。

- 1 位 仲宗根エイミ 中国語 II+ ブラジル・ポルトガル語 II
- 2 位 松浦 涼子 中国語 I + スペイン語 I
- 3 位 望月里緒菜 ブラジル・ポルトガル語 I+ スペイン語 I

審査員奨励賞：高校生を対象とした賞です。

- 1 言語 浦田莉里花 静岡県立静岡城北高校 2 年
- 1 言語 宮崎 凜 静岡県立静岡城北高校 2 年
- 1 言語 小川 愛理 静岡県立吉原高校 1 年

< 学生実行委員 >

[実行委員長] 加藤未奈

[実行委員] 井芹タイナ、栗原良明、中沢真央、林田りゅうじ、松本彩香、
望月美里

[ボランティア]

(3 年) 落合悠成、斎藤明美、佐藤綾菜

(2 年) 横山結花

(1 年) 伊川亜裕菜、納本京香、神谷唯衣、小林瑞歩、シアヤビク シェイラサチ、
橋本果奈、久門千夏、宮原優芽、山崎慶人

(以上、本学外国語学部グローバルコミュニケーション学科生)

< 教職員 >

秋山浩一、岩城明、江口佳子（会計）、影山千恵美、谷誠司（審査）、戸田裕司、福島みのり（学生補助）、福富敦子、増井実子（総務）、三村友美、若松大祐（編集）

< 公式サイト >

<https://sites.google.com/site/tokoharecitation>

パンフレット巻頭言より再録

詩の力ー多言語レシテーション大会によせて

常葉大学長 江藤 秀一

常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科の教育目標は、複数の言語や文化を学び、グローバル社会で活躍する国際派社会人を育てる、というものです。この多言語レシテーション大会も学科の多言語を学ぶという教育目標に沿うもので、この大会の最大の特徴は、暗唱する課題が古今東西の詩歌であるという点であります。どの言語にもその言語特有のリズムがあります。日本語では五、七、五のリズムがおなじみです。次の詩はイギリスのクリスティーナ・ロセッティという詩人の *What Are Heavy?* という作品です。

What are heavy? Sea-sand and sorrow:

What are brief? To-day and tomorrow:

What are frail? Spring blossoms and youth:

What are deep? The ocean and truth.

声に出して読んでみますと、強弱のリズムを感じることができると思います。また、sorrow と tomorrow、youth と truth のように韻を踏んでおります。詩歌にはこのような音楽性がありますので、母語とは違ったリズムを持つ外国語の学習には最適な教材と言えます。この詩は語彙の面でも構文の面でも決して難しくはないのですが、散文では言い表すことのできない深い意味を持つ詩となっております。それぞれの「重いもの」「短いもの」「もろいもの」「深いもの」への対になった回答は、読む者を「なるほど」とうならせます。そして、心に刻まれた詩は、ときの経過とともに、さらに深い感動を呼び起こすことになります。このレシテーション大会の意義もそこにあります。

外国語学部 3 つのコンテスト

外国語学部長 一言 哲也

外国語学部には、秋の恒例行事として 3 つの「コンテスト」があります。

まず、高校生を対象とした「高校生英語対話弁論大会」。これは今年で第 35 回を数える伝統的な大会です。高校生がペアで参加して英語の対話を発表するコンテストで、毎年 15 ～ 20 組が日々の練習成果を披露してくれます。今年も去る 11 月 10 日（土）に無事終了することが出来ました。高校生の皆さん、今回も素晴らしい熱演でした。

この大会の特徴は、通常の英語スピーチコンテストとは趣が異なり、2 人が英語で対話をするものです。単に個人の考えを主張するのではなく、日常生活の中から高校生らしい感性で捉えたテーマに基づき、2 人で思いを表現するのです。「対話で主張する」という観点からも、他のスピーチコンテストとは一線を画すユニークな大会です。

次に、英米語学科で行う「キャサリン ササキ メモリアル スピーチ コンテスト」。今年で第 34 回になるという、これも歴史の長いコンテストです。名称には、かつて外国語学部で教鞭をとられ、ご病気で他界されたキャサリン・ササキ先生を偲んで、彼女のお名前が冠に付けられています。先日 12 月 4 日（火）に行われました。

英米語学科を中心に、毎年 20 名ほどの学生が、実体験から感じた自分の思い・夢・目標・決意などを英語でスピーチします。この大会の形式は、いわゆる典型的なスピーチですが、参加者の気持ちが強く伝わる熱弁が毎年聴かれ、感動をよびます。

そして、この大会、つまり「多言語レシテーション大会」。タイトル通り「レシテーション（暗唱）」が主となるコンテストで、朗読する内容は詩歌等の文学作品からの出典が中心になります。詩を「読む」というよりも、まさに「詠う」と言った趣のコンテストです。早いもので、今回で第 5 回。G C 学科の伝統になりつつある行事です。G C 学科では、高校時代に学習しない 4 言語を「初修」するため、まずは日頃の学習成果をレシテーションで披露しようという趣旨で、

1984 年以来開催されていた「スペイン語弁論大会」を発展的に変えて始まったものです。

毎年多くの学生が参加しますが、中には複数の言語で挑戦する人も見られます。さらに第 3 回からは、高校生の皆さんにも参加していただくようになり、ますます充実した G C 学科の看板行事に育ってきました。4 言語の独特な響きが、英語とは異なる不思議な「音楽」として、聴衆を魅了します。

言葉を修め、その背景にある人・文化・社会・歴史などを専攻し、世界に目を向ける外国語学部の学生にとっては、そして、さらに外国語に興味のある高校生にとっても、これらの行事は、大いなる挑戦と発表の機会です。参加する皆さんの努力と勇気にエールを送ります。結果よりも、参加までの過程と大会当日の緊張感にこそ、大きな意味と将来に繋がる貴重な収穫があるはずです。今年、客席で観ている皆さん、来年は演壇に立ってみませんか？外国語で自分の思いを表現することは大変ですが、素晴らしい世界がその向こうに広がっています。外国語学部の秋の 3 イベントが、その出発点になります。皆さんが学んでいる外国語が持つ「魅力的な力」を発表してみませんか？

学生実行委員長より

踏み出す一步

16122015 加藤 未奈

私は昨年 12 月に開催された、第五回レシテーション大会の実行委員長を務めました。今回は草薙キャンパスで行う、初めての大会です。そのため昨年度までの大会と変更するところがたくさんありました。たとえば出場者の入退場や表彰の仕方、主な出入口の決定。交流タイムでは、ダンス部やセビジャーナス部に協力してもらい、来場した方々に楽しんでいただきました。このように様々なことを変更しています。また、実行委員長としては、ほかの実行委員や先生方との話し合いを重ね、チームとしての団結力を高めていきました。たくさん出た意見をまとめることで、一つの形となり、大会は成功を収めることができました。

これは私のほかの経験にもつながっています。私は過去二年間出場者として大

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

会に参加しました。その結果はあまり良いものではありませんでした。しかし、私は大会に出場することで、ある一つのことを学びました。それは「自分からチャンスを掴む」ということです。大学生は一般的に「学生」と呼ばれます。「学生」は自らの意志で勉強し、学びの発展へとつなげていると、私は考えます。私たち学生は、積極的に何かに向かって行動することで、自己の成長につながり、新たな世界を見ることができるのです。それがチャンスを掴むということなのです。目の前にある、チャンスに目を背けるのではなく、前向きに物事をとらえ、挑戦していくことが大切だと思いました。大学では自分から行動しないと何も始まりません。何か小さなことでも始めることが重要です。それが勉強でも趣味でも何でもよいと思います。

私の場合は、2019年1月に静岡で開催された「東京ガールズコレクション」の、静岡県ステージプロデュースプロジェクトに参加しました。静岡県内の大学生・専門学生が15名集められたものでした。ステージでは、静岡県内の魅力を若者に伝えるものです。もともと服飾関係に興味があった私は、この機会にぜひ参加したいと思い、自分から応募しました。その結果、県内の魅力を再発見し、より服飾に関わる職業に就きたいと考えました。そして、服飾関係のインターンシップに参加し、夢に向けて頑張っています。

私はこれから本格的な就職活動が始まります。これからどんなことが起こるかわかりません。不安もたくさんあります。しかし、自分の強い意志をしっかりと持ち、何事にも物怖じせず、前向いて歩んでいきたいと思います。皆さんも目の前にあるチャンスを掴み、積極的に挑戦してみてください。きっと何かが変わるはずです。そして踏み出したその一步はあなたにとってとても意味のあるものです。一つ一つの経験を大切にしましょう。

入賞者より
二言語入賞 1 位

自信をつける

16122043 仲宗根 エイミ

人は舞台に立つと、必ず緊張する。当たり前だ。私は毎年、レシテーション大会に出場しているものの、やはり本番前は緊張する。緊張するのは仕方がないこととはいえ、どうすればその緊張を克服できるのか。緊張の克服を目指し、私はレシテーション大会の一か月前から暗誦の練習を始めた。

まず、ひたすら詩を覚えることに専念した。電車の中、窓に反射している自分の姿を見ながら、来る日も来る日も詩を完璧にするまで練習し続けた。もしかしたら目の前に座っていた人は、私のことを変な人だと思ったことだろう。

次に、詩を「表現すること」に対して集中的に練習した。過去のレシテーション大会での自分の映像が残っていたため、それを何度も再生し、長所や短所を見つけ出した。徹底的に分析し、どうすれば短い時間でより多くの人々に私の表現が伝わり、彼らの心に響くのかを模索したのである。いろいろな暗誦パターンを練習した。こうした試行錯誤のおかげで、暗誦の形がある程度決まり、自分の中で余裕ができた。そして、大きな自信へと繋がったと言える。

最後に、本番で緊張しないようにするため、場数を踏んだ。いろいろな人の前で詩を発表し、どうすれば自分の表現が良くなるのか、聞き手に伝わるのかについて、先生方、周囲の友人や知人に具体的なアドバイスを求めた。また、自分自身も「一人の先輩」として、昼休みや空き時間などに後輩達にたくさん助言し、互いの暗誦を何回も見せ合ったりもした。

練習を重ね自信をつけた私は、本番で堂々と発表することができた。レシテーション大会が始まる前から、「今年は絶対に私が優勝するのだ」と自分に言い聞かせ、家族や友人にも伝えていた。平成最後のレシテーション大会、自分の中では最も燃え、思い出に残る大会となった。何事に対しても弱気にならず、「自信をつけること」で、人は強くなれる。これをレシテーション大会への参加から学んだ。来年も優勝し、新年号でのチャンピオンになりたい。

中国語レベルⅠ 1位

挑戦心

18122081 西川 莞人

私は、大学入学当初から何事にも挑戦しようと考えていました。理由は、挑戦することによって、自分の視野を広げようと思ったからです。そう思い挑戦した多言語レシテーション大会で、中国語レベルⅠ部門で優勝することができました。ここでは、私が多言語レシテーション大会に挑戦して感じたことを、3つに分けてお伝えしましょう。

まず、多言語レシテーション大会に出場したことで、言語への興味や意欲が以前より格段に上がったと感じています。レシテーション大会本番まで、関係言語の先生や先輩に発音や表現の仕方などのアドバイスを求め、練習していきました。この練習を通じて関わった人たちとの時間は、大会当日の詩の暗唱よりも大事なものになりました。共に学ぶ人たちとの関わりが重要なのです。尊敬できる先輩や先生という、お互いに高め合える仲間をみつけ、言語学習にますます意欲的に取り組めます。

次に、時間を有意義に使えたと感じました。挑戦することによって明確な目標ができ、自分で計画的に時間を設定し、進めることができます。24時間を自分のために有効に使うことができたのです。

最後に、新たな挑戦に取り組みたく感じました。私の場合、レシテーション大会に先立ち、自分の履修している外国語の検定を受験していました。検定への挑戦が、多言語レシテーション大会への出場を後押ししました。また、レシテーション大会が終われば、以前までほとんど考えていなかった留学に行きたくてたまらなくなりました。

レシテーション大会に挑戦するということは、私を以前は見えていなかった世界に連れて行ってくれたのです。是非、みなさんも「挑戦する心」を持ち、大学生活を送ってみてはどうでしょう。

ブラジル語レベルⅠ 1 位

臆病者の挑戦

18122118 渡邊 光砂

大学に入って「何か」に挑戦したかった。臆病でネガティブで自身を持ってない自分。そんな自分を変える「何か」を探していた。多言語レシテーション大会。12月に開催される GC 学科のイベントである。やってみたい、でもできない。私は怖かった。自分なんかがこの大会に出ていいのだろうか。この臆病な心がいつも私を止める。私は中国語とポルトガル語を専攻しており、各授業で何度かレシテーション大会への参加を呼びかけられた。その度に私の心は葛藤する。出てみたい自分と、出たくない自分。どちらの気持ちも手放せないまま、出場の期限は迫ってきた。

この臆病者に勇気を与えてくれた人がいる。ポルトガル語の江口先生だ。「悩んでるなら出よう！出てくれたら先生も嬉しい。」若干強引ではあったが、その言葉が私を動かした。練習は思ったよりも順調に進み、最大限の努力もした。先生や先輩にも上達したと褒めてもらえた。しかし、友達のスピーチの出来を見ると、自信は消え失せ、不安は膨らむ一方である。私のスピーチはダメかもしれない、やはり私には無理なのだろうか。私にまた臆病な心が芽生えてしまった。

そのまま迎えた当日。心臓の音が私を支配する。友達のスピーチを聴けば聴くほど、鼓動は痛いくらい早くなる。どうして友達はあんなにもかっこいいのだろう。自分が益々情けなくなる。そんな中、自分の名前が呼ばれた。「はい！」思っていたよりも大きな声が出た。自分自身に喝を入れるような返事だった。壇上に立った時、私は驚いた、心臓の高鳴りに。今すぐ壇上から降りたい。上手くできるわけない。いつもの臆病な心ならそうなるだろう。でも今回は違った。私が主役なんだ！皆が私を見てくれている！かっこいい自分を見せたい！心地よい心臓の高鳴りを感じながら、私は口を動かす。言葉がスラスラ出てくる。すごい、楽しい、気持ちいい。今まで味わったことのない気持ちだった。

結果、私はポルトガル語レベルⅠで一位に入賞した。「おめでとう！」先生や友達から言われた一言。その一言でじわじわとそれが現実であると理解する。あ

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

の臆病者の私が、一位を取れたのだ。スピーチ直前までの私を変える「何か」とは、「レシテーション大会」だったのだ。私はほんの少しだけ、自信を持つ楽しさを知ることができた。ほんの少しだけ、臆病者から挑戦者に近づけた。きっと来年の私も壇上に上がるだろう。臆病な自分を変えるために。

韓国語レベルⅡ 1位

「仲間」の大切さ

18122054 杉山 慎之佑

このたび、多言語レシテーション大会の韓国語レベル2の部に出場した。レベル2に挑戦しようとした理由は、2018年9月に韓国語学研修に参加し、私の中で韓国語学習のモチベーションが上がったためである。レベル2はレベル1の何十倍もの難しさを感じた。まず一行を覚えることができれば、次の行に進むというふうに練習を重ね、暗唱を行なった。大会準備期間から本番までの中で学んだことが、「仲間」をめぐる3つあった。

1つ目は、韓国語学研修に共に参加した友人や先輩や先生に聞いてもらってアドバイスを受け、自分自身の暗誦に修正を重ねた。ここから学んだのは、思い切って仲間や先生に聞いてもらうことの大切さであった。こうしてたった60秒の詩であっても何週間も時間をかけて練習することで詩の意味を理解して詠み上げることが出来たのである。

2つ目は、本番での出来事である。やはり周り人々のレベルが高く、自分の発音の仕方やジェスチャーの仕方などは彼らに及びないから、気持ちが落ち込みそうになった。だが、相手は相手である。自分は自分で頑張ってきたため、その成果を堂々と披露しようと決意し、舞台上上がった。結果は、ありがたいことに、1位だった。閉会した後、友達や先生や先輩から個別に感想や評価をうかがい、自分では気づけなかったことをたくさん理解することが出来た。出場者だからこそ実感できる仲間意識を持つに至った。

3つ目は、他の言語で出場する親友が朗誦する姿を見て、自分も頑張ることが出来た。出場した親友は、閉会後に「一緒に高め合える仲間を持てて良かった」

と語った。この言葉を聞いた時、嬉しさと共に、仲間とともに努力し互いに高め合っていくことの大切さを実感したのである。

この3つが大会中に学び、感じたことだ。この結果に満足せずさらなる高みを目指して頑張っていきたい。

スペイン語レベルⅡ 1位

勝負は一瞬、努力は無限

18122053 杉山 渥一

「勝負は一瞬、努力は無限。」この言葉はもともと英語のことわざで、原語では“The effort is infinity. The match is a moment.”という。今大会でこのことわざから、日々の積み重ねと一瞬一瞬を大事にすることの大切さを、改めて実感した。自分は今回初めて多言語レシテーション大会に出場し、スペイン語レベルⅡの部で1位になることができた。そこで、一瞬の勝負をものにするためには、散々の努力が必要であると学んだ。これから、自分がこのことわざを実感したきっかけを3つ述べていきたい。

まず、この大会に応募したときの自分は実力がなかった。スペイン語を勉強して1ヶ月ほどしか経っておらず、スペイン語の単語力、文法力、発音力が乏しかったのだ。しかし、やるからにはレベル2で出場し、1位を獲てやろうと決めた。次に、自分は1位を獲るための努力を惜しまなかった。レベルⅡの暗誦は1分であるものの、この1分という短い時間のために、2か月間も練習したのである。授業の空きコマや昼休みを利用して先生に指導していただき、通学中やバイト中にも詩を何度もつぶやいた。発音の上達のコツはモノマネだと思う。自分は先生の発音を何度もまねして体に染み込ませている。そのおかげで詩の中の単語を正しく発音できるようになった。

最後に、大会当日、練習の成果を発揮することができた。自分は集中していたため、発表していた一分のことを覚えていない。一分のために練習してきたのに、その一分を覚えていないのは残念であったけれども、何度も読み続けた詩は一生忘れられないと思う。

要するに、このようなきっかけから、「勝負は一瞬、努力は無限」であると改めて実感し、一瞬の勝負をものにするためには散々の努力が必要であると学んだのだ。今大会で、スペイン語の良さを詩で知ることができ嬉しく思う。一位になった達成感よりも、もっと語学の勉強をしたいという気持ちのほうが強くなった。これからも様々なことに挑戦し、一瞬の勝負をものにできる努力をしていきたい。

中国語レベルⅡ 3位

中国語に私の1年を捧げました

16122044 中野 元文

私が常葉大学に入学して3年目になるが、2016年に入学してからいまで、私は何をしたのだろうと疑問と、危機感を持っていた。そこで、私は大学3年生では、何か目的を持って1年を過ごそうと思った。しかし、何に重点を置き、何を目標にすべきかと考えた時、大学入学時に持っていた目標を思い出すことにした。それは、この常葉大学で中国語の勉強をすることだ。ここまで私は中国語学習において、何か自信を持てるものを達成したのだろうか。結論は何もなかった。そこで、私は3年生になる2018年を中国語の学習に捧げることにした。そうして、目標を決めた。常葉大学には、多言語レシテーション大会という素晴らしい大会がある。この大会は12月に開催される。そこで、これを1年間の目標に定めた。しかし、1月から12月まで、あまりにも時間が長い。そこで、私は目標をさらに3つに分けた。すなわち、まずは中国語検定、次に台湾語学研修、そして12月に行われる最終的な目標の多言語レシテーション大会だ。ここでは、3つの目標をそれぞれみなさんに報告したい。

まずは、中国語検定で合格するために頑張った。中国語検定は1年で3回開催される。私は、まず6月に行われる検定に向けて勉強を始めた。結果として、12月に2回目の受験で合格した。学習に際して、気を付けたことが2つある。1つ目は単語学習だ。1回目の検定では、リスニングより筆記の点数が悪かった。家に帰って自分の回答を見直したところ、理解していない単語が多く、単語学習に力を入れた。2つ目は発音に気を付けた。1回目はリスニングの点数が良かった

ものの、中国語の発音はとても難しくはっきりと区別して理解できていない。そこで、問題集に付いていた CD を何度も聞き直した。以上の 2 点に力を入れて学習し、私は合格することができた。

次に、私が建てた目標として、台湾語学研修で現地の人と自然な会話ができるように頑張った。語学を勉強する際に最も効果があるのは、中国語を母語として話す人と実際に交流すること以外にない。ここでも私は 2 つのことに力を入れた。1 つ目は交流だ。現地の大学生との交流会に積極的に参加し、積極的に話しかけて中国語力を鍛えた。交流する機会がきっかけになり、私には今でも連絡を取り合う学生がたくさんできた。2 つ目は買い物だ。買い物をしながら学習する場だと思い、積極的に店員に話しかけた。普段日本ではイヤホンをつけて店員と会話などしなかったけれども、台湾では些細なことでも店員に話しかけた。私の中国語を理解できなかった現地の人が英語で聞き返して来ても、私は英語で聞き返されることを悔しく思い、中国語で言い直す。とにかくチャレンジすることが大切だと思った。とても充実した 3 週間になった。

最後に、最も重要な目標に挙げていた多言語レシテーション大会で優勝できるように頑張った。この大会は、常葉大学で学習できる 4 言語に取り組む学生が自主的に参加し、日頃の成果を発表する場である。私は 1 つの挑戦の場として認識していたので、ほぼ独学で挑戦した。ここでも、2 つのことに意識して取り組んだ。1 つ目は聞き込みだ。モデル音声をとにかく聞き込むことに力を入れた。2 つ目はパフォーマンスだ。先生に「もっと詩の意味を理解するべきだ」というアドバイスをいただき、自分自身を登場人物に置き換えて詩を読むことにした。さらに、友人からのアドバイスを受け、抑揚やジェスチャーをつけて臨場感を出す工夫もした。結局、私は誰かの力がなければ、入賞できなかっただろう。私は自分を最下位だったと評価している。緊張して重大なミスを犯してしまったからである。覚えていたはずの詩を忘れてしまったのだ。しかし、審査の結果、3 位に選ばれ、私は思った。すなわち、4 年生になる来年こそ、文句のない堂々たる 1 位を獲りたいと強く思ったのである。

ここまで、私は中国語の学習を 2018 年の目標に掲げ、中でも多言語レシテーション大会を 1 年の最終的な活動の場に位置付けてきた。前の 2 つの目標は達成することができたとはいえ、最も重視していた大会で失敗をしてしまった。その

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

ため、私の1年間の取り組みは失敗だったのかもしれない。しかし、この1年間は今までで最も中国語に向き合ってきた1年間であり、今までの人生で最も誇れる1年間だった。2019年は2018年よりもさらに誇れる年にしたい。

出場者より

自分との闘い

17122067 宮本 智華

レシテーション大会に出場して、今年で2回目となります。今回の私には、「中国語レベル1で入賞する」という目標がありました。この目標に達成するため、さまざまな方法で準備をしたものの、実現出来ませんでした。練習の成果を発揮できず、悔しい気持ちが残っています。それと同時に、レシテーション大会とは、結果がすべてではなく、「自分との闘い」であることに気づいたのです。確かに、目標は叶わなかったものの、失敗から大事なことを学んだ今年の大会は、私にとって特別なものとなったと言えます。

振り返りますと、このたび私は中国語のレベル1での入賞を目標に掲げ、昨年よりも早めに準備を始めました。昨年は、声調を意識した正しい発音が出来ていませんでした。そこで、今年は大会ホームページ上のモデル音声を何度も聴き、声調を頭に沁みこませます。それだけではなく、中国語の授業の小テストの発音に始まり、日常生活のいたるところまで、暗誦すべき詩歌を入れ込み、常に練習を心掛けます。

しかしながら、大会当日、いざ舞台上上がると緊張が襲い掛かり、心臓がバクバク震えました。早口になってしまい、一つ一つの音が正確に発せなくなってしまう。落ち着かせようと試みたものの、緊張に勝つことは出来ませんでした。私は、ネガティブ思考で物事をマイナスに考えてしまいます。その考え方が自分をダメにし、弱い心を生んでしまっていました。このたびの大会に参加した結果、自信こそが自分との闘いに勝つ大きな手段であると思うに至ります。

そして、自信を持つために、2つの目標を設定しました。1つは、中国語を正確に発音することです。まずは『キクタン』を使い、単語を声に出して覚えるよ

うにします。さらに、ドラマや音楽から、母語話者の発音を聞いて真似をするようにします。2つは、精神力を鍛えることです。私は、自信がないあまり、他人と比較してしまいます。相手に惑わされることが多いので、自分で考える力を身につける必要があります。読書は、思考力を身につけるために効果的な方法であるので、通学時間を利用して、本を読む機会を設けます。本を読むことで、視野が広がり、違う視点から物事を考えられるようになるでしょう。継続して行うことで、思考力だけではなく、語彙力や表現力も身に付き、自信につながるはずです。

要するに、今回の大会で、自身を持つことこそが「自分との闘い」に勝つための大きな手段であると学びました。来年はレシテーション大会での入賞を目指すだけではなく、学外のスピーチコンテストにも参加していきます。考えてみれば、普段の生活の中には多くのチャンスが転がっています。チャンスをつかみ、自分から一歩踏み出せば、強い自分になれるでしょう。

新たな挑戦

17121119 松本 奈々

私の挑戦、それを挑むにあたっての問題点、成績と感謝、今後の抱負について述べたいと思います。

初めに私がこの大学で挑戦したことを述べます。1つ目は自分を変えたいと思い挑戦した、去年の「キャサリン・ササキ メモリアルスピーチコンテスト 2017」です。2つ目の挑戦として多言語レシテーション大会にスペイン語で出場することにしました。スペイン語の授業についていくのに必死だった私は不安でしたが、周囲の後押しもあり精一杯頑張ってみようと思いました。

しかし、問題点がありました。いざ練習を始めてみると習ったことのない単語ばかりで、どう発音するのかわかりません。特に、スペイン語に重要な巻き舌ができませんでした。そこで、まず単語の意味を理解して、情景を浮かべながら練習に励みつつ、巻き舌の練習を開始しました。スペイン語は普段から耳にしない言語なので、この言語を初めて聞く人に理解してもらうにはどのように表現すべ

Ⅲ. 2. 多言語レシテーション大会

きか悩みました。本番数日前、スペイン語のクラスで発表させてもらえることになりました。いざやってみると、緊張で顔はこわばり声も固くなってしまいました。不安になりながらも、周りの人々に勇気づけられ、当日を迎えました。会場には見慣れない顔ばかりであふれていました。ステージ上には大きく「多言語レシテーション」の文字があり、ついに本番が来たのだなと実感しました。発表前に友達に何度も聞いてもらいましたが、それでもやはり不安は消えませんでした。そしてスペイン語の発表が始まり、私の鼓動は一気にスピードアップし、練習でやった以上に感情豊かで、巻き舌に近い発音ができたと強く確信しました。

けれども、思ったような成績は得られませんでした。本当に悔しかったです。練習にずっと付き合ってくださった三村先生が「よかったよ。練習の成果が出てたね」と声をかけてくださり、その言葉と先生の笑顔に心が救われました。他にも、このレシテーションで出会ったすべての方々、会場で私の発表を保護者のように聞いてくれた友達に、本当に感謝しています。思ったような結果が得られなくても、挑戦することに意味があると感じた大会でした。

今後の目標としてはこれからも大学生の今しかできない新たな挑戦をしていきたいです。もちろん、卒業してからも新たな挑戦を続けていきたいと思います。

3. 社会人基礎力養成

「協働研究セミナー」の改善に関する一考察

谷口 茂謙

2012 年度より始まった現在のグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムで、特徴の一部を担う科目群がある。経済産業省が提唱する社会人基礎力を身に付けさせることを目指す協働研究セミナーである。1 年次および 2 年次の必修科目としてそれぞれ、Basic A と B、および IA と IB が配置されている。3 年次には選択科目として、IIA と IIB がある。各年次で、与えられたプロジェクトに、グループで協働して取り組む。1 年次前期の Basic A では、キャンパス図鑑、友達インタビュー、先生インタビュー、そして、後期の Basic B では、アンケートの実施、新入生歓迎行事の企画の各プロジェクトに取り組む。2 年次前期の IA では、新入生歓迎行事の実施、静岡おもてなしプランの 2 つに取り組む、後期の IB では、パラパラ動画、60 秒動画、学科紹介動画の 3 つの映像を作成する。3 年次前期の IIA では、静岡市の旅行会社の協力を得ながら、新たな旅行商品を企画する。そして、後期の IIB では、学生たちが取材・編集する雑誌の作成に取り組む。これまでに、担当教員が検討と改善を積み重ね、学生たちの社会人基礎力の養成に大きな効果をもたらしている。そこで、上に述べたプロジェクトについて新たな進め方を模索することで、今後の発展に向けた次のステップとなる改善策を考察する。具体的には、1 年次で取り組む新入生歓迎行事の企画と、2 年次の映像作成を取り上げる。

1 年生が後期に企画して、2 年次の当初に新入生歓迎行事を実施することの意義は極めて大きい。2 年生がアイデアを出し合い、協力し合って後輩を歓迎する。これにより、2 年生は社会人基礎力を養う上で多くの貴重な経験を積む。1 年生は、新しい環境で感じている様々な不安を解消し、学科の仲間として受け入れられたことを実感する。結果として、GC 学科での学修に意欲を高める絶好の機会となっている。この行事を継続することが、GC 学科の良い伝統をつくることにつながるに違いない。

このプロジェクトについて改善の余地があると考えられる点は、2 年生の貴重

Ⅲ. 3. 社会人基礎力養成

な経験が1年生に十分に伝わっていないことである。1年生が後期の課題として企画を考える際には、新入生として歓迎された自分たちの経験を基に、より良い行事にすることを目指して話し合いを進める。「顧客満足」を顧客の立場に立って考えることは、企画を考える場合の重要な視点である。その点は良いが、準備・運営する側の視点が足りない。行事を実際に準備・運営する際の問題点とそれに対する反省や改善を、2年生たちが提案してくれている。それらが、1年生に十分に伝わっているとは言えないのである。その結果、これまでの1年生は、2年生が経験した様々な問題を、ほとんどそのまま同じように経験することになる。現在の授業では、3年次のIIBに参加した学生から直接に助言を受ける機会を設けている。だが、先輩たちの経験を踏まえて自分たちなりの改善策を考案し、それを企画に活かそうとするまでには至っていない。

そこで、改善に向けた提案をする。2年生は自分たちの反省や改善案をレポートの形で残している。このレポートを授業の教材として活用する。企画を話し合う前に、先輩たちの振り返りレポートを手分けして読み、報告しあう時間を設けるのである。すべての学生で手分けをして、各自で1～2人のレポートを読み、その内容をグループ内で報告する。各グループでどのような問題とそれに対する改善策が出されたかをまとめた上で、クラス全体に報告する。各クラスの報告を学年全体で共有する時間が設けられるなら理想的である。それが難しければ、SNSに掲示してそれを必ず閲覧した上で、企画の話し合いの臨むよう指導する。そうすれば、2年生の貴重な経験の多くが、現在よりもしっかり1年生に伝わるはずである。

もちろん、企画を成功させることだけがこの科目の目的ではない。うまく行かなかった経験が、社会人基礎力の養成につながることも考えられる。しかし、2年生の経験がより多く伝われば、1年生は先輩たちとは異なった新たな問題を経験することになる。それに対する新たな反省や改善のアイデアが次の世代に残される。このようなことが実現できれば、後輩学生にとってはもちろん望ましい状態となる。そして、授業としてもその質をより高めることができる。

2年次には、パラパラ動画、60秒動画、学科紹介動画の3つの作成に取り組む。各クラスの数によって柔軟に対応するものの、原則として、パラパラ動画は2人、60秒動画は3人、学科紹介動画は4～5人で協働する。学科紹介動画の作

成に向けて、協働する人数が増え、必要となる技術もより複雑になる。段階を追ってプロジェクトの難易度が高くなるように配慮されて、現在のような授業の構成となっている。

次のステップに向けた改善として、パラパラ動画の作成をやめることを提案する。これによって、3回の授業が空く。その3回を、学科紹介動画の発表と振り返りの充実にあてるのである。これまでのやり方を大幅に変えることになるが、これまでの学生たちの取り組みの結果から、2人で初歩的な技術を使って作成するパラパラ動画を経験させなくても、次のプロジェクトの協働に大きな影響はないと判断できる。

空いた3回のうち、1回を学科紹介動画の発表に回す。現在は、すべてのグループの力作を全員で見ることを重視して、1回の全クラス合同の授業で発表を行っている。外部から迎えた専門家から各グループへの助言がもらえることも大きな理由となっている。そのため、90分の授業では、各グループに与えられる発表時間が極めて短くなる。その上に、授業の終了時刻が大幅に遅くなってしまう現実がある。発表の授業を2回にすることにより、授業時間内で、すべての映像を全員で見ることはできないが、各グループによる発表時間は十分に確保できる。1回目を各クラスで行い、2回目を各クラスの代表作品の発表とすることも考えられる。すべての作品を見ることは、受講する学生と担当教員のためのSNS等を利用すればできる。改めてすべての作品から優秀作品を選ぶ投票もできるであろう。専門家からの助言をすべてのグループにももらえなくなるデメリットも、後日にメール等でのフィードバックを依頼することで、補完されると考えられる。

残りの2回を使って、必修科目としてのこのセミナーの振り返りを充実させる。そのために、ワールドカフェの形式を取り入れた反省会を提案する。その意義を考えるために、一人の学生から受けた相談を紹介する。その学生はグループでリーダーの役割を務めた。だが、メンバーの一人から十分に意見を引き出せず、積極的な参加を促すことができていなかった。そこで、どうすればよいかという相談を受けたのである。おそらく、リーダーとしては「笛吹けど踊らず」の状態に対するストレスを感じたものと思われる。この例だけではなく、表に出さずに様々な問題を感じている学生も少なくないと考えられる。必修科目としてのこのセミナーの最後に、学生が感じる問題についてじっくり意見交換をする機会を設ける

ことの意義は大きい。

1 回目の授業では、各学生がどのような問題を感じているか、率直に意見を申し合う。その中から、より多くの学生たちが共通に感じている問題を4つぐらいに絞る。学生たちの希望にできるだけ配慮しながら、各問題を考える集団に分ける。さらに、4人を基本にそれぞれの問題の集団を小グループに分ける。1学年を70名とすると、4つの問題で4人の小グループを4つずつ作ることが目安となる。1 回目の授業では、2 回目の授業での意見交換に向けて、担当した問題に対する各自の意見をまとめさせる。

2 回目の授業では、決められた時間の話し合いの後に、一人を残して他のメンバーが他のグループに散って、新たなグループでそれぞれ持ち寄った意見を交換する。必ずしも改善策を見つけられるとは限らない。それでも、メンバーを組み替えて複数のグループで話し合わせ、その結果を全体にフィードバックすれば、改善に向けてなんらかの糸口を見つける可能性を高めることができる。

社会人基礎力を養成する協働研究セミナーは、GC 学科のカリキュラムの特徴として、不可欠の科目群となっている。この科目群は、GC 学科の学生たちに良き伝統を作る礎としても大きな意義を持っている。協働研究セミナーによって期待できる教育効果をより大きなものにするために、さらなる改善を加える必要がある。その具体例として、2つの改善を提案した。1つは、新入生歓迎行事での先輩学生の経験を、後輩学生がこれまでよりしっかり学ぶ時間を設けることである。そのために、先輩学生が書く振り返りレポートを、後輩学生の教材として活用する。もう1つは、2年次で取り組むプロジェクトを減らして、その分の時間を、作品の発表と振り返りにあてる。これにより、まず、現在の進め方よりも多くの学生がしっかりと発表に参加できるようになる。加えて、振り返りの時間を設け、代表的な問題の改善策について、ワールドカフェ方式で考えさせることで、学生たちが共通して抱える問題について協働して考える機会を与えられる。結果として学生たちがより大きく成長することが十分に期待できる。GC 学科の教育の特徴を、より質の高い内容にできるはずである。

4. キャリア開発

「現代の産業」の現状と改善

谷口 茂謙

グローバルコミュニケーション学科では、2012 年度に現在のカリキュラムが始まった。スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語より 2 つの言語で日常会話程度の基礎的なコミュニケーションができる能力を身につけることに加え、経済産業省が提唱する社会人基礎力を身に付けさせ、地元静岡の発展に貢献できる人材の育成を目指している。さらに、学生が自身の将来を計画的に考えるようにさせるために、キャリア開発科目群という一連の授業を設けている。その 2 年次の科目が、「現代の産業」である。授業全体を通して 1 つのテーマを設け、そのテーマに合う代表的な企業・団体を前期と後期にそれぞれ 3 社ずつ招き、各産業界の現状と将来の展望に関する特別講義を聴く。2018 年度は、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会を全体のテーマとした。そこで、スポンサーの企業から、野村ホールディングス株式会社、KNT-CT ホールディングス株式会社、総合警備保障株式会社、凸版印刷株式会社の 4 社、放送業界から日本放送協会静岡放送局、ホストタウンから藤枝市役所にお越しいただいた。企業・団体の招聘に関する準備については、本学のキャリアサポートセンターが多大な協力をして下さっている。この授業では、特別講義の前の週を予習、その後の週を復習の授業として、それぞれの企業・団体に対する理解を深めさせている。この小論では、予習、特別講義、復習の授業の進め方を紹介するとともに、特に予習と復習の授業が抱える問題点を挙げ、その解決策を考察する。

予習の授業では、主にお越しいただく企業・団体のウェブサイトの情報から、基礎知識を理解させることを狙いとしている。例えば、資本金、従業員数、沿革、代表的な製品やサービスあるいは活動を紹介する。そして、おそらく特別講義でも言及されると思われる専門用語の解説なども加える。何よりも重視している点は、必ず各自で 1 つ質問を考えさせることである。教員が準備した講義を聴かせるだけでは、学生に積極的に学ぶ姿勢を持たせることは難しい。そこで、必ず質問を考えさせ、メールで提出させるようにしている。

Ⅲ. 4. キャリア開発

昨年度までは、コンピューター室で授業ができた。学生各自で企業・団体のサイトにアクセスさせ、指示したページを参照させながら授業を進めることができた。授業中に教員が巡視しながら考えさせることができるメリットもあるため、質問も授業中に考えさせていた。教員による講義を60分を目安に切り上げ、残りの30分で関連のサイトを調べさせながら質問を考えさせた。

この授業を始めた当初は、予習の講義そのものは30分ほどであった。次の30分で質問を考えさせ、それを各自のPCの画面に表示させる。最後の30分のうち、前半で全員の質問を見て回らせ、後半でメールを通じて投票させる。その結果に基づいて、特別講義で代表として質問する学生を決めていた。予習の授業に、より積極的に学生を参加させる工夫として、十分に効果があると考えられた。その一方で、質問の多くが皮相浅薄なものになりがちであるという欠点も明らかになった。特別講義に備えるためには、講義に関係ある内容について、ある程度の深みを持った講義を教員がする必要がある。それを手掛かりに質問を考えさせないと、どうしてもサイトの記述で十分にわからなかったことの説明を求めるような質問が多くなってしまう。例えば、その社が目指す理想的な方向性と、学生の立場から感じるニーズとの違いを問うような、学生の問題意識を反映させた質問が出にくいのである。

年を追うごとに、90分のほぼすべてを予習の講義にあてるように変化してきた。講義だけでは学生の積極的な参加が促せないなので、できる限り教員から質問を問いかけ、グループで考えさせ、意見を出させる工夫をしている。しかし、PCの画面でお互いの質問を見て話し合うような積極的な姿勢までは、なかなか引き出すことができていない。一方的な講義という印象を学生に持たせてしまっており、結果として、学生の参加意識を低くさせていることが問題点の一つである。その一方で、質問をメールで提出させるようにしたことにより、じっくり質問を考える学生が増えたことも事実である。学生たちが自分たちで選ぶという参加意識を高める効果は削がれるものの、代表の質問を教員が選ぶので、特別講義の内容に関してよりふさわしい、しっかり考えた学生に質問させることができるメリットがある。学生の参加意識が低くなるというデメリットを割り引いても、以前に比べて、自分の問題意識に基づく率直な質問を書いてくる学生が多くなった利点を見逃すことはできない。この点では、学生の能動的な学習に結び付けら

れていると考えられる。

今年度は、他の授業との関係でコンピューター室を使うことができなかった。そのため、各自のスマートフォンを使ってサイトにアクセスさせ、指定したページを見せながら授業を進めた。画面が小さく見づらいため、教員が示すスクリーンのみを見る学生も多かった。しかし、スクリーンで示される画面でも、表示される説明の文字が小さく、席の距離によっては見づらくなってしまう。スマートフォンを使う学生もそれなりに熱心に学んでいると思われるが、教員の講義と画面とに集中力が分散されることは否めない。やはり、スクリーンで読むべき箇所を提示して、「この部分を各自の PC で見て、～についてグループで意見を出しなさい」などと指示できる方が望ましい。さらに、学生の人数と対応できる PC の台数の問題もある。コンピューター室であっても、人数分の PC を用意できるとは限らない。今後の授業でも、学生のスマートフォンを活用することを前提に、授業の仕方の工夫を考えることが現実的な選択である。

特別講義の時間は、おそらく、教員である筆者が最も熱心に耳を傾け、メモを取っていると思われる。翌週に自身が復習の講義をしなければならないからである。学生にはもちろん、各自でしっかりメモを取るよう指導している。しかし、実際の講義は、学生にとって難しい内容で、わかりづらい時もある。より深く理解させるためには、授業で復習した後、さらに見返すことができる資料がある方がよい。教員が作成した資料がもらえると、学生たちがメモを取らない、あるいは、特別講義を熱心に聴かないという恐れもある。「復習の資料で要点はわかるから大丈夫だ」と油断して、せっかくの講義に居眠りをする者が一部にいる。確かにこれが 1 つの問題点である。それでも、大多数の学生は興味深く講義に耳を傾けながら、メモを取っている。そうした積極的な学生にとっても、自分のメモと照らし合わせて理解を深められるというメリットが、教員の作成する資料にはある。居眠りをした学生にとってはもちろん、講義の要点を理解する拠り所となる。結果として、お越しいただいた企業・団体をより深く理解する学生を増やすことにつながる。したがって、特別講義では、教員が最も熱心に学び、復習のための資料作成につなげることは継続しなければならない。

復習の授業にも 1 つ大きな問題がある。さすがに、特別講義の貴重さはほとんどの学生が理解しており、よほどの理由がない限り、欠席する学生はいない。だ

Ⅲ. 4. キャリア開発

が、復習の回は、通常の授業に比べて、欠席者がやや多くなるのである。内容が特別講義の復習だとわかっている。そのため、特別講義に出席して熱心に耳を傾けた者の中には、十分に理解したと判断して、欠席する者がいるようである。しっかり準備をして下さって、学生たちにわかりやすく講義して下さる企業・団体も多い。そのような場合、復習の授業は事実上、内容をなぞるだけになってしまう場合もある。もちろん、できるだけ学生たちの記憶を呼び覚ましたり、メモの内容を確認させるための質問を出し、学生に答えさせる努力はしている。だが、出席する学生の中にも、資料をもらうことだけを目当てに居眠りをする者もいる。

それでも、復習の授業は必要である。特別講義では、企業・団体から必ず課題をいただく。与えられた課題に対して1200字程度のレポートを書かせ、それを企業・団体に送付している。評価は教員がして、企業・団体には目を通してもらうだけだが、実はこのレポートが大きな役割を果たしている。どうやら、企業・団体の側では、学生たちのレポートを保存しているらしいのである。

レポートを書いた時点で学生たちは2年生だが、4年次の就職活動の際に、実際に特別講義を受けた企業・団体を受験する者も出る。2年次の課題でしっかりと考察したレポートを書いた学生は、就職試験の際にいささかなりとも有利に扱われているようだ。確たる証拠はない。だが、教員が高く評価したレポートを書いた学生が当該の企業・団体を受験した例があった。その時の話を聴いてみると、「集団面接の際に私だけ質問が違った」という経験を語ってくれた学生がいた。また、内定後の集会でご講義の担当者に会って挨拶をした際に、「あのレポートを読んで是非ともうちに来てほしいと思っていた」と言ってもらえたと報告した学生もいた。このような報告を受けた事例は数えるほどしかない。それでも、熱意ある学生が企業に予めアピールできる機会になっていると推測できる。

企業・団体からの課題は、学生自身の将来に大きな影響を及ぼす可能性がある。だから、このレポートで手を抜いてはならない。学生たちには、そのように厳しく言い聞かせている。今は進路として直接に興味がない企業・団体かもしれないが、いろいろと考えるうちに、改めてそこに興味を持ち、実際に受験するかもしれない。（特別講義には、学生たちが「ここに入れたら嬉しい」と思うような企業・団体を招聘している）その時に、手を抜いたレポートを読み返されては命取りになる。しっかり考察したレポートを書いておく必要がある。この点を学生たちに

は常に強調している。そのために、復習の授業は欠かせないのである。

予習には、学生に授業への参加意識を持たせることと、学生自身で考察を深めさせ、より良い質問を考えさせることとのバランスに配慮する必要がある。参加意識の問題は残されているが、これを高める方法には別に工夫も考えられるはずである。その一方で、良い質問を考えさせるために、しっかりと予備知識を理解させる講義を行うことの重要性は明らかになった。年を経て、現在の進め方にたどり着いており、現在の予習の形がこれまでの中では最善と考えられる。

復習には、欠席の問題と教員が作成する資料の功罪を考える必要がある。いずれの問題も、企業・団体からの課題の重要性を理解させることが、解決に向けて大きな影響を及ぼす。自分だけの理解で良しとしないよう繰り返し説くことは欠かせない。その上で、特別講義の内容を、自分のメモと教員が作った資料を基に振り返らせる。そして、講義の要点と課題を結び付け、自分の持つ問題意識とどのようにつなげるのか、それについてある程度の方向性を指導する。これによって、学生たち独自の深みを持った考察に導くことができる。指導にはさらなる工夫が必要だが、予習と復習の時間を設けて特別講義の理解を深めさせる進め方は、「現代の産業」において、今後も継続するべきであることは間違いない。

5. 臨地実習

やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu 2018」

ボランティア活動報告

増井 実子



〔写真 1〕 はあとふる Yaizu 2018 オープニング

今年で 25 回目を数える「はあとふる Yaizu」は、焼津市役所と焼津市国際交流協会が主催して、地域の外国籍住民と日本人住民がふれあう機会を提供する国際交流事業であり、年に一回開催されている。今年度は 11 月 23 日（祝）に焼津文化会館で開催された。

今年の「はあとふる Yaizu」には外国語学部生 GC 学科生 11 名が実行委員として加わり、各国のダンスや音楽の披露、各国料理の販売や民族衣装の試着など、さまざまなアトラクションの企画・準備・実施に主体的に関わった。

また GC 学科のカリキュラム改定により、今年度から学外での活動に学内での事前・事後指導を組み合わせて単位認定する「臨地実習 A」「同 B」「同 C」という科目が新設された。今年度は「臨地実習 A」指定の臨地活動が「はあとふる Yaizu の実行委員活動」であったため、新カリキュラムに該当する 1 年生は単位認定される予定である。このような仕組みによって、GC 学科生の学外活動がますます活性化することを期待している。なお、「臨地実習 C」については、本誌 IV の「3. 中国語圏」に所収の報告を参照いただきたい。

学生の活動を温かい目で見守りサポートしてくださった焼津市役所市民協働課

担当者堀内さん、進藤さん、清水さん、そして実行委員長のマハラジャン・ナレスさんにはこの場を借りて心からお礼を申し上げます。

以下に、実行委員の氏名と役割分担、活動内容、実行委員 6 名の手記を紹介し、今年度の報告とさせていただきます。

はあとふる Yaizu 2018 実行委員

担 当	メンバー (◎がグループ責任者 ○が副責任者))		
正副実行委員長	◎ナレス・マハラジャン	中村和貴 (4 年)	内田麗奈 (3 年)
総務	◎内田麗奈 (3 年)	◎(事)焼津市職員	(事)焼津市職員
司会	◎ナレス・マハラジャン	久門 千夏 (1 年)	梶川 夏葉 (1 年)
やいちゃん担当	伊藤 侑 (1 年)	竹下 媛香 (1 年)	
チラシ作成	柳沼 叶子 (3 年)	小柳 直人 (2 年)	望月 美里 (3 年)
イベント PR	◎焼津市一般ボランティア	焼津市一般ボランティア	焼津市一般ボランティア
スタンプラリー	◎古川 舞 (3 年)	伊川 亜祐菜 (1 年)	竹下 媛香 (1 年)
展示室	◎中村 和貴 (4 年)	○小柳 直人 (2 年)	常葉大学生

はあとふる Yaizu 2018 実行委員活動記録

1	6 月 19 日	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介・実行委員 副実行委員の選出 テーマ・概要確認 企画(案)について 	焼津市役所
2	7 月 10 日	<ul style="list-style-type: none"> 企画(案)発表、検討 実行委員の担当決め 	焼津市役所
3	7 月 17 日	<ul style="list-style-type: none"> 企画検討 	焼津市役所
4	8 月 28 日	<ul style="list-style-type: none"> 企画の確認について ポスター・チラシの作成について 担当ごと打ち合わせ 	焼津市役所
5	9 月 25 日	<ul style="list-style-type: none"> 準備状況の確認について 当日ボランティアについて 担当ごと打ち合わせ 	焼津市役所
6	10 月 23 日	<ul style="list-style-type: none"> 当日までの準備段取りについて確認 担当ごと打ち合わせ 	焼津市役所
7	11 月 13 日	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア説明会 担当ごとに作業 	焼津市役所
8	11 月 20 日	<ul style="list-style-type: none"> 担当ごとに作業 SBS ラジオ(クローズアップマイタウン)電話出演 	焼津市役所
9	12 月 11 日	<ul style="list-style-type: none"> 事業のふりかえり 	焼津市役所

はあとふる Yaizu 2018 実行委員手記

4 年間楽しめて活躍できるイベント、 それが「はあとふる Yaizu」

15122043 中村 和貴

私は、「はあとふる Yaizu」に1年生の時から参加し、今年が4回目である。さらに、実行委員としては、3回目の参加となった。1年生の時には、当日ボランティアとして当日のみの参加ではあったが、焼津市のマスコットキャラクター「やいちゃん」係として、多くの外国人や子供たちと交流をした。その中でも、毎回イベントの最後に行われる「みんなでダンス」というコーナーは思い出として強く残っている。これは、ステージに出演した方々、お客さん、実行委員と、とにかくその場にいる人がみんなで円を描くように音楽に合わせて踊り、イベントの最後を締めくくる恒例のコーナーである。このコーナーで、私は、「やいちゃん」として、約15分間みんなと踊った。11月の終わりという寒い中ではあったが、途中から汗が止まらず、終わった時には滝のように汗が顔から流れ続けていたことを今でも覚えている。そして、「やいちゃん」の経験を通して、楽しさとやり甲斐を感じた。この経験から、国際交流にさらに興味を持ち、来年は実行委員として、イベントに携わりたいと思った。

この年以降、私は毎年実行委員を務めることになった。2年生の時には、先輩たちに支えてもらいながら初めての実行委員を終えることができた。3年生では、実行委員の中では最上級生だったため副実行委員長を務めた。出店係となり、自分からいろいろな店へ足を運び、直接出店交渉をして当日の出店へ結びつけることができた。この経験は、とても貴重だったと感じている。

毎年、イベント当日までに約10回開かれる実行委員会では、市役所の方や実行委員会のみんなと意見交換をし、より良い「はあとふる Yaizu」を作り上げていく。その気持ちは年々強くなっていると感じる。特に、4年生となった今年は、1年生から5人も実行委員が参加したこと、上級生に経験者が多く集まったことで、議論がさらに活発化した。1年生は、当日に向け、ステージの看板作りをしてくれたり、母校に呼びかけ高校生ボランティアをたくさん集めてくれたりと大

活躍であった。さらに楽しく有意義な「はあとふる Yaizu」を作り上げてもらうために、来年以降も是非 1 年生に実行委員として参加してもらいたい。そして、上級生は経験者として 1 年生を助け、時には助けてもらいながら、今年以上に遠慮なく意見が飛び交う関係を作ってほしい。

4 年間「はあとふる」に携わり、授業だけでは味わえないイベントを作り上げる楽しさを体験できた。後輩の皆さん、今後も国際交流を楽しみつつ、多文化共生社会の実現に少しでも役立つような「はあとふる」を作っていくてください。心から応援しています！

1 年生としてはあとふる Yaizu の実行委員を務めて

18122005 伊川 亜祐菜・18122009 伊藤 侑・18122022 梶川 夏葉
18122068 竹下 媛香・18122088 久門 千夏

私たち 5 人は、2018 年 11 月に開催された「はあとふる Yaizu」の実行委員を務めた。以下、5 人がそれぞれ担当した役割を中心にはあとふる Yaizu を振り返る。

* * * * *

「はあとふる Yaizu」では企画からイベント当日の運営まで、1 つのイベントを作り上げるという貴重な経験ができた。その中で、私はスタンプラリーを担当した。スタンプラリーは、どうしたら全ての来場者の方に楽しんでもいただけるかということを考えながら計画を立てるのが大変だった。しかし、当日実際にスタンプラリーに参加してくださった方々の笑顔や楽しんでくださる姿に嬉しくなった。同時に「スタンプラリーの問題がむずかしい」「スタンプラリーの問題を出題する場所がわかりにくい」といった意見や、当日ボランティアとして参加した高校生スタッフのシフト組み方や指示の出し方がなかなかうまくできなかったといった反省点も多くあった。今回のイベントで学んだことを次の活動に生かしたいし、来年もはあとふるに関われたらと思う。

【伊川】

「はあとふる Yaizu」に参加して学んだことが沢山あるが、特に学んだのは来

Ⅲ. 5. 臨地実習

場する外国人のニーズに応えるための工夫である。最初私は「外国人の方たちが仕事終わりに来てもらうため、イベントの時間を伸ばしたらどうか」という提案をした。しかしミーティングを通じて外国人は仕事が終わるとそのまま帰宅してしまうことが多いということを知り、自分のアイデアが必ずしもニーズに合っていないことがわかった。また、企画を練る上で、多様な国の人々のために何をするか、日本語が少ししかわからない人のためにどう対応するかといったことを考えるのは思ったよりも難しく、大変であった。しかし、全体としてなかなかできない良い経験をさせてもらった。

【伊藤】

私は今回の「はあとふる Yaizu」で司会と吊り看板の作成を担当した。看板は日本の文化として書道を取り入れ、字体も少し工夫を入れたので、ステージに華を添えることが出来たと思う。司会は台本をおおまかにしか作らず、アドリブを多く取り入れたものだった。進行するに当たって、会話形式を取ったので私が話せなければ進まない。盛り上げなければという気持ちが先走り、始めは言葉も少なかったが、だんだんと周りを見渡しながらの司会が出来るようになった。周囲からの反響も大きかったので達成感を感じることができ、貴重な経験となった。

【梶川】

私は今まで数多くの国際交流協会でボランティアに参加したが、企画から担当したイベントボランティアは今回が初めてだった。私が担当した役割の中で、スタンプラリーは老若男女にわかりやすい内容で楽しんでもらうことを工夫した。焼津市のゆるキャラやいちゃんの中にも入ったが、みんなを喜ばせられるような動きを心がけた。また、ボランティアに来てくれた中高生に対し的確なシフトを割り振って運営することはとても難しかった。今回このイベントに参加したことによって、私が今まで参加者やボランティアとして関わってきていた活動は、実行委員会の人々の工夫や努力によって成り立っているということに気がついた。貴重な経験をつむことが出来たので良かったと思う。

【竹下】

「司会」はイベントを進めるにあたってとても重要な役割だ。そんな司会をはあとふるで私は務めた。はあとふるでは台本はあるものの、ほとんどがアドリブ。

緊張もあいまってうまく言葉が出てこず、歯痒い思いをした場面も多くあった。しかし、ステージ運営として自分が話さなければ進まない、という思いから必死に言葉をつないだ。その結果周りの方から「よかったよ!」と言われる司会をすることができ、ただひたすらに嬉しかった。また、はあとふるは国際交流を目的としていることもあり、多くの外国人の方と触れ合うことが出来た。一番感動したのがイベント最後の全員で踊る所だ。全員が全力で楽しんで全力で音に合わせて踊っていたあの瞬間は会場がひとつになっていたと思う。今回司会を通して沢山の外国の方々と笑顔を交わし、自分に自信をつけることができた。今後もこのようなイベントに積極的に参加したい。

【久門】



6. 国内外関係組織から GC 学科への受け入れ

韓国公州大学大学生との交流会の報告

谷 誠司

静岡県は韓国・忠清南道と友好協定を締結しているが、韓国・忠清南道に所在する国立公州大学から大学生 10 名が常葉大学外国語学部を訪問し、グローバルコミュニケーション学科 1 年生 14 名(谷担当人間力クラス 13 名、福島クラス 1 名)と交流をした。

交流会は 2018 年 12 月 19 日(水)に行われ、3 時間弱の短い時間ではあったが、キャンパス案内、昼食会、ゲームによる交流会と多様な活動を通して言葉の壁を超えた交流が行われた。

当日は 12:20 頃、公州大学から大学生 10 名と引率教員である尹慧麗(ユン・ヘリョ)先生(産業科学部教授)と金葆京(キム・ボキョン)先生(産業科学部助教)の計 12 名が常葉大学をバスで訪問した。(写真 1)



その後、公州大生と常葉大生の混成で 3 班(A・B・C)に分かれて、キャンパスツアーを 20 分ほどした。各班では名札シール(常葉&公州大学の学生全員分)を準備し、ルートや紹介方法、内容を班別に準備した。通訳は A 班と B 班は県庁の人と通訳の人、そして C 班は伊川亜祐菜さんが担当した。

キャンパスツアー後は場所を学生食堂(グランテール)に移し、班単位でお弁当を食べた。昼食時間は 40 分間で、その間は通訳もいなかったが、昼食が終わるころには一緒に学内のコンビニに移動する学生も出ていた。

昼食後は交流会の会場である A402 教室に移動した。交流会は神谷唯衣さんと竹下媛香さんの司会・進行で始まった。まず韓国側&日本側からの挨拶として、尹慧麗(ユン・ヘリョ)先生(写真 2)と一言哲也先生(外国語学部長・写真 3)のご挨拶があった。尹先生は(前日は静岡県と忠清南道の特産品を使用した食育

の効果の高い弁当づくりのワークショップがあったので)今日は交流自体を楽しんでほしいこと、一言先生はアイゼンハワー元大統領の People to People プログラムに言及され、民間交流の大切さをお話された。



写真 2 公州大学校食品科学科 尹慧麗 (ユン・ヘリョ) 先生 (写真中央)



写真 3 常葉大学外国語学部長 一言哲也先生 (写真左)・司会・進行役の神谷唯衣さんと竹下媛香さん (写真右)

交流会のメインのイベントは、各班で行われるカードゲームである。各班で事前にゲームのルール説明を準備した。どの班も最初に常葉大生だけでプレイを見せながら説明した後、実際に一緒にゲームをプレイしながら、ルールが分からなくなったところは通訳の人の助けを借りていた。各班のゲームとプレイ中の様子は以下のとおりである。

A 班「ニムト」(数字並べのゲーム)



写真 4 ルール説明の文書 (韓国語)



写真 5 ニムトをプレイしているところ

Ⅲ. 6. 国内外関係組織から GC 学科への受け入れ

B 班：「HANABI」（プレイヤー全員が協力して花火を打ち上げるゲーム）



写真 6 ルールの説明をしているところ



写真 7 日韓ペアでプレイしたので、二人で相談しているところ

C 班：坊主めくり&韓国のゲーム



写真 8 通訳の人が通訳しているところ



写真 9 韓国のパーティゲームをしているところ

交流会後は連絡先の交換、記念撮影をし、14：50に駐車場までお見送りをし、終了した。今回の交流会は静岡県地域外交局地域外交課地域外交専門官である高知延（コジョン）氏にたいへんお世話になった。この場を借りてお礼申し上げる。

7. 学内外での教職員や学生の取り組み

歓迎聆聴：2018 年度公開講演を実施して

若松 大祐

2018 年度は、自身の授業の一環として合計 10 回の公開講演を実施しました。いずれの講演も、授業担当者である若松の不足を補って余る内容でした。講演終了後にアンケートを取ったところ、受講者は講演を通じて新たな知識を得たり、何か物事について考えるきっかけを得たようです。

講演は公開しており、本来の授業の受講生のみならず、他の学生や教職員、時には学外からも聴講する人々がありました。特に林世英氏の講演には、本学入学センターの協力があり、静岡県内の高等学校から数名の教員や生徒の参加がありました。とはいえ、授業の受講生以外の参加者はまだまだ数なく、残念です。2019 年度も引き続き公開講演を実施しますので、この記事を読んだあなたもお越しになりませんか！

なお、ゲストスピーカーを招聘するにあたり、常葉大学教材費の支援を受けました。改めてお礼申し上げます。

< 公開講演の一覧 >

いずれも 60 分の講演、20 分の質疑応答です。

(0) 7/17(火)4 限 15:00-16:30、教室 A428 (常葉大学共同研究費)

尤淑君 (YU, Shuchun)、中国浙江大学准教授

「木宮泰彦教授の著作の中国語訳とその学術的影響」

『日華文化交流史』は、日中関係史や（日本史の）対外交流史という研究分野では今なお先駆的存在です。講演では、同書の中国語訳が中国で与えた影響について考察しました。（講演は中国語で行われ、若松が日本語へ通訳しました。）

(1) 7/23(月)3 限 13:15-14:45、教室 C201 (授業名：国際関係論 A)

鐸木昌之 (SUZUKI, Masayuki)、赤穂観光大使

「東アジア情勢の急変：皆さん、自分の問題です」

Ⅲ. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

日々のニュースをにぎわす北朝鮮情勢について、北朝鮮研究の世界的権威が歴史的な視野とフィールドワークに基づく感性から、わかりやすく解説しました。

予習資料があり、当日午前 9-12 時に B404 で関連映像を視聴しました。また、14:45-15:15 には C303 へ移動して歓談する機会を設けました。なお、本講演は、「コミュニケーション総論 A」（清ルミ）と合同で実施しました。

(2) 7/25(水)4 限 15:00-16:30、教室 C305（授業名：世界と日本）

林 世英 (LIN, Shih-Ying)、台北駐日経済文化代表処 教育組長

「台湾と日本の絆：教育・青年交流について」

日本から台湾へは修学旅行生や観光客がたくさん訪問しています。日本と台湾の教育交流について、講師が駐日大使館に相当する機構で教育行政を取り仕切る立場から、報告しました。

(3) 7/26(木)3 限 13:15-14:45、教室 A520（授業名：中国語 IA）

宮内 肇 (MIYAUCHI, Hajime)、立命館大学文学部准教授

「近代日本と中国語の側面 —— 私たちは中国語をいかにとらえてきたのか」

日本人は外国語である〈中国語〉をどのようにとらえ、いかなる目的をもって学習してきたのでしょうか。講演では、日本人にとっての中国語を歴史的にみることで、私たちの中国に対する理解や態度を改めて考えました。

(4) 7/27(金)3 限 13:15-14:45、教室 A520（授業名：中国語 IIA）

関 智英 (SEKI, Tomohide)、明治大学兼任講師

「支那通のはなし—後藤朝太郎」

「通」と呼ばれる人々がおり、かつて中国に詳しい人を支那通と呼びました。講演では、近代の日中両国において彼らの果たした役割を考えました。

(5) 7/27(金)4 限 15:00-16:30、教室 A307（授業名：世界の宗教と民族）

大江 道雅 (OE, Michimasa)、明石書店社長

「誰が弱者をつくるのか」

明石書店は書籍を通じて、世界各地で生きる人間の姿を日本に伝えてきました。

講演では、出版事業という立場から共生と差別について考察しました。

(6) 11/15(木)2限 10:40-12:15、教室 A520 (授業名：中国語会話入門)

海野 典子 (UNNO, Noriko)、日本学術振興会・特別研究員 (中央大学)

「少数民族」の中国語：回族の事例を中心に」

中国は56の民族から構成される多民族国家です。漢民族が9割以上を占めます。講演では、漢民族でありながらイスラームを信仰する回族に着目し、一口に中国語と言っても、多種多様であることを指摘しました。

(7) 11/29(木)3限 13:15-14:45、教室 A405 (授業名：中国語 IB)

林 初梅 (LIN, Chu-mei)、大阪大学大学院言語文化研究科・准教授

「異郷で出会った私の母語－華語と台湾語」

世界で中国語を使う国家や地域はいくつかあります。講演では、台湾とシンガポールに着目して中国語の多様性を考えるとともに、Sinophone (華語語系) という新概念を紹介しました。

(8) 12/13(木)1限 9:00-10:30、教室 A504 (授業名：国際関係論 B)

早丸 一真 (HAYAMARU, Kazumasa)、日本国際問題研究所・研究員

「外交よりも国よりも――「中国」から見た国家と国際関係」

主権国家が構成する国際システムを、中国はどのように受容してきたのでしょうか。近代中国の外交を振り返り、中国にとっての国際関係をわかりやすく解説しました。

(9) 12/19(水)2限 10:45-12:15、教室 A405 (授業名：人間力セミナー)

北村 由美 (KITAMURA, Yumi)、京都大学附属図書館研究開発室・准教授

「勉強しない読書のすすめ」

「読書＝勉強」という常識をいったん離れ、読書を楽しめるようなきっかけをいくつか紹介しました。講師が人生の節目で読んできた20数冊のリストも配布されました。

Ⅲ. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

(10) 1/11(金)3限 13:15-14:45、教室 A520 (授業名: 中国語 IIB)

清水 篤 (SHIMIZU, Atsushi)、シェイクスピア・ギャラリー・芸術監督

「ビジュアルコミュニケーションの歴史」

画像や映像の歴史を、美術系の古書店店主が語りました。大学時代に学んだ外国語が、私たちの趣味を楽しむ際に役立つというアドバイスもありました。

台北駐日経済文化代表処との交流

若松 大祐

台北駐日経済文化代表処（台湾駐日大使館に相当）は、数年前から「日本学生台湾留学および華語文（中国語）研修成果発表会・交流会」を毎年春と秋に開催しています。これは代表処の教育組が主催するもので、目的は台湾に留学や渡航した日本の学生が帰国後にその成果を共有し、日台交流を促進するところにあるようです。

本学からは、2017年春季に鹿内彩香さんと矢吹真佑さんが、また秋季には石川由美さん（教育学部）と仲宗根エイミさんがそれぞれ参加し、中国語で簡単なスピーチを行いました。

2018年は春季の発表交流会への参加者がおらず、残念でした。秋季が11月8日（木）に恒例の台湾文化センター（東京虎ノ門）で開催され、佐藤文香さん（外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年）が参加しています。午前に成果発表を行い、昼食を兼ねて交流するという内容です。日本人学生（高校生を含む）十数名、関係教員、台湾人留学生、代表処スタッフの併せて約三十名が集いました。

佐藤文香さんのスピーチは改稿して、『とこはことのは』の「Ⅳ、各言語圏での活動 > 3. 中国語圏」に収録しました。佐藤さんは、普段から韓国の大衆文化に強い関心を持っています。そこで、佐藤さんは2018年夏の「日本青年台湾研修ワークショップ」への参加をきっかけにして、台湾と韓国それぞれの対日認識を比較するという観点から、日台関係のあるべき姿に言及しています。

2018年度は、例年に比べて本学と駐日代表処の交流が多い一年でした。2018

年 7 月 20 日（金）には代表処教育組が拓殖大学にて、「日本における華語文教育推進座談会」を開催し、若松が参加して所感を述べました。7 月 25 日（水）には代表処教育組の林世英組長が、本学で「台湾と日本の絆：教育・青年交流について」と題する講演を行いました。12 月 16 日（日）にはグランシップ（静岡市駿河区）で「ふじのくに海外留学応援フェア 2018」が開催され、日本台湾教育センター（<http://tecj.tku.edu.tw/>）の郭艶娜主任が本学学生数名へ個別にアドバイスしました。

Lo que aprendí estudiando idiomas

17122050 Mao Nakazawa

Empecé a interesarme en aprender lenguas de pequeño. Cuando era alumno de primaria, me encantaban las clases de inglés que había un maestro americano en el aula. Cuando estaba en el segundo año de la escuela secundaria, participé en lo que llamaron “una capacitación de inglés” que realizaron por la ciudad donde vivía. Era una oportunidad de ir a Australia dos semanas para aprender inglés. A mí me parecía más “un viaje por Australia”. No había ninguna razón para no ir allá. Ir a Australia era el motivo por el que decidí aprender más idiomas. Sin embargo, creía que tendría que hablar inglés antes de aprender algún otro idioma. Por eso decidí estudiarlo tres años en una escuela secundaria superior de Canadá. Ahora en la universidad estoy estudiando más idiomas, español y chino.

Por estudiar los idiomas yo aprendí estas cosas: ser flexible, y la importancia de lengua maternal.

En primer lugar, he aprendido que es importante ser flexible. Por ejemplo, cuando memorizo las palabras en un idioma diferente, yo no trato de memorizar una palabra con solo un sentido. Trato de memorizarla con varios sentidos. De este modo, cuando una palabra se usa de una manera que podría

ser difícil de aprender en una frase, puedo ser flexible y al menos adivinar lo que significa. Ser flexible no es solo bueno cuando uno estudia idiomas, sino también es muy importante cuando uno conoce culturas diferentes. Cada vez que voy al extranjero, estoy sorprendido por algo. Podría ser una comida, una persona, una tienda o un edificio, porque no son normales para mí o en Japón. Pero no debo juzgar nada por la razón. Es necesario conocer la cultura y las costumbres de cada país para disfrutar la estancia y experiencias.

En segundo lugar, he aprendido que ser capaz de expresarse bien en solo un idioma es esencial. Por ejemplo, cuando empecé a aprender inglés, comparaba frecuentemente las palabras y frases en japonés e inglés. Además, memorizaba sus sentidos en japonés, no en inglés. Además, yo estoy aprendiendo un par de lenguas, pero teniendo una lengua que me siento cómodo hablar y con la que puedo expresarme mejor, es muy significativo porque la lengua es la fundación de todo.

En conclusión, hay muchas cosas que puedo aprender al estudiar idiomas. Este es el motivo por el que me encanta aprender idiomas y me gustaría seguir estudiándolos para progresar más como persona.

IV 各言語圏での活動

Experience Things for Myself

16121045 Junya Saito

One year has passed after I came back to Japan from Victoria, Canada. Since I went there, I have learned many new things and I have found that I had preconceived ideas about other countries. Until I went to Victoria and met some foreign people, for example, Mexican, Korean, and some others, I generalized about them. I thought every Spanish person was easygoing and loved spicy food and every Korean person also loved spicy food. I generalized about them according to their countries, even though each individual was different. Since I went there, I met many people and I understand that personality is not related to one's country. Of course, some people may be greatly influenced by their cultures, but not everybody. Therefore, some Spanish people are not easygoing and dislike spicy food and some Koreans also dislike spicy food. As I said, until I went there, I didn't realize such a simple thing.

For example, if I didn't know about other international students, I could find out about them using the Internet or through the grapevine. However, this is just general information about them. There may be some exceptions, but people often try to generalize about others. It is also the same in Japan. What I really want to say through this report is that nobody can understand the truth of something until they experience it for themselves. Therefore, you can't understand people's personalities until you meet them and you can't understand the cultures until you have contact with them. Generalizing is an easy way to make judgements, but I think experiencing things for yourself is the best way to understand everything.

These days we can easily connect between our country and others.

According to the Ministry of Justice, there were three million people from other countries in Japan as of 2016. And according to the Japan National Tourism Organization, 26 million people of other countries came to Japan in 2017. As you know, we can have more chances to encounter people from other countries in the future. Until we meet and talk with them, I think we won't understand about them in a real sense. The most important thing is experiencing things for yourself and judging by yourself, not using the grapevine and rumors. I hope you, who are reading this report, will try to experience things for yourself like I did.

Vicissitude

16121091 半田 ひな乃

私は、2017 年 9 月から 2018 年 4 月の 7 か月間カナダのビクトリア大学に留学していました。これが私にとって初めての海外渡航であり、わからないことも不安なこともたくさんありました。しかし、それと同時に学ぶこと、カナダでしか出来ない体験をたくさんしてきました。そんな貴重な経験を経て、一年が経った今、数々の変化が自分自身に起こったように感じています。

まず、一つ目は自分の思っていることや、考えを言うことをあまり怖がらなくなったということです。それまでは、そういったことが非常に苦手であり、自分の意見を伝えてその場に波風を立てるよりも、自分が黙ったまま周りに流されているのが楽であるし、それが一番いいと思っていました。いわゆる、日本人的な思考です。それに加え、意見を言って、誰かから否定されるのが怖かったというのもありました。というのも、自分なりによく考えて出した意見を「それは違うんじゃない？」と否定された経験が過去にあったからです。それ以降、「自分の意見を否定される = 自分自身を否定される」ことであるように思えるようになってしまい、自分の意見を言うことに対し、臆病になってしまいました。そういった一面が自分の中にあるのにも関わらず、言わなければ、あとで絶対に「あの時言っておけばよかった」と後悔をしました。

IV. 1. 英語圏

そんな私が、自分の意見を持てるように、そして伝えることが出来るようになったのは、留学中の授業で、グループディスカッションの機会が多くあったからだと思います。ディスカッションの時は、必ず自分の意見や考えを言うことを求められました。英語で自分の意見を言うためにはまず、日本語でそれをまとめる必要があります。英語という第二言語を使っているという点では、日本語で伝えるよりも難易度が高いのは事実ですが、だからこそ出来るだけわかりやすく説明しようとする訓練にもなったように思います。また、第二言語なのだから、間違っても仕方ないと思えるようにもなり、「自信がなかったとしても、とりあえず伝える」ということを重視するようになりました。自分とは違った考えを持っている人がいてもそれが当たり前であると思えるようになったのは、違う国籍の人たちとさまざまなトピックについて話し合いをする機会があったからだだと思います。

二つ目は、目上の方との関わり方が上手になったということです。これは、異なる国籍、また年齢の人たちと関わる機会が多かったことが大きな要因であると思います。わたしは、先輩など目上の方と話をする時、いつも緊張する気持ちだけが先走り、訊きたいことがある時や頼りたい時、上手く接することが出来ませんでした。部活や教職関連のことで、先輩の経験などを参考にさせていただいたことがたくさんあるのに、話しかけることが出来ずにもどかしい思いをすることがよくありました。

しかし、留学から帰ってきて部活に復帰し、先輩方が「留学どうだった？」と声をかけてくださり、たくさん話をしました。その時にはなぜか不思議と、全く緊張しなくなっていました。英語圏では、日本ほど年上や年下であることを気にしないのに加え、敬語というものがありません。留学中同じクラスには、歳が離れた方が多数いましたが、そんな方々とも英語という共通言語を使ってコミュニケーションをとっていたため、目上の方に対し、それを意識しすぎることはありませんでした。英語圏特有の年上、年下を気にしない文化、敬語がない文化に触れることにより、目上の方々に過度に緊張を覚えなくなったのだと思います。ここまで述べた事柄は、日本の中には起こり得なかったことであると、留学から帰ってきて時間が経って気付きました。二点とも、自分に対してネガティブに思うことであったため、とても良い変化であったと強く思います。これから

社会に出るにあたり、これらの能力は必要不可欠だと考えます。留学という貴重な経験を経て得ることが出来たこれらのことをうまく生かして、今後の時間を過ごしていきたいと思います。

初めての土地でチャンスをつかむ！

16121037 木野 結生

私カナダに来ちゃったけど、どうやって友達作ればいいの？英語も全然自信ないし、全然聞き取れないし…。でもやっぱ誰よりもキラキラした楽しい毎日を送りたい。カナダに着いた1日目は、期待と不安で心がソワソワしていました。私は UVIC で ELPI という留学生のための英語を学ぶクラスを取っていました。はじめの1週間はすべてが新鮮で、新しい友達、文化、英語での会話、毎日がキラキラわくわくしていました。

しかし2週間目に入ると、ある事に気づきました。なんか毎日が同じ繰り返しな気がするし、まずネイティブの友達が一人もいない。「これって本当に私が描いていた日々??」と自分に問いかける毎日でした。きっとクラスに通うだけではだめで、もっと外に出て新しいチャレンジをしなくてはいけないんだ！とやっと気づき、ここで私は3つの目標を決めました。1. ネイティブの友達を作る。2. わくわくした毎日を送る。3. 誘いを断らない YES って言う。この3つを意識し始めてから、私の毎日は180度変わっていきました。

1番はじめのチャレンジは、UVIC の Japanese Culture Club に入ることでした。このクラブは日本語を話したい人と英語を話したい人が混合のグループで、ここで出来た友達は今でも仲良くしています。何かに挑戦するってすごく緊張するけど、めちゃくちゃ楽しい！わくわくする！私に必要だったのはやっぱり常に挑戦することだったんだ。カナダに来て3ヶ月目、ほぼゼロだった私の英語は、しっかりネイティブの人と一緒に会話出来るまでに成長しました。そして何より嬉しかったことは、いつの間にか英語を使って話すのが楽しくてしょうがなくなっていた事です。こんな毎日をずっと続けていると、不思議と色々なチャンスに巡り合うことができました。Japanese Cultural Fair や Tea party のボラ

IV. 1. 英語圏

ンティアに誘われたり、たくさんの夢を持った人たちのお話を聞くことができた、家族と呼べる人たちに会えることができました。いつの間にか、カナダがもう一度帰って来たい場所になっていました。

あの7ヶ月間の留学から1年経った今、私はもう1度カナダで新しい事にチャレンジしています。たった7ヶ月、でも自分次第でとんでもないくらい濃い毎日に出来る、誰よりもわくわく出来る。この経験は私の人生に大きく影響するものになったと思います。もし、これからなにか新しいことに挑戦しようと考えている人たちがいたら、怖がらず何でも挑戦してみてください。きっと最高にキラキラした楽しい日々になると思います！



持って帰ってきたもの

16121120 山田 裕子

カナダでの留学生活が終わり、日本に帰ってきてからまもなく1年が経とうとしています。同じ学校に通い、同じ人々と生きていてもカナダでの7か月は毎日が異なり、毎日新しいことを学んでいるということを体全体で感じていました。そんな限られた期間の留学生活はとても短く感じましたが、帰国後の時間の進みはさらに早く感じます。時間が経つほどカナダでの思い出が薄れていくような気がして寂しさも大きくなりますが、そんな中でも忘れないもの、私の中に染み付いたものがあります。

私がカナダで学び、持って帰ってきたものの中で最も大切なものは生き方において考え方が変わったことです。常に一所懸命に生きるということです。まず、

私を受け入れてくれたホストマザーから大きな影響を受けました。年配にも関わらず、毎日朝から晩まできびきびと生活するホストマザーは誰が見ても生き生きとしており、どんな時でも前向きで素敵な女性でした。彼女がよく口にしていた言葉の一つとして、自分を奮い立たせ、常に学び続けなさい、という言葉がとても印象に残っています。いつも受動的で、自分から何かをしたい、これは必ずやり遂げたい、という情熱があまりない私は、自分自身が嫌になることもしばしばありました。しかし、一番自分で許せなかったことはそう実感していながらもその部分を変えることができなかった自分がいたことです。そんな私にとって、彼女との出会いは本当に大きく、心からありがたいと思います。彼女の存在は、何一つ満足のいくような結果が出せずにいた私のこれまでの人生の不甲斐なさを実感させると同時に、自分の生き方をもう一度見直し、今のままではいけないと奮い立たせてくれるものとなりました。自分の意見をはっきり言えない私を否定せずに根気強く理解しようとしてくれたり、私の中の良いところを見つけてくれたりしました。また、素の自分を出すことが得意ではない私が留学生生活を始めてまもなくの頃、まだ遠慮しがちだった私にここはあなたの家で、私はあなたのカナダの母よ、と温かい言葉をかけてくださった時、あまりの嬉しさに涙が出ました。毎日本当の家族のように接してくれていました。そこから私も自分を表現できるようになっていきました。彼女の1分1秒も無駄にしない生き方と人に対する温かい心が私の考え方まで変えてくれました。

また、たくさんの人々の考え方からも大きな影響を受けました。海外の人々と触れ合う機会が多かったことで、一つの物事においても、想像もしなかったたくさんの考え方があることを学びました。たくさんの方の考え方と言っても、意見が合う、合わないというものではなく、新しいものの見方を発見することが出来たように思いました。カナダで一番身近だったホストマザーをはじめ、一緒に暮らしたハウスメイトに学校のクラスメイト、それ以外でも友達になった日本以外の国の人々と関わりながら、日本しか知らない自分に気がきました。授業中に与えられた議題について意見を出し合う時、自分の想像もしなかった意見が出てきたり、多くの友達と会話をしている自分なら出てこないようなことを言われたりすることもありました。もちろん理解が難しいこともあり、国が違うとうちも異なるのかと感じました。でも、それは逆に言えば無意識のうちに日本人らしい意見が自

分の中の常識になっていたことにも気が付くことが出来ました。どんなことにも、これが当たり前だと決めつけず、すべての可能性に目を向ける余裕を持たなければいけないと思いました。そして考え方ひとつで、同じ物事を全く違った見方で見る事が出来ると分かりました。これから先、生きていく中で多くの困難に直面した時、この方法で客観的に自分を見たり、相手の立場で考えたり、物事の解決策を模索したりできる人間になりたいと思いました。

私にとってカナダでの7か月間は本当に貴重で、英語の勉強はもちろん、これからの生き方についても学ぶことだらけの期間でした。カナダで見たものや感じたことを、ただの懐かしい思い出にするのではなく、自分の原動力にしなければいけないと思います。過去には戻ることはできないけれど、自分の目標を再確認した以上、これからの時間を無駄にしないように常に一所懸命でありたいです。

留学という財産

16121047 榊原 未菜

一年前のカナダへの留学を振り返ってみると、私にとってかけがえのない貴重な体験だったと感じます。カナダという異国の地で多くの人たちと出会い、自分の英語力でコミュニケーションをとることで自分自身が大きく成長したように感じます。7ヶ月の留学経験とその成長により自分がどうあるべきか、これからどんなことをしていきたいかということを明確にすることができました。

まず、留学に行く以前は人と積極的に関わることがあまり得意ではなかったのですが、留学先で出会った友人たちのおかげでたくさんの人と知り合うことの楽しさや人とのコミュニケーションの重要性を学びました。人との出会いは自分がない考え方を知ることができたり、刺激を受け自分の成長につなげることができたりと、とても価値あるものだと思感しました。また考えや価値観が違って受け入れてくれる人たちとの出会いで、以前に比べてありのままの自分で人と接することができるようになりました。今では知らない人と知り合う機会や話す機会も貴重なものと考え、自分から積極的にコミュニケーションをとっていくように心がけています。この先もたくさんの人と関わることでひとつでも学びを増やせ

ていけたらいいと思います。

それから、留学経験を通じて物事への取り組み方も変わりました。留学へいくことができたこと、留学生活を無事にやり遂げたことにより自信が身につきました。これまでは何かをするにしても考えすぎてしまうことや、不安と感じれば諦めてしまうことが多かったのですが、今では自分から積極的に動いていくようになりました。何をするにしてもその行動に責任をもつことで失敗することをあまり恐れないようになり、真剣に物事に取り組むことができています。物事に対して受け身になるのではなく、自ら動いてさまざまな経験をする中でそれが自分の糧になると気づいたことが、自分の中で大きな学びであったと感じます。

そして何より将来私が世界に関わる仕事に就きたいと思うようになったのもこの留学がきっかけです。留学を通して、カナダの良さはもちろん、日本の良さにも改めて気づきました。そして他国の人々と話す中で日本に興味を持ってくれている人たちが非常に多いということを知り、とても嬉しく感じました。より日本の魅力を知ってもらいたい、外国について知りたいという気持ちから、今現在日本と世界に関わる仕事をしたいと考えています。帰国してから現在まで、自分が将来何をしたいのかと悩むこともありましたが、そのときにいつも留学生活のことが頭に浮かびました。留学生活を振り返って、文化も考え方も違う他国の人たちとつながることは、自分にとって魅力的なものであると感じました。それに基づいて、今自分の将来について考えることができていますので、カナダで過ごした 7 ヶ月間はかけがえないものだ実感しています。

帰国してから 1 年が経ちますが、留学生活の中で得たものはとても大きかったと思います。大学入学当初は、自分のなかでのゴールは留学へ行くことだと思っていましたが、実際に帰国してから留学はゴールではなくひとつのステップであったと気づきました。今自分の中でまた新たな目標ができましたが、それに向かって前向きに取り組むことができてるのは留学生活での学びがあったからだと感じます。そして自分自身の未来を形づくるきっかけとなった留学を経験できたことは大きな財産だと思います。

帰国してからの1年

16121027 梶田 隼大

前回の『ここはことのは』留学だよりでは自分がアメリカ長期留学で感じた、今の自分の英語と本当の英語との縮めなければいけない「差」というテーマで書かせていただきました。アメリカ留学から多くの人の協力のおかげで無事2月に日本に帰国してから1年が経ちました。この1年間自分の英語力をさらに高めるため、自分なりに様々なことに挑戦してきました。まずは、自分の英語力やアメリカ留学での成長を目で見える結果にするために、英検（実用英語技能検定）の準1級に挑戦しました。1年前に過去問を解いた時は文法パートの4択問題の単語4個全て分からない問題だらけだったり、リスニング問題も1回聞いただけでは理解できなかったりしたのでものすごく合格できるかとても不安でしたが、結果は合格でした。自分のアメリカでの頑張りが証明できて嬉しかったです。

その後も常葉大学にアメリカのクレイトン大学から語学研修生がやって来ると聞いたので自分がアメリカで素晴らしい経験をさせてもらった恩返しをしたいと思い、ホストファミリーをやりました。アメリカ人が自分の家で生活しているというのはとても新鮮でした。2週間という短い間で我が家で滞在し、一緒にお寿司を食べに行ったり、英語で話した経験は自分の英語学習のモチベーションをさらに上げてくれました。

その他にも、高校生の弁論大会でモデルスキットとして英語で劇をやらせていただいたり、常葉大学で毎年開催される英語スピーチコンテストで多くの人の前で英語でスピーチをした経験は自分の英語に自信を持たせてくれました。

家でもYouTtubeを英語で見たり、英語で本を読んだり、英会話のアプリを使って毎日15分ずつネイティブスピーカーの人と英会話をしたりなど自分でできる限り日々の生活の中で英語に触れることの出来るよう努力をしています。

アメリカ長期留学に行く前と行ってきた後で大きく違う点は、英語が自分の生活の中で中心になりつつあるということです。それには2つの理由があります。1つ目はアメリカ留学を通して、自分が英語を勉強していなければ話せなかった

人たちと意思疎通を図れることがどれだけ楽しく、尊いことかということを再確認できたことです。2つ目は、毎日英語を使って生活しているネイティブスピーカーの人の英語と今の自分の英語との差は少しの努力では縮まっていけないと思ったからです。英語を話すことの大変さも楽しさもすべてこのアメリカ長期留学が教えてくれました。まだまだ本当の英語との「差」は大きいと思いますが、毎日少しずつ努力していき、この差を縮められるように頑張ります。

留学を終えてからの1年

14122079 曾根田 成

2018年3月半ばに留学から帰ってきてもうすぐ1年が経とうとしている。この1年を振り返るとすべてが自信と行動力にみなぎっていた1年ではなかったかなと思う。それは留学が私にくれた産物だと自負している。

この1年間「留学していたおかげで・・・」と感ずることが多々あった。その中でも特に留学を強みに感じた体験を挙げたい。

それはなんといっても「就職活動」だ。後輩の中には「とりあえず留学しておけば、就活に有利だ」なんて考えている人がいるかもしれない。しかしみんなに勘違いしないでほしいのは、ただ留学してきただけの経験は就職活動においてはさほどアドバンテージにならないということだ。私は3月に帰国した時点で就職活動がすでに始まっていた状態だった。周りの4年生はエントリーシートの話や合同企業説明会の話をしていた。そんな中、自分だけが就職活動の情報が全くないことに不安を感じていた。しかし「遅れをとっている」とネガティブには考えなかった。なぜなら、どこからともなく「なんとかなる」という思いで溢れていたからだ。ここで私が考える「留学をしていた強み」は、ただ単に自己PRや志望理由の内容が周りの人よりも濃いということではない。むしろ大手企業では、留学をしていたことは「普通」の話題にすらなっている。今の時代、留学自体は突拍子もないことではないのだ。私が伝えたいことは、留学で培った「壁を乗り越える力」が「面接中に話す態度」や「就職活動に臨む姿勢」に自然と反映されてくるということだ。半年間幾度となく訪れた試練は就職活動よりも乗り越える

のに時間と労力と、何より勇気がいるものばかりだった。それ故、帰国後の就職活動はそもそも母国語で会話ができるというだけでかなり自信につながった。

振り返って考えてみれば、留学中は「何とかなる」「何とかしなければいけない」という状況があまりにも多すぎて、自然とそういった考え方や姿勢が身についていたのかもしれない。留学前の自分は誰かに頼ってばかりで、自分の力で一から何かを成し遂げることをしてこなかった。しかし、母国語が通じない海外で半年生活するという体験は予想以上に自分を成長させたと感じる。「銀行で口座を作る」といういたって簡単なことも、英語で手続きをしなければというだけで当時は足が重かった。

ただ現地に行って、授業を受けるだけなんてもったいない。より自分を成長させるために、いろんなレストランに行ってみたりいろんなアクティビティに参加して「勇気を出さなければいけない状況」をたくさん作ってほしい。そして勇気を出して何かを成し遂げることに慣れていってほしい。それがどんなに小さいことからスタートしても、やがて就職活動なんて小さいことに感じてしまうような考え方が身についているはずだ。そしてその先に「英語力の向上」はたまた「人間力の向上」を期待できると私は考える。

留学を「英語力の向上」で終わらせることなく、「挑戦していく力」や「自信」などのエネルギーにもつなげていき、その先の日本での活動に反映させていくことを願う。

自分への挑戦

15122056 山田 真愛

約半年のオーストラリア留学を終えて、一年が経過しようとしています。留学生活を終えた現在、留学生活で鍛え抜かれた積極性と英語力に自信を持ち、様々な挑戦をしています。

一つ目は、英米語学科主催のスピーチコンテストです。人前に立って英語でスピーチをする勇気も自信もなかった留学前の私にとって、スピーチコンテストの参加は大きな飛躍となりました。一度は参加することに躊躇いを感じましたが、

自分の力を信じて卒業前の集大成として挑戦したいと心に決め、出場を決意しました。「日常生活でのストレスの乗り越え方」というテーマに沿って、留学中に身につけた言語ストレスの乗り越え方について発表しました。私は、自分自身の能力不足を痛感した時にストレスを感じる事が多く、特に留学中に現地の方と上手くコミュニケーションが取れなかった、言いたいことを英語で伝えられなかった際に、度々ストレスを感じていました。そして、自分の英語力に自信がないことが原因でストレスに感じてしまうことに気づき、日常生活に英語力上達の工夫を取り入れました。具体的に、英会話クラブやボランティアに参加したり、大学附属病院のフードコートにいる方に話しかけたり、授業の時間に加え、身近なコミュニティを活用して色々な方と対話をする習慣を身につけました。次第に会話をするのが楽しくなり、誰にでも話しかける積極性と英語力に磨きがかかり、不安やストレスが自信へと変わっていきました。そして、スピーチコンテストでは、英語でスピーチをする初めての体験に少し動揺しましたが、よい緊張感で自信を持って発表することができ、大満足に終わりました。スピーチコンテストに勇気を持って挑戦したことで、経験がさらなる自信となり、新たな成長に繋がりました。

二つ目は、外国人観光客をもてなすボランティアの参加です。このボランティア活動では、豪華客船に乗って清水港を訪れた外国人の観光客を、小学生が日本文化でおもてなしをして迎えるため、その補佐役として3日間活動しました。書道や清水探検ツアー、サッカー、射的など、グループごとおもてなしの内容は異なりますが、どのグループもどうしたら楽しんでもくれるのか、喜んでくれるのか、を考えながら入念に準備を進めていました。この活動の難しい所は、自分たちでお客さんである外国人観光客を集客して、日本文化を体験してもらうことです。しかし、まだ英語が不慣れな小学生にとって、自分から積極的に英語で話しかけても、質問や説明に返って来る相手の返答を聞き取ることが出来ず、なかなかお客さんを集めることが出来ずに苦戦していました。そこで、担当していた書道・折り紙チームの集客のため、リスニングの部分だけ私が担当して訳し、小学生はそれに対する返答を自分で考え、英語で返答できるときは見守り、わからない時には英文を教えて、外国人と小学生の間に立ってコミュニケーションの手助けをしました。準備を重ねて用意した日本文化のおもてなしを、自分たちで呼び込ん

だお客さんに喜んでもらえた時にはとても嬉しそうでした。留学で鍛えた英語力が人の役に立ち、ボランティアに挑戦した3日間は新鮮で、様々な新たな視点に気づくことが出来た素晴らしい経験になりました。

時は驚くべき速さで過ぎ去り、留学を終えてあっという間に一年が経ちました。4月からは社会人として仕事が始まりますが、新しい環境でも留学で得た様々な経験や知識を生かして、逆境に挫けることなく常に「自分への挑戦」の姿勢を忘れることなく生活したいと思います。

During a Storm

16121009 Kota Ushio

Being exposed to different cultures, languages, food and people, I was in trouble like a kite flying in a stormy sky. I remember that I was totally at the mercy of the violent weather while I was in Canada. However, after gaining awareness of three things, I have been going against strong winds with determination to be knowledgeable, unambiguous and sensitive to my words.

“Being able to speak English is excellent! You must be intelligent”. I heard this cliché over and over again. We often associate people who can speak English with smart people, yet I always doubt it because it is not true. What makes me think that way is in spite of being capable of communicating in English, some people are frequently ignorant of everything except English. As for me, I have knowledge of English grammar and vocabulary, so I can understand what people say in English and respond to it. However, I had little confidence to say I was the type of person who matched this phrase. When I was asked to explain Japanese culture during a class in Canada, I did not know about it at all and said nothing. In other words, I could speak English, but I had nothing to tell through it. This was my first awareness. I was sitting and nodding next to my Spanish friend who was

talking about his own culture and he then asked me to tell about my own. But I froze because I did not come up with anything to say. I was completely ignorant, so I needed to change something. Since then, I have been focusing on what I want to tell or be able to talk about. Needless to say, this has made a big difference to me. I have become able to gain a lot of knowledge, which allows me to see things from a different point of view. In addition, the more I am aware of things that I do not know, the bigger my desire to obtain knowledge becomes. It is being conscious that I am ignorant that drives me to be knowledgeable.

There is a Japanese word which we repeatedly use to describe novel or surprising things: ‘Yabai.’ We say it in order to portray so many situations that it has become a convenient word for us. Although it is a useful expression, it leaves ambiguity. What I mean is that once I say, “Yabai,” I stop thinking about why it got my attention, why it is beautiful, how come I dislike it and so on. This expression made me realize that I disregarded my inner voice. I was chatting with my Canadian friend who studies Japanese and he told me that Japanese people often say, “Yabai,” but he did not understand how to use it. Because of that, I thought about it and tried explaining how to use it, but I could not find the right way to elucidate. A few days later, when I was preparing for my presentation, where I was supposed to tell about my favorite thing, I wrote down Yabai as a memo on the paper. After that, I suddenly wondered why I wrote it down and tried verbalizing it. Then I had an awareness. Shortly after I used ‘Yabai,’ I did not dig into what made me use the expression, so it is ‘Yabai’ that stops me from expressing my ideas and thoughts. As a result, in order to avoid having a vague idea, I never use ‘Yabai’ to describe things. Instead, I always try to verbalize my inner thoughts because continuing to ask myself why clarifies my opinions and ideas.

Being sensitive to words is what I have learned in Canada because I

IV. 1. 英語圏

believe in the power of words. Every now and then, we are moved by words, and I am one of those people who is preoccupied with words. I went to see my teacher in Canada to say goodbye and express my gratitude after the last class. Then she said to me, “I hope you will always believe in yourself and step outside your comfort zone. There are lots of unique things waiting there for you”. Even though almost a year has passed since I got the beautiful phrase, it is unbelievable that I still remember every single word that she told me. Therefore, I believe that words have the power to give an impact to people’s lives. As I was impressed with the power of words, I have been careful of my words and have tried to enrich my vocabulary so as to move people’s hearts. I sincerely think that the more I expand my vocabulary, the better chance I get to impress others.

A kite which was at first exposed to the foul weather with a blast of wind is now about to get out of the extreme weather by knowing a lot of things, clearing up ideas and paying attention to words. Having stayed in Canada for seven months, a lot of things and people brought me unique questions that I enjoyed to solve. They are all challenging, but I dealt with them by stepping outside my comfort zone.

留学便り

私の成長

17121137 山崎 あゆみ

2018年8月15日からエバンズビル大学で留学生生活を始めてから5か月が経った。時間が経つのが本当に早いと感じているが、そう思えるのも留学生生活が充実しているからではないだろうか。正直、最初から楽しめていたわけではなかった。私は、もともと心配性な性格で出発する前から楽しみより不安のほうが大きかった。そんな気持ちでアメリカに着くも、1週間はご飯もいつもより喉に通ら

ず吐き気とも戦い、留學生活なんて最後まで終われないかもしれないとさえ思っていた。しかし、たくさんの人としゃべっていく中でそんな不安もいつのまにか消え、楽しめるようになっていった。留學生活は、楽しいこともたくさんあるが何度も壁にぶち当たることもあった。一部に過ぎないが、私の経験をここで伝えたい。

約3か月が経った頃、授業内で即興1分間スピーチというものがあった。お題は一人一人異なり、お題をもらってから1分間だけ考える時間があり、その後みんなの前でスピーチするというものだ。何事にも準備をしっかりとしないと、うまくできない私には、たった1分でさえつらかった。よりによって、くじ引きで私が1番に当たってしまい、予想通り全く喋ることができなかった。確かに自分の出来なさにショックを受けたが、前の私とは違い自分のミスにそれほど落ち込まなくなり立ち直りが早くなったのだ。そして、次の日に違うお題でもう一度やった時にはしっかりスピーチすることができた。アメリカに来てから、失敗は日常茶飯事で当たり前になった。そのおかげで、前より自分は少し強くなったと思った瞬間だった。とはいえ、自分は成長しているのかと考えた時期もあった。しかし、セッションの終わりに毎回行われる TOEFL では得点が確かに伸びており、特にリスニングがとても伸びていたのを知った時は自分の自信につながった。

休暇中は、グローバルファミリーにお世話になった。私のグローバルファミリーは中国人の方で私を温かく迎え入れてくれた。アメリカで中国の文化も知れるというのは、多国籍国家であるからこそその貴重な経験であった。彼らは日本のことが大好きだと言ってすごく興味を持ってくれ、日本のことをたくさん褒めてくれた。日本のドラマやアニメも数多く知っていて、私の知らないものまで教えてくれた。ある日、日本の労働環境の話になり私が知っている限りの情報を使って会話をした。しかし、どうしても一点だけうまく伝わらず相手を困惑させてしまった。旦那さんは、異文化のことを説明するのは難しい時もあるから大丈夫だよと言ったが、奥さんは諦めずに私の伝えたいことを理解しようとしてくれた。その後、何度も説明をした結果、うまく伝わった。その時みんなでハイタッチするほど喜んだ。自分の言いたいことを、うやむやにならずにしっかり伝えることがこんなにも嬉しいとは思いませんでした。

留學は、語学力はもちろんが人間として成長させてくれるものだと思う。私

は、失敗でクヨクヨする自分が嫌で仕方なかった。20年間ずっとこの性格で生きてきたのだから、約半年の留学で180度変わるとは最初から思ってなかった。しかし、それが少しでも変わったということは大きな成長であると思うし、留学の価値は自分にとって大きいものだ実感した。また、留学を通して日本に帰って挑戦したいことや、将来の自分の理想像が明確になった。留学は通過点に過ぎないのだから、学んだことを日本に帰ってからの生活に活かしていこうと思う。

留学が教えてくれた大切なこと

16121079 徳原 有紀

私は今、カナダのビクトリアという町に留学しています。カナダの南西部に位置し、自然が豊かでとても住みやすい町です。私にとってこの留学は初めての海外で不安と期待でいっぱいでした。ホームステイや学校、外国人のクラスメイト、全てのことが新鮮で毎日学ぶことばかりです。その中で、留学しなければできない貴重な体験をたくさんし、大切なことを学びました。

一つ目は、英語を学ぶ楽しさです。もともと英語は好きでしたが、勉強していて楽しいと思うことはあまりありませんでした。留学に来て、一瞬にして全ての言葉が英語に変わり、初めは理解するだけでも大変で、自分の言いたいことを伝えることが出来ない時もたくさんあり、英語力の無さを痛感しました。しかし、ホストファミリーやボランティアの人たちと話し、繰り返し練習する中で少しずつですが、自分の成長を感じることが出来ました。自分が話した英語が通じた時は、私も英語が話せるのだなと実感し、英語を勉強することが楽しいと思えるようになりました。今では外国人の友達も増え、日常会話を楽しんだり、週末一緒に出掛けたり、今までの自分では出来なかったことが出来るようになり、英語を話せるだけでこんなにも世界が広がるのだなと改めて実感しました。英語をもっと勉強したいと思えるようになりました。

二つ目は、他国の文化を学ぶことです。私は留学しているカナダで沢山の行事に参加することが出来ました。ハロウィンには、近所の家に仮装をして“Trick or treat!”と言いに行ってお菓子を頂いたり、クリスマスは、ホストファミリー

のクリスマスパーティーに参加させて頂いたりしました。自分で見て感じて体験することで、本場の雰囲気や日本との違いを明確に比べることが出来ました。他にも、全てことに感謝をし、家族や親戚が集まって食事する Thanksgiving Day や第一次世界大戦以降の戦争で亡くなった軍人や退役軍人を追悼する Remembrance Day などカナダ独自の行事に参加し、今まで知らなかったカナダの伝統や時代背景にも触れることができ、とてもよい勉強になりました。日常生活の中でも、カナダの人の習慣や性格の特徴、食文化など留学しなければわからなかったカナダの文化を知ることが出来ました。また、他国の文化を知り日本を客観的に見ることで、気づかなかった日本の良さも実感できました。自分の国とは違った文化を楽しみ、知ることも留学では大切なことだと思います。

三つ目は、人との繋がりでです。ビクトリアに來たばかりの頃は、友達が一人もいなく、不安ばかりの毎日でした。しかし、今のクラスメイトや友達、ホストファミリーと会ったことで大きく変わりました。毎日一緒に生活し、勉強していく中で、互いに支え合い、切磋琢磨してとても良い関係を築くことが出来ました。一人では出来なかったことも、仲間と協力することで成し遂げることが出来ました。友達がいたからこそ、勉強することや学校に行くことが心の底から楽しいと思えました。「英語がもっと上手になりたい」という一つの目標に向かって努力し合えたことで、国籍や言葉、年齢は関係ないと改めて気づかされました。三か月しか一緒にいなかったクラスメイトも今となっては、私のとても大切な友達です。ホストファミリーも、宿題でわからなかったところを丁寧に教えてくれたり、週末にはスポーツ観戦や公園、ショッピングなどに連れて行ってくれたり、本当の家族のように接してくれます。毎日笑いが絶えなくて、とても楽しい家族です。今、私が楽しく生活できているのは、たくさんの人の支えがあってこそだと実感しました。

最後に、自分から行動することの大切さです。私が通っているのは、英語を勉強したい人が通うビクトリア大学内にある施設です。私が思っていたよりも日本人の数が多く、簡単に日本語を話すことができます。日本人同士で日本語ばかり話したり、ホストファミリーと話さず、ずっと部屋にこもったり自分に甘えて生活することはとても簡単です。しかし、それは日本にいたことと全く変わらず、英語を勉強するチャンスや人と関わる楽しさを逃してしまっていることになって

しまいます。英語を学ぶ機会は、海外に行けば山ほどありますが、その機会を作ったり、見つけたりするのは全て自分次第です。出来るか出来ないかが問題ではなく大切なことは自分がやるかやらないかだと感じました。私はこのまま自分の努力不足で英語が不十分なまま帰国しないために、積極的にたくさんのことに挑戦し続けたいです。

その他にも、留学を通して学べる大切なことがたくさんあります。私にとってこの留学は、英語を勉強するだけのものではなく、英語以外のことも多く学べることができ、自分と向き合えるとてもいい機会でもあります。新しいことに挑戦し、自分を変えるのはとても大変で、勇気のいることですが、自分の弱い部分見直し、失敗を恐れず、勉強することを楽しみながら日々成長していきたいです。

カナダ留学のメリット・デメリット

17121111 増田 翔馬

9月からカナダに留学して約4カ月が経ち、時間の流れをととても早く感じます。ビクトリアに4カ月滞在して、自分の感じたカナダ・ビクトリアでの留学のメリット・デメリットをまとめてみました。メリットのとして、カナダは世界中からの移民も多く、英語が第1言語ではない人口の割合も高いので、英語があまり話せない留学生に対して優しく丁寧に接してくれる人が多いです。又、治安がととてもいいので、安心して留学生活を送ることができます。しかし、2018年に大麻が法的に合法になったため、夜のダウンタウンでは、大麻のにおいを時々感じます。そして、ナイアガラの滝やカナディアンロッキー、ウィスラーやイエローナイフ観光地が豊富にあるので、1カ月間の休みでこれらの観光地を訪れている人も多くいました。気候は静岡県とよく似ていて、寒くても氷点下を下回ることはなかなかありません。比較的過ごしやすい環境であると思います。その中でもビクトリアの人々がとても優しいことが最大のメリットであると思います。特に横断歩道で車が止まるのを待っていると、必ず1台目の車が止まってくれます。日本ではほとんどあり得ないことなのでとても驚きました。次にデメリットを挙げていきます。大きなデメリットとしては日本人がととても多いことです。ビクトリアは

英語圏の都市と同様に日本人に人気な都市であると感じます。特に春休みや、夏休みなどの日本の大学の長期休暇中はより日本人の数が増えます。なので、日本語を話すことが簡単にできてしまうので、英語で会話するということを努力する必要があります。気候面では、静岡県によく似た気候と先ほども言いましたが、冬に入ると長い雨期に入るため、雨の日が続きます。気温がそれほど冷えないので、雪が降ることはありませんが、湿度の高い日が多くなることによって、活力が起きない日があることも時々あります。また、これは人によるかもしれませんが、アメリカと異なり、ホームステイでの生活になるので、自分から行動しなければ英語を話す機会はとても少なくなります。逆に、現地の人と共に生活するので、普通では味わえない体験をできます。自分は3人の子供たちと共に生活しているので、週末にはよくピクニックなどに出かけたりします。自分から行動を起こせば、とても充実した留学になります。

カナダには多くの自然や文化などのたくさんの魅力があり、多くの日本人留学生が訪れる場所です。日本人が多い環境はデメリットに感じてしまうかもしれませんが、留学するにはとても良い場所だと思います。

「英語」以外大切なもの

17121047 木宮 伽音

「英語力を向上させたい！」留学前、私の頭の中にはただそのことしかありませんでした。高校時代にオーストラリアに3ヶ月留学していたこともあり、留学に対する不安はそんなになく、現地での生活にも比較的すぐに慣れました。いざビクトリア大学に来てみると、本当にカナダなのかと疑ってしまうほど沢山の日本人がいました。私は Uvic 生活初日にそのような感想を持ちました。

その後のクラス分けテストで私はいきなり上のレベルのクラスでした。日本ではそんなに出来ないのになんで... という不安と戸惑いでいっぱいでした。常葉の先生からはこの結果に対して「努力が報われたんだね。頑張ってたね。」というメールが来ました。しかし、いつもの私だったら普通に嬉しいし素直に喜べるのに、そのときは何故か変なプレッシャーを感じたのを今でも覚えています。

IV. 1. 英語圏

そしてクラスでの授業が始まりました。私のクラスは日本人が他のクラスに比べて少なくほぼ全員が年上でした。そのためクラスに馴染むのが大変で時間がかかりました。授業内容は reading, speaking, grammar, writing などがメインです。中でも私が一番苦勞したのは discussion class でした。この授業では1組3～4人のグループになって毎週グループ内でリーダーが決めたテーマと用意した資料に沿って30分間討論していくというものです。社会問題をテーマに行っていたため、最初の頃、私は英語力よりも自身の知識の無さに悩まされました。元々社会問題に対して何1つ興味もなく、日本のことですらほぼ無知の状態でした。発言したいのに何も知らないせいでちゃんと参加できない、指名されても分からないと誤魔化してちゃんと回答出来なくて他の人達からバカにされるというようなことがありました。さらに酷い時は私のグループが私以外全員韓国人居たこともあり、韓国語で話を進められてしまいました。担任の先生からも発言するようにと注意されてしまい、無知な自分がとても恥ずかしく悔しかったです。

そのような屈辱を味わってから私は家で空いた時間を使って日本国内外の社会問題について調べ、自分の意見もまとめるようにしました。それから段々と自ら発言できるようになり。グループの皆にも褒めてもらえるようになりました。「積極的な言動」と「きちんとした知識」が自分にとって大事なのだと気付かされました。テスト勉強や課題と両立しながらだったので正直とても大変でしたが、カナダに来てからの3ヶ月の中で自分自身を変える大きなきっかけになったと思うので後悔は全くありません。

最初の ELPI が終わって数週間が経ちました。クラスのほとんどの人は母国に帰ってしまいました。クラス全員個性豊かで、私が在籍している人間力セミナーのクラスのようなものでした。土日に色々な所へ遊びに行ったり、お泊り会をするなどプライベートも充実していました。学期末の farewell party で皆との別れが辛すぎて涙が止まりませんでした。多分、半生分泣いたと思います。ただ、出来ることなら、もっと早くから仲良くなって沢山遊びたかったです。

もうすぐ新しい ELPI の授業が始まります。7ヶ月の留学生活も早いもので折り返し地点にいます。新しいクラスでは前のクラスよりも積極的に発言・授業に参加してさらに成長できるようにしたいです。そして留学を終えて帰国した時に、留学してよかった、ひと回り成長できたと思えるように残り半分を悔いなく過ご

したいです。

Vacation in America

17121096 Kyohei Nimura

It has been four months since I came to America, and I have gained many experiences through my study abroad like making friends and facing different cultures. Out of my experiences in traveling to other places, I have gained many benefits honing both my English skills and worldly perspectives. I visited these five cities in the four months, New York, Boston, Chicago, Los Angeles, and New Orleans. Out of all these places the Boston I went to was a trip during a school weekend from the University of Evansville, where other Tokoha University students went with as well. I visited Boston to join the Boston Career Forum, a job hunting for mainly bilingual students. Through this essay I want to introduce my four months in the United States by telling you where I visited, what I did, and how I spent time in each place.

First, in October I hit my first break called fall break which was in total a four-day break. I visited New York with another Japanese student and international students. This was my first opportunity to go out of the state of Indiana in America. Because it had only been two months since I had come to and lived in America, I had lots of problems like English communication with my friends and doubts to go to a dangerous city such as New York when I made decision to go there. As soon as I arrived at New York, I saw a terrible traffic jam in front of the New York Airport and heard incessant car horns, which made me even more anxious. I noticed by spending time in NY how different it was from what I thought, NY had a lot of interesting things, for example the theater which I watched The Phantom of the Opera in had delicious food, and many shops. The most impressive place I visited

IV. 1. 英語圏

was the Statue of Liberty. To get close to the statue with the ferry I had to move from other near islands to the island of the statue or from the statue to other islands.

Second, I experienced a job hunting in Boston during November eighth to tenth. I had never heard the event until my friend, John, asked me if I wanted to join it or not. This event called Boston Career Forum was targeted for bilingual speakers who were studying in America or students who were current international students. These forums when I researched on them, hosted events all across the globe, for example in London, and even in Japan every year. In the event hall venues, companies opened their own booths to let students know about their company through their presentations, and then if a student gets interested in a company after the presentation, he or she can give a resume to the company and talk with or ask questions to employees to show them that he or she wants to enter their company. If the company finds someone that they want out of the resumes turned in by students and they will proceed in giving them a job interview to the students. That a student passes the interview means he or she can get a qualification to work at the company. Companies basically wanted juniors or seniors that could work next year or two years later, so sophomores like me were out of targets of companies. However, I could land two job interviews for an education and hotel company. One was in English, and the other was in Japanese with other students at the both time. I was nervous about the interview before that; however a few questions my examiner asked me were totally easy to answer not like a Japanese interview, for example “What thing in Japan do you miss the most?” or “What did you do the best?” As a result, I failed in the interview, but as a result of going to Boston I was able to have an amazing opportunity to practice job hunting in the future in Boston or Japan.

Third, I spent Thanksgiving Day, from November twenty first to twenty fifth, staying at my roommate house in Chicago. Because when I met my

roommate and his parents for the first time when he moved into our room of UE dormitory, I told them that I wanted to go to Chicago, and he called his parents to accept my visit and invited me to his house. His house was so far away from UE, which took about six hours by car. On the first day, my roommate and I visited a church-like building which had some religious things inside and then went to the NBA game which his mother booked downtown. Around six we parked his car and had dinner near the game stadium. After dinner we went to the stadium and entered. I hoped I could see a close game, but I couldn't. Even though it wasn't a close game, it was exciting and moving for me because my wish since a junior high school student came true. On the second and third day, we had parties with his parents' friends and his friends. We visited different houses each day and had dinner with his friends. This seems enjoyable for readers, but for me that time was tough because their conversations were so fast that I couldn't join them. I almost only listened to them. I had hard time with not only the speed but also the peculiar expression in speaking English. I became more used to the speed at which they spoke and learned the responses that I can use in daily normal conversations. Through this break, I was merely exposed to English and I felt I would challenge to improve my English skills as a student for the rest of my time at UE.

Forth, in the winter break I left Evansville for Los Angeles, California, with other Japanese friends of mine by around five hour airplane flight. We wanted to save money as much as we could for the reason why we would spend lots of money in Los Angeles especially by going to Disney Adventure and Universal Studio Hollywood, so we made an appointment of our rental house by the site Airbnb, in which we can book a house during even a short term with saving money and staying at a neat and convenient house. Actually, our house we reserved in the site was better than we had expected. On the first day in California we walked around near Hollywood with sometimes dropping in a souvenir shop and food stores. I liked the Death

Museum and iced earl grey tea I bought on the way back to our house on the first day. After we were back to our house and took a rest, then we went to the Griffith Observatory to see the sun go down. We saw the sunset for only ten to twenty minutes, but that was the most beautiful in my life. On the next day we went to Disney Adventure in California. Because there were all different attractions and goods from those of Tokyo Disney Land at the next to Disney Adventure, we picked out that one. All of that was indeed fantastic: the structure of roller coasters we took was attractive and interesting, and foods were delicious and a little different taste from Japanese ones. On the next day of Disney we were in Universal Studio Hollywood. Compared with the distance from our house to Disney, that was much closer than Disney for twenty- minutes-ride by car. According to my friend, USH attractions were almost as same as those of Japan. Fortunately, we could ride ten attractions in only one day without waiting for in a long aisle. The way from the parking lots to Universal Studio Hollywood had lots of shops and food stores. We could enjoy not only USH but also the shops on the way to USH with shopping and having dinner. On the last day we were at Santa Monica Pier, a beach, for sightseeing and taking a rest of two amusement parks. The beauty of the sea and the combination of the sea and sunset were enough to get relaxed for us. We also had fun with entering the sea and coincidentally meeting our friends of UE.

Fifth, after a visit to California we traveled to New Orleans, being famous for distinct music like Jazz. In New Orleans we basically went shopping by going to its downtown, and when we got tired of walking around the downtown or found some delicious foods or good stuffs, we dropped in the shop. In one of my unforgettable memories I was impressed at having the Beignet, which looks like a triangle donut on a sweet white powder, and the inside is so soft. Unlike other American sweets, that and that powder are not too sweet, and that matches with a bitter cafe latte that is also famous in the shop I ate the Beignet. I like the donuts in foods I had

in New Orleans the best, yet I had other flavorful foods there. My second-best food in New Orleans was the Croissant in the cafe called PJ's coffee. There are three flavors there: plain, chocolate, and almond. I ate plain and chocolate croissants with the espresso, which totally costed only 6 dollars, and also those taste was the best ever in my life. On the third day dinner I ordered basil pasta with shrimps and breads. Actually, I am not good at seafood dishes, but even a person who doesn't like seafood like me will be able to enjoy that pasta. After eating pasta I attached breads to the rest of the sauce of basil taste and had that. To make the trip to New Orleans enjoyable you should get knowledge of Jazz as I introduced that New Orleans is famous for Jazz in the first sentence of this paragraph. I'm not interested in music, especially Jazz, so I didn't feel anything about that. Many people play music instruments in everywhere like in a bar or a street, and you can listen to that songs without fee.

To sum up, during four months, while I have lived in America, I have obtained a lot of experiences by traveling in America, living in out of Evansville with many troubles, and facing difficult situations through my travels. The first trip in America made me nervous and it was a little tough time due to the lack of my English skill and experience of a travel in America. In the Boston journey I got an opportunities of a job interview that would be my benefits of my future job hunting. During the Thanks Giving Day I went to Chicago with my roommate and stayed at his house. As a result, that became a regrettable memory because I couldn't participate in conversions between native speakers, and I did only listen their talking, but this visit definitely made my English skill improve. In early of winter break I was in Los Angles with other Japanese friends of mine and visited many places that were famous in LA such as Disney Adventure, Universal Studio Hollywood, and the Griffith observatory. As the last of my trip I went to New Orleans, which was famous for especially Jazz, and there I found the best sweet, the Beignet, which was a food like a donut with white powder, in my life.

日本とカナダに住んでみて

17122074 山口 萌子

ずっと夢だった留学生活を送り私が感じていることは、留学は語学を学ぶ為だけのものではないということです。現地の人たちが話す英語はとても流暢で、聞き取れなかったり、知らない単語ばかりであったりと、自分に苛立ち、落胆することが多々あります。留学したら簡単に語学力を伸ばせるなんて思っていませんでしたが、自分の成長が感じられない時は苦しいです。そんな時、周りを見渡すと、綺麗な景色、目が合えば微笑んでくれる人たち、レストランで朝食を楽しんでいる人たちが目に入ります。多くの人が幸せそうで、人生を心から楽しんでいるように見えます。バスに乗車した時には、車いすや乳母車を持った人が乗車しようすると、椅子をたたみ、全員で迎え入れようとする姿勢や、子供が乗り込むと自然に席を譲ろうとする姿が見られます。このようなカナダの人たちの姿に、自分も少しずつでもいいから成長していこうと励まされます。カナダの人たちのこういった、周囲の人に対する思いやりや、生活を自然体で楽しんでいる姿勢は日本人が見習うべきところだと感じます。

また、感謝の気持ちを込めてチップを払うことも大切な文化の一つです。日本では馴染み薄いですが、カナダではチップを払うことはマナーの一つです。従業員とお客さんが対等の立場で接し合っているからこそ、サービスを受ける側は感謝の気持ちを込めてチップを渡します。また、多くの人が働きながらのコーヒーやお菓子を楽しんでいます。日本人の私からすると、就業中にそんなにリラックスして大丈夫なのかと心配になりますが、その光景は可愛らしくお茶目で、仕事を楽しんでいるようにも見えます。そして、カナダの人は、日本に暮らしている人より余裕があるように見えます。流行に流されず人は人、私は私、という考えをしっかりと持っていて、一人一人が自分らしく生きています。ハロウィンやクリスマスなどのイベントも盛大に祝い、大切な人たちとの時間をゆっくり楽しみます。簡単なようで実際に行うことは難しい“日々を楽しむ”という気持ちを感じられ、私自身も前向きな気持ちになることができました。このようなカナダ特有

の文化や風俗習慣を、同じように日本に取り入れることは難しいかもしれませんが、こう言った文化や制度を通して、私は変わることができました。以前よりも自分に自信が持てるようになり、何より毎日が楽しいです。

自分の知らなかった世界に來られたこと、今まで知らなかった人に出会えたこと、世界は本当に広いのだと感じられたこと、この留学で感じられたことすべてが私の宝物です。家族、友達、私に関わってくれた人たちへの感謝が尽きません。この気持ちをただ心に留めておくのではなく、これからの自分に生かしていけるように成長していきたいです。

日本を伝える

17121139 山本 妃紗

私がアメリカ留学に來て最も驚いたこと、それは多くの外国人が私が思っている以上に日本に興味津々だったことです。アメリカには日本を感じられる場面が数多くあります。例えば、ショッピングに行けば、日本語が書かれている服や日本のアニメのグッズが売られていたり、日本食専門のレストランがあったり、大学の学食にはサラダコーナーに豆腐があったりします。そして、日本にとっても興味を持ってきているんだなと感じられる場面も多々あります。私が SNS で日本食の写真を投稿した時、多くの外国人が、「美味しそうだ！これはなんて料理なの？」、「私は日本食が大好きだから今度一緒に食べたい！」などと返答をくれました。また初対面の人と話をする時、自分は日本出身だと伝え、「日本はとても綺麗な国だと聞いているよ、1度行ってみたいんだ！」、「日本には、本当に忍者がいるの？」など、とても話が盛り上がりました。私は留学に來る前、外国の人達は全く日本のこと知らないだろうし興味もないだろうと、勝手に考えてしまっていたので、とても嬉しく感じました。それと同時に、外国の人達により詳しく日本のことを伝えるために、もっと日本の伝統的な文化や風習などを学んでおくべきだったと少し後悔もしました。留学に行く前にこの『とこはことのは』を読んでいる皆さんには、留学先に行く前に日本について深い知識を身につけておくことを強く推奨します。それらの知識は必ず外国の人達との会話のタネ

となり、大きく大きく盛り上がっていくでしょう。

アメリカでの多くの経験の中で、外国の人たちは日本に興味があるんだ、と私が一番感じた時は毎年 11 月に行われるインターナショナルバザーです。このイベントは他国から来た生徒達が自分たちの母国のブースを作り、お客さんに紹介する、と言ったものでお客さんは生徒を含め 200 人以上来るとも大きな行事のひとつです。日本のブースは大盛況で、たくさんの人達が来てくれました。中でも折り紙で折られた手裏剣や花、鶴が人気ですぐになくなってしまったり、折り紙と一緒に折るコーナーでは人だかりができてしまうほどでした。インターナショナルバザーが終わったあとも日本のブースに来てくれたみんなが、折り紙を部屋に飾っているよ、と教えてくれたり、授業用ファイルに挟んでいてくれたりしていて、とても嬉しかったです。このイベントのおかげで、外国の人達の日本への関心がより深くなったと感ずることが出来たので、私はとても貴重な体験ができた満足しています。

私の留学生活も折り返しを迎え、残り 4 ヶ月となりました。留学を通して様々な国の人と関わりを持ったり、文化を共有することができています。さらには日本の良さを再確認することもできました。これからも多くの人と関わりを持ち続け、日本の良さや伝統、文化を発信していけたらいいなと考えています。さらに、日本では体験出来ないようなことを今よりももっと沢山経験して、成長して帰国できるように頑張ります。

Small Opportunity から Huge Opportunity へ

17121140 渡邊 花音

私は留学する前から、「絶対日本語なんて使わず、英語をなるべくたくさん使ってみせる。そして、ネイティブの友達を作ってやる。」と意気込んでいた。日本人とでさえも英語で話していれば何か小さなチャンスをつかめる と思っていた。しかし、実際は私の予想とは違うものだった。ビクトリア大学で勉強していて、確かに授業を英語で受けているし、家に帰ればホストマザーとも話しているが、それでも私にとっては英語に触れる時間が少なく、物足りなさを感じた。

そこで私はネイティブの友達を作って、英語を話す機会を少しでも増やそうと決めた。それと同時に『毎日1時間以上はネイティブとしゃべる』という目標を立てた。

実際は、ネイティブの友達を作ることは予想していたよりも遙かに難しかった。それどころか、ホストマザーや先生以外のネイティブと話すことですら難しかった。私は当時、目標を立てたにもかかわらず何をしたら良いのかわからなかったが、その後、ネイティブの友達を作るということに焦点を置くのではなく、様々なことに挑戦しつつ、ネイティブと話す機会も増やすということに焦点を置いた。このように現実性のある目標を立てることによって私のモチベーションが上がり、いろいろなことに挑戦するようになった。例えば、ネイティブがたくさん参加するイベントにホストマザーと参加してみたり、一般の人たちが応募しているボランティアにダメもとでお願いしてみたりした。また、夜のパブに行ってみたり、少し小さめのカフェで折り紙教室を開いてみたいしたりした。ボランティアやイベントでは、一度では言われていることが理解できなかったり、何度も失敗したりしたが、ビクトリアの人たちは本当に優しく、失敗だらけの私に優しい声を掛けながら何度も何度も教えてくれたし、こんな私にたくさんお礼を言ってくれた。夜のパブや折り紙教室では、私が日本人だという理由であり良くない人たちに絡まれたりもしたし、「留学生はめんどくさい」という意味のことをわざと私にはわからない表現で言われたりもしたが、このような不快で悲しいことよりも楽しく嬉しいことの方が多かった。折り紙教室では、私のために少し大きめの席に座らせてくれるカフェの店員さんや日本人の留学生がやるただの折り紙教室に興味を持ってくれて、わざわざ声を掛けてくれる人、折り紙教室に参加するだけでなく、面白い話をしてくれる人、毎月開いている折り紙教室を楽しみに待っていて、毎月欠かさず会いに来てくれる人などがいた。また、夜のパブでは、ポツンと座っている私に「一緒に踊ろう!」と誘ってくれる老夫婦や日本人の私を守ってくれる“The Temps”というバンドの人たちなどがいた。このように私はこの新しい土地でたくさんの親切な人たちに会うことができ、このような人たちのおかげで私は現在もボランティアや折り紙教室を続けると共に、ビクトリアの中にある小会社の方と話す大きなチャンスを手にすることができた。このような機会がもたらしたのは、ビクトリアで一つも惜しまず全てのことに挑戦した「自

分の頑張り」の成果だと思う。これは私の体験記だから、人によっては図書館で勉強したりする方が良いという人もいるかもしれない。しかし、日本ではできなくて、その国だからこそできるとあると思うし、挑戦しなくてはもったいない。小さいチャンスならたくさん落ちているし、自分で限界を決めない限りいくつでも挑戦できると思う。そして、最終的にはその小さな挑戦とたくさんの努力が大きな挑戦を作り出してくれると思う。だから、次留学に行く人たちも、何でも挑戦してほしいと思う。そして、私はこの留学をきっかけにこれからより成長していきたい。

Japan Wants to Incorporate Diversity from the United States

17121076 Tetsuya Sunagawa

I have found several differences between Japan and the US through my experience in an exchange program. I think one of the biggest differences that has a significant impact on American culture is diversity. Japanese are much more uniform thinking and culture compared to Americans. Of course, this may not be a negative aspect. No matter where one might live in Japan, each person has access to an equal quality of school education. Japanese morality is based on national character not religious beliefs. Japanese have a spirit- loving traditional culture and spirits of cooperation and harmony. Apparently, these characteristics are the result of a racially homogeneous nation; therefore, the US probably has not had such characteristics as a multiracial nation. Even when we look at other countries, these are still unique features. However, at present, Japanese people seem to find considerable difficulties in their lives. This cooperative national character could be one of the elements of distress about living. Some people struggle with self-denial or self-sacrifice under social peer pressure more than is needed. This peer pressure seems the main reason for a lot of problems that Japan is facing such as more and more companies that habitually flout labor

regulations, people having agrophobia, people having no interest in politics, and so on. I strongly believe Japanese society can be improved if the Japanese government would actively accept immigrants in order to make society more diverse.

The peer pressure that people have in several communities in Japan is a troubling problem for several reasons. Needless to say, the peer pressure is influenced by other members of the community that one belongs to. The necessity of being a member of the group is a serious reality that we cannot ignore, so it is always hard to reject the peer pressure once we feel comfortable with our community. This process could appear in any size or any kind of group. For instance, in Japan, “black company” is increasingly more common. A typical practice at a black company is to hire a lot of young employees and force them to work a large amount of overtime without pay. In wholesome capitalist countries like Europe and the USA, “black companies” can’t keep hiring people since employees normally leave their work place if the work conditions are unacceptable. However, in Japan, some people keep working even if they know their employer is breaking the law because, due to peer pressure, they give priority to peer’s profit not one’s own profit. Actually, this self-sacrifice has a potentially negative effect on the whole country because it allows a “black company” to remain in the market. Because of their characteristics, I don’t think Japan is cut out for capitalism. However, as long as Japan remains a capitalistic country, this negative belief that one needs to give into peer pressure needs to be changed. The work place dominates most of our life time, so if we want to change this situation, then something needs to be done.

In order to get rid of excessive peer pressure from Japanese society, the government should allow more immigration. Under Japanese democracy, it is hard to change social structure dramatically by vote. Looking in the past, Japan changed due to extremely unusual situations such as civil war and world war; nevertheless, nobody wants to face such tragedies again. Since we

can't depend on political reform to change the national character, people's mind should be changed directly by different culture experiences. From my experience studying abroad in America, I expect that acceptance of immigration will have several positive effects. First, education will change. Children from different nationalities and Japanese children could be educated together in the same place. If there are a variety of children having different backgrounds, with different skin color and different eye color, then it will be noticeable that the Japanese assumption that everyone is the same at the beginning is wrong. For example, we will not be able to have ridiculous rules such as students can only dye their hair black. A Japanese American student I met at the University of Evansville who attended junior high school in Japan said that he was puzzled to be scolded for dyeing his hair when he entered Japanese middle school. Second, common sense will change. Children will also realize that various cultures exist around them, so the idea that each person is different from everyone else will become commonplace, and then children will understand the difference well, accept it, and have an international perspective. What I noticed through studying abroad is that the perception of foreigners in America is quite different from that in Japan. There are some people who were born overseas but raised in the US, whose parents have different mother tongues; or perhaps the parents and children even have different mother countries. People with multiple national identities and various cultural backgrounds are not unusual in the United States. I believe Japan needs this diversity. Third, the Japanese people will be full of ideas, and political change will also occur when Japan has various cultures and people with various backgrounds have the right to vote. Furthermore, relationships between people of different nationalities will become more common, and people will become interested in diplomacy as well. I had the opportunity to talk about diplomatic issues with a close Korean friend who is majoring in history, and I realized that the information I received from that friend was completely different from the information I previously heard

from the mass-media in Japan. As a result of different cultures and different habits involving Japanese society, people have various perspectives through various experiences, and the balance between totalitarianism and individualism possibly change, so that excessive peer pressure will also disappear as one of the effects. Of course, it's easy to understand that acceptance of immigrants could bring changes to the spiritual culture but could also help solve some of the problems of a decreasing labor force and declining birthrate.

Given the vitality of social community, Japan must try a large-scope plan of social reform such as welcoming immigrants. Critics of this solution argue that acceptance of immigrants may leads to an increase in the Japanese unemployment rate and an increase in the crime rate. In fact, some countries, such as Germany, had economic success with the acceptance of a lot of immigrants. Since Japanese economic system is similar to Germany's, this is a great country for reference. Germany is one of the countries that has the highest GDP rate. The unemployment rate in Germany is 3.47% and the unemployment rate in Japan is 2.87% in 2018 according to IMF. Furthermore, per capita GDP is higher than in Japan. Speaking of the crime rate, there is no other country with such an extremely low crime rate as Japan. According to the Gun Violence Archive over 13,000 people were killed in the US by firearms in 2018, and an additional 26,819 were injured. Research from the Centers for Disease Control and Prevention and the Small Arms Survey, and compiled by the New York Times, compared gun death rates around the world and the United States. It shows that in the US, gun-related homicide is just as likely as a fatal car crash. Since guns have never be allowed in Japan, there is no need for concern no matter how much the number of immigrants increases. Additionally, because the only entrance to Japan is through airports and harbors, there is no need to worry about smugglers as well. I have noticed a lot of Japanese goodness through living in America. However, Japan has hardly changed in recent decades. Why

don't we "update" the national mentality with a single new policy?

成長と気持ちの変化

17121129 望月 のゆり

『ここはことのは』を書いている今、私のオーストラリアでの生活が半分以上過ぎました。今振り返ってみると楽しかったことも多かったけれども、最初の二カ月くらいは自分の英語の伸びが感じられず悩んで、後悔してまた挑戦しての繰り返しでした。留学に来る前は、日本から出てオーストラリアで生活すれば、自然と英語漬けの毎日が送れたくさんの友達ができるとしていました。でもそれは間違いだったことに気づいたというよりも、気づかされました。

私が通っているグリフィス大学の語学学校は半数以上が中国人、そして日本人の生徒で構成されています。クラス内で母国語をしゃべること、そして日本人の友達と過ごすことははるかに簡単で、他の生徒と関わることに積極的になれず控えめになっていた自分がいました。ある時、日本人のクラスメートと韓国人、中国人の四人で遊びに出かけました。その友人の一人の彼は英語がすごく喋れるわけではありませんが、間違えてても話し続け、分からなければ相手に質問し、何よりも英語を話すことを楽しんでいました。簡単そうに聞こえるけど、その時の私にとっては容易なことではなく、思うようにいかない自分に対して苛立ちと不安で頭がおかしくなるくらい悩みました。そんな私を変えたのは紛れもなく自分自身であり、頭でいろいろ考えることをやめてただ行動に移してみることに挑戦しました。せっかくオーストラリアにいるのだから日本で出来ないことをしようと決めました。そして一番自分にとって必要なことは、テキストやリスニングの勉強を自分一人ではなく、誰かと会話をし生の英語に触れることだと気が付きました。それまでの私の生活を変えたきっかけは、英会話クラブに参加したことです。この英会話クラブは、ネイティブスピーカーのボランティアの人と、他の英語を学んでいる人たちと一緒に会話を楽しむというものです。はじめはただクラスに参加するだけでしたが、今では国籍も年齢も違うたくさんの人と友達になることができました。また会話を通して、日本と比較しながら様々な国の文

化を聞いたり、Aussie slang といわれるオーストラリア独特の単語や表現を教わっています。そして私はこの英会話クラブを通して、英語を話すことに不安になったりプレッシャーを感じる必要はないということを学びました。自分は英語学習者であり、間違えることは当たり前のことで恥ずかしいことではないということ。どんな簡単なことでもいいから発言することを積み重ね、楽しみながら会話をすることがスピーキングの向上につながるということ。自分が伝えたいことをすらすらと話せるわけではないけれど、それを相手に伝えようと挑戦する姿勢が大切だと気づけました。

他にもこの数カ月で、ここには書ききれないほどの経験をし、全てが今の自分の成長に繋がりました。それは、私の留学に携わってサポートしてくださった先生方、家族、友達やオーストラリアで出会った人たちのおかげです。感謝の気持ちと前向きに行動していく姿勢を忘れず、残りの留学生活より一層努力し、全力で楽しんでいきたいです。

第二の人生

17122003 安倍 栞吏

私にとって、この留学は第二の人生が始まったような感じがします。なぜなら、日本にいる家族から離れて、また海外で生活することは今まで生きてきた中で初めての経験だったからです。もちろん不安もありましたが、日本にいるときからワクワクする気持ちが大きかったです。カナダについてから私の新たな生活がスタートしました。私は第一にホームステイ先のファミリーと仲を深めようと決めました。そうすることで英語を話すことに抵抗を無くし、リラックスしながら会話ができたと思ったからです。一人でいる時間を就寝する時間まで作らないようにし、それまでの時間をなるべくホストファミリーと過ごしました。最初はずっと緊張し、居心地があまりよくありませんでした。しかし、ファミリーと過ごす時間が増えていくにつれて心地悪さはなくなっていきました。リラックスしながら英語を話すことが出来る空間はとても大事だと思います。この時間は今なお私にとって、とても貴重な時間です。また、私には一人の韓国人のハウスメイト

IV. 1. 英語圏

がいました。三か月間、私は彼女と過ごし、とてもいい関係を築くことができました。彼女とはユービックでの通常クラスも一緒に多くの時間を共にしました。ルームメイトが他国の方である場合、使用する言語は英語なのでアドバンテージになると気づきました。またクラスが同じだったこともあり宿題やテストが同じなので家に帰ってから、一緒に勉強をし、自分たちの文章を見比べたりしながらお互いに高めあっていきました。彼女と過ごした全ての時間が私にとって素敵な思い出です。

ユービックの授業では各国から来た生徒と受けます。英語だけではなくコミュニケーション能力や他国の文化も学ぶことが出来ました。ELPIの生徒の年齢層は幅広く、たくさんの方がいます。これは今まで同じ世代の人と勉強していた私にとって新鮮でした。今の私は、たくさんの方から、その人自身の「バックグラウンド」や「これからの目標」などを聞くことに興味を持っています。様々な人の人生を聞くことはとても面白いです。そこから、自分にプラスになること、新たな発見が見つかります。自分の視野がカナダに来る前よりも広くなれた気がします。これからも多くの人の人生談を聞いていきたいと思います。

授業やファミリーからたくさんのことを学ぶことができました。しかし、現在の私の英語力は本来の目標としている姿には成れていません。毎日自分の英語力の進歩に焦りを感じ、「今後はどうなっていくのか…？」と不安になります。時には周りの友達の経験談や英語の勉強方法を耳にし、自分と比べて落ち込むこともあります。しかし、ただ落ち込んでいるだけでは自分は何も進歩しません。折り返し地点の今、悔いのないように自分にできることを何でも行動に移していきたいと思います。一人では何もできない自分をやめ、一人でも何か行動する自分に変わります。多少の失敗や恥を気にしている時間はもうありません。次の年に留学を決めている生徒さんには、留学することの素晴らしさ、貴重さを知ってほしいです。

最後に、このようなとても貴重な経験を出来ているのは、承諾してくれた家族をはじめ、大学の教授、職員の皆様、ホストファミリー、友達、のおかげです。今後も自分自身と闘いながらさらに英語力を高めていきたいです。

My Turing Point

16121077 Airi Terada

Study abroad in Canada became much more memorable for me. Of course, I was in trouble with my poor English skills many times. However, the words from my friends became a turning point, and thanks to them, my study abroad started to shine.

In 2018, on February 4th, I arrived in Canada, where I really wanted to go. I have loved English very much, so this study abroad was precious for me. I had a strong will that I only speak English even when talking to myself. On the second day from the arrival, I took a placement test. On the third day, I took a class for the first time in University of Victoria. Most of my classmates were from other countries, so I was very excited to meet new people.

At the beginning of the class, we introduced each other in pair. My partner was Chinese, and he spoke English more fluently than I expected. On the other hand, I spoke English that I memorized in Japan. Therefore, I could not say what I really wanted to say in my mind. When I took a class, I could not understand at all what my teacher and classmates were saying. Also, everyone said their opinions in the class, but I could not say anything. Finally, during the class, I said something to one of my classmates, but she made a face because she did not understand me. At that moment, my confidence in my English disappeared. I was afraid of speaking in front of people, and I tried not to speak much. I regretted my way of learning English in Japan, just memorizing. I felt as if I were a robot. I felt I was not supposed to be there. Although my classmates were very kind, they spoke to me a lot, and we hung out, I did not enjoy the time because I could not tell what I truly thought in my mind.

IV. 1. 英語圏

Such boring days continued for one month, and one day, I told my friend about how I was frustrated with my poor English skills. He said, “If you keep thinking that you cannot speak English, then you can’t.” He added, “Nobody cares grammar mistakes while speaking English. It is natural to make mistakes, so you should have confidence on your English.” His words helped me think differently and they became my turning point.

In the second month of my study abroad program, I was placed in a new class and met new classmates. I believed in his words and I tried to speak English in a self-introduction session with my partner. I was so surprised at myself that I could speak English well and say what I really wanted to say. The second month was different from the first month, and I could speak up in the class. I did not hesitate to speak English anymore.

Since the turning point, I learned a lot of things. The more I spoke, the more I could understand what teachers and classmates said. I was picking up a language through experiences, not memorization. I did say what I thought freely, and I felt how wonderful speaking English was. I believed I could speak English, and I felt I was supposed to be there. After that, I made many friends and often hung out with them. We talked a lot and I was speaking English so fluently as if I were speaking Japanese. I really enjoyed that time from the bottom of my heart. I was never afraid of speaking English in front of others anymore, and I gained confidence. His advice changed me in a positive way, and it brought out the hidden talent in me.

I learned a lot through the experiences in Canada and I hope to make use of them for my dream, to be an English teacher. When I become one in the future, I would like to give my students and people around me the words he gave me. By doing so, I hope they will realize that they can speak English as I experienced. I hope my words will be a chance to solve their trouble of English if they have. I so hope they will bring out the hidden potential in them.

(ショート留学：カナダ)

留学が変えた私

16121051 佐野 日花莉

大学2年生の9月、私はショート留学に行くことを決めました。留学に行く理由は至ってシンプルでした。当時の私は、海外の文化や言語にさほど興味もなく、将来、教師になるのであれば、行っておいた方がいいだろうという理由で決めました。留学準備が進むにつれ、留学で何を学ぶのかと留学への焦りが出てきました。もはや、英語を何のために学ぶのか、自分がしたいことは何だろうかと自分を見失ってしまいました。2年間必死にTOEICの点数をあげよう、多読の語数を増やそうとやってきたことは、自分のためではなく、やらなきゃいけないからやるという意識だったのだと気づきました。どこからやり直すべきか分からず、一人で悩んでいた時に、柴田先生が手を差し伸べてくださいました。「留学に不安を感じることは普通で、負担を感じる必要はないよ。無理をせず、健康で最低限のことをしていれば大丈夫だよ。」という柴田先生のお言葉で不安な気持ちは減り、どうにかなるだろうと前向きに考えることができました。

思い切って行った留学で、私は3つのことを学びました。まずは、英語力です。苦手であったリスニング、スピーキングが圧倒的に強くなり、相手の話を理解し、自分の意見を述べるできるようになりました。頭の中に、英語で物事を考えたり、意見を述べたりしようとするシステムができ、英語を自分のものにすることができたと感じました。今では、アルバイト中に、ふと英語で話しかけられても、何も困らず受け答えられるようになりました。

次に、異文化理解です。ショート留学の2ヶ月の間に多くの出会いがありました。カナダ人のホストファミリー、タイ人のルームメイト、日本・韓国・中国人のクラスメイトなど、多くの人と関わりから、さまざまな文化に触れることができました。例えば、林檎を丸々一個をかじりついたり、バス停でバスを待っている間に見ず知らずの人と話したり、雨が降っていても傘をささなかったり、驚くことが多くありました。実際に異なる文化に触れたことで異文化を体験することの面白さを感じました。今までではなかったこと、してはならないと思っていたことは、少し文化が変わるだけで、「なんてことない当たり前のこと」だった

ります。立場が変われば考え方が変わり、概念が変わります。異文化が多く流入しグローバル化が進む今、日本ができることは異文化を拒むのではなく理解することだと思いました。

最後に、意識の変化です。ショート留学の2ヶ月間、「限られた時間の中で何ができるか」は自分にかかっていました。普段は消極的な私が、時間に制限をかけられたことで様々なことにチャレンジする積極性を獲得しました。どんな経験も自分を成長させるチャンスだと思い、自分の持つ力、時間、お金、全てを使い切る気持ちでした。家にいても部屋にこもらず、子供達と宿題やゲームをして、ホストファミリーとの時間を、少しでも長く作るようにしました。学校の宿題を学部生に手伝ってもらったり、バスで隣に座った人と話してみたり、日本ではできないことをするようにしました。カナダにいる私は、カナダ人からすると外国人であり、少し変わったことや間違っただけのことをしても、何もおかしくないのです。特にカナダは、ダイバーシティに富んだ国であり、異文化を受け入れてくれる体制がありました。この環境のおかげで積極的に言語や文化の学習ができました。留学は、私の人生、人間性を変えました。私がなぜ英語を学ぶのか、どんな人生を歩みたいのか、どんな人間になりたいのか、いままで雲がかかっていた私の脳内には今、クリアな人生計画が浮かんでいます。今後も、新たなことに挑戦しようと考えています。留学をさせてくれた親、支えてくれた先生方や友人、私の周りにいてくれたすべての人に心から感謝をしています。本当にありがとうございました。

(ショート留学：カナダ)

国境を越えて学べること

16121042 桑山 美柚

留学するという事について、私は大学に入学した時、「どうしても留学をしたい」という強い気持ちがあったわけではなく、「外国語学部にいるのだから留学をすることもあるかもしれないな」という漠然とした気持ちでいました。ところが二年の夏、留学を終えて戻ってきた先輩方の「留学報告会」に参加し、先輩方がキラキラした瞳で、留学によって身についた語学力や異国文化のこと、そしてどれ

だけ自分が成長できたかを生き生きと語ってくださったことにより、留学に行きたいという気持ちが強くなりました。大学二年の春というこの時期だからこそ、留学しなくてはと強く思うようになりました。そして二年の二月、留学に向け「二ヶ月間という限られた時間の中で一秒も無駄にしない」こと、「一日を大切に過ごす」ことを決心し、カナダへ出発したのです。

カナダに着いた初日は緊張こそしましたが、拙い英語ながらホストファミリーと楽しく会話をすることができました。しかし私が想像していた以上に英語の壁は高く、学校でも先生の英語が速すぎて何を話しているのか理解できず、周りのクラスメイトが流暢な英語で話しているのを聞いて、「自分の英語は全然だめだ」という劣等感でいっぱいになりました。「このままではいけない、何とかしないと」と思い友人に相談したところ、「まずは耳を鍛えること。自分に話しかけられていなくても周りの会話をよく聞くといいよ」とアドバイスされました。それ以降、ホストファミリー同士の会話をよく聞いて観察することや、通学でのバスで人の会話を注意深く聞くことを心がけました。また、新しく学んだ単語はすぐにノートにメモをして覚え、ホストファミリーやクラスメイトには積極的に自分から話しかけ会話をするように努めました。すると二週間経った頃、急に先生の話している内容がすべて聞き取れるようになりました。先生の話が理解でき自信がついた私は、クラスメイトやホストファミリーに対しても自分の考えを堂々と話せるようになり、相手との距離がぐっと近づけるようになりました。

私がカナダに滞在していた時の一番好きな時間は、ホストマザーとの時間です。毎日夕食後マザーと映画を見たあと、一時間以上いろいろな話をしました。マザーと一緒に映画を見るときは、登場人物の長いセリフが終わると途中で停めて、分かりやすい表現で説明してくれます。二時間の映画を見終えるのに三時間くらいかかりましたが、このおかげでかなり耳が鍛えられ、ボキャブラリーを増やすことができました。また、映画を見たあとはマザーやファザーとバニラアイスにたっぷりのチョコをかけて食べながら、映画について、学校のことについて、お互いの国の文化の違いについてたくさん語りました。この時間は今でも、私にとって最高の宝物です。

私が留学で学んだことは、「何事も受け身でいるのではなく積極的に自分をさらけ出す」こと、「何事も諦めずチャレンジしてみる」ことです。この留学を通

IV. 1. 英語圏

して、英語は私の生活の一部になりました。また、英語力だけでなく人生で生きる力やたくましさを学び、身につけることができましたと思います。この経験は今後の私の人生に大いに役立つことになるでしょう。今の恵まれた生活を離れ、見知らぬ土地で、違う言語の中で生活をする事に一步を踏み出すのはとても勇気がいられます。しかし留学は単なる語学研修ではなく、これまでの常識や考え方を見つめ直し、今後の自分の人生にも影響を与えてくれる実り多いものです。現在留学をしようか迷っている人がいるのであれば、強く背中を押してあげたいと思います。

最後に、留学するのにあたり支えてくれた友人、応援してくれた両親、そして留学前からずっと温かく見守ってくださった柴田先生に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(ショート留学：カナダ)

自信がついた 2 ヶ月間

16121132 渡邊 優衣

私は大学に入学する前に「大学に入ったら必ず留学をしたい。」と思っていました。高校2年生の時に研修でオーストラリアに3週間ホームステイをしました。その時、3週間目でやっとスムーズに話すことができるようになり、これから楽しく過ごすことができそうと思った矢先に日本に帰ることになりました。この研修がきっかけで、もう少し海外に長く滞在してみたいと思い、カナダの短期留学に行くことを決意しました。

出発する2、3か月前は「早くカナダに行きたい。」という思いの方が強く、気持ちが高まっていましたが、徐々に出発の時間が近づくにつれ、不安の方が勝っていました。実際にカナダのビクトリアに着くと、ホストファミリーが私を温かく迎えてくれましたが、私は流暢に英語を話すことができなかったため、自分の英語力に自信が無く、最初はなかなか会話が続きませんでした。しかし、ホストマザーが「もし話している中で分からないことがあれば何でも聞いてね。」と言ってくださり、聞き取れないことを何度質問しても快く答えてくださったので、徐々に話す回数を増やすことができました。

ビクトリア大学では、クラスはプレイスメントテストにより、レベル別に分けられたクラスであったため、クラスメイト同士が同じようなレベルで、良い刺激になっていたと思います。例えば、グループプレゼンテーションを行う機会が数回あり、その中で、2 度も、「良いプレゼンテーションの投票」で 1 位になることができた時はとても嬉しかったのを覚えています。また、自分の意見を主張したり、ロールプレイをクラスメイトの前で発表したりすることで自分の英語力に自信をつけることができました。

また、他の国の人と友達になることもでき、それぞれの文化の違いについて話したこともありました。特に仲良くなったのは韓国人の女の子でした。その子と毎日英語で会話することによってスピーキング力が上がったと自分自身でも実感することができました。文化の違いで感じたことは、ビクトリアの人は、バスを降りるときには必ず “Thank you!” と運転手にお礼を言い、お互いのことを知らなくても “Have a good day!” と言いあう点が、素晴らしいと感じました。そして、そのような温かいビクトリアで 2 ヶ月間過ごすことができて本当に良かったと心から思います。

この留学を終えて変化したことは、英語力はもちろん、グループワークの中で自ら自分の意見を主張することができるようになったこと、何にでも挑戦しようという強い気持ちになれたことです。留学中の様々な困難を乗り越えることで、精神的に強くなることができました。ビクトリアで過ごした 2 ヶ月間は人生で二度とできないくらい貴重な体験だと思います。最後にビクトリアに留学に行くことができたのは、多くの支えがあったからだと思います。家族や友人、サポートしてくださった先生方には感謝しかありません。この経験を生かして、これからの人生を充実したものにしていきたいと思います。 (ショート留学：カナダ)

文化を超えた家族の温かさ

16121093 廣田 琴乃

私は大学二年生の春休みを使ってカナダのビクトリアに二カ月の留学をしました。小さい頃から海外の生活や文化に憧れを持っていて、両親も賛成してくれた

IV. 1. 英語圏

ので行くことに決めましたが、英語もずば抜けてできるわけでもなく、二カ月も家族のもとを離れ知らない土地で生活していくことは、とてもとても不安でした。案の定、現地に着いてから初めの2週間の「不安」「孤独」「寂しさ」は今でも忘れられません。ホストファミリーにも馴染めず、伝えたい事を伝えることも精一杯で、日本にあと何日で帰ることができるのかを数えていたほどでした。そんな時、日本にいる家族や先生、友達からのメールが唯一の支えで、二カ月間悔いのない時間を過ごそうと思えるようになりました。

初日のテストで自分のレベルに合ったクラスに振り分けられましたが、最初の一カ月目の私の所属クラスは日本人が八割を占めていて、正直、日本人の友達ばかりが増える一方でした。これではいけないと思い、私は放課後や週末はホストファミリーとの時間を大切にしました。ホストファミリーの家族構成は、レストランのオーナーのファザー、会社員のマザー、5歳と12歳のシスター、ウェールズ出身の留学生、日本人の留学生で、毎日が賑やかでした。誕生日会や子供たちの音楽発表会、日本の文化体験などホストファミリーにいろいろな所へ連れて行ってもらいました。一緒に生活していく中で日本とは違って、とても素敵な文化だなと感じた事がいくつかありました。一つ目は家事への関わり方です。食事の時間になれば、皆がすべてを中断してマザーの手伝いをし、掃除や5歳の子の面倒も家族全員で協力します。「皆で母の手伝いをする・皆で協力するのがカナダの文化だ」とマザーは教えてくれました。私のホストファミリーは日本人を受け入れ慣れているのもあり、日本人の子や父は一般的に家事に協力してきではないと知っていたので、わかりやすく違いを教えてくださいました。私も帰国したら、自ら積極的に家事の手伝いをしようと思いました。二つ目は就寝時間の早さです。八時半にはベッドに行き、九時には完全消灯です。「日本人は遅くまで何をしているの？」マザーの素朴な質問にととても戸惑い驚きました。私は寝る時間を削ってまで、いったい何をしていたのか考えさせられました。これ以外にもたくさんの文化の違いを発見しましたが、改めてそれらの文化の違いの面白さを感じました。カナダへの留学は、英語の上達だけでなく、カナダの生活や文化など色々なものを発見でき体験できるという、とても貴重な体験であることを感じました。

留学を通して学んだことは数え切れないほどありますが、私が一番うれしかったことは一番大切にしてきたホストファミリーに家族の一員のように接しても

らったこと、そして家族の会話にまったくついていくことができなかった私が、話を理解し、皆と同じタイミングで笑えるようになったことです。自分自身で成長したことが発見でき、もっと頑張ろうと思えました。また、過去の留学生の話、家族の話など私のことを信頼して話してくれたこと、5歳の子が私の部屋に入ってきてまで遊びに誘ってくれたこと、すべてが嬉しくかけがえのない思い出となりました。いつしか日本に帰らないといけない日まで何日かを数えている自分がいました。この二カ月は私にとって、とても貴重で素敵な体験になりました。帰国して約一年がたとうとしている現在も、海外の方とコミュニケーションをとる機会を自分で作り、そのたび感じる「楽しい」という気持ちをこれからも大切にしていきたいです。

(ショート留学：カナダ)

語学研修

アメリカでの出会い

15121056 谷 菜々美

本語学研修を通して多くの人と出会い、自分を変えることができた経験を書かせて頂きます。以前の私は自分に自信がなく、積極的に英語を話すことができませんでした。UCI の語学研修では Conversation Partner がいつも私たちに質問をすることで、常に英語を話す機会を与えてくれました。また、自分から質問をすると丁寧に答えてくれ、繰り返すうちに以前より早く頭の中で文章を作り、口に出すことができるようになりました。授業の先生は私に自分の考えを言う機会をたくさん与えてくれ、考えるだけでなくその考えを伝えることの大切さを教えてくれました。

ホームステイ先のホストマザーとは、毎晩その日の出来事や学んだことを話しました。私が単語だけで伝えようとする「しっかり文章にして伝えなさい」と時間がかかっても最後まで私の話を聞いてくれました。

今回出会った人たち全員に共通して言えることは、私が単語や文法、イントネーションや発音を間違えても伝えたいことを理解しようとしてくれ、正しい言い方

IV. 1. 英語圏

を優しく教えてくれたことでした。そのおかげで、間違えることが怖くなり、積極的に英語を話すことができるようになったのだと思います。また、自分の伝えたいことがしっかりと伝わった時や、会話ができた時の喜びが大きく、英語を話すことが楽しくなりました。

そしてもうひとつ、自分の中で変わったことは、外国に対する考え方です。今まで日本から出たことがなかった私は、住みやすさや人の良さ、環境など様々な点で日本が一番だと思い込んでいました。しかし、実際にアメリカで過ごしてみて、確かに日本の良さを感じましたが、同時にアメリカにも独自の良さがあることを身をもって感じ、以前よりも外国に興味を持つようになりました。ホストファミリーの知人たちや、語学研修で出会った他大学の学生たちと友達になったことも大きいです。UCIの授業以外でも、ホストファミリーと過ごした時間、例えば、料理やバーベキュー、ショッピングモールでのショッピングを楽しんだり、大きなお祭りに行ったりと生活そのものを体験することができました。最も印象に残っていることは、ハンティントンビーチで見た美しいサンセットです。それは今まで見たことのない程美しいもので、同じ太陽であるはずなのに見え方や大きさが異なり、眺めていると時間を忘れ、日本から離れていることを改めて感じました。

この多くの出会いのおかげで、以前より英語が好きになり、新しい自分にも出会うことができました。自分の英語のスキルを更に上達させたい、この語学研修で得たこと、感じたことを生かしながら努力を続けていきたいと考えています。私の夢は小学校の教師になることです。将来は子供たちに教える立場になります。私が英語は楽しいと感じることができたように、子供たちにも英語の楽しさを教えたいと思います。

未知の世界を知る

16121025 落合 右季

実質3週間という短い期間でしたが、振り返りますと、この時がこれまでの人生で一番頑張ったと思います。

正直なところ、語学研修に行くまでは、それなりに英語ができるという自負がありました。しかし、それは初日で消え去りました。行きの機上でのアナウンスが所々しか聞き取れず、内心焦りました。仲間から「なんて言ってるかわかる?」と聞かれた時は「なんとなくわかるよ」と言い逃れしたことを覚えています。実際アメリカに着くと、英語しか使わない環境や日本との文化の違いに順応するのが難しく、数日間体調を崩しました。その間、授業には出席していましたが、学びたい気持ちより早く帰りたいという気持ちが強かったです。本学からだけではなく、日本全国有名大学から大学生が集まっていました。僕はプレイスメントテストで、6 クラス中、3 番目のクラスに所属することになりました。そのクラスは、帰国子女や、韓国、ブラジル、チリなど、多くの国々から英語を学びに来る意欲の高い学生ばかりでした。そこで自分を見つめ直し、自分より英語ができる人たちと、英語圏で勉強が出来る、上達にはこれ以上ない環境で英語力を試したいという意志が自分を奮い立たせました。それからは、ホームステイ先に帰ってからずっと勉強をし、午前3時前後に寝るのが当たり前になっていきました。体力的には少し疲れましたが、それよりも自分を高めたいという気持ちの方が強かったです。

しかし、簡単には英語力を伸ばすことはできませんでした。個人的に一番苦労したのは発音です。water という単語が伝わらなかった時は絶望しました。僕は「リスニング&ライティング」と「アメリカ文化」の授業を取っていました。これらはプレイスメントテストの結果で異なります。幸い、前者は仲間が2人いたのでなんとかりましたが、後者に関してはとても大変でした。僕自身、他人と話すことがあまり得意ではなく、しかも、30人ほどいるクラスで、自分を含め男子学生は2人しかいませんでした。しかし、そんな逆境に立たされるほど燃えてくるのが自分のいいところです。失うものは何も無い、ただひたすら挑戦し続けようと決意しました。その結果、日に日にネイティブの英語が聞き取れるようになり、自分の伝えたいことをすらすらと言えるようになりました。最終日の「アメリカ文化」の授業で5分間のプレゼンがありました。もちろん全て英語です。緊張で足の震えが止まらず、自分の言っていることがしっかり伝わっているか不安でしたが、ジョークが通じクラス全体が笑ってくれたので安心しました。プレゼン後は、大きな拍手と先生が「よく練習してきたことがわかるものでした。初

IV. 1. 英語圏

日に比べて発音も良くなり、成長しましたね。」とコメントくださり、隣の席の学生も「すごく良かったよ」と言ってくれたので涙が出るくらい嬉しかったです。帰りの飛行機でアナウンスの大半が理解できた時にも成長を感じ、努力してよかったと思いました。

僕にとって初めての海外は、新たな発見が出来た貴重な体験となりました。もし僕の体験談を読み、勉強のために海外に行きたいと思った学生さんがいるなら、ひとつだけ忘れないで欲しいことがあります。確かに、語学研修や留学では、自分を変えることが出来る可能性があり、英語力を上達させるためのプラスの経験が出来ます。しかし、一番伝えたいのは、その経験を活かすも殺すもあなた方の努力次第だという事です。僕は、語学研修の費用をアルバイト代で全て払いました。なぜなら、アメリカで自分が成長できなかったら、親が出してくれた費用が無駄になってしまうのが嫌だったからです。皆さんにも時間と費用を無駄にして欲しくないのです。投資した金額に見合う、もしくはそれ以上の成果を挙げて欲しいのです。結果的に、僕は目に見える形で英語力の上達をすることが出来ています。もちろん帰国してからの過ごし方も大事です。もし語学研修に行っていなかったら、今の自分は無いと言っても過言ではないほど、僕の人生を変えてくれました。語学研修で培ったものをこれからの人生にも活かしていきたいです。

2. スペイン語圏

2017 年度スペイン語学研修・留学報告

増井 実子

2017 年度も多くの GC 学科生がスペイン語学研修や留学に意欲的に参加してくれた。参加した学生たちの滞在方法は一樣ではないが、各自の滞在期間や意欲に応じて大きな成果があったという点では一致している。特にスペイン語運用能力が向上したという点やスペインの歴史・文化に関する理解が深まったという点では手応えを感じた参加者が多かったようである。

2017 年度のそれぞれの活動の概要および参加人数は以下の通りである。

- ① スペイン春季語学研修：2018 年 2 月約 4 週間。アリカンテ大学語学教育センターで実施。参加者は GC 学科生 12 名
- ② スペインショート留学：2018 年 2 月～3 月の約 8 週間。アリカンテ大学語学教育センターで実施。参加者は GC 学科生 3 名

また上記①②以外に、私費でスペインに短期または長期留学をした GC 学科生も 3 名いた。

その中から、今回は語学研修課題レポート、ショート留学報告、長期私費留学報告と計 3 名に原稿を寄せてもらった。

また、語学研修の企画・実施のみならず、ショート留学や私費留学に関しても学生に対しアドバイスやサポートをしてくださったスパニッシュコミュニケーションズ代表の小口さんにはこの場を借りてお礼を申し上げたい。

2017 年度スペイン語学研修課題レポート（春季 1 ヶ月）

El idioma inglés en España ～スペイン内での英語～

17122050 中沢 真央

はじめに

私が英語の学習を始めてから、既に 15 年以上が経過している。始めた頃は英

IV. 2. スペイン語圏

語に全く興味は無かった。しかし、小学校高学年頃、英語の授業の ALT の先生が変わり、その先生により英語の楽しさに気がついた。中学生になると、地元の市が行っている海外研修に参加し、オーストラリアに短期間滞在した。そのオーストラリア研修で英語に対しての関心がより高まり、その後カナダの高校に進学することを決意した。

留学したカナダでは当然のことながら英語漬けの毎日であった。一方、カナダは移民の受入れ国として知られており、高校にも母国語が英語以外の生徒が多くいた。多文化主義を掲げる環境の中で、自分を含めた非英語圏の生徒たちにどのように英語を学ばせるか、そういった点もじっくり観察することができた。つまり、カナダ留学によって、私はコミュニケーションツールとしての英語のみならず、世界の中で英語がどのように使われているかという点に関心を持つようになった。例えば日本のように、英語が母国語ではない国や地域における英語の使用状況や通用度について現在は興味を持っている。

今回 1 ヶ月のスペイン語学研修に参加するにあたり、上に述べたような私の問題関心についてスペインで調査をしてみたいと考えた。スペインはヨーロッパの中では比較的英語が通用しない国と思われているが、実際はどうか。現地で英語の掲示・看板を調べ、英語での取材やインタビューを実施した。以下、その報告をまとめる。

1. スペインの英語教育の現状

スペインでインタビュー調査を実施するにあたり、スペインにおける英語教育の現状について調べてみた。

1-1. 世界的に見たスペインの英語能力

2017 年の EF English Proficiency Index (EF 英語能力指数調査) によると、スペインは調査された 80 カ国 (英語圏の国々は含まれていない) の内、28 位に位置している。これは EF EPI が定めている能力レベル (非常に低い・低い・標準的・高い・非常に高い) 内では「標準的」に値する。標準的というレベルに達している国の能力として、「専門分野における会議に参加している」「歌の歌詞を理解することができる」「熟知した内容についてプロフェッショナルなメールを書くことができる」などが示されている。この調査から、スペイン人の英語能力

は世界の中では上位であることが分かる。

1-2. ヨーロッパ内でのスペインの英語能力

ヨーロッパ内に限ってみるとスペインの英語教育は、ポルトガル・イタリア・ギリシャ・スペインの頭文字を合わせ「PIGS」(豚)と呼ばれるほど、お荷物扱いされているようだ。これは EF EPI の調査にも示されている。2017 年、スペインはヨーロッパ内 28 カ国中、21 位に位置している。この結果から、スペイン人の英語能力は世界的には上位ではあるが、ヨーロッパ内では低い位置にすることが分かる。

1-3. スペイン国内の英語教育

スペインでは、20 年前からマドリードを中心にバイリンガル教育プロジェクトというものが行われている。このプロジェクトは幼年期から英語の授業を開始し、スペイン語と英語の 2 言語の常用を促進することを目的としている。現在、マドリードでは 350 校以上の公立小学校と 180 校の私立小学校で、スペイン語と英語の両方での授業が行われている。しかし、2016 年に行われたある大学の調査の結果で、英語で科学の授業を受けていたマドリードの生徒の科学レベルが、他の学生と比較して低いことが分かっている。そのため、このプロジェクトの有効性が疑問視されているものの事実である。日本の学校にもいわゆるイマージョン・プログラムを導入している小学校はあるが、スペインと比較すると非常に少数である。

1-4. 日本の英語能力との比較

2017 年の EF EPI の結果によると、日本は 37 位である。この調査からだとも日本は世界的に上位に位置していることとなる。しかし同じ調査で 28 位だったスペインに比べると、日本の方が低い。この理由として考えられるのは、スペイン語と英語は同じインド・ヨーロッパ語族に属していることだ。したがって、スペイン語と英語には似ている単語やニュアンスがあり、それは日本語と英語を比べた時にはほとんど存在しない対称点である。また、言語だけではなく文化や人種の違いにも理由があると考えられる。

2. スペインにおける英語の使用状況－英語表記の案内や看板

スペイン滞在中に、実際に街中に出かけ、英語表記の掲示や看板があるかを調

IV. 2. スペイン語圏

べてみた。特に、目についたものを以下に列記する。

2-1. Burger King：アメリカ発祥のファーストフード店（アリカンテ）

2-2. Livanti：アリカンテにある、ジェラート店。

2-3. Excursión Isla de Tabarca：アリカンテとタバルカ島を船で往復する旅。



2-1 “HOME OF THE WHOPPER”
と英語で表記されている。



2-2 “Simply the 3rd best ice cream parlour of Spain” と表記されている。スペイン語でも表記されているが、英語より小さい。



2-3 船の旅のポスターの説明がスペイン語と英語でされている。

英語で表記されている案内や看板のある店や場所のほとんどが、アリカンテの観光地内や周辺に集中していた。また反対に地元の人がよく行く地域には英語の案内は少なかった。また、Burger King や McDonald's などのアメリカ発祥のファーストフード店では、メニュー上の商品の名前も英語を使っていることが多かった。

3. スペインにおける英語の通用度

次に、実際にスペインで英語を使って話しかけてみて、通用した場所とどの程度通用したかについてまとめてみる。

3-1. バルセロナ空港

バルセロナからアリカンテに向かう際に利用した。

空港で英語が通じるのはある意味当たり前である。バルセロナからアリカンテに向かう際に、バルセロナ空港に思ったより早めに到着してしまい、予約したフライトまで3～4時間以上あった。ダメ元で早めのフライトに乗せてもらえるかを聞いた。その際に、チェックインカウンターの中年くらいの男性の係員と英語でスムーズな会話できた。

3-2. El Corte Inglés

スペイン国内、唯一のデパートである。このデパートはマドリードに本社を置く、ヨーロッパで最も大きいデパートである。また、世界的に見ても4番目に大きいデパートとして知られている。デパートの名前には「イングランド仕立て」という意味がある。

シャンプーやボディーソープなどのトイレタリーを購入する際に El Corte Inglés 内のスーパーマーケットに行った。その際、外国らしくシャンプーとボディーソープの容器が非常に大きく、小さい容器のものが置かれているかを店員に英語で尋ねた。若い男の人が対応してくれて、何回か聞き直したが、最終的には理解してもらえた。

3-3. Camp Nou

スペイン・カタルーニャ州バルセロナにあり、約10万人を収容できるヨーロッパ最大級のサッカー専用スタジアムである。

Camp Nou はサッカー観戦をする際に、自分の席が全くわからなくて、ゼッケンを着ていた若い女の整備員に英語で聞いた。すぐに理解してもらい、自分の席まで案内してくれた。他の観戦者に席を案内する際もその整備員はスペイン語と英語、両方を使っていた。

3-4. Hotel Urban Dream

アリカンテ大学が行なっているグラナダ旅行に参加した際、滞在したホテルである。

基本的に空港と同じで、ホテルで英語が通じるのは当たり前である。グラナダで

IV. 2. スペイン語圏

利用したホテルでは、トイレの場所や朝ごはんの場所などわからないことをフロントの係員に英語で尋ねた。何の問題もなく対応してくれた。

3-5. Goiko Grill

マドリードに本社を置く、ハンバーガー屋である。このお店で使われている肉や野菜などの材料は、全てスペイン産である。

Goiko Grill には 2 度、夕食を食べに寄った。1 度目は店内で食べ、2 度目はテイクアウトで利用した。店内で食べた時は、スペイン語で注文した。しかし、2 度目の時は店内で食べる予定が、店内満席だったためテイクアウトに変更した。その際、店内が満席のこと、テイクアウトのみ可能のこと、注文など全て英語でやりとりを行った。若い男の人が対応をしてくれたが、少しスペイン語のアクセントがあり、「R」の発音が重かったのを覚えている。しかし、全て相互理解できた。

3-6. Aimé Moss

アリカンテにあるスケートボードの店である。

Aimé Moss は、小さいお店ではあるが、店内の商品を見ていると、店員の方がまず、スペイン語で “Hola, … rebajas…” と言ったので、私は「今、セールをしている」と言われたと思い “Vale” と答えた。その時に、店員が私の返答や仕草であまり理解できてないと思ったらしく（事実だが）“Do you speak English?” と英語で聞いてきた。それに対し、“Yes!” と答えたら、店内全てのセクションの商品のセールについて教えてくれた。また、その店内にいたスケボー少年達も、“Where are you from?” “Why are you visiting Spain?” など、様々な質問を英語でしてきた。

3-7. ホストファミリー

私がステイした、ホームステイの家族。

私がお世話になった、ホストファミリーにはホストマザーとホストブラザーがいた。2 人ともヨーロッパ内ではあるが、他国へ 1 年以上の留学の経験がある。その際、英語を学習したと聞いた。特に、ホストブラザーは母国語（スペイン語）・英語・ドイツ語の 3 言語を話せる。そのため、生活している中で、スペイン語が理解出来なかった時は、英語で会話をした。また、テレビを見ている際に、理解出来ない単語やフレーズがあった時、ホストマザーに聞くとたまたまに英語で教えて

くれた。

おわりに

以上、スペイン語学研修中に街中で調査した英語表記の案内・看板や英語が通じた状況についてまとめた。

看板や案内における英語表記の使用度は、日本の方が使われている場所も英語の分量も多いと感じた。日本では、特に店の名前に英語を使ったり、標識などに英語が書かれてあったりすることが多い。スペインでも使われてはいたが、日本ほどではなかった。

一方、スペインの人たちの英会話能力であるが、今回実際に行ってみて、事前に予想していたより英語が通じるという印象を持った。特に観光地では英語で話しかけてもほとんど不自由がなかった。また、スペイン人（ヨーロッパ人）とカナダ人（北アメリカ人）では、話し方や手の動作などのジェスチャーが似ていると思った。こういった非言語的な部分での類似性も英語を理解する上で重要であると思う。

今回は研修で滞在したアリカンテや旅行先のバルセロナやグラナダでしか調査が出来なかったが、次回スペインに行く機会があれば別の地域でも同様の調査を実施してみたい。さらに、ヨーロッパの他の非英語圏の国々においても、英語の使用状況がどのようになっているかについても今後の課題としたい。

【参考ウェブサイト】

1. EF 英語能力指数調査：<https://www.efjapan.co.jp>
2. 世界の英語教育：<http://d.hatena.ne.jp/jotun82/20101221/1292952986>
3. El Corte Inglés (Wikipedia)：https://en.wikipedia.org/wiki/El_Corte_Inglés

不完全を楽しむ

16122040 田島 利恵

「留学」という言葉に触れた中学の時から、私は留学に強い憧れを抱いていました。そのチャンスをようやく掴んだ大学2年生の春休み。常葉大学認定留学生としてスペインで2ヶ月の留学生活を送りました。現地では、毎日が「ハッピー・ラッキー・サイコー」の3拍子。ホームシックを感じる隙などどこにもありませんでした。正直なところ私のスペイン語力というものはかなり乏しかったでしょう。基本的な挨拶と自分の気持ちか少し言えるくらいのレベル。しかし、上手く話せないことや分からないことだらけの環境を楽しんでいる自分がいました。それは不完全な状況をマイナスに捉えるのではなく、むしろプラスに受け入れることにしたからです。ここからは、そういった意志を持つことで特に充実させることが出来た私のスペインライフを2つ紹介します。

1つ目は、積極的に発言した日常生活です。分からない単語の意味や表現を辞書で調べるのではなく、目の前にいる人に主体的に質問することで理解を深めました。そうすることで、より多くの情報・理解を得られることに気づいたのです。それは、勉強のみに限ったことではありません。私は、広い大学内で迷った時や近隣施設の利用方法が分からない時、近くの職員の方や現地の学生に尋ねて情報を得ていました。また、お店やデパートで値段表記がない物やおすすめが何かを知りたい時も同様です。実際に聞くという習慣を身に付けたことによって、コミュニケーションの場を増やしたり、自分のスペイン語力を試す機会を作ったりしました。

2つ目は、私の所属学科名でもある「グローバルコミュニケーション」を意識して活動したことです。「世界中から人が集まり、様々な言語に触れられる場所にいるのだから、こんなチャンスはない」と思った私は、かたっぱしから大学で知り合った学生に出身を聞き、その国の言葉でコミュニケーションをとるという行動に出ました。その中で出会ったのは、中国、韓国、ブラジルといった、私が1年次に学んでいた言語圏の方々。また、フランス、ロシアといった挨拶程度は

できるかな…という方々。やり取りがスムーズにいったりいかなかったりでしたが、相手はとても喜んでくれました。反対に、そういった海外の方々日本語でコミュニケーションを取ろうとしてくれる姿勢には私自身も嬉しく感じました。

最後に。スペイン文化を堪能できたホームステイでの交流は一番の思い出です。特に、本場パエリアを家族4人がかりでテーブルに運んできてくれた時には驚きました。日々、笑いの絶えない温かい環境を与えてくれたホストファミリーには本当に感謝です。更に成長した自分となり、いつか会いに行くのが今の一番の夢です。



写真) ホームステイ先にて。4人がかりで運んできてくれた特大パエリア

2017年度スペイン長期私費留学報告(2017年3月～2018年3月)

1年のスペイン留学が教えてくれたこと

14122012 大久保 愛

私は2017年3月から1年間大学を休学し、スペインのセビージャとアルカラ・デ・エナレスへ半年ずつ留学をしました。帰国してから、もうすぐ一年が経とうとしています。

振り返ってみると、留学を機に自分自身で変わったと思うことが二つあります。一つ目は、できるだけ一人一人を個々として見ようと思うようになったことです。これまでは、このことに関して深く考えたことがありませんでした。それはあまり自分の意見を持つとしていなかったからかもしれません。このように考える

IV. 2. スペイン語圏

ようになったきっかけは二つあります。一つ目は、日本ではまだイメージが良いとは思われてないLGBTが、スペインでは何の違和感もなく受け入れられていることを見たからです。スペインの人たちは、男・女という性差ではなく、「人」として見てくれるのだと思いました。二つ目は、LGBTなどに関しては寛大な一方で、アジア人に対しての偏見があると感じたからです。私が街で歩いているとすれ違う人に「中国人だ」と言われることが多々ありました。つまり私個人を見るのではなく、東洋的な外観＝中国人というステレオタイプの見方をされ、あまりいい気持ちはしませんでした。留学前の私は、LGBTに対してマイナスのイメージを抱いていました。また、街で出会う外国人＝英語圏出身者と思い込み、その人個人を知ろうとする気持ちに欠けていました。ただ、今では「この世の中に一人として同じ人間はいない」と考えられるようになってきました。同時に、周りの人ともいい形で、向き合えるようになってきた気がします。

二つ目は、緊張することが少なくなりました。帰国してからだいぶ経ちますが、このことには最近気がつきました。留学前は「緊張しい」で、発表の際やバイト先で失敗するとすぐに焦ってしまいました。しかし今では落ち着いて考えることができるようになり、発表で焦ることも、失敗することも少なくなりました。幼い頃は人見知りで、泣き虫な私でしたが、今まで一つ一つ克服してきました。ただ「緊張しい」の私とはいつまでもお別れすることができませんでした。成長できたのは、一年間親元を離れて一人で生活をしたことで自信がついたからではないかと思います。

一人で生活したとはいえ、多くの支えがありました。幼少期から海外への憧れがあった私の背中を押してくれた母、快く賛成してくれた父、また常に心配して声をかけてくれた家族や先生、そして日本の友達、またスペインで出会った友達には、感謝でいっぱいです。これからもこの思いを大事にしていこうと思います。最後に、私の大好きな言葉で締めくくります。“Muchas gracias”

3. 中国語圏

中国語そして「中国」・「中国人」を学ぶ

—GC 学科の中国語圏における活動—

戸田 裕司

(1) 台北語学研修 (海外中国語研修)

中国語語学研修は、2018 年度も協定校である台湾 (台北市) の銘伝大学にて、3 週間実施された。参加者 7 名 (3 年生 2 名・2 年生 5 名) は、8 月 12 日 (日) に東京羽田空港から出発し、9 月 1 日 (土) に全員無事帰国した。

中国語は発音のハードルが比較的高い言語である。学習に際して、中国語の現場に身を置きつつ、適切な会話指導を受けるメリットは計り知れない。3 週間という限られた期間ではあるが、例年、参加学生は聴解力の向上や発話のスピードの面で大きな躍進を見せてくれる。

また、参加者全員に台湾現地事情のレポートを課すことによって、学生たちが台湾社会・中国文化への理解を深める格好の場ともなっている。

(2) 中国福建省・閩南師範大学での研修

台北での語学研修は、台湾の中国語教育の伝統に支えられ、また銘伝大学教職員の士気の高さとも相俟って、良好な成果を上げてきている。ただ、GC 学科では、エリア・スタディの領域で学生により魅力的な学びの場を提供するという観点から見れば、より幅広い活動を通じて、海外で人と社会を体感し、異文化への耐性を高めるプログラムの必要性が指摘されていた。

2018 年度に新設された「臨地実習 C」は、学科必修科目である社会人基礎力養成科目での学びをベースとして、上記の必要性に応えるべく、語学研修ではない海外研修として、構想されたものである。

この新科目のテスト・プログラムとして、2018 年 3 月 18 日から 3 月 24 日までの 7 日間、中国福建省南部漳州市に位置する閩南師範大学日本語学科で、授業への参与や課外活動への参加を軸とする交流活動を実施し、「漳州街歩きマップ」(234 - 235 頁) のようなタスクや活動を実施した。

出発前の企画・検討・作業を要する項目も多くそもそも全てにおいて前例や経験がない中、6名の参加者は積極性を発揮し、創意工夫をこらしてくれた。受入先の教職員や学生たちにも、暖かく迎えられ、まさに face to face の関係を通じて、メディアやネットからの情報やイメージを受け取るだけでは知り得ない、生の中国・中国人を理解する機会となった。

正規の授業科目となった本年度は、初年度にもかかわらず13名(1年生9名・2年生4名)もの履修者(参加者)を得て、2019年3月19日から28日までの10日間の日程で実施される予定である。本誌も含めて、多くの機会を利用して、学生たちの成果を披露して行きたい。

中学語学研修

台湾の夜市と食文化

～士林夜市編～

17122021 小野寺 悠夏

テーマ設定理由

台湾に行くことが決まった時最も楽しみにしたことが夜市での食事である。台湾のローカルな食べ物にたくさん挑戦してみたいという思いがあった。銘伝大学の目の前には台湾の中でももっとも有名な夜市のひとつの士林夜市がある。夜市は日本にとって馴染みのない文化で、わたしは夜市とは祭りの時の縁日の出店のようなものかと思っていた。しかし台湾の夜市は、そのようなわたしの想像とは、その規模も内容も大きく異なるものであった。

また外食文化の発達した台湾において、夜市は台湾人の生活と密接に結びついていると感じた。そこでわたしは台湾の夜市と食文化についてその概要を調べ、特に士林夜市について観光として訪れた面からレポートにまとめたいと考えたため、このテーマを設定した。

夜市とは

台北市市場管理所の定義によると「夜市とは、夜の 6 時から 1 2 時までを営業時間とし、有効な管理の下で営業を許可された露店のことであり、台北市民に夜間の休息、街遊び、消費場所を提供するもの」とある。その中で観光夜市は「消費者が街遊び、買い物ができ、50km 以内に政府が認める観光名所、文化遺産がある所」と定義されている。＜出典 <http://square.umin.ac.jp/mayanagi/students/06/kawamura.htm>＞



早期の夜市は、廟や寺、縁日などから生まれ、次第に個々の露店から一つの夜市が形成されたと言われている。露店商人は多くの利潤を得ることになり、営業時間も延びていった。

士林夜市

士林夜市は捷運（MRT）の剣潭駅付近にあり、大東路、基河路、文林路の三大道路と駅前に建つ士林臨時市場で成り立っている。

士林夜市は国際的にも知名度のある観光夜市になったが、繁栄の理由には以下のことが挙げられる。

- (1) 業種が揃い、かつ価格が高くなく、適正である。
- (2) MRT（剣潭駅）と文林路に走るバスの運行が便利である。
- (3) 近辺に学校が多く、学生にとって夜市が放課後や休日に遊ぶ場所となる。
- (4) 営業時間が長く、毎日明け方の 1 時、2 時まで営業している店があり、夜型の人の需要を満たしている。

士林夜市は観光夜市の中でもその規模が他と比べてとても大きく、店舗数、来場者数ともに台湾の中で一番である。士林夜市にある店を系統ごとにまとめて、その特徴を述べていきたい。

● 娯楽…射的、金魚すくい、輪投げ、占い、文具、おもちゃ、等

娯楽の分野の店の特徴として、日本語で話しかけてくる客引きは、この娯楽の分野が一番多い。観光客で日本人が圧倒的に多いため店主は「一回、サービス」

IV. 3. 中国語圏

というような感じで、たくさん日本人観光客に声をかけていた。日本人以外には、台湾人の学生やデートで訪れた若者のカップルなどがゲームを楽しんでいた。

●飲食類…臭豆腐、小籠包、鍋、焼き物、揚げ物、牡蠣のオムレツ、タピオカミルクティー、マンゴーかき氷、等

飲食類の分野の店の特徴として、観光客向けの店と地元の人向けのローカルな店と分けることができる。士林夜市は特に

観光客の多い夜市であるため、飲食店のメニューに英語はもちろんのこと、日本語が書かれていることも多く、看板に韓国語の表記がある店さえあった。有名店でいつでも観光客が長蛇の列を作るような店では、店員が日本語を話せたり英語で対応できたりというところもあった。メニューは日本語で書いてあるものがあるが、日本語はできないという店（チェーン店）も中にはあった。一方で店構えも一見入りづらく、メニューも店員の言語も中国語だけという、地元の人が多く訪れている様子の店もあり、夜市の中にもさまざまな雰囲気の店があった。

●服飾品…衣類、靴、化粧品、手袋、マフラー、眼鏡、帽子、かばん、財布、ベルト、アクセサリー、等



服飾品の分野の店の特徴として、価格設定が安いことが挙げられる。観光客や近隣の大学生をターゲットにしているようで、リーズナブルな価格で販売されている。また女性ものを取り扱っている店が多い印象を受けた。

台湾人と外食

●台湾人は外食文化

台湾は「国民の4割が1日2回外食をしており、収入の約3分の1を食費に費やす」＜出典 <http://www.near21.jp/kan/publication/taiwanex/2508.pdf>＞と言われるほど、外食することが日常となっている。特徴として朝食専門の食堂や屋台の存在が挙げられる。営業時間は朝5～6時頃から昼11時頃のみである。店で豆乳や葱餅を食べたり、テイクアウトで職場で始業前に朝ごはんをとる。朝から外で食事をする文化があるのだ。さらに近年のコンビニのイートインスペースの充実からか、出勤前にコンビニで朝食をとるサラリーマンの姿も多く見かけられた。またたくさんの夜市が台北のいたるところに存在している。夜市の食品は一般的に安くて美味しい。自炊するよりも外食した方が美味しく安く済ませられることが、台湾で外食が多い理由にある。



●なぜ外食文化が普及したのか

外食文化が浸透しているひとつの理由として、台湾は共働きが一般的で、女性も男性と同じようにフルタイムで働いている場合が多いことが大きく関わっている。台湾にはたくさんの飲食店・食堂や屋台で、総菜を調理してテイクアウトできるような店がある。飲食店の利用者が多いため、飲食店同士の価格競争と顧客獲得のための品質向上によって、台湾の飲食店は安くて美味しいという地位を得た。

そのような店が多くあるため、自炊す



IV. 3. 中国語圏

る機会がなくなり食事は外でとるという文化が生まれた。実際、台湾にあるアパートにはキッチンがついていないものもあるそうだ。台湾人の友達に自炊をするかと聞いてみたところ、男女問わずほとんどしないという答えだった。大学生の実家暮らしだと日本でも自炊はしないことが多いので、この点は同じであるが、台湾人の場合、食事はほとんど外食か、家で食べるにしてもテイクアウトしたものを食べるということであった。台湾では外食が日常の一部になっているといえる。日本では外食というと特別な日の印象があり、一般的に毎日のように外食する家庭はめったにないだろう。

まとめ

台湾人にとって夜市は生活の一部分となっている。夜市は地元の人たちの交流の場であり、地域の活気を表しているような場所である。毎日の食事をする場所であったり、学生にとっては放課後にふらっと立ち寄れるような気軽な場所であったり、台湾人にとっても夜市の使い方は様々である。また、観光の面から考えても、夜市という場所は台湾の様々な料理に出会える場所であり、そこに住んでいる人々の暮らしを知ることができる場所である。観光名所のようなきちんとした整備がされて、言語も日本語対応可能というような場所ではなく、観光として訪れていながらも、台湾の現地の生活の中に入り込めるような体験を、夜市に行くことで味わうことができる。台湾に行ったら夜市を一度は訪れてほしい。

参考サイト

<料理ができないママに寛大な台湾文化と充実した外食事情>

<https://chiik.jp/articles/krjNV>

<日本人・台湾人の夜市利用意識研究—台北士林夜市の例—>

<http://square.umin.ac.jp/mayanagi/students/06/kawamura.htm>

<台湾の料理・食文化は平均レベルが高く美味しいものばかりだった>

<http://blog.hycko.net/4946.php#i>

<台湾 Express! >

<http://www.near21.jp/kan/publication/taiwanex/2508.pdf>

臨地実習 C

中国のおもてなし ―異文化理解の第一歩―

16122019 亀山 莉美

「中国」と聞くと、どのようなイメージが湧くだろうか。ニュースで報道されている内容の影響で悪いイメージを持つ人は多いだろう。中国にも日本のことが好きな人はいるだろう、と思っていた私ですら実際はどうであるのか不安になることもあった。しかし、実際に中国を訪れてみたところ、ニュースとはかけ離れた中国人の良い面を発見することができた。

私たちは3月下旬に約1週間、中国の福建省にある漳州市を訪れた。訪問先である閩南師範大学に着くと、学生達は非常に私たちの訪問を歓迎してくれた。さらに、上手な日本語を話しながら、大学周辺にある地元のお菓子を買っているお店や、料理が美味しいお店などを案内してくれた。学生達は友達というよりかは家族のように接してくれた。後から聞いた話によると、学生達は大学周辺のお店についてあまり知識が無かったが、この日のためにわざわざ調べてくれたそうだ。そのことを知って私は嬉しくなった。

1日目の夕食は、大学の先生が、中華料理店にあるような回転テーブルの上いっぱいに料理を用意してくださった。中国でのマナーということで先生にお酒を注ぎに行くと喜んでお酒を一気飲みしてくださった。

大学の人だけではなく、街の人々も優しかった。中国の学生と一緒にタクシーに乗った際、私が日本人だと気付いた運転手が「日本人に見えないね！何か中国語話せる？」と話しかけてくれたり、降りる時に日本語で「じゃあねー」と言ってくれたりした。学生曰く、日本のアニメが人気で、それを見てちょっとした日本語を学んでいるらしい。

実際に1週間中国で過ごしてみて、日本人よりも中国人の方が細かいところまで心配してくれる上、心の距離を近づけて接してくれているように感じた。このことを中国の学生の中でも特に仲良くなった学生に伝えると、「中国にはたくさん人がいるから悪い人もいる。でもいい人もたくさんいる。日本も同じだよ。私は日本が大好きだから楽しく過ごせるようにみんなをもてなしているんだよ。」

IV. 3. 中国語圏

と言っていた。日本のおもてなしも素晴らしいとは思っていたが、中国のおもてなしと比べると、心からもてなすということが少し足りていないように感じた。

さらに、最終日には中国の学生達は私が好きと言っていたイヤリングや手紙、お土産などをたくさんくれた。まさかこのようなことまでしてもらえるとは思っておらず、ちょっとした手紙しか用意してなかった私は申し訳なく思った。普段私はあまり泣かない方だが今までしてもらったことが思い出され、この時は家族との別れのように涙が出てきた。

たとえ、初めて会う人だとしても家族のように暖かく接してくれる。私は今回の体験を通じて、このような中国の良い面を発見した。ニュースから得られる印象だけで、中国人の性格を決めつけてしまうことは非常にもったいないと感じた。また、このことは中国に限らず、他国や日本国内に関しても同じようなことが言える。1つの情報に縛られず、実際にその地や文化を体験してみることが異文化理解の第一歩である。新しい魅力を発見し、異文化理解について考えを深める良い機会となった。

お茶テラス



東海の人とお茶が大好きで、お茶が大好きな、お茶から
お茶まで、お茶の文化を伝えています。お茶の文化を
伝えるために、お茶の文化を伝えています。



学外に出れるのは、貴重だ

時間！現地の学生と、色々な
交流！お茶の文化を伝えています！
中国の文化を伝えるための、お茶の文化を
伝えるための、お茶の文化を伝えています！

お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

200

お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

東

コンビニ(学園)



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

レンボブリッジ



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

レンボブリッジ



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

商店街



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

三角



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！



学外Ver.

寧明街MAP



あるき

きい道



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

中山公園



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

南山寺



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！



お茶の文化を伝えるための、お茶の文化を伝えています！

双方向の繋がりへ

16122027 佐藤 文香

この夏、私は中華民国外交部主催の 2018 年度日本青年台湾研修ワークショップに参加しました。その中でも、日本台湾交流協会で聞いた「台湾の親日感情は当たり前ではない」という言葉が、特に記憶に残っています。私はこの言葉を次のように解釈しました。台湾国内がどんな状況でも、台湾に対して日本がどんな態度でいたとしても、とにかく台湾が親日的であり続けるというわけではないという意味です。

私は台湾という国に関心を持ってからはまだ日も浅いです。しかし、もともと韓国に関心があり、日本に対する感情というものがいかに繊細で難しいものかを感じてきました。台湾は日本統治時代があったにもかかわらず、日本にとっても友好的な国だという印象があります¹。それは、意識調査で日本を身近な国と感じる台湾人が多いことや、訪日者数上位三ヵ国に台湾が入っていることなど、データにも表れています。

1. 日台の対外意識

初めて台湾を訪れ、多くの事を感じました。それを日本と比較してみます。まずは台湾について、物と人の二つに分けて話します。一つ目は物についてです。研修初日、初めて見る台湾の街には、台湾へ進出した日本企業の多くあったのが印象的でした。その日の散策で行った誠品書店では、並んでいる本の多くが日本の本やその本を翻訳したものでした。予想以上に日本とのつながりがはっきりと見え、驚きました。

二つ目は人についてです。研修中、同行した台湾の大学生や、二日目の台湾大学との交流会で話した学生など、同年代の台湾の人々と話す機会が多くありまし

¹ 司馬遼太郎『台湾紀行』（東京：朝日文庫、1997 年）など。

IV. 3. 中国語圏

た。彼らは日本へ何度も訪れたことがあると言って、訪れた場所をとて上手な日本語で楽しそうに話していました。多くの人が日本への留学経験がある、または留学予定があると話していて、その親日的な姿勢に私も日本人として嬉しくなりました。聞くと、彼らが日本語を勉強しようと思ったきっかけは、多くが日本文化やサブカルチャーなどです。私も韓国語の学習は、大衆文化好きが高じてのものでした。そのため、文化から言語や国そのものへと好意が広がっていく気持ちに、共感しました。

次に日本について目を向けてみます。私は友人の多くが英語圏へ留学しており、日本にいて台湾を感じることはあまりありません。日本台湾交流協会で受け取った資料によると、2017年のワーキングホリデー実施人数は、台湾から日本への人数が上限の5000人に対し、日本から台湾への人数はたった375人です。それだけではなく、日台間の人々の往来自体にもこの傾向がみられます。台湾から日本への往来は1990年以降増え続け、2013年の航空自由化を境に大幅に増加しました。ですが、日本から台湾への往来は航空自由化を経てもなお大幅な増加は見られていません。

2. 台北だけではない。地方の魅力を感じた二日間。

台湾を訪れ、台湾を深く知ると、多くの魅力に気が付きます。台北は観光地として有名ですが、私にとっては研修三日目と四日目に訪問した花蓮が、今まで生きてきた20年間で一番印象深い旅行地になりました。台北から花蓮へ向かう時に乗った太魯閣号から見た海。山と空が水面に映る鯉魚潭。松園別館から見渡した街並み。どれも本当にとて綺麗で、目が離せませんでした。花蓮に着いてすぐに乗り込んだバスから見た街は、台北とは違い、素朴でどこか懐かしい雰囲気でした。

そして、花蓮での研修日程には、光栄なことに台湾日本関係協会の秘書長である張淑玲さんが同行してくださいました。バスの車内や訪問先、そして食事の席でも、日本と台湾の繋がりについて沢山お話してくださいました。特に花蓮での地震の際に、地震発生から一夜明け、すぐに駆け付けた日本の専門チームを花蓮へ案内したときのお話はとても印象的です。被災してすぐに受け入れた援助は日本だけだというお話に、同じ地震の国ということ、そして日本を信じているよう

な台湾の対応に、少しジーンと感激してしまいました。

3. 日台の関係

改めて、台湾から日本への関心と、日本から台湾への関心について比較してみます。すると、この二つにはあまりにも差がありすぎるように感じます。日台関係は台湾からもらってばかりの一方通行な関係だ、と気づきました。「台湾の親日感情は当たり前ではない」。初めに話したこの言葉の解釈は、この気づきがきっかけです。例えば日韓関係も、アニメや音楽などの大衆文化や国民同士の交流(民間外交)は良好な部分が多いです。ところが、政府間の関係が悪化すると、それはすぐに民間外交にも影響を及ぼします。国と国の関係というのは、影響を受けやすい繊細なものなのです²。

これを日台関係に当てはめてみます。日台関係も、日本の大衆文化、台湾の食文化や景観などの観光要素によって、民間外交は良好です。しかし、日韓の例を見ればわかる通り民間外交だけでは台湾が常に親日であり続けることは難しいです。「日本と台湾も、慰安婦や領土の問題はあるが、問題を前向きに解決し友好的な関係を築いていきたい。」中華民国外交部のこのような姿勢が、日本統治時代を経ても日台両国の関係を良好に保っているのでしょう。日本青年台湾研修ワークショップを始めとする、台湾政府から日本国民に対する積極的な働きかけ(Public diplomacy、文末の図表2を参照)³。総じて台湾から日本への一方通行という印象の強い現在、こうした働きかけが日台関係を成り立たせているのだと感じています。

4. 日本から台湾へできること

では、日本は台湾に対してどうするべきでしょうか。台湾は日本と国交を持たないものの、日本に対して友好的な姿勢を見せており、日本にとっては世界各国の中でも台湾は貴重な存在です。日台はお互いに歩み寄り、多方面で深い繋がる

² 小針進『韓国と韓国人』(東京:平凡社、1999年)など。

³ パブリック・ディプロマシー(public diplomacy)とは、「自国の対外的な利益と目的の達成に資するべく、自国のプレゼンスを高め、イメージを向上させ、自国のついでに理解を深めるよう、海外および組織と関係を構築し、対話を持ち、情報を発信し、交流するなどの形で関わる活動」である。村田晃嗣・君塚直隆・石川卓・栗栖薫子・秋山信将『国際政治学をつかむ』(東京:有斐閣、2009年)、P.163。

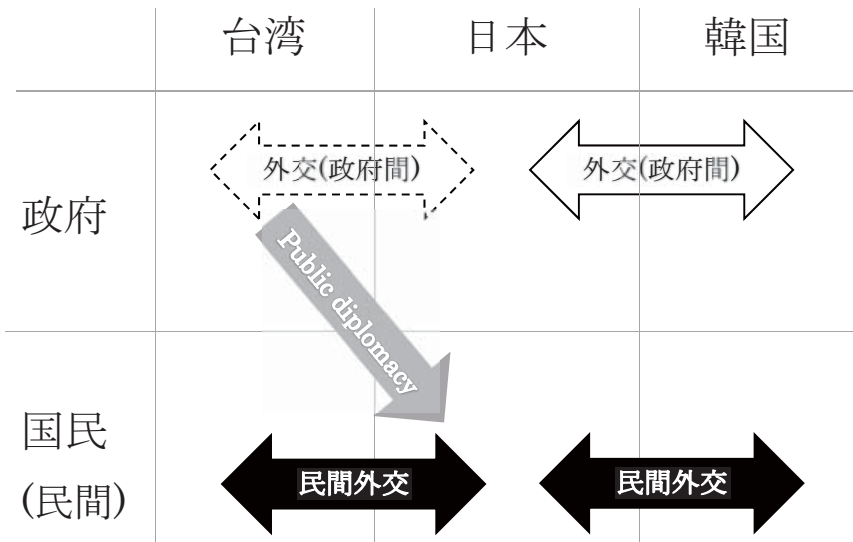
IV. 3. 中国語圏

ことによって、さらに親密で友好的な関係を築くことが出来るはずだと思います。日台はこれまでの一方通行でなく、今後は双方向の繋がりを築くべきではないでしょうか。今後、日台関係が良好に保たれるかどうかは、日本次第です。私たちのような若い世代が先頭に立って更に台湾へ関心を持ち、積極的に行動していくべきです。そうすることで、台湾と日本もさらに身近な国になるでしょう。

【図表 1】2018 年度日本青年台湾研修ワークショップ

DAY1 09/10(月)	【見学】中正紀念堂＝【夕食】鼎泰豐 101 店＝【文化体験】香堤大道、信義誠品書店
DAY2 09/11(火)	【見学】台北賓館＝【訪問】大陸委員会＝【訪問】外交部＝【昼食】九華樓＝【訪問】日本台湾交流協会＝【学生交流会】国立台湾大学＝【夕食】寧夏夜市の千歲宴
DAY3 09/12(水)	台湾鉄道で花蓮へ【太魯閣(タロコ)号 408 列車】台北駅→花蓮駅＝【文化体験】鯉魚潭＝【昼食】Cikasan レストラン＝【見学】国立東華大学、石材及び資源産業研究発展センター＝【夕食】東大門夜市
DAY4 09/13(木)	【見学】林田山林業文化園区＝【昼食】林田山豚足レストラン＝【見学】松園別館＝台湾鉄道で台北へ【普悠瑪(プユマ)号 225 列車】花蓮駅→台北駅＝【歓送会】研修のご感想及びご意見交換@臻愛会館－台北京華館
DAY5 09/14(金)	【文化体験】大稻埕戲苑、迪化街、霞海城隍廟、民藝埕＝【昼食】稻舍 UR239 レストラン

【図表 2】外交の 3 種類



4. 韓国語圏

長期留学レポート

人との出会いが私を変えてくれた

15122008 泉 咲弥夏

私は大学3年生の9月から2月までの5か月間韓国のキョンヒ大学の語学堂に長期留学していた。留学中は楽しい反面、大変だったこともあったが、日本にいただけでは経験できなかったことを学ぶことができた。秋学期は、スウェーデンやトルコ、ベトナム、中国、香港、日本という多国籍なクラス編成であったため、仲良くできるか少し不安もあったが、スウェーデンやトルコ人の学生たちの「会食する人ー!」という呼びかけがきっかけで行った食事会でクラスのみんと打ち解けることができたので、2人には感謝しかない。クラスの雰囲気もよく、授業中に積極的に意見を発表する学生が多かったため、私も自発的に発表することができ、楽しく勉強することができた。特に中国人の友達とは先生に「二人とも雰囲気が似ているね、間違えそうになるわ」と言われたことがきっかけで話すようになり、今でも頻繁に連絡を取り合うほどの仲だ。今でも、私が韓国へ行くたびに会って思い出のチキンのお店でご飯を食べたり、カフェで「あの先生のおかげで仲良くなったよね」など留学中の出来事やお互いが好きなアイドルの話などで花を咲かせている。

冬学期は中国、モンゴル、日本人というアジアなクラス編成で、人見知りする学生が多く不安であったが、卒業制作で行った映画制作を行う中で打ち解けることができた。私たちは「日常」をテーマとし、コンビニで並んでラーメンを食べたり、遊園地へ行った時の動画を制作し、達成感を感じることができた。上級になると、グループ発表の形式が討論となり、テーマも「捨て犬の安楽死について」や「大型デパートから商店街を守るには」など実際の問題について意見交換をしなければならず、資料を探しうまくまとめるのに本当に苦労した。秋・冬学期ともに、ほとんどの学生が大学進学を志望していたため、授業内容も実際に大学で扱われるテーマを使った討論を行ったり、レポートの書き方などを学んだり大変だったが、みんな大学進学という目的を持ち一生懸命に取り組む姿に刺激

を受けて、「このままではだめだ、もっと頑張ろう」という気持ちになった。

私はこの半年の留学の間、韓国各地の世界遺産を研究テーマにしていたので、留学中ソウルはもちろんのこと、済州島や慶州、公州、水原にある世界遺産をまわった。一番印象に残っている遺産は、済州島にある城山日出峰という世界遺産だ。写真で見るとより実物の方がはるかに大きく、頂上まで登るのがとても大変だった。しかし、頂上から海や街を一望することができ、達成感があった。自然遺産なので緑も多く、気分をリフレッシュすることもでき、訪れた各地の韓国人の優しさや温かさを感じることができた。どこの地域に行っても「どこから来たの？」と声をかけてくれたり、ご飯を食べながらお店の人と話すこともあった。

韓国に留学した理由はもともと語学力の向上が目的だったが、語学力の向上はもちろんのこと、人見知りの克服や行動力の向上など世界遺産を巡りながら出会った韓国人や語学堂で出会った学生などの出会いが私を変えた。また、今まで新しい出会いを避けてきた私に人と関わることの楽しさ、新しい出会いの大切さも教えてくれた。これからも様々な出会いを大切にしたい。

完璧でなくていい

16122051 畠山 愛理

大学2年の夏休み、私は3週間の韓国語学研修に参加した。この時、以前受けたレベルの検定より上のレベルに合格していたため、ある程度実力がついていると思っていた。しかし、初日に行われたレベル分けテストで作文と面接が行われたのだが、自分の伝えたいことを何ひとつうまく伝えられなかった。結果、初級のクラスに分けられ、自分のレベルの低さを実感した。この時の悔しさから、もっと実力をつけるために長期留学をしようと決意した。

私は、苦手な会話の力を一番伸ばすことを目標にした。韓国語で話すことに自信がなく、授業の初日にクラスメイトに自分から声をかけようと心に決めてはいたが、結局誰にも声を掛けられなかった。新しい友人を作って学食で一緒にご飯を食べるといふ、留学生活のイメージからどんどん遠ざかっていく気がした。それから数日間葛藤を繰り返し、ようやく話す機会が訪れた。放課後、クラスメ

トのスウェーデン人とすれ違い、軽い挨拶を交わした。これはもっと話すチャンスだと思い、食事に誘おうという意図で、いつもどこで食事をしているのか質問をした。すると、学校の近くという答えと共に、私が誘おうとしているのを感じ取ってくれ、一緒に食べようと向こうから誘ってくれたのだ。食事をしながら会話をしていたが、やはりうまく伝えられないことも多かった。それでもジェスチャーを交えながら伝えていった。自分が伝えたいことを 100%言葉で伝えられなくても、たとえ半分以下でも相手は理解してくれると気づかされた。私は完璧に話そうとすることにこだわりすぎていたのだ。

この日から、他のクラスメイトにも積極的に声を掛けていけるようになった。もちろん同じレベルの授業を受けている学生でも、自分より会話が上手い人は山ほどいる。最初は、何故自分はこんなに会話が苦手なのかと悩むことも多かった。しかし、「外国人なんだからうまく話せないのは当たり前。話していけばあなたも上手になるよ。」といった友人の励ましもあり、頑張ることができた。留学してから 3 カ月が過ぎたころには、友人との会話は問題なく交わすことができるようになった。間違えるのは当たり前といった考え方に気づいてから、実力がどんどん伸びていったように感じた。「完璧でなくても良い、間違いはこれから成長できるチャンス」というように、前向きな考えを忘れずに残りの留学生活を楽しみたい。

海外語学研修報告・課題レポート

【2018 年度韓国語圏 (ソウル) 語学研修】

実施責任者：福島 みのり

概 要

実施期間：2018 年 9 月 1 日～9 月 22 日

実施国・機関：ソウル市慶熙 (キョンヒ) 大学国際教育院

参加者：外国語学部グローバルコミュニケーション学科生 11 名、教育学部 1 名

実施内容：初日はオリエンテーションとレベル分けテストを受け、翌日より各クラスで授業開始。トウミ制度 (韓国人学生が外国人留学生をサポート

する制度)がある。

言語授業 44 時間・文化講座 8 時間、現地学習 (韓国民俗村、NANTA 公演、国立中央美術館、ソウル N タワー見学など。)

実施責任者：福島みのり

アイドルとファンについて

17122014 大石 陽菜

はじめに

3 週間はじめて日本以外の海外で生活をしてみて、日本とは全く異なる文化にたくさん触れることができた語学研修となった。例として、食べ物や礼儀、交通マナーなどが挙げられるが、私は今回のレポートではアイドルとファンについて取り上げたいと思う。私自身、小さいころから K-POP が好きで、韓国アイドルを長く応援してきたことから、日本のアイドルとは違った音楽文化があると感じていた。そこで、ファンという視点からその時に感じたことや、実際に韓国へ行ってみて自分の目で見て感じたことや思ったことについて、日本のアイドル、そして、ファンとを比較しながら調査していきたいと思い、このテーマを設定した。以下、1. サポート文化の時代、2. ファンが行う活動、3. 韓国アイドルと企業の関係の 3 つの視点から考察していく。

1. サポート文化の時代

アイドルを応援するファンは、ファンレターを書いて彼らに想いを伝えたり、うちわなどを作成したりして応援するのが一般的である。しかし、現在の韓国では、ファン自体が彼らの認知度をあげる行為や広報活動をする時代になってきている。それだけでなく、ファンは好きなアイドルの名前で寄付やボランティア活動を行うことで、彼らのイメージアップを図る動きもみられるようになっている。最近では、国民が投票することでデビューするアイドルが決まる番組などもあり、自分の好きなアイドルがデビューできるようにとファンが投票を促す看板なども出している (参照 1)。ただのアイドルとファンという関係から一種のビジネス



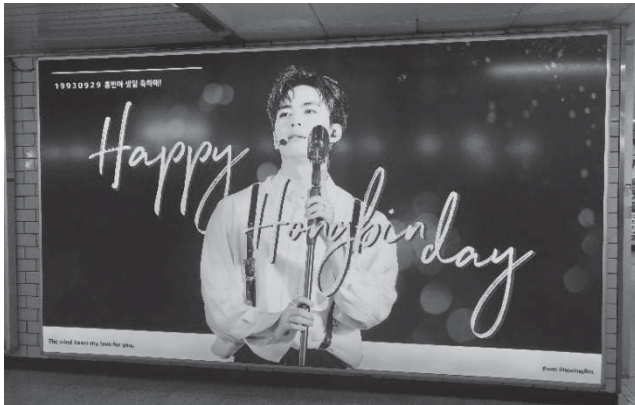
「投票してください」と書かれた看板（参照 1）

パートナーと化しているといっても良いだろう。それほど、韓国アイドルの活動にとってファンは大きな存在となっている。そのほかにも私は好きなアイドルのレギュラー番組で、韓国ファンがケータリングをサポートすると聞き、実際にサポート代として寄付をしたことがある。認証ショットとして SNS に写真をあげているのをみて嬉しかった記憶があるが、そのとき何よりも驚いたのが、好きなアイドルの分だけでなく出演者、そしてスタッフの分までサポートするという点である。ファンは彼らの分も用意することで、好きなアイドルの顔を立てているということをその時はじめて知った。

日本では、食べ物や生ものの差し入れは、基本的に NG としている事務所が多いように感じる。そもそも、韓国のようなサポート文化というものは根付いていないだろう。日本では、そういった広報活動やサポートをファンが行うというより、CD を買いアイドルである彼らをテレビやコンサートで応援することに重きをおき、決してアイドルとファンという壁を崩そうとしない特徴があると感じた。音楽番組やライブでも、韓国アイドルを応援するファンには掛け声が必要で、どのファンも揃った掛け声を曲中に披露し、バラードでは一緒に歌うことで一体感が生み出されている。日本のアイドルを応援するファンで、掛け声をしている人はあまり見かけないどころか、大合唱をする韓国と比べて日本は静かに歌声に耳を傾けバラードを聞く人が圧倒的多数である。

2. ファンが行う活動

K-POP を好きな人たちなら誰もが知っていると思われるが、アイドルに向けた誕生日広告というものが存在する。自分が好きな韓国アイドルの誕生日が近くなると、ファンがお金を出し合い、「誕生日おめでとう」の意味を込めた大きな電光掲示板を出すのだ（参照 2）。2017 年に駅に出された誕生日広告は 1038 件と前年と比べ 2.6 倍も増加している（注 1）。誕生日広告だけでなく、デビュー日をお祝いしたりするものもあった。これは多くの人々が行き来し目に止まりやすい弘大駅や江南駅の駅内でより見られた。彼らのファンは自分たちのお金を出し合って形にすることで彼らを応援しているという表現をこのように示しているのである。研修中にも電車に乗って色々な場所に行ったが、どこの駅にもアイドルのお祝いをする電光掲示板が見られた。



誕生日をお祝いする電光掲示板（参照 2）

ファンでない人から見れば関心はあまり持たれないかもしれないが、同時期に何ヵ所にもわたって電光掲示板が存在していることで、結果的に自然とそのアイドルの知名度をあげることに成功しているのではないかと感じた。ファンはただ単に彼らのお祝いをするだけでなく、様々な層をターゲットにして知名度を上げることも目的としているのではないだろうか。

日本でも東京駅などでアイドルの新曲プロモーションとして大きな看板が出ることはあるが、それは事務所が公式に出しているもので、韓国のようにファン個人で出しているものは滅多に見られない。ファンが自らアイドルの広報を行うと

いう行為は、韓国独特の文化であることが分かる。ファン個人で出しているものの例として、最近では誕生日が近くなると駅内の電光掲示板だけでなく、ファンがお金を出し合い、カフェにドリンクスリーブを置いてもらうイベントが多くみられる（参照 3）。私もそのイベントをやっているカフェへ行き、ドリンクスリーブを受け取ったが、それだけでなく、カフェ自体にもポスターや写真が飾ってあった。普段は普通に営業している既存のカフェで行うことから、そのために来るファンだけでなく、普段利用している一般の客への知名度を上げることもできるのだ。



カフェのドリンクスリーブ（参照 3）

身銭を切って行うこれらの行為は安いものではなくファンの利益はないうに等しいだろう。それでも尚このようなサポート文化が衰えるどころか年々発展してきているのは、「自分が好きなアイドルが喜ぶ姿が見たい。」「もっといろいろな人に周知してもらいたい」というファンの強い思いが込められているからではないかと思った。

3. 韓国アイドルと企業の関係

街中や電車でよく見られたのが、韓国アイドルや俳優を起用した企業の広告である。多くの飲料会社や化粧品会社では、韓国アイドルをイメージモデルとして起用し、販売促進を促していた。日本でもアイドルや女優が食品会社や化粧品会社のイメージモデルとして起用され、彼らが実際に CM に出演しているのを見るが、韓国では CM だけではなく商品にまで彼らを使用しているケースが非常に多かったのだ。韓国はチキン大国といわれるほどチキンのお店が数多くある。そこで、チキンブランドのイメージモデルになれることはスターである証だといわれている。街中でも BTS や Wanna One、Seventeen など人気のアイドルがイメージモデルをしているチキンブランドを発見した。もちろん、パッケージに

IV. 4. 韓国語圏

はそのアイドルの顔写真が印刷され、中にはそこでチキンを買うとクリアファンルやポストカードが貰えるといった特典が付いていた。

食べ物だけでなく、化粧品でも同じことがいえる。日本でいう原宿に相当する若者の街、明洞では数えきれないほどの化粧品ブランドが立ち並んでいたが、そのすべての化粧品ブランドに人気の韓国アイドルや若手俳優がイメージモデル、公式モデルとして起用されていた。彼らを起用しコラボ商品や特典をつくることで、ファンは彼らがイメージモデルをやっているならと購入するというケースが発生する。私自身もイメージモデルをしているという理由でその化粧品ブランドを買ったことがある。また、箱に好きなアイドルが印刷されているという理由だけ



顔写真が印刷されたアイス（参照4）

で買っている友人を何人も見たことがある（参照4）。私たちは企業の戦略に見事に引っかかっているといえるだろう。しかし、化粧品ブランドが数えきれないほどある韓国で生き残るためにはどれだけ手に取ってもらえるか、名前を知ってもらえるかが重要となってくる。そう考えると、韓国アイドルとそのファンをそばに置くことで、一番はやく知名度を上げることができるのだ。

おわりに

日韓のアイドルとファンについて比較をしてみると、日本アイドルのファンがアイドルである彼らを遠くから個々に応援していて、あくまでもアイドルとファンという立場から離脱することがない一方で、韓国アイドルのファンは、物理的に近くで一緒に彼らの広報活動を行い、ともにマーケティングしているという関係性の違いに気づいた。どちらかが合っていてどちらかが間違っているというものではないが、アイドルとファンという点1つとってみても、こんなに違いがあることが分かりとても興味深かった。また、韓国企業はアイドルをイメージモデ

ルとして起用することでその商品のイメージアップや知名度をあげることを目指していると感じた。それだけでなく、彼らを起用することで、ファンは購買欲が出て結果的に企業の売り上げを伸ばすことにも成功しているのではないだろうか。韓国は他の国以上にアイドルとファンの関係、そしてそこに企業が加わりお互いが密接に関わっているのだと調査を通じて実感した。

<参考文献>

・ 福島みのり 石坂浩一 (2014)『現代韓国を知るための 60 章』明石書店
(脚注)「アイドル応援広告がラジオにも登場 EXO メンバーの誕生日祝う」『韓国コネスト』(2018 年 4 月 10 日付 https://www.konest.com/contents/news_detail.html?id=37052)

JENESYS 日韓交流事業レポート

「交流」で日韓を繋ぐ第一歩に

18122005 伊川 亜祐菜

「日本で韓国はどんなイメージなの？」これは、私が韓国の大学生に尋ねられた質問だ。この質問を受けて、交流をする意義を改めて考えさせられた。

2018 年 9 月、静岡市国際交流協会が主催する「静岡市大学生訪韓研修」に参加した。もともと、私は小学生の頃から韓国の女性歌手グループの少女時代をきっかけに韓国語の勉強を始めた。韓国語を勉強する中で、自分と同じように韓国が好きな日本の方、反対に日本が好きな韓国の方を結ぶことのできる仕事に将来就きたいと考えるようになった。2つの国を繋ぐカギは「交流」だと考えている私にとって、今回の研修は交流ができる素晴らしいチャンスだった。

研修では、本当にたくさんの韓国の方と交流をすることができた。その中でも、最も良い経験になったのが水原にある京畿(キョンギ)大学の学生とのディスカッション・交流だ。なかなか普段話すことのできない、同世代の学生と話せることがすごく楽しみだった。ディスカッションでは、お互いの国の就職と進路の現状や問題点について話した。大企業への就職を志望する人が多く、競争が激しいと

IV. 4. 韓国語圏

ころなど共通する部分が見られた。一方、韓国では日本に比べ、就職に関する情報を得づらく、学生が進んで探していかなければならないところ、日本は日本国内で就職を考えるが、韓国では国内の他に海外で就職を考えるところなど異なる部分も多く見られた。日本も韓国も青年たちは希望する企業へ入る競争で苦しい状況におかれていることは変わらないが、その状況で勝ち抜いていく韓国の学生の能力の高さを知ることでもでき、良い刺激になった。

そのあと、学生たちと交流もかねて夕食を食べに行った時、最初の質問を受けたのだ。私はどうして？そう聞いてみると「日本の人たちは韓国に悪いイメージを持っていると思っていたから。」と答えが返ってきた。それを聞いて、日本でも同様なことが起きていると感じたのだ。「韓国では日本は良いイメージを持たれていないだろう、きっと嫌われているんだ。」と思い込んでいる人が多いというこの状況がお互いの国の交流の場・機会を奪っていると思った。そんな気持ちを生むのは、メディアが大きく影響している。メディアでは慰安婦問題や、徴用工問題などの歴史的問題によって日韓関係が悪化した状況が多く伝えられる。しかし、人と人との関係まで悪化しているとは言えない。実際、参加した10人の団員は全員が韓国が好きというわけではなく、韓国語を話せるメンバーも少なかった。しかし、団員全員が研修を通して韓国の方と交流をする中で、自然に韓国について興味・関心がより強くなった。実際に顔を合わせて話をし、時間を一緒に過ごしたからこそ日本人・韓国人という違いを超えて友人になれたと思う。やはり、顔の見える関係を築くということが大切だと学ぶことができた。この研修で出会った人たちとの絆を大切にし、感じたこと、学んだことを将来の夢や次の活動につなげていきたい。

5. 上記 5 言語以外の言語圏

第 4 回 GC 学科学生海外活動報告会

江口 佳子

本報告会は GC 学科の学生が、海外でのインターンシップや学外公的機関の海外派遣事業、国内のイベントでの活動を発表するために、毎年 1 月に行われている。大学のプログラム（海外語学研修・海外留学、海外臨地実習）を経験した学生等が、さらに活動の場を求めて、自ら学外のプログラムや事業に応募して、貴重な経験を積んでいる。

ここ数年の傾向として顕著なのは、学科のカリキュラムの柱である四言語、日本語教育、協働研究で学んだ総合力を活かして、国内外で多文化共生社会に繋がる取り組みをする学生が増えていることである。また、発表者の体験を聞き、それを共有することが、GC 学科全体に意欲向上をもたらしている。聴衆の中には、海外に対して漠然と抱いていたイメージをより明確にすることができたので、今後、何かに挑戦したいとコメントしていた学生がいた。

今回の報告会でも、学生だからこそ経験できる活動やプログラムは、関心の領域を広げ、グローバルな視野を培う絶好の機会であると改めて感じた。

【当日の報告等】

1	日本語指導プログラムータイ バンコク（2018/8/27～31）	森谷みなみ（16122064）
2	JENESYS（日韓交流事業 水原市国際交流センター・ 静岡市国際交流協会主催）ー韓国 水原市（2018/9/6～13）	竹下媛香（18122068） 伊川亜祐菜（18122005）
3	個人長期留学報告ースペイン セビージャ、アルカラ・デ・エナーレス （2017/3/4～2018/3/18）	大久保愛（14122012）
4	やいづ国際フェスタ「はあとふる Yaizu2018」 ボランティア活動報告（2018/6～2018/12）	伊川亜祐菜（18122005） 伊藤侑（18122009） 梶川夏葉（18122022） 竹下媛香（18122068） 久門千夏（18122088）

IV. 5. 上記 5 言語以外の言語圏

5	2019 年度まつり in ハワイについて	近畿日本ツーリスト静岡支店 矢部裕子氏
6	2019 年度トビタテ！留学 JAPAN について	静岡県文化・観光部総合教育 局大学課 梅澤雄司氏

勇気の一步

16122064 森谷 みなみ

私は 8 月 27 から 31 日の 5 日間、タイバンコクにある Thai business administration technological college で、学生たちに日本語を指導するボランティア活動に参加した。

この活動は 3 年ほど前から行われているもので、明治学院大学の渋谷恵教授から声をかけていただき、参加することになった。他大学の学生も参加できるオープンな活動で、様々な面で刺激を受けた。これを通して学んだことは、大きく分けて 2 つある。

1 つ目は、日本語教員という職業の偉大さである。私は日本語教育養成課程を得るために、大学 1 年から日本語教育の授業を受けてきた。学んだ知識を活かそうと現地へ向かったが、理想の指導はできなかった。授業形態は、15 ～ 19 歳の受講生 1 クラス約 30 名を日本人学生 2 ～ 3 名で 100 分の授業を行う。カレッジに到着するまでは文法等の教案を作成していたが、受講生の年齢層が広いため学習能力に差があることが判明。そこで、「日本を知る授業」に変更した。挨拶・文化・音楽・体育等、私たちにしか教えられない授業を行った。教案の急な変更といったハプニングは海外ではつきものだ。また、言語や文化の違う人と接する際は多くの壁を感じる。それらを踏まえて、日本語教員の大変さ、その中で芽生える達成感を身に染みて学ぶことができたと思う。

2 つ目は、積極性の大切さだ。G C 学科では四言語を主に学ぶ。それらとは違う言語圏に行く目的は？今の知識を発揮する事とはかけ離れているのでは？そう考える人も少なくないだろう。しかし、胸を躍らされる事に飛び込んで行けるのは「大学生」の今がチャンスだ。社会に出てから時間を作ることは簡単ではなく

なる。少しでも興味関心の湧きたつものが自分の中に芽生えているのならば、勇気の一步を踏み出そう。そう、私に教えてくれたのがこのボランティア活動だ。

今の私は、以前の私よりほんの少し大きくなれた気がする。与えられた環境のみならず、自分で切り開いていく経験はかけがえのない宝物になった。



(左) ワット・ポー観光での1枚

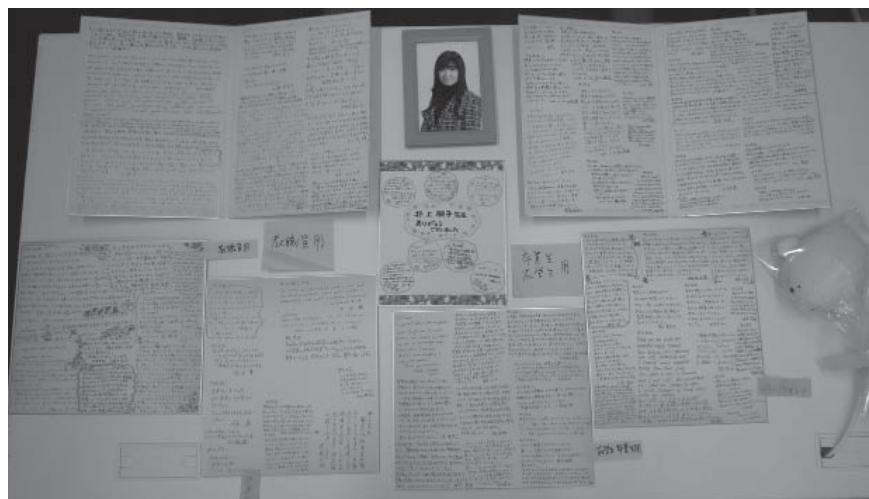


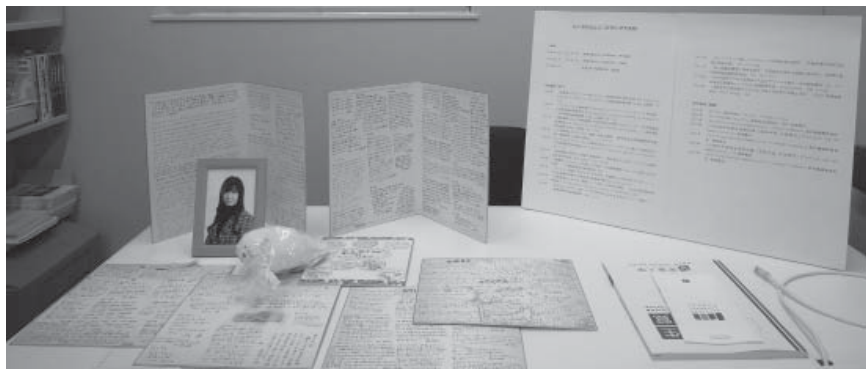
(右) 送別会での1枚

V 井上朋子先生を悼む

井上朋子先生の経歴と業績

2018年10月30日（火）に井上朋子先生が逝去なさいました。11月7日（水）の教授会では学部長の一言哲也が改めて訃報を告げ、一同が黙祷を捧げます。各教員も自身の担当授業で受講者に訃報を伝え、多くの受講者から驚きと悲しみの声がありました。11月5日から23日までには、草薙キャンパス A 棟3階西側に「追悼コーナー」を増井実子が準備したところ、卒業生からの要望もあり期間を30日までに延ばすにいたしました。集まった寄せ書きは写真の通りです。外国語学部は先生のご冥福を祈るとともに、『とこはことのは』でも関係の記録を残して先生を偲ぶことになりました。幸田明子と小池理恵が追悼文を書き、谷誠司が先生の経歴と業績をまとめています。（文責：若松大祐）





井上朋子先生の経歴と業績

学歴

筑波大学 第一学群 人文学類 言語学主専攻 (英語学)

静岡県立大学 大学院国際関係学研究科 比較文化専攻 (英語学)

経歴

2006 年 4 月 – 2010 年 3 月 常葉学園大学 外国語学部 専任講師

2010 年 4 月 – 2013 年 3 月 常葉学園大学 外国語学部 准教授

2013 年 4 月 – 常葉大学 外国語学部 准教授

研究業績 (論文)

1999 年「文構造とメタファーの成り立ち」『中部言語学会学会誌 Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)』(『英語学論説資料第 36 号』に再録) (6) pp.7 ~ 19

2000 年「『～ていく』の意味変化におけるイメージスキーマとメタファー的写像」『中部言語学会学会誌 Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)』(『日本語学論説資料第 37 号』に再録) (7) pp.1 ~ 20

2001 年「移動動詞 pass の意味拡張にみる空間から時間へのマッピング」『中部

言語学会学会誌 *Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)* 』(『英語学論説資料第 37 号』(8) pp.1 ~ 20

2002 年「大学教育における TOEIC 指導～成果と課題」『静岡県立大学国際関係学部紀要 国際関係・比較文化研究』(1/1) pp.1 ~ 56

2002 年「『be +V-ing』と『V- ていく』の関係にみるイメージスキーマに基づく意味変化」『中部言語学会学会誌 *Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)* 』(9) pp.1 ~ 16

2003 年「認知言語学研究と入門期の英語教育——進行相のとらえ方」『アイリス 英語教育学会学会誌 IRICE PLAZA』(13) pp.14 ~ 22

2008 年「前置詞 to から to 不定詞への文法化—日本語後置詞『に』との比較における考察—」『常葉学園大学研究紀要』(24) pp.81-100

2009 年「不定詞発生における『移動』と『目的』の認知的役割」『日本中部言語学会学会誌 *Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)* 』(16)

2009 年「『に』との比較における to の文法化—前置詞から不定詞のマーカーへ—」『日本英語学会第 26 回大会研究発表論文集 JELS』(26) pp.61 ~ 70

2010 年「文法化とカテゴリー論—to 不定詞の成立にみる文法カテゴリーの変化—」『常葉学園大学研究紀要』(26) pp.1 ~ 17

2011 年「ポートフォリオ導入によるキャリア開発教育の研究」『常葉学園大学研究紀要外国語学部』(27) pp.271 ~ 296

2011 年「良い授業の概念に関する研究：学習意欲を高める授業の具体例」『常葉学園大学研究紀要教育学部』(31) pp.181 ~ 214

2014 年「to の文法化における意味と文法カテゴリーの変化—日本語後置詞『に』との共通点と相違点—」『IRICE 英語教育学会 IRICE PLAZA』(24) pp.21 ~ 29

2016 年「英語音声の聞き取りにおける日本人学習者の問題と分析」『IRICE 英語教育学会 IRICE PLAZA』(26)

研究業績（書籍、共著）

2003 年『E ゲイト英和辞典』ベネッセ・コーポレーション

2005 年『コーパス活用 ロングマン実用英文法辞典』（共訳）桐原書店

2013 年『Pro-Vision English Communication I Teacher's Manual』教科書編集委員会

2013 年『文部科学省検定済教科書（高等学校 外国語用）Pro-Vision English Communication II』桐原書店

2014 年『Pro-Vision English Communication II Teacher's Manual』教科書編集委員会 桐原書店

2014 年『文部科学省検定済教科書（高等学校 外国語用）Pro-Vision English Communication III』桐原書店

2015 年『Pro-Vision English Communication III Teacher's Manual』教科書編集委員会 桐原書店

朋子先生との思い出

幸田 明子

井上先生とは、12 年もの長い間、同僚として大切な時を過ごさせていただきました。先生と出会えたこと、本当に感謝の気持ちで一杯です。

朋子先生が、2006 年に赴任していらした時の爽やかでエレガントなスーツ姿が今でもはっきりと臉の上に思い浮かびます。外国語学部の教員、学生にとって朋子先生の実在はあまりに大きく、2018 年 10 月 30 日に朋子先生の訃報を耳にして呆然と立ち尽くしてしまったのは、私だけではありません。2018 年 3 月、4 月にご体調がご回復なさり、大学の行事にいらしてくださいました。お姿を目にしたとたんあまりに嬉しくて、「朋子せんせー！」と思わず抱きついていって、ハグを交わした時の両腕の暖かかった感触と朋子先生の笑顔が何度も思い出され、未だに朋子先生にもうお会いできないという現実が受け止められない私がいまいます。

英語学がご専門の朋子先生とは研究分野が異なる私は、研究に関してはあまり

接点がありませんでしたが、国内外の大学の研究会などに熱心に参加なさっていた折のお話を伺うのがいつも楽しみでした。サマープログラムでは年齢が異なる人たちと共に学ぶこともあり、すごく勉強になると語っていらしたことも昨日のこのように思い出されます。授業の折にも国内外のご自身の貴重な体験を学生と共有なさり、話題がいつも豊富で、学生に寄り添った朋子先生の授業はどの科目もとても人気のあるものでした。

瀬名キャンパスでは、私の研究室の先に朋子先生の研究室があったため、扉を開けたときに、廊下で朋子先生にお会いすることがよくありました。お姿を目にすると、思わず「朋子せんせい！」と声を掛けるのが日課でした。いつでも細身のパンツスーツに身を包み、にこやかな笑顔で迎えてくださる朋子先生とお話をしていると、何故だか明るくて楽しい気分になるのです。瀬名キャンパスの朋子先生の研究室はとても居心地がよく、つつい長居をしてしまいました。本棚には、専門書が整然と並び、机の上もいつもすっきりと片付いていて、PCの周りに貼ってある付箋のメモもきちんと一列に並んでいました。美味しそうな紅茶の香りが漂っていて、「紅茶を飲むためだけに通ってくる学生もいるんですよ」などど、にこやかに笑いながら話していた朋子先生の声が今でも聞こえてくるような気がします。メタリックシルバーの観覧車のような素敵な写真立てには、朋子先生と学生たちの楽しそうな写真が何枚も飾ってあって、気候のよい春先などには、開放された窓からの爽やかな風に誘われて、写真がゆらゆらと揺れていたのを思い出します。

普段あまりご家族のお話をなさらなかった朋子先生でしたが、常葉大学のある卒業式でのごことが思い出されます。教員席で隣に座っていた私に、朋子先生が「先日息子の大学院の卒業式に出席したんですが、思わず泣いてしまったんですよ」と小さな声で教えてくださいました。いつもすごくクールな朋子先生のその嬉しそうで、ちょっと恥ずかしそうな横顔、でも同時に母親としての凛とした表情も浮かべているその横顔を見つめていた私は、思わず自分ももらい泣きしそうになっていました。

朋子先生はイギリス・プレミアリーグのリバプールの大ファンでした。Steven Gerrard がお気に入り、サッカーの話題で学生たちとも楽しそうに盛り上がっていましたよね。ずいぶん前のことになりますが、瀬名キャンパスの体育館で長

友佑都選手が、子どもたちのためのサッカー教室を開いた日のことは鮮明に覚えています。私はその夏に、バルセロナにある FC バルセロナのホームスタジアム “Camp Nou(カンプノウ)” を訪問し、バルサのサポーターの熱狂ぶりに圧倒されていました。その後、ローマの空港で同じフライトに乗る長友選手を見かけて握手をしてもらったことから、にわかサッカーファンに変身していました。そのことはもちろん朋子先生にもすぐ報告しました。長友選手が大学に到着する少し前に、私は朋子先生に誘われてカメラを握り締めながら、大勢の観客を掻き分けながら体育館へと急ぎました。今思えば、ほんの 1 時間半ぐらいの時間だったとは思いますが、二人で興奮しながら話をし、長友選手の姿をカメラで追っていた時間は、本当に楽しいひとときでした。いつもクールな朋子先生もその時ばかりは、サッカー好きな少女のように嬉しさと頬が紅潮していたことを思い出します。

テレビなどで、プレミアリーグのニュースやリバプールのチーム応援歌 “You’ll Never Walk Alone” が聞こえてくると、何か作業をしている時でも必ず手を止めて、ニュースや歌に聞き入ります。そして、朋子先生のことを思い出します。この 12 年間のさまざまな出来事、朋子先生の声、顔の表情などが、次々と蘇ってきます。そして歌を聴きながら、私も小さな声で歌詞を口ずさみます。きっと、朋子先生も一緒に歌っているはずだと感じながら。

Walk on, through the wind
Walk on, through the rain
Though your dreams be tossed and blown
Walk on, walk on, with hope in your heart
And you’ll never walk alone
You’ll never walk alone

To my dear colleague and friend, TOMOKO-sensei

Rie KOIKE

Now, when I do some division of my duties, I can no longer call at your

office. Even though we have known each other for a relatively short time after I was transferred from Fuji Campus, the time we have worked together seems much longer and deeper. We have shared divisional duties and you were and still are a model of mine in many ways. Your sincere and modest attitude was a perfect example for me as a new comer.

All I can do is to imagine what you could do or what you would say; then do so by myself. Even though we went out drinking just one night, it was a happy hour spent laughing at simple things. On the very next day, we returned to our daily routine. You were still here as a model and example of mine.

“Mother...,” once day you said you loved your mother who was then in bed dying. Even though you had never asked me to take over your work, I did so just this one time. You never forgot it, offering gratitude to me again and again. Back at work, you became another example of mine when I lost my father.

Until we lost you, we had never realized what you had done for us.

“She was such a kind and elegant female professor” : our students always say.

“Her warm smile made us feel relieved and happy” : a graduate of our department told me.

If ever two worlds, the heaven and the earth, were one, then we are still together here at TOKOHA University: we hope.

No one can replace your being.

Nothing can fill our emptiness.

You were such an enthusiastic researcher, professor, mother and daughter.

Oh, there are more things I would love to say, but I will put my pen down and spare you my trivial talk. Your memory will continue to live in my heart.

Thank you.

VI 学部機関誌と学内学会規約

1. 学部機関誌と学内学会規約

『とこはことのは』を開く

若松 大祐

外国語学部言語文化研究会は、機関誌を発行してきた。目的は、外国語学部に所属する教職員と学生が、1年間の活動を振り返り、考えていることや感じていることを自由に披露するところにある。ところが、機関誌に投稿したり、読んだりする雰囲気は、近年の外国語学部では残念ながら低調となっていた。機関誌を内外に向けていっそう開いていくために2018年度に取り組んだ作業を、ここに記録しておこう。

そもそも、現在は『とこはことのは』と称する雑誌を遡ると、『Albion』（常葉学園大学英語・英文学会、1988年3月創刊）にたどり着く。もう一つ、『Retama』（常葉学園大学イスパノ・アメリカ文化研究会、1985年3月創刊）という雑誌もあった。つまり、外国語学部には英米語とスペイン語の学科があり、両学科が学内学会をそれぞれ持ち、機関誌をそれぞれ発行していたのである。『Albion』26号（2013年3月）は、『Retama』を吸収合併して外国語学部全体の機関紙となった。そして、『Albion』は29号（2017年3月）でISSN（International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号）を取得し、30号（2018年3月）から改名して『とこはことのは』になっている。

2018年度に取り組み、このたびの31号（2019年3月）に導入したことは、二つある。二つとも、清委員から何度も有益なアドバイスを受けた。一つは、目次の刷新である。（新しい目次のパターンは、本稿末尾の資料をご覧いただきたい。）従来の目次は、当初は何らかの方針によって構成されていたはずである。しかし、外国語学部の歩みとともに新たな項目が追加されていった。今になってみると、目次はまるで項目の無作為な羅列のようにになっている。ちょうど2018年度には、外国語学部言語文化研究会の事業内容を整理し、規約を策定するという作業を行った。そこで、事業内容を踏まえ、目次を思い切って刷新したのである。

目次は、次の二つの方針で構成されている。すなわち、一つは、海外での語学学修に関する事業内容を一括して後半に配置したことである。いま一つは、前半

に配置する活動を、外国語学部に通ずるもの、英米語学科でのもの、グローバルコミュニケーション学科でのものというふうに三分したことである。

もう一つ、このたび新たに導入したことは、指名制から志願制へという投稿方法の変更である。従来は一定の条件を満たした特定の学生に対し、教員が個別に投稿を勧めていた。そのため、受け身の立場で書いた文章が混じってしまう。そこで 31 号 (2019 年 3 月) では、投稿を希望する人は教職員であれ学生であれ、全て web での申し込み作業を行い、投稿意志を表明することにした。今号からは、熱意溢れる自発的な原稿を収録できるに違いない。

次年度以降には、『とこはことのは』の全文を web 公開し、また、『Albion』と『Retama』の歴年の総目次を公開できるように計画している。教職員や在学生のみならず、卒業生や高校生、さらには常葉大学外国語学部に関心を持つ人々に向けて、『とこはことのは』をいっそう開いていきたい。

【資料】『とこはことのは』の目次のパターン

(注意 1) 投稿がない活動については目次から削除する。

(注意 2) 新たに追加すべき項目が出現した場合は、臨機応変に追加する。

一、巻頭言

1-1. 会長

1-2. 貴賓

二、外国語学部共通

2-1. 教員エッセイ

2-2. 外国語学部コロキウム

2-3. 外国語学部文化講演会

2-4. 特別研究の題目と要旨

2-5. 日本語教員養成課程

2-6. 外国語学習支援センター (TA および peer support)

2-7. 国内外関係組織から外国語学部への受け入れ

2-8. 学内外での教職員や学生の取り組み

VI. 1. 学部機関誌と学内学会規約

2-9. [共催] 現職教員向け研修会および研究会

2-10. [後援] 世界文学等の読書会

三、英米語学科

3-1. 学科コロキウム

3-2. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest

3-3. 高校生対話弁論大会

3-4. 卒論発表会

3-5. 教員採用試験合格者

3-6. 国内外関係組織から英米語学科への受け入れ

3-7. 学内外での教職員や学生の取り組み

四、グローバルコミュニケーション学科

4-1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

4-2. 多言語レシテーション大会

4-3. 社会人基礎力養成

4-4. キャリア開発

4-5. 臨地実習

4-6. 国内外関係組織から GC 学科への受け入れ

4-7. 学内外での教職員や学生の取り組み

五、各言語圏での活動

a. 英語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

b. スペイン語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

c. ポルトガル・ブラジル語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

d. 中国語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

e. 韓国語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

f. 上記 5 言語以外の言語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

六、その他

七、学部機関誌と学内学会規約

6-1. 『とこはことのは』

6-2. 常葉大学外国語学部言語文化研究会会則

言語文化研究会会則の策定始末

若松 大祐

2018 年度の学部の方掌には「機関誌編集と規約策定」という事務があり、このたび学内学会の規約を策定することになった。外国語学部が組織する学内学会は外国語学部言語文化研究会（以下、本会とする）であり、本会は近年は (1) 機関誌の発行、(2) コロキウムの開催、(3) 文化講演会の開催を中心に活動を続けてきた。しかし、かつて規約に掲げていた活動内容は上記 3 つ以外をほとんど実施しておらず、本会は事実上の開店休業であり、規約は有名無実だったと言える¹。

そこで、本会の活動を活性化するために、一昨年度からは後援や共催という形で関連する研究活動を支援し、昨年度には機関誌の名称を『Albion』から『とこはことのは』に変更している。今年度は、活動の抜本的な活性化を促すため、本会の規約を改めて策定することになった。（なお、後述するように、本会では規約を会則と呼ぶ。）

規約策定の作業は、まず本会の活動内容を把握して整理（統廃合）することから始めた。5/9（水）、6/6（水）、7/4（水）の学部教授会での検討やアンケート（google form）の実施を通じて、本会の活動内容を整理した。これに並行して、清委員が他大学の学内学会の規約の中で、本会の参考に値するものをいくつか選抜している。

8 月末には若松が規約を起草し、一言会長や清委員との検討を経て、「常葉大学外国語学部言語文化研究会会則」の初稿を 9/5（水）の教授会に提出した。教授会や会後に外国語学部教員から受けた意見や指摘を反映して改稿し、改訂稿を次の教授会の前週に一言会長と一言一句読み合わせながら数時間かけて検討し、次の教授会に提出した。こうした作業を繰り返し、10/3（水）の二稿と 11/7（水）の三稿を経て、12/5（水）の四稿が教授会で承認された。2019 年 4 月 1 日より施行する予定である。

¹ 従来の規約には、旧瀬名校舎 3 学部共通の「常葉学園大学 学内学会準則」、および外国語学部の「常葉学園大学英語・英文学会会則」、「常葉学園大学イスパノ・アメリカ文化研究会会則」の 3 つがあった。規約本文は、『とこはことのは』31（2018 年 3 月）、pp.219-224 でも参照できる。

VI. 1. 学部機関誌と学内学会規約

本会の目的は、世界各地の文化全般に関して教育と研究を促進し、常葉大学外国語学部の発展に寄与しようと試みるところにある。そのために、本会は本会独自の事業を展開しつつ、同時に外国語学部およびその所属学科の諸事業をも支援する。そこで、このたび新しく策定した本会の会則では評議会を設置し、教員のみならず、在学生や卒業生を改めて会員に位置付けている。在学生や卒業生の積極的な参加を願いたい。

【資料】

常葉大学外国語学部言語文化研究会会則

1. 〔名称〕

本会は、常葉大学外国語学部言語文化研究会と称する。外国語での名称については、施行細則で定める。

2. 〔目的〕

本会の目的は、日本語、英語、スペイン語、ブラジル・ポルトガル語、中国語、韓国語を中心とする言語に関して、並びにこうした言語を使用する地域の文化全般に関して教育と研究を促進し、併せて会員相互の親睦ならびに関係諸団体との交流を図り、学内学会としてのこれまでの活動を継承しつつ、もって常葉大学外国語学部の発展に寄与するところにある。

3. 〔事業〕

本会は前項の目的を達成するために次の事業を行う。具体的な事業内容については、施行細則で定める。

- (1) 機関誌等の発行
- (2) 講演会、研究会、発表会等の開催
- (3) その他、本会の目的に適う事業

4. 〔事務局〕

本会の事務局（運営委員会）は、常葉大学外国語学部長の研究室内に置く。

5.〔年度〕

本会の運営に関わる年度は、毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日までとする。

6.〔会員〕

- 1) 本会は、主に正会員ならびに賛助会員をもって組織される。
- 2) 正会員は、常葉大学外国語学部 に所属する専任教員および学生をもって組織する。
- 3) 賛助会員は、常葉大学外国語学部（前身諸学科を含む）に所属した専任教員および卒業生をもって組織する。さらには本会の目的に賛同する者が、会員 2 人以上の推薦を受けた上で会長の承諾を得れば、賛助会員になることができる。
- 4) 大学院国際言語文化研究科に所属する専任教員や大学院生も、会員 2 人以上の推薦を受けた上で会長の承諾を得れば正会員になることができる。また、修了生（前身諸研究科を含む）も、大学院生と同様の手続きを経て賛助会員になることができる。
- 5) 評議会もしくは外国語学部教授会での推薦により、名誉会員を置くことができる。

7.〔役員〕

本会は、下記の役員を置く。役員の任期はいずれも 1 ヶ年とする。ただし再任を妨げない。

- 1) 会長 1 名。外国語学部長を充てる。
- 2) 副会長（運営委員長） 1 名。必要に応じて学科長を補佐に置くことができる。全て会長が選任する。
- 3) 運営委員 部門や部会ごとに 1-2 名ずつ。会長が選任する。
- 4) 各事業の責任者 事業ごとに主副 1 名ずつ。会長が選任する。具体的な責任者については、施行細則で定める。
- 5) 学生委員 各学年に若干名ずつ。

8. 〔組織〕

- 1) 本会はその運営のための最高の議決機関として評議会を置く。
- 2) 評議会の下に、教員部会と学生部会と卒業生部会を設ける。具体的な事業内容については、施行細則で定める。
- 3) 教員部会の下に、英米語部門とグローバルコミュニケーション部門を設ける。具体的な事業内容については、施行細則で定める。

9. 〔評議会〕

- 1) 評議会では下記の事項を審議して決定する。ただし、各部会の意見を充分に反映させることに留意し、特に重要な事項については外国語学部教授会の承認を得るものとする。
 - (1) 前年度の事業報告
 - (2) 今後の事業計画
 - (3) 本会則の改正
 - (4) 前年度の事業経費の報告、および次年度の事業予算の企画
 - (5) その他、本会に関係する事項
- 2) 評議会は会長が召集し、年度に1回開催する。必要に応じて、会長が臨時に評議会や役員会を開催することができる。実施時期は施行細則で定める。
- 3) 評議会の議長は、会長が務める。
- 4) 評議会の構成員については、施行細則で定める。施行細則で明記した構成員以外の正会員や賛助会員が、評議会へオブザーバーとして参加することを妨げない。
- 5) 評議会が成立するための定足数は、構成員の3分の2以上であり、これには委任状（会長に一任する）を含む。評議会当日の出席者の過半数以上を以って議決する。

10. 〔運営〕

運営委員会は、必要に応じて開催し、本会全体に関わる事業や業務、ならびに各部会や各部門の事業を遂行できるように、関係者に対して連絡や調整を行う。

11. 〔会費〕

本会の会費は徴収しない。

12. 〔会則改正〕

本会則の改正には、評議会での議を経て、会長が決定する。

13. 〔付則〕

1) 本会則は 2019 年 4 月 1 日より施行する。

2) 本会則の施行上必要な細則は〔施行細則〕として別にこれを定める。

常葉大学外国語学部言語文化研究会会則〔施行細則〕

本施行細則（以下「細則」）は、常葉大学外国語学部言語文化研究会会則（以下「会則」）を施行するに際し、運営上必要な規則を、会則の改正に及ばない範囲で取り決めるものである。細則の改正は運営委員会で行い、改正後の評議会でも報告し承認を得る。

1. 〔名称〕

（日本語）常葉大学外国語学部言語文化研究会

（英訳）Association for Foreign Studies in Tokoha University

2. 〔事業〕

1) 事業内容

本会の事業は、次に掲げるものである。本会は本会独自の事業を展開しつつ、同時に外国語学部およびその所属学科の諸事業をも支援する。各事業の責任者については、年度初めに会長が指名し作成する学部内分掌表に記載する。なお、共催や後援については、会長に申請用紙を提出して、総評議会（もしくは教授会または学科会議）で承認を得ることとする。

VI. 1. 学部機関誌と学内学会規約

(本会が支援する学部および学科の事業)

(ア) 外国語学部共通

1. 外国語学部コロキウム
2. 外国語学部文化講演会
3. 『とこはことのは』の編集と発行
4. 認定留学（長期・ショート）の報告会
5. 日本語教育実習報告会
6. 海外提携校等からの受け入れ
7. [共催] 現職教員向け研修会および研究会
8. [後援] 世界文学等の読書会
9. その他、本会の主旨に適う交流事業などの活動

(イ) 英米語学科

1. 英米語学科コロキウム
2. Catherine Sasaki Memorial Speech Contest
3. 高校生対話弁論大会
4. 卒論発表会
5. 教職関連活動報告
6. 英語圏への語学研修

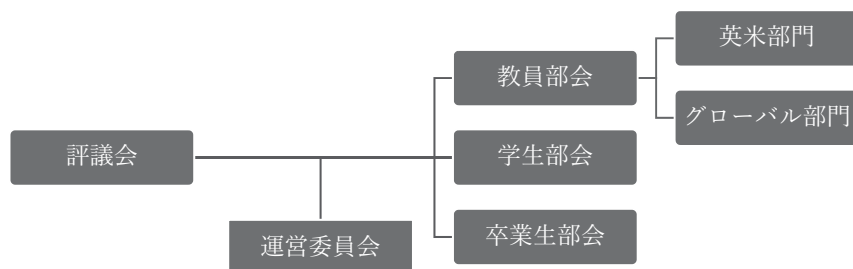
(ウ) グローバルコミュニケーション学科

1. グローバルコミュニケーション学科コロキウム（海外事情談話会）
2. 多言語レシテーション大会
3. 特別研究の成果報告書
4. 語学研修、臨地実習、海外活動などの報告会

2) 事業経費

事業経費については、前年度中に予算を要求する。

3. 〔組織〕



4. 〔評議会〕

評議会の構成員

- (1) 会長 (外国語学部長)
- (2) 副会長
- (3) 各部会の運営委員 (教員部会委員、学生部会委員、卒業生部会委員)
- (4) 各部門の運営委員
- (5) 外国語学部専任教員
- (6) その他、本会が適任と認めた者

編集後記

久々の編集作業。入稿までの原稿整理は眼精疲労マックスでけっこう大変でした。が、誰より先に原稿を読める点は編集委員の特権。先生方の別のお顔の一面が魅力的だったり、学生らの色んな体験談にホロリとしたり。『とこはことのは』の完成が多くの方に喜ばれるものでありますように。
(清ルミ)

4月に常葉大学に來た私にとって、外国学部学びは未だ知らないことだらけです。『とこはことのは』32号の編集委員をさせていただき、普段は見ることでない先生方や学生さんたちの熱意溢れる活動を知り、ただただ「すごい！」と感激しています。読んでくださった方々ともその気持ちをシェアできたら嬉しいと思います。
(本沢 彩)

毎日慌しく過ぎていく大学での生活の中で、『とこはことのは』の編集作業はふと立ち止まり、過ぎた1年を振り返る貴重な時間を与えてくれます。映像が持つ囃される現代ですが、投稿してくださった教員、学生の皆様の原稿を読ませていただくと、改めて「ことばの持つ力」を感じます。『とこはことのは』第32号を手にした方々が、2018年度の外国語学部の活動に思いを馳せながら、ゆったりとした豊かな時を楽しまれることを祈っております。
(幸田明子)

このたびの『とこはことのは』32号からは目次を刷新し、原稿を公募することになりました。詳しい経緯については、本誌「VI. 学部機関誌と学内学会規約」の「1.『とこはことのは』を開く」をご覧ください。こうした変更に伴い、教職員や学生の皆さんの普段とは違う姿が見えました。残念ながら、本学の外国語学部では知識をinputすることに偏重しています。学生の皆さんは、ぜひとも自身の意欲的な取り組みを『とこはことのは』に書いてください。知識をoutputする良いチャンスです。
(若松大祐)

とこはことのは

第 32 号

2019 年 3 月 10 日

発 行：常葉大学 外国語学部 言語文化研究会

代 表：一言哲也

編集委員：若松大祐（委員長）、幸田明子、清ルミ、本沢 彩

連 絡 先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号

常葉大学外国語学部『とこはことのは』編集委員会

TEL (054) 297-6100 [代表], FAX (054) 297-6101 [代表]

ISSN: 2432-8111

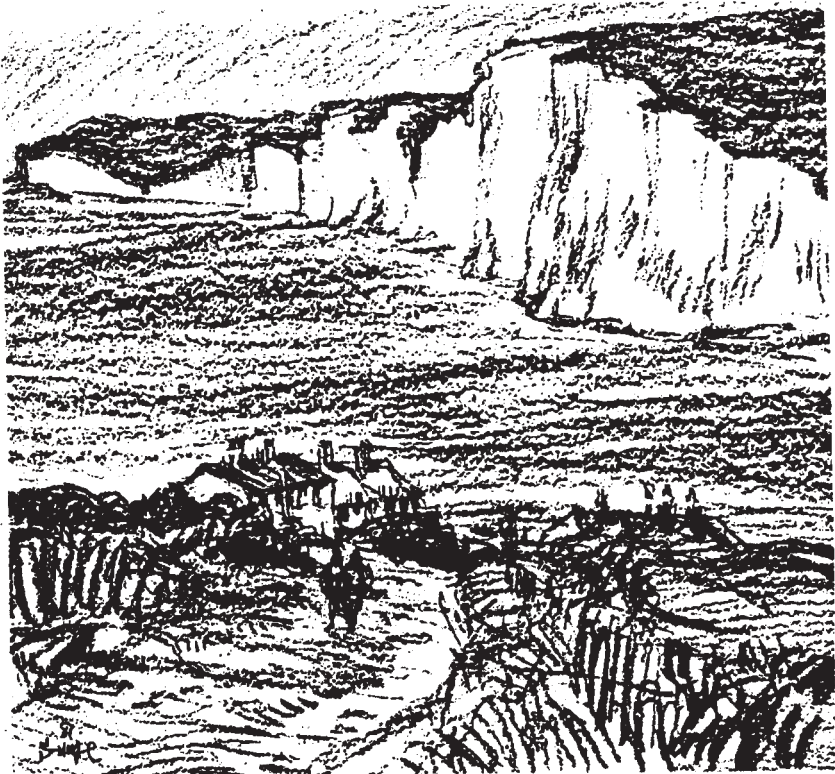
印刷製本 株式会社 篠原印刷所

〒 422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 - 5

TEL (054) 286-5141

旧 題

Albion



ドーヴァーの白壁

題字は諏訪卓三（元学長）による。扉絵の作者は不明。